

# 京都府遺跡調査概報

## 第 92 冊

1. 赤坂今井墳丘墓・今井城跡・今井古墳
2. 福知山城跡
3. 東山遺跡
4. 平安京跡右京一条三坊九・十町  
(第 8・9 次)
5. 三山木遺跡第 2 次

2 0 0 0

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



赤坂今井墳丘墓全景（北から）

# 凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。

- |                      |                         |
|----------------------|-------------------------|
| 1. 赤坂今井墳丘墓・今井城跡・今井古墳 | 2. 福知山城跡                |
| 3. 東山遺跡              | 4. 平安京跡右京一条三坊九・十町(8・9次) |
| 5. 三山木遺跡第2次          |                         |

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者及び概要の執筆者は下表のとおりである。

	遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1.	赤坂今井墳丘墓・今井城跡・今井古墳	中郡峰山町赤坂小字今井・ケビ	平10.11.10～平11.2.20 平11.5.25～9.29	京都府土木建築部	黒坪 一樹 石崎 善久
2.	福知山城跡	福知山市岡野一町	平10.7.26～9.29	京都府福知山土木事務所	福島 孝行
3.	東山遺跡	北桑田郡京北町字周山	平11.7.22～9.17	京都府土木建築部	中川 和哉
4.	平安京跡右京一条三坊九・十町(第8・9次)	京都市北区大將軍坂田町29番地	平10.10.7～平11.3.12 平11.4.19～8.30	京都府教育委員会	村田 和弘
5.	三山木遺跡第2次	京田辺市三山木字山崎	平11.5.17～10.28	京田辺市	岡崎 研一 田代 弘

3. 本書で使用している座標は、国土座標第6座標系による。

4. 本書の編集は、調査第1課資料係が当たった。

## 序

財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

さて、発掘調査については、その内容を出来るだけ早く公表する必要があり、それに対応するために三種の刊行物を出しております。すなわち、発掘調査の速報と職員の論考等を『京都府埋蔵文化財情報』によって、発掘調査成果の概要報告を『京都府遺跡調査概報』によって公表しております。そして、特に著しい成果のあったものについては、『京都府遺跡調査報告書』を刊行しております。

本書は、『京都府遺跡調査概報』として、平成11年度に実施した発掘調査のうち、京都府土木建築部・京都府福知山土木事務所・京都府教育委員会・京田辺市の依頼を受けて行った赤坂今井墳丘墓・今井城跡・今井古墳、福知山城跡、東山遺跡、平安京右京一条三坊九・十町(第8・9次)、三山木遺跡第2次に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が、学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、何がしかのお役にたてば幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、峰山町教育委員会・福知山市教育委員会・京北町教育委員会・京都市埋蔵文化財調査センター・(財)京都市埋蔵文化財研究所・京田辺市教育委員会などの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成12年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

理 事 長 樋 口 隆 康



- 図版第24 (1)調査前風景(南西から) (2)重機掘削作業(南から)  
(3)人力掘削作業風景(南東から)
- 図版第25 (1)北側トレンチ全景(東から) (2)溝S D99010(西から)  
(3)溝S D98014(東から)
- 図版第26 (1)九町南側築地推定地と溝S D99010(西から) (2)鷹司小路推定地(西から)  
(3)十町北側築地推定地(東から)
- 図版第27 (1)土坑S K99065(東から) (2)土坑S K99065出土軒丸瓦(東から)  
(3)土坑S K99065出土土器(東から)
- 図版第28 (1)溝S D99010焼土および瓦出土状況(北から)  
(2)溝S D99010土器出土状況(北から) (3)溝S D98117土器出土状況(南から)
- 図版第29 (1)門跡S B14掘削作業風景(西から) (2)門跡S B14全景(南から)  
(3)東側トレンチ全景(北から)
- 図版第30 (1)門跡S B14柱穴1断面(北から) (2)門跡S B14柱穴2(北東から)  
(3)門跡S B14柱穴3(南東から)
- 図版第31 (1)遺構掘削作業風景(南東から) (2)溝S D99020完掘状況(東から)  
(3)門跡S B14柱穴6検出状況(西から)
- 図版第32 (1)掘立柱建物跡S B1・2検出状況(北から)  
(2)掘立柱建物跡S B1・2検出状況(西から)  
(3)掘立柱建物跡S B4全景(南から)
- 図版第33 (1)井戸SE98058全景(東から) (2)井戸S E98058断面(南から)  
(3)井戸枠刻印接写(南から)
- 図版第34 (1)西側トレンチ掘削作業風景(南から) (2)溝S D98117全景(北西から)  
(3)東側トレンチ南部全景(南から)
- 図版第35 (1)南東隅部遺構検出状況(東から) (2)空中撮影作業風景(南東から)  
(3)現地説明会作業風景(西から)
- 図版第36 出土遺物(1)
- 図版第37 出土遺物(2)
- 図版第38 出土遺物(3)
- 図版第39 出土遺物(4)
- 図版第40 出土遺物(5)
- 図版第41 出土遺物(6)
- 図版第42 出土遺物(7)
- 図版第43 出土遺物(8)
- 図版第44 出土遺物(9)
- 図版第45 出土遺物(10)

- (3)墳丘墓第13主体部(東から)
- 図版第7 (1)墳丘墓第11主体部(東から)  
(2)墳丘墓第11～13主体部完掘状況(東から)
- 図版第8 (1)弥生土器甕(第3主体部出土) (2)弥生土器甕断片(第12主体部出土)  
(3)鉢(第11主体部出土)
- 図版第9 (1)今井城跡櫓跡・柱穴検出状況(西から)  
(2)今井城跡竪穴状遺構土層断面(北から)  
(3)今井城跡竪穴状遺構完掘状況(南から)
- 図版第10 (1)出土遺物(8は今井古墳出土)
- 図版第11 (1)出土遺物(6は第8主体部) (2)出土遺物、裏面
- 図版第12 (1)墳頂部埋め戻し状況(北から)  
(2)墳丘北側裾部埋め戻し状況(南東から)

## 2. 福知山城跡

- 図版第13 福知山城跡・板石積遺構全景(西から)
- 図版第14 (1)土層断面(東から) (2)玉石敷遺構(西から)  
(3)板石敷遺構全景(西から)
- 図版第15 (1)板石敷遺構部分1(北から) (2)板石敷遺構部分2(北から)  
(3)板石敷遺構部分3(北から)
- 図版第16 (1)板石敷遺構部分4(北から) (2)板石敷遺構部分5(北から)  
(3)板石敷遺構部分全景(東から)
- 図版第17 福知山城下絵図御泉水部分(黒線はおよその調査地点)
- 図版第18 福知山城跡出土遺物

## 3. 東山遺跡

- 図版第19 (1)東山遺跡遠景(南西から) (2)第1トレンチ全景(北から)  
(3)第1トレンチSH01(北西から)
- 図版第20 (1)第1トレンチSH02(東から) (2)第6トレンチ(北から)  
(3)調査風景
- 図版第21 (1)第3トレンチ全景(東から) (2)第4～6トレンチ全景(南から)  
(3)東山遺跡出土遺物
- 図版第22 (1)東山遺跡出土石製遺物 (2)東山遺跡出土石製遺物(裏面)

## 4. 平安京跡右京一条三坊九・十町(第8・9次)

- 図版第23 (1)門跡SB14(上空から、上が北) (2)調査トレンチ全景(上空、南から)

第82図	出土遺物実測図(10)-----	116
第83図	出土遺物実測図(11)-----	116
第84図	出土遺物実測図(12)-----	117

## 付 表 目 次

1. 赤坂今井墳丘墓・今井城跡・今井古墳		
第1表	赤坂今井墳丘墓主体部一覽表-----	19
4. 平安京跡右京一条三坊九・十町(第8・9次)		
第2表	遺構時期別一覽表-----	56
第3表	掘立柱建物跡S B 1・2土層名一覽-----	63
第4表	建物規模一覽表-----	64
第5表	四脚門検出例一覽表-----	91
5. 三山木遺跡第2次		
第6表	三山木遺跡出土石器一覽表(1)-----	111
第7表	三山木遺跡出土石器一覽表(2)-----	112

## 図 版 目 次

1. 赤坂今井墳丘墓・今井城跡・今井古墳		
図版第1	(1)調査地遠景(東から)	(2)調査地遠景(北から)
	(3)頂部遺構検出状況(垂直、空中写真)	
図版第2	(1)頂部調査前風景(北から)	(2)墳丘墓主体部(第1～6)検出状況(北から)
図版第3	(1)墳丘墓第2主体部(北から)	(2)墳丘墓第3主体部(北から)
図版第4	(1)墳丘東側裾部調査風景(北から)	(2)墳丘東側裾部調査風景(南から)
図版第5	(1)墳丘墓第7主体部(南から)	(2)墳丘墓第10主体部(南から)
	(3)墳丘墓第12主体部(東から)	
図版第6	(1)墳丘墓第8主体部(北から)	(2)墳丘墓第9主体部(東から)

第49図	出土土器実測図(3)-----	73
第50図	出土土器実測図(4)-----	74
第51図	出土土器実測図(5)-----	75
第52図	出土土器実測図(6)-----	76
第53図	出土土器実測図(7)-----	77
第54図	出土瓦実測図(1)-----	79
第55図	出土瓦実測図(2)-----	80
第56図	出土瓦実測図(3)-----	81
第57図	出土瓦実測図(4)-----	82
第58図	出土瓦実測図(5)-----	83
第59図	出土瓦実測図(6)-----	84
第60図	出土瓦実測図(7)-----	85
第61図	出土瓦実測図(8)-----	86
第62図	井戸 S E 98058・方形井戸枠材実測図-----	88
第63図	出土木製品および銭貨・砥石実測図-----	89

#### 5. 三山木遺跡第2次

第64図	調査地および周辺遺跡分布図-----	94
第65図	トレンチ配置図および周辺地形図-----	96
第66図	遺構配置図-----	97
第67図	第2トレンチ谷部柱状断面図-----	98
第68図	S K 01(上)・S K 02(下)実測図-----	98
第69図	遺構配置図(第4トレンチ)-----	99
第70図	遺構配置図(第5トレンチ)-----	99
第71図	S B 01・02実測図-----	100
第72図	S E 01・02実測図-----	101
第73図	出土遺物実測図(1)-----	103
第74図	出土遺物実測図(2)-----	104
第75図	出土遺物実測図(3)-----	105
第76図	出土遺物実測図(4)-----	107
第77図	出土遺物実測図(5)-----	108
第78図	出土遺物実測図(6)-----	109
第79図	出土遺物実測図(7)-----	110
第80図	出土遺物実測図(8)-----	113
第81図	出土遺物実測図(9)-----	114

## 2. 福知山城跡

第19図	調査地位置図	21
第20図	トレンチ配置図	22
第21図	土層断面図	24
第22図	内トレンチ配置図および板石敷遺構平面図	25
第23図	黒灰色粘土層出土遺物	27

## 3. 東山遺跡

第24図	調査地位置図	31
第25図	トレンチ配置図	32
第26図	東山遺跡土層断面図(1)	33
第27図	東山遺跡土層断面図(2)	34
第28図	第1・2トレンチ遺構平面図	35
第29図	第1トレンチ竪穴式住居跡実測図	36
第30図	第3トレンチ遺構平面図	37
第31図	東山遺跡出土遺物実測図(1)	38
第32図	東山遺跡出土遺物実測図(2)	39
第33図	東山遺跡出土遺物実測図(3)	40

## 4. 平安京跡右京一条三坊九・十町(第8・9次)

第34図	調査地位置図	51
第35図	平安京の条坊と調査地の位置	52
第36図	調査トレンチ遺構配置図	55
第37図	門跡S B 14と周辺遺構平面図	57
第38図	遺構土層断面図	58
第39図	溝S D 99010平・断面図	59
第40図	井戸S E 98058平・断面図	60
第41図	掘立柱建物跡S B 3平・断面図	61
第42図	掘立柱建物跡S B 1・2平・断面図	62
第43図	九・十町I期の遺構	65
第44図	九・十町II-a・b期の遺構	66
第45図	九・十町II-c期の遺構	67
第46図	九・十町III期の遺構	68
第47図	出土土器実測図(1)	71
第48図	出土土器実測図(2)	72



# 本文目次

1. 赤坂今井墳丘墓・今井城跡・今井古墳発掘調査概要-----	1
2. 福知山城跡発掘調査概要-----	21
3. 東山遺跡発掘調査概要-----	31
4. 平安京跡右京一条三坊九・十町(第8・9次)発掘調査概要-----	51
5. 三山木遺跡第2次発掘調査概要-----	93

# 挿図目次

## 1. 赤坂今井墳丘墓・今井城跡・今井古墳

第1図 調査地および周辺主要遺跡分布図-----	2
第2図 赤坂今井墳丘墓平・断面図-----	4
第3図 第2主体部平・断面図-----	7
第4図 第3主体部平・断面図-----	8
第5図 第7主体部平・断面図-----	9
第6図 第8主体部平・断面図-----	10
第7図 第9主体部平・断面図-----	11
第8図 第10主体部平・断面図-----	11
第9図 第11主体部平・断面図-----	12
第10図 第12主体部平・断面図-----	12
第11図 第13主体部平・断面図-----	13
第12図 出土遺物実測図(弥生時代)-----	13
第13図 出土鉄製品実測図-----	14
第14図 今井城跡遺構平面図-----	15
第15図 出土土器実測図(古墳時代・室町時代)-----	16
第16図 今井古墳地形図および調査区-----	17
第17図 今井古墳調査区および出土遺物-----	18
第18図 今井古墳調査前風景-----	18

図版第46 出土遺物(11)

図版第47 出土遺物(12)

図版第48 出土遺物(13)

## 5. 三山木遺跡第2次

図版第49 三山木遺跡全景(北東から)

図版第50 (1)第2トレンチ全景(南から)

(2)第3トレンチ全景(北から)

図版第51 (1)第4トレンチ全景(南から)

(2)第5トレンチ全景(南から)

図版第52 (1)第3トレンチ近景(西から)

(2)S K01遺物出土状況(西から)

(3)サヌカイト片埋納穴(東から)

図版第53 (1)第4トレンチ近景(南から)

(2)S B01・02, S E01・02近景(南から)

(3)S B01近景(南から)

図版第54 (1)S E01近景(南から)

(2)S E01断ち割り状況(南から)

(3)S E03近景(南から)

図版第55 (1)出土遺物(1)

(2)出土遺物(2)

図版第56 出土遺物(3)

図版第57 (1)出土遺物(4)

(2)出土遺物(5)

図版第58 (1)出土遺物(6)

(2)出土遺物(7)



# 1. 赤坂今井墳丘墓・今井城跡・今井古墳 発掘調査概要

## 1. はじめに

今回の調査は、主要地方道網野峰山線交通安全施設等整備事業に伴って、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。当該地は、京都府中郡峰山町赤坂小字今井・ケビに所在し、府道網野峰山線や北近畿タンゴ鉄道の路線を東に臨む、標高55～60mの丘陵先端部に位置している(第1図)。路線帯には、今井城と今井古墳の2遺跡の一部がかかり調査することになった。

また、中世山城として調査した今井城跡は、結果的に同地点に弥生時代の墳丘墓が築造されていることもわかった。そこで、今回新たに見つかった墳丘墓の名称について峰山町教育委員会をはじめとする関係機関と協議した結果、赤坂今井墳丘墓と命名し、中世(室町時代)の山城を今井城跡とすることとなった。

調査期間は、平成10年11月10日～平成11年2月20日まで(試掘調査)と、平成11年5月25日～9月29日まで(本格調査)である。調査面積は、今井古墳約50m<sup>2</sup>、赤坂今井墳丘墓・今井城跡約1,500m<sup>2</sup>である。

現地調査は、当調査研究センター調査第2課課長補佐兼調査第1係長水谷壽克、同主査調査員黒坪一樹が担当し、本概要報告は黒坪の他、調査第2課調査第1係調査員石崎善久と同志社大学学生の古川 匠・三好 玄が分担執筆した。

調査期間中、現地には、樋口隆康理事長・上田正昭理事・角田文衛氏(古代学協会理事長)・広瀬和雄氏(奈良女子大学教授)・関口 力氏((財)古代学研究所助教授)・小林 克氏(文化庁文化財調査官)・瀬戸谷皓氏(豊岡市出土文化財管理センター)などがご足労下さり、ご教示を受けることができた(順不同・敬称略)。以上の方々に厚く御礼申し上げたい。寒さ厳しい積雪期、また猛暑の夏期をとおして地元有志の方々や学生諸氏には、作業員・補助員・整理員として熱心に作業に取り組んでいただいた<sup>(注1)</sup>。また京都府教育庁指導部文化財保護課・峰山町教育委員会をはじめとする関係諸機関には、ひとかたならぬ御指導と御協力を賜った。心より感謝の意を表したい。

なお発掘調査に要した経費は、全額京都府土木建築部が負担した。

## 2. 位置と環境

今回の調査地のある峰山町は、丹後半島をほぼ南北に縦断するように流れる竹野川の中流域に位置している。竹野川に沿って北に向かっては沖積平野が海岸部まで続くが、三方は山間部に囲まれている。峰山町の市街から北西側の山間部を抜けて網野町に至る主要ルートが、府道網野峰山線である。おそらく古来より交通路として重要な役割を担ってきたのであろう。それを裏付け

るように街道沿いには多くの遺跡が存在している(第1図)。この街道の入り口ともいえる峰山町市街、網野町の福田川の沖積地、さらに調査地から北東方向の谷筋を抜けた弥栄町竹野川流域にまで視野にいれ、主な遺跡をあげると、弥生時代前期の環濠集落である峰山町扇谷遺跡(第1図5)や同時期の墳墓群のカジヤ遺跡(同7)・七尾墳墓群(同6)、弥生時代中期から平安時代の大規模集落である浅後谷南遺跡(同2)、その墓域として形成された浅後谷南墳墓(同3)、弥生時代後期末の拠点集落である古殿遺跡(同4)、直径80mを測る古墳時代前期の円墳カジヤ古墳(同8)、全長100mを測る前方後円墳である湧田山1号墳(同10)、青龍三年銘鏡で著名な大田南古墳群(同



第1図 調査地および周辺主要遺跡分布図

- |                 |           |           |           |            |
|-----------------|-----------|-----------|-----------|------------|
| 1. 赤坂今井墳丘墓・今井城跡 | 2. 浅後谷南遺跡 | 3. 浅後谷南墳墓 | 4. 古殿遺跡   | 5. 扇谷遺跡    |
| 6. 七尾墳墓群        | 7. カジヤ遺跡  | 8. カジヤ古墳  | 9. 大耳尾古墳群 | 10. 湧田山古墳群 |
| 11. 大田南古墳群      | 12. 石丸城跡  | 13. 赤坂城跡  | 14. 吉原山城跡 | 15. 峰山陣屋跡  |
|                 |           |           |           | 16. 今井古墳   |



11)などがある。調査地はまた、福田川水系の中流域から竹野川の支流である大糸川の源流域を結ぶ地点に位置している。福田川中流域を含めたこのあたりの発掘調査はそれほど多くはない。先述した網野町公庄に位置する浅後谷南遺跡・浅後谷南墳墓、さらに北に遡った山間部にある古墳時代中期～後期の生野内大内古墳群、スガ町古墳群<sup>(注2)</sup>、角杯や装飾付須恵器を出土した大耳尾古墳群(同9)、ホエケ谷古墳群<sup>(注3)</sup>などの古墳群、さらに北丹後震災の震源地である網野町郷にある十王堂遺跡(縄文時代後期の墓など)がこれまで調査されている。調査地周辺は古墳群は多いが、確実な集落遺跡は未確認である。

さらに今井城跡に関連して、周辺地には石丸城跡(同12)・赤坂城跡(同13)・吉原山城跡(同14)・峰山陣家跡(同15)などの中世以降の山城も多く存在している。

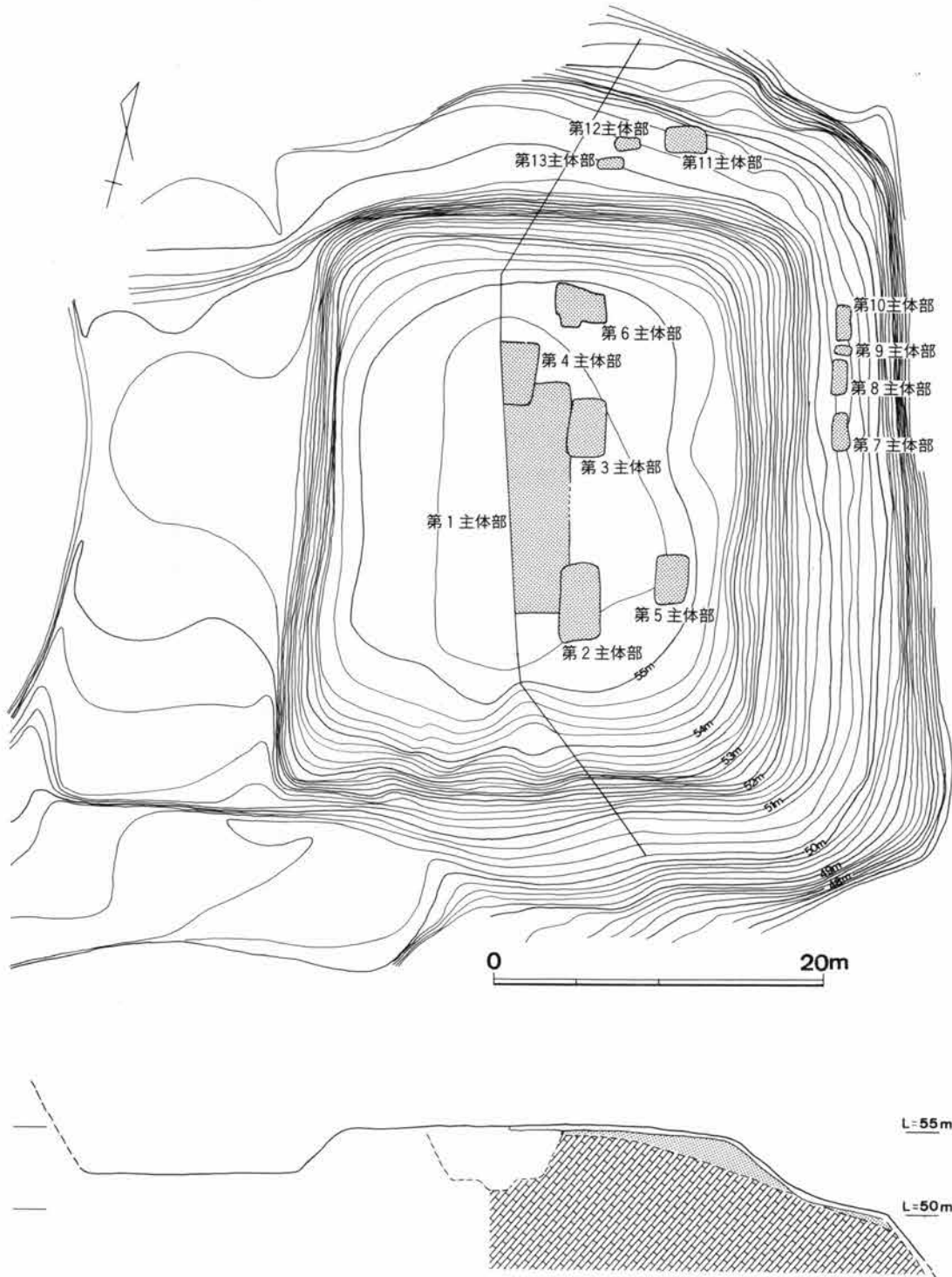
### 3. 調査経過

今井城跡および今井古墳は、平成10年11月15日～平成11年3月2日まで試掘調査を実施した。調査面積は両遺跡あわせて500m<sup>2</sup>(今井城450m<sup>2</sup>、今井古墳50m<sup>2</sup>)であった。今井城跡の試掘調査対象地は曲輪の周囲をめぐる平坦部が中心であった。表土掘削を進めるうち、中世山城としての今井城跡に関連する遺物はまったく出土せず、かわって弥生時代後期の土器片が東側の裾部に集中して出土することがわかった。しかしこの段階では、今井城跡の全体が弥生時代の墳丘墓であるという認識は明確ではなかった。曲輪の頂部にあった小規模な埋葬主体部が破壊されて、遺物が転落したものと考えていた。周辺裾部の表土掘削が終了していくにつれ、北側および東側平坦部から次々に埋葬主体部が検出された。ここにおよんで、中世山城としてしか考えていなかった今井城跡は、おそらく巨大な墳丘墓となる可能性が濃くなった。次年度の調査の見通しをたてるため、墳丘・曲輪の頂部についても、樹木の間隙を縫って調査トレンチを設定した。部分的に土色変化のラインを認めたが、1月中旬からの積雪、小さく限られた面積での精査などのため埋葬主体部の存在は確認できなかった。しかしながら、周辺平坦部をめぐる埋葬主体部は7基となり、墳頂部における主体部の存在を確実にうかがわせる試掘調査となった。

今井城跡に関する遺物(土師器皿)も出土し、依然として次年度調査の主眼の一つであることを再認識した。また、今井古墳については、今井城跡と並行して表土掘削を行った。試掘調査で樹木伐採の範囲も限られていたが、墳頂部周辺における石材の散布状況、墳丘上位からの須恵器(杯身)の出土、裾部の傾斜変換ラインの検出などから、今井古墳の規模・形態・築造時期などについて考える材料が得られた。以上、平成10年度試掘調査は3月2日に終了した。

平成11年度の今井城跡および今井墳丘墓(仮称)の本格的な調査は、墳頂部の樹木伐採の終了した5月25日から開始した。墳頂部から裾部にのびる土層観察用の畦セクションを設定しつつ、墳頂部全面の表土掘削を進めた。掘削にあたっては、中心部の埋葬主体部の存在状況を把握することを最優先させ、中心から次第に外縁部に向かって掘削を進めた。中心部からまず検出されたのは、土師器皿を出土する柱穴痕、柵列、大きな土坑(S K01)など中世山城のものとみられる遺構群であった。これらの遺構を掘削しつつ、その遺構面の精査を重ねた結果、2基の埋葬主体部

(第2・第3主体部)の輪郭の一部が検出された。それ以後、次々と第4～第6主体部の3基の主体部の存在を明らかにすることができた。第2～第4主体部の墓壙の輪郭を精査していくうちに、もう一つの主体部(第1主体部)がその輪郭を現してきた。第2主体部により南東隅が、第3主体部により北東部が、そして第4主体部により北辺部がそれぞれ破壊されているが、調査範囲内において長辺14m・幅4m以上という大規模な墓壙の輪郭である。現地調査と並行して、遺跡の持つ重要性が認識されてきた。そして、第1主体部の正確な規模と時期を明らかにする必要が生じ



第2図 赤坂今井墳丘墓平・断面図

た。遺跡の取り扱いについて、京都府土木建築部・京都府教育委員会等、関係機関と協議の結果、第1主体部の掘削はせず、第1主体部を切っている第2・第3両主体部を掘削することによって、間接的ながらも結果を出すことにした。第3主体部から弥生時代後期末(3世紀中葉)とみられる甕型土器が出土した。このことから、第1主体部の時期はおそらく第2主体部と同時期か、やや古い時期の所産であることがわかった。さらに墓壙規模を確定するため、幾重にも精査を繰り返し、また、第2・第3主体部および両主体部の中間に位置する竪穴状遺構の断面観察などから、第1主体部は一基のものであると確認された。

調査地に半面の輪郭が確認された第1主体部、および墳頂部に残る第4～第6主体部については、当面の間、掘削を見合わせることとなり、墳丘周辺の7基の主体部の掘削を鋭意進めていくことにした。調査は8月11日までにすべての掘削作業を終了した。8月11日にリモコン・ヘリコプターによる空中写真撮影を終え、現地説明会にむけて準備を進めていった。そして現地説明会の後、主体部を中心に埋め戻し作業を行うことが決定した。9月18日の現地説明会では、380名ほどの参加者があった。その後ベルトコンベアーを設置して埋め戻しを9月末までに完了させ、現地におけるすべての作業を終了した。各墓壙の埋め戻しに使用した土砂は、掘削の際に墓壙、棺内ごとに厳密に分けて土のう袋につめたものであり、それらを再び同じ所に戻すことを基本とした。

#### 4. 赤坂今井墳丘墓

##### (1) 概要

赤坂今井墳丘墓は、1辺40m近く、高さ3mを測る方形墳で、埋葬主体部は、墳頂部で6基、周囲の平坦面で7基の合計13基を検出した(第2図)。なお、現地調査と並行して、現状保存のための協議が進められているため、すべての埋葬主体部を完掘していない。掘削したのは、周囲の7基(第7～第13主体部)と墳頂部の2基(第2・第3主体部)である(第1表)。注目されるのは、墳頂部中央に構築された最も古い第1主体部である。検出面で南北約14m・東西4m以上を測る。この規模は、現在のところ弥生時代のものとしては最大のものである。この第1主体部を若干壊して造られているのが、第2・第3・第4主体部である。掘削の結果、第2主体部からは丹後地方で特徴的な舟形木棺、第3主体部からは組合式箱形木棺の痕跡を確認した。遺物として、それぞれの棺内で鉈が1点ずつ出土した。さらに第3主体部の墓壙の肩部に置かれた甕形土器(弥生時代後期末)も出土した。大小の規模をもつ周辺の7基は、舟形木棺(第8主体部)、組合式木棺(第7・第10～第12主体部)を主体部にもつものや、土壙墓(第9・第13主体部)などであった。出土遺物として鉈・短刀などの鉄器、弥生土器などがある。さらに埋葬主体部以外のものとして、墳丘下段の南東周辺部から出土した弥生土器の器台・壺および石杵などがある。

##### (2) 墳丘(第3図)

整った方形の墳形で、南北約37.5m・東西約32.5m・高さ約3.5m、下の府道路面からの比高約17mを測る。また、墳丘周囲には幅5～6mの平坦面がめぐり、墳丘をより明確にしている

(第2図)。したがってこの周囲の平坦面を含めた墳丘墓の規模は南北48mを測る。

築造過程はまず背後の幅広い尾根に直交する溝をおよそ数mにわたって掘削して墓域を画している。同時に、できた土を全体に盛って形を整えている。したがって盛土整形された墳墓といえる。盛土は墳丘周囲にも及んでいるが、下段面の北～北東にかけては比較的薄く、南半部にかけて厚く盛り土されている。断ち割りによる墳丘断面の観察をしていないので、明確にはわからないが、墳頂部の第2・第3両主体部の断面および部分的な墳丘断面でみると、墳頂部の浅いところで約40cm、裾部から墳丘斜面部の特に東側では2～3mほどの盛り土が施されている。

北側の周辺平坦面から東側の中央にかけては、複数の埋葬主体部が確認されているが、東側平坦部の南半部および南側平坦部では主体部が確認されていない。この埋葬主体部の設けられていない部分からは、弥生土器(器台・壺)とともに赤色顔料を砕くための石杵の出土があった。この状況からみて、埋葬施設のないこの場は、おそらく祭祀を執り行うという機能をもっていたのではないかと推察される。

### (3)埋葬主体部の構造と出土遺物(第1表)

#### 第1主体部

墳頂部のほぼ中央に設けられている。長方形の墓壙である(第2図)。長さ約14m・幅4m以上の大きさを測る。長軸方向はほぼ南北方向といえるが、西に大きく振られている(N13°W)。検出面で観察した埋土は、やや赤みを帯びた暗黄褐色土である。墳頂部の中心位置を占めることや、特異な規模をもつことから赤坂今井墳丘墓の主を埋葬したものと推測される。弥生時代全般を通じて、国内最大級の規模をもつものといえる。未掘削であるため、埋葬主体部の構造、遺物の有無などについては不明である。

(黒坪一樹)

#### 第2主体部

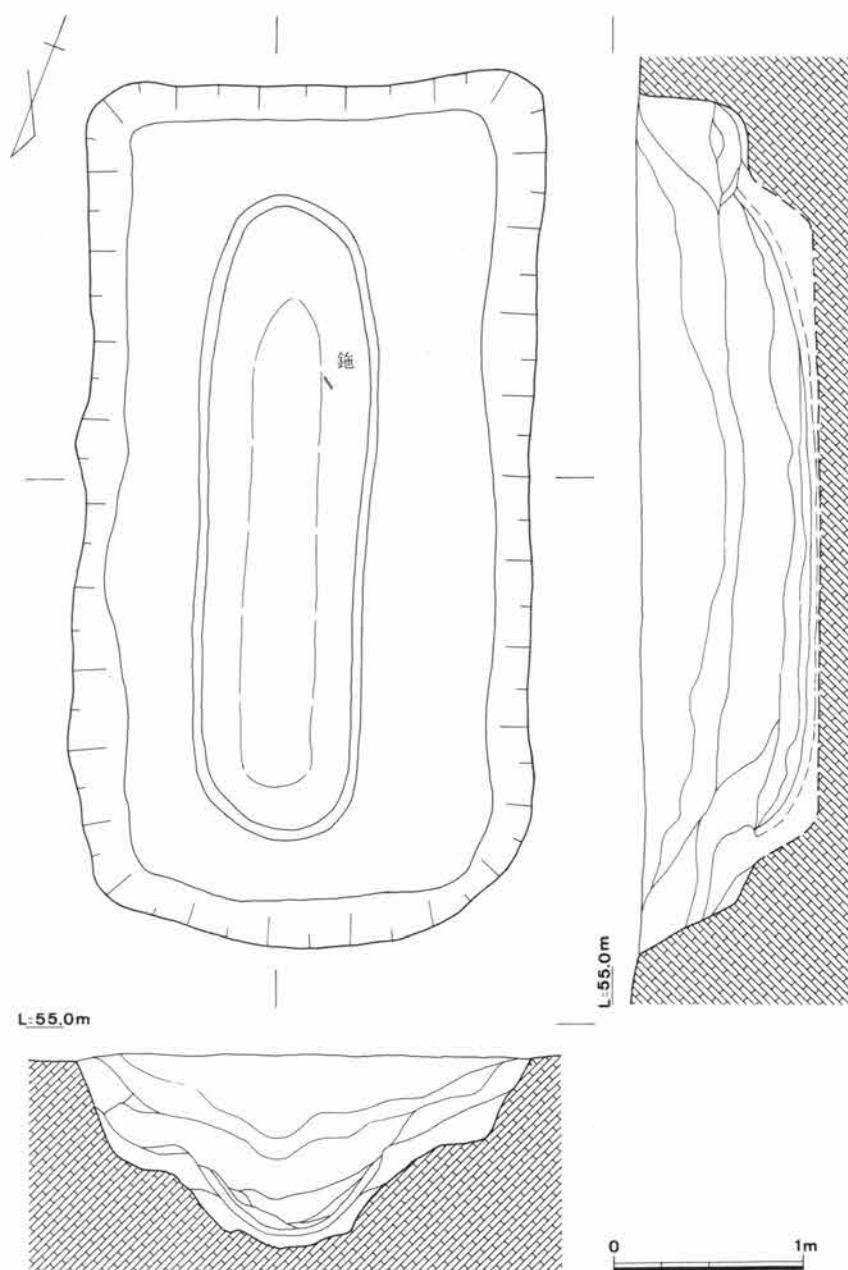
墓壙は盛土上から地表面まで掘り込まれた2段墓壙である(第3図)。主軸方向はN20°Wである。また、墓壙北西側は第1主体部を切っており、第1主体部に後出する埋葬施設であることは明らかである。上段は長軸4.5m・短軸2.4mを測り、平面隅丸長方形を呈する。下段墓壙は上段墓壙底面のやや東寄りに掘られ、平面は隅丸長方形を呈する。上段墓壙底面を掘り残すことによって設けられた平坦部は、下段墓壙の四周をめぐる。また、東側平坦部の方が西側平坦部に比べ低い。墓壙底面は短軸方向にしか断ち割っていないため詳細は不明であるが、横断面はゆるい弧状を呈する。

木棺の痕跡は、下段墓壙上面を確認するのとほぼ同じレベルで検出した。幅約90cmを測る淡黄極細砂を主体とする土色の変化を確認し、断面の観察結果から、これを木棺材そのものの腐食痕と判断した。

木棺は平面・断面から丹後でいわれるところの「舟形木棺」と判断した。棺痕跡の短軸方向断面はゆるい弧状を呈し、また両小口部分も垂直には立ち上らず、弧状を呈している。また、平面的にみると、南側小口部分は東側小口部分に比べ平面的には鋭角であり、また、断面の立ち上

がり角度もゆるい、そのため、仮にこれを丸木船に見立てるならば、南側が舳先に、北側が艫に相当することとなる。木棺検出時の規模は長軸3.35m・短軸0.9mを測るが、墓壇長軸方向の土層断面観察から本来の棺の長軸は3.45mを測るものと判断した。

棺蓋の形状については、明確にはできないが、墓壇長軸方向の土層断面から、若干の復原を試みる事が可能であった。墓壇長軸南側の埋土は、棺の内側に向かい逆弧状を呈しており、この部分が本来の棺蓋直上の埋土であると判断した。となると、棺蓋も棺身同様丸木舟状の形態を持つ可能性が高い。



第3図 第2主体部平・断面図

遺物は棺内南西区より切先を南方向に向けた鉋1点を検出した。以上の点から被葬者の頭位は南方向であると判断する。

鉋は切先部から全体のほぼ2/3を残存する。残存長7.9cm・幅0.6cm・厚さ0.2cmを測る。

(石崎善久)

### 第3主体部

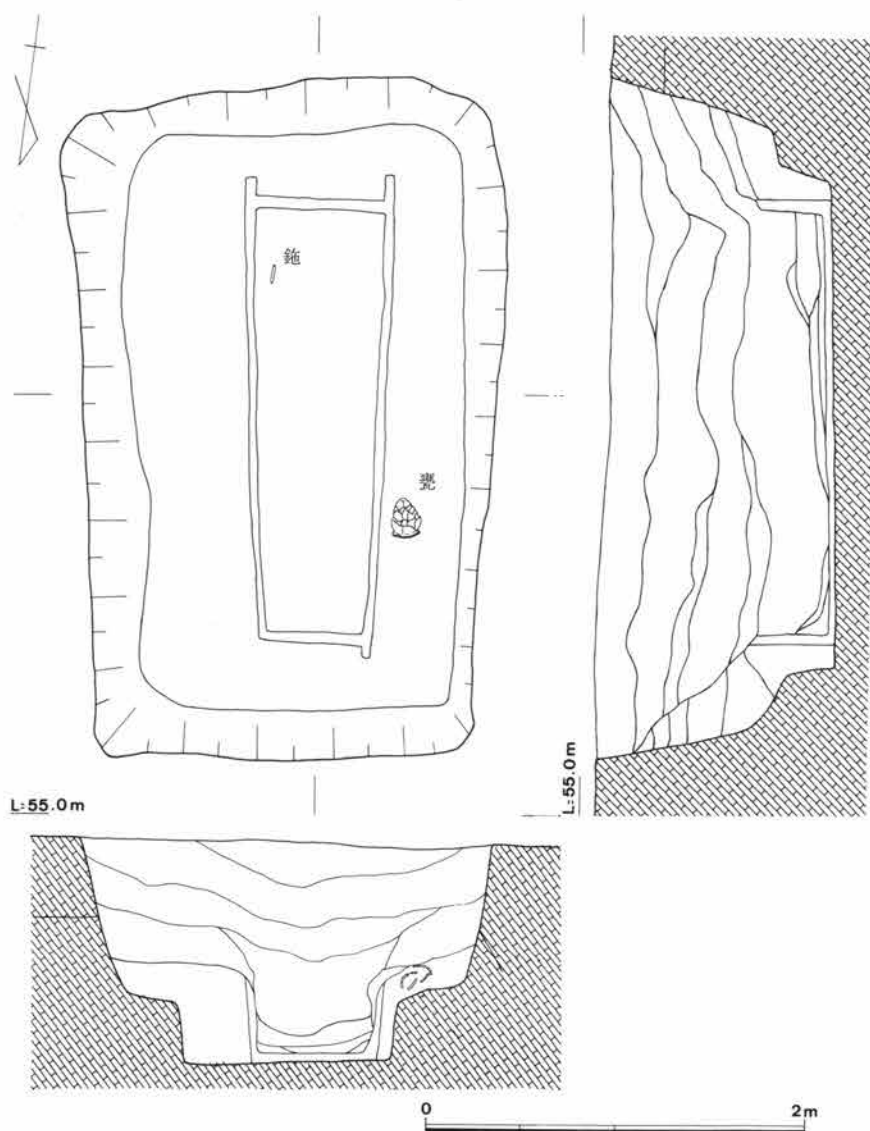
第1主体部の北東部を若干壊して設けられている。隅丸長方形の墓壇である(第4図)。長さ3.55m・幅2.3m・深さ1.2mの大きさで、木棺直葬である。墓壇の長軸は、N7°Wである。墓壇は検出面から50cmで段をもつ、いわゆる2段墓壇である。木棺の棺材(置き変わり土)のラインが明瞭に検出されたため、木棺は墓壇の中央からわずかに西に寄って据え置かれたこと、木棺部



の大きさは、長さ2.35m・幅0.8mで、組合式箱形木棺である。棺材の推定幅は4cmほどである。棺底はほとんど水平であるが、棺の幅は南側がやや広がっている。このことから南側頭位で埋葬されたものと考えられる。

遺物は、木棺内の南小口寄りの西側に置かれた鉞1点と、墓壙2段目の西側長辺の中央やや北寄り、甕1個体が出土した(第12図)。鉞は切先を欠損しているが、切先は長軸に沿う南側に向けられていた。鉞は先端を欠失しているが、鏑の部分が少し残存し、ここから切先刃部はわずかに反りかえる。残存長9.1cm・身の幅0.85cm・厚さ0.2cmを測る(第13図2)。

甕は、口縁部径14.2cm・器高16.5cm・体部最大径14.4cm・底部径3cmを測る(第12図1)。口縁部の二段目の立ち上がりは短く斜め上方につまみあげられ、全体にナデ調整されている。擬凹線は認められない。体部外面は横および左上がり方向のハケメが入念に施されている。体部内面は、口縁部との境目から幅広の比較的粗いケズリ調整が入っている。胎土の質は普通で、色調はやや濁った暗褐色を呈している。形態学的特徴から弥生時代後期末(3世紀中葉)とみられる。



第4図 第3主体部平・断面図

#### 第4主体部

第1主体部の北辺部を壊して設けられている。隅丸長方形の墓壙である(第2図)。長さ3.75m・幅1.7m以上を測る。墓壙の主軸は、ほぼ南北方向である(N14°W)。埋土表層は暗黄褐色土である。未掘削であるため埋葬主体部の構造、遺物の有無などについては不明である。

#### 第5主体部

墳頂部の南東側、傾斜変換線近くに設けられ

ている。長方形の墓壙で、長さ2.8m・幅1.85mの大きさである(第2図)。墓壙の主軸はほぼ南北方向に沿う(N13°W)。埋土表層は、やや赤みを帯びた黄褐色土である。未掘削のため主体部構造、遺物の有無については不明である。

### 第6主体部

墳頂部の北東側やや中央寄り傾斜変換線近くに位置する。長方形の墓壙で、長さ3m・幅1.8mの大きさである(第2図)。墓壙の主軸はほぼ東西方向に沿っている(N86°E)。埋土表層は暗黄褐色土である。未掘削のため主体部構造、遺物の有無については不明である。

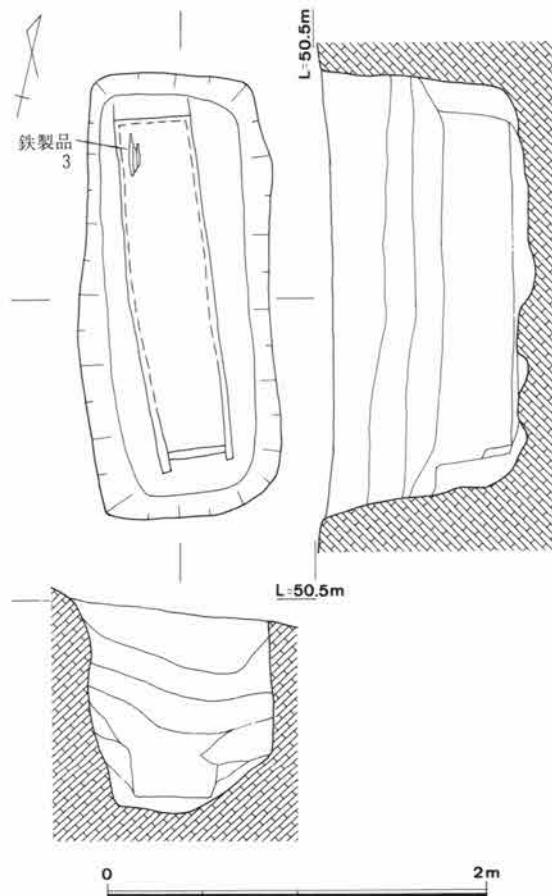
(黒坪一樹)

### 第7主体部

墳丘裾部の東側ほぼ中央寄りに設けられている。東側平坦面では最も南に位置する。墓壙の主軸は南北に沿う(N14°W)。平面形態は隅丸長方形を呈する(第5図)。盛土上から掘り込まれた1段墓壙である。長さ2.3m・幅1m・深さ1.1mを測る。墓壙が非常に深く、しっかりとしているのが特色である。木棺痕跡は墓壙検出面から0.7m掘り下げたところで、木棺材が黄灰色中粒砂に置き換わった状況で検出された。木棺の構造は、長側板が小口板を挟み込む「H」字形木棺(組合式箱形木棺)の形態である。また底板の上に長側板および小口板をのせる構造のものであることが、土層の断面観察から明らかとなった。規模は、棺底部内法で長さ1.8m・幅0.45mほど、深さは棺痕跡検出面から底板まで25cmである。棺材の厚みは南側小口部分でみると、両長側板・小口板ともに4cmほどの厚みをもつ。さらに木棺を安置する際、墓壙掘削時の排土の一部を墓壙底に水平に敷き詰めていることも土層の観察から明らかとなった。木棺の主軸は、墓壙に対しやや西に振っている(N21°W)。

遺物は墓壙内埋土上層で土器片が1点出土しているが、あまりの細片のため時期なども不明といわざるをえない。墓壙上に供献された土器であろうか。本主体部ではなによりも棺内からの鉄器の一括出土が注目される。棺内の位置は北側小口部の西寄りで、鉄製短刀・鉞・鉄鏃の順に3点が底板の直上で接して置かれていた。すべて切先は長軸方向の南に向けられていた。この状況から被葬者は北側に頭を向けていたものと推察される。

短刀は平造りの刀身(16.1cm)を持ち、全長20.7cmを測る。関は刃部側のみ形成される。茎部には一つ目の釘孔(直径3mm)がある。棺底と



第5図 第7主体部平・断面図

接する側のみ木片の付着が認められるので、木質部は棺材である可能性が高い。

鉞は長さ11cm・刃部幅1.8cm・身部長9.1cm・厚さ0.2cmを測る。切先部の鏝も識別できる。これも木質部が片面のみに付着しているため、棺材底板の木質であろうとみられる。

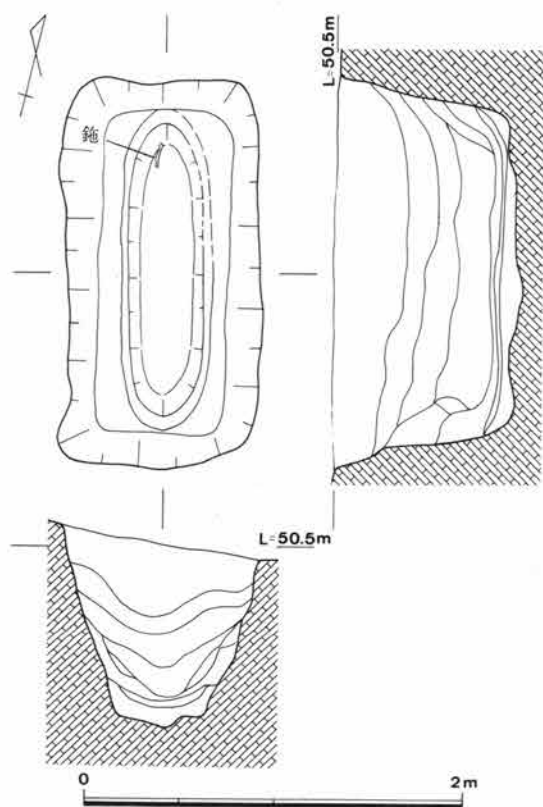
鉄鏃は、柳葉式で全長9cm(復原)・鏃身長6.9cm・細く短い茎部長は2cmを測る。弥生時代の鉄鏃の特徴をもつものといえるが、鉞と鏃着して、鏃が進行しているため、詳細は不明瞭である。

以上3点の鉄器は、表面に付着物が見られ、布状の物質にくるまれて副葬されたようである。

(古川 匠)

### 第8主体部

第7主体部の北側2mを隔て、ほぼ第7主体部に主軸をそろえて設けられている。墓壙は隅丸長方形である(第6図)。地山と盛土の整形によって造成された平坦面より掘り込まれる1段墓壙の形態をとる。規模は検出面で長さ2m・幅1m・深さ1.1mを測る。墓壙の主軸は南北方向である(N14°W)。7号主体部同様、墓壙平面の規模に対して、墓壙の深さがしっかりしているのが特徴である。木棺痕跡は墓壙を約75cm掘り下げた段階で検出した。棺材は橙褐色細～中粒砂に置き換わり、棺痕跡は比較的明瞭に識別できた。木棺の平面形は両先端が「U」字形に収まる形態のものである。棺底部の横断面はゆるい「U」字状を呈し、小口部分断面もゆるくカーブを描いてたちあがる。いわゆる舟形木棺であるが、舳先と艫の区別は明瞭ではない。木棺部の大きさは、長さ1.7m・幅0.47mで墓壙の掘形いっばいに棺が納められている。木棺底のレベルはほぼ水平である。遺物は、棺内の北側小口寄りの西側で棺長軸に沿って、鉞が1点出土した。切先は



第6図 第8主体部平・断面図

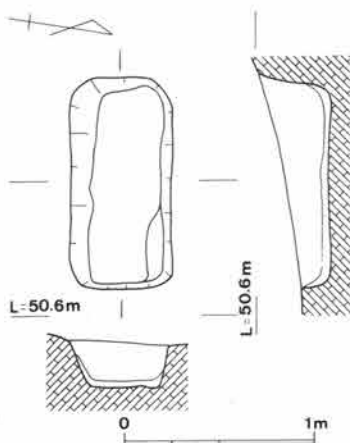
北に向けられている。被葬者の頭位を考えてみる。南北両小口を比較すると、棺の幅および底のレベルともに顕著な違いはない。そこで丹後地方における弥生時代後期における鉞の副葬状況を見ると、上半身寄りに置かれて<sup>(注4)</sup>いる場合が他と比較して卓越しているため、本例も北頭位である可能性が高い。

鉞は、長さ12.6cm・幅1cm・厚さ0.3cmを測る。先端部から基部までを残存する(図版第11-6)。

(三好 玄)

### 第9主体部

第8主体部の北側にほぼ接して設けられている。墓壙は楕円形に近い隅丸長方形である(第7図)。長さ1.1m・幅0.52m・深さ0.35mを測る。主軸は東西方向に近い(N81°E)。墓壙内の埋土の観察からは、木棺の痕跡を識別し得なかった。素掘りの土壙墓とみられる。底の形状はほぼ水平



第7図 第9主体部平・断面図

である。遺物は出土していない。

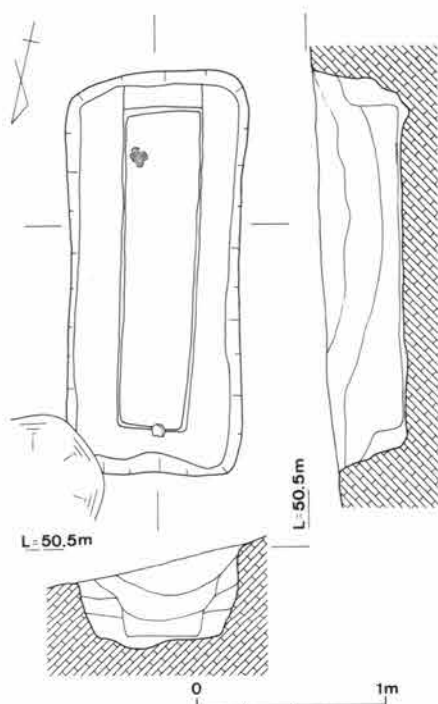
#### 第10主体部

第9主体部の北側にほぼ隣接して設けられている。墓壙は隅丸長方形である(第8図)。長さ2.1m・幅0.9m・深さ0.45mの大きさである。主軸は南北方向である(N13°W)。第7・第8両主体部の深い墓壙と比べ、浅いものである。墓壙の下底から15cmほど上で、長方形の木棺痕跡を確認した。木棺は長さ1.7m・幅0.4mを測る。組合式箱形木棺であろう。木棺の主軸は墓壙に沿っている。なお棺底はほぼ水平となったが、棺痕跡の南側がやや幅広であることや、副葬品の検出位置から、被葬者は南頭位と判断した。

棺内の副葬品は、木棺底とみられるところから、片手一杯ほどの赤色顔料が薄く塗布されていたのみである。棺内中間部から南に1/3ほどの位置で、直径30cm程度の範囲に認められた。

#### 第11主体部

墳丘裾部の北側平坦面に設けられたものである。全体から見た位置は、下段平坦面の北東隅寄りである。墓壙は幅広の隅丸長方形である(第9図)。長さ2.6m・幅1.8m・深さ0.6mを測る。主軸の方向はほぼ東西を指す(N79°E)。上面の削平を考慮すれば、深くしっかりした墓壙である。2段掘りの墓壙は底から30cm上の花崗岩の風化岩盤面から2段目となり、ここより木棺の痕跡が確認された。木棺は長さ1.8m・幅0.6mの大きさと推定される。主軸は墓壙に沿っているが、墓壙内における位置は、やや北側に寄って安置されている。なお棺底はほぼ水平になっている。



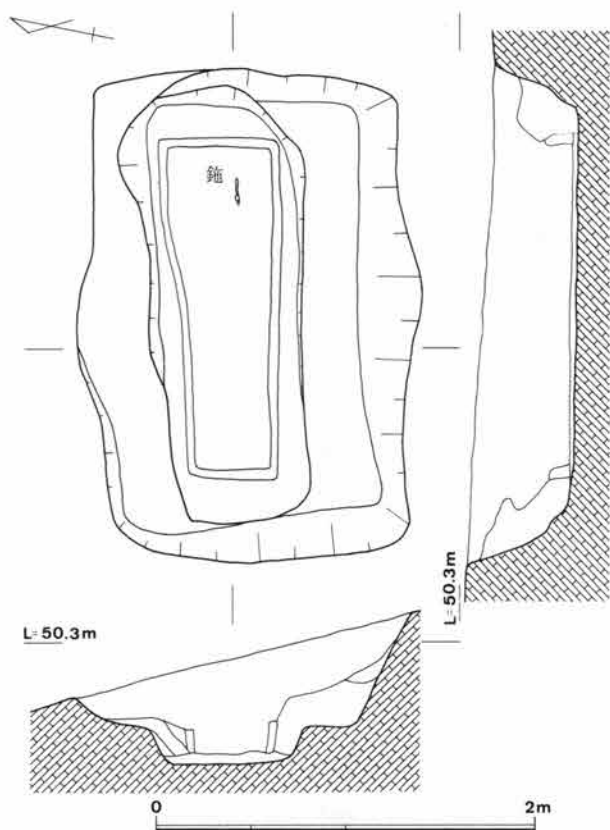
第8図 第10主体部平・断面図

棺内の遺物は、北東側の隅に近いところから鉈が1点出土した。この鉈の出土した側の棺の幅が広がっていることから、被葬者は、東頭位に安置されていたと判断される。

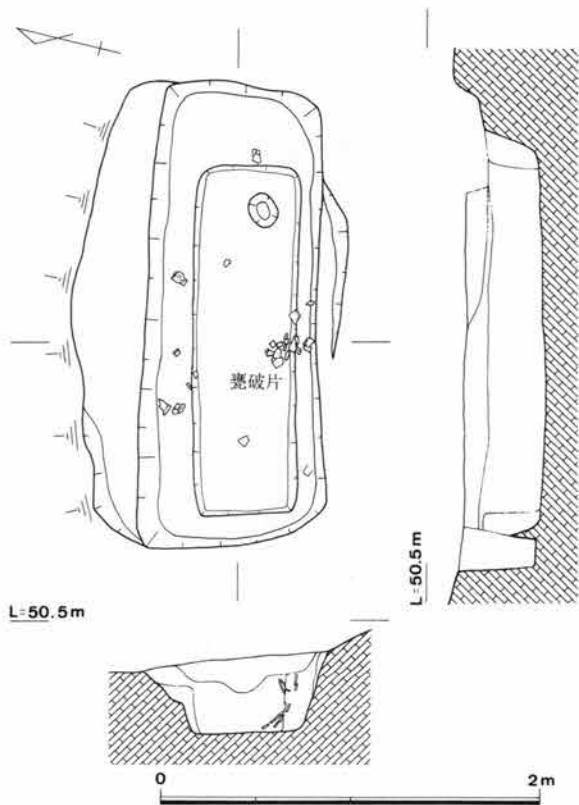
鉈は切先部を欠損する。残存長13.6cm・幅0.8cm・厚さ0.3cmを測る(第13図3)。中間部から切先方向にごくゆるやかなラインで反っていく。なお下面に木質の付着が認められ、棺底材のものと考えられる。

#### 第12主体部

第11主体部の西側に2mほど隔てて設けられている。墓壙は隅丸長方形である(第10図)。長さ2.4m・幅1.5m・深さ0.45mを測る。主軸の方向は、ほぼ東西方向を指す(N77°E)。上面の削平を考慮しなければならないが、浅い墓壙である。墓壙の南西側に寄って棺痕跡が確認できた。木棺の南側の裏込め土の幅は狭く、南墓壙壁との



第9図 第11主体部平・断面図



第10図 第12主体部平・断面図

距離はわずかである。土層の断面観察からも明瞭な木棺痕跡は確認できなかったが、組合式箱形木棺の存在を考えている。木棺の長さ1.83m・幅0.55mとほぼ推定される。この木棺の南辺中間部を中心に棺の内裏込め部の上面に、弥生土器甕の破片が散在している状況を捉えた。破片の接合を試みると、底部付近を除いてほぼ一一体となった。木棺を納めた直後に土器を破壊し、破片を棺上にばらまくようにして納めた、いわゆる破碎供献された好例である。棺全体が腐食して棺蓋が棺内に落ちこんだ際に、棺蓋の上に置かれていた土器片も一緒に落ち込んだ状況をとどめたものといえる。甕形土器は、口径15.9cm・器高18cm以上、体部最大径15.6cmを測る(第12図2)。口縁は二重口縁で、2段目の立ち上がりの外面に擬凹線が施されている。体部外面はハケメ、内面は口縁部との境目から幅広のケズリによる調整が認められる。時期は弥生時代後期末のものといえる。

#### 第13主体部

第12主体部の南西側の墳丘裾部寄りに設けられる。墓壙は隅丸長方形である(第11図)。長さ1.75m・幅0.63m・深さ0.4mである。墓壙の主軸はほぼ東西を指す(N 82° E)。土層の断面観察を入念に検討したが、木棺の痕跡を確認できなかった。素掘りの土壙墓である。出土遺物はない。

#### (4)主体部外の出土遺物

壺(第12図5)は口縁部の断片である。二重口縁壺の形態をとる。口径15.9cmを測る。2段目の立ち上がり部は擬凹線が施され、上半部がゆるやかに外反している。淡黄褐色の色調で、風化がすすんでいる。



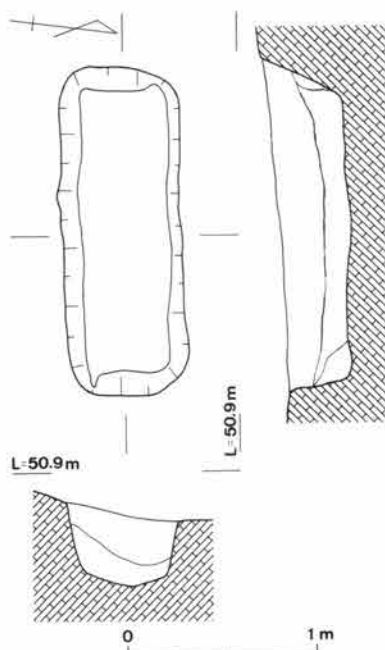
壺(第12図6)は断片ながら、体部から頸部にかけてほぼ垂直に立ち上がり、口縁部は大きく外反する形態のものである。頸部のはじまる部分に貼りつけの突帯がめぐる。突帯の部分には連続する半截竹管圧痕文が認められる。口縁端部を欠くため大きさは不明瞭。暗褐色を呈する。

器台(第12図3)も口縁部の断片である。大きく外反する口縁部には擬凹線が施された後に櫛描波状文が描かれている。口縁部径は32.1cmである。

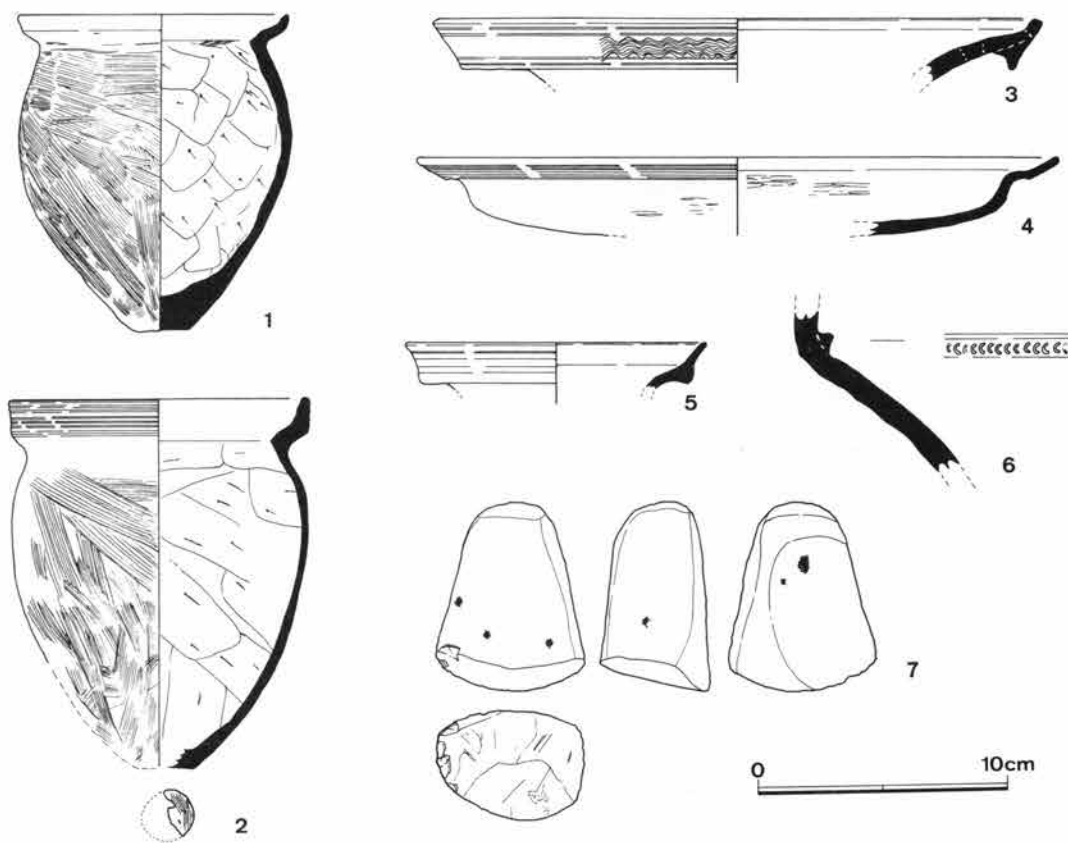
石杵(第12図7)は、スタンプ形のものである。もともと不定形楕円の自然礫を用い、たとえば赤色顔料などを精製するため、台石とのセットでもちいられたものである。幅広の下端部は艶やかなほどの磨面を形成している。擦痕の方向は明瞭ではないが、わずかに面変わりの稜が確認できることから左右に振り分けられてのグラインド作業が復原できる。長さ9.8cm・幅7.7cm・厚さ5.9cm・重さ492gを測る。

以上の3点の遺物は埋葬主体部の分布しない南東平坦面からのもので、この場の祭祀的空間部としての性格がうかがい知れる。

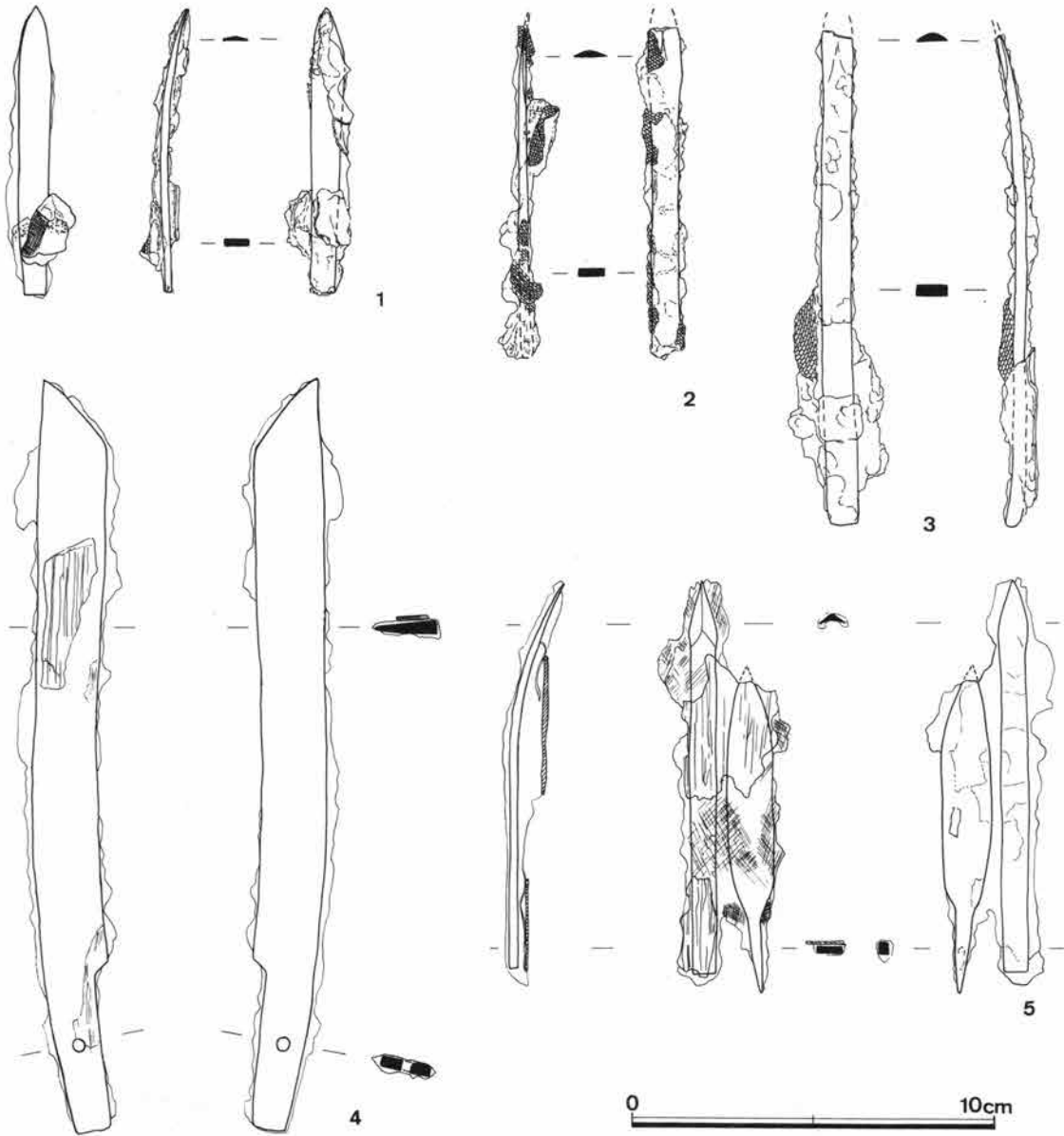
高杯(第12図4)は、外側に大きくのびやかに開く二重口縁の大型高杯である。口縁部径は34cmを測る。完形率15%ほどの断片である。口縁端部には擬凹線が認められるが、かなり



第11図 第13主体部平・断面図



第12図 出土遺物実測図(弥生時代)

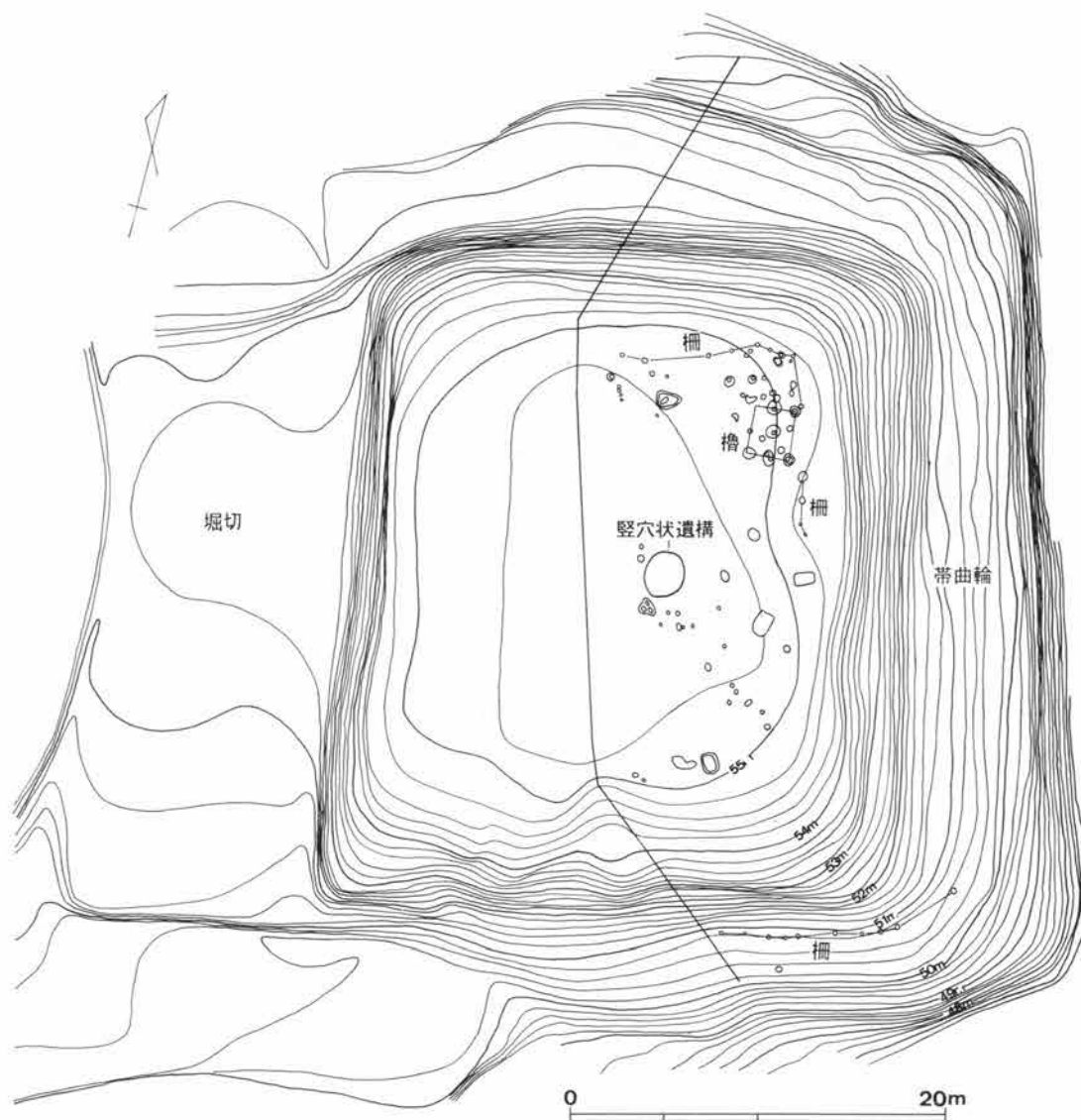


第13図 出土鉄製品実測図(1.第2主体部 2.第3主体部 3.第11主体部 4・5.第7主体部)  
 磨耗している。また内外面にはミガキ調整がごくわずかにのこる。やや赤味を帯びた淡褐色の色調で、精製に近い胎土をもっている。日用品ではなく墳墓にともなう性格の土器である。弥生時代後期末のものである。墳頂部から墳丘南側斜面にかかる地点から出土した。

須恵器杯蓋・杯身・高杯(第15図1～4)は、いずれも断片である。南東側の墳丘裾部から平坦面上の表土層および包含層中から出土した。時期に幅があり、TK10(6世紀中葉)～TK209(6世紀末頃)に相当する。しかしながら、これらに関する埋葬施設は検出されていない。

### 5. 今井城跡

今井城跡は、赤坂今井墳丘墓の地形をほとんどそのまま利用して築かれている(第14図)。頂部平坦面の曲輪、周囲にとりつく曲輪、墳丘墓の溝をさらに大規模に掘削して形成した堀切などを備えている。山城としての機能を果たしたものといえる。頂部には大小の柱穴痕や、竪穴状遺構



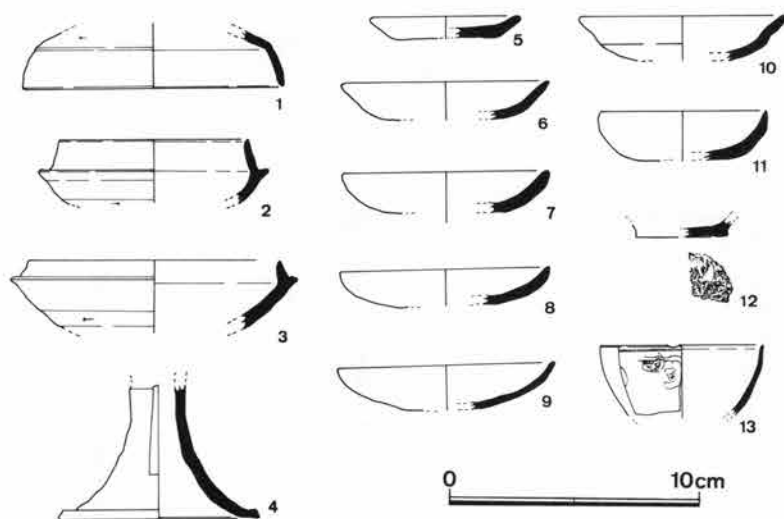
第14図 今井城跡遺構平面図

などがあり、周囲をとりまく柵、櫓状の建物などの存在がうかがえる。出土遺物としては、土師器皿や中国製陶磁器の破片などが若干ある。

竪穴状遺構は直径2m・深さ1.9mほどの大きさである。底はほぼ平坦で、平面形は上面の輪郭と比較すると隅丸の四角形を呈している。その北東隅で直径20cmほどの柱穴痕を一つ確認している。長い柱を立てて、いかなる施設を設けていたのかについては明瞭ではない。類例の集成と検討が必要である。櫓状の建物については、南北2間×東西2間の規模である。建物の中心および東西列の柱穴痕は南北列のそれらと比較して大きくしっかりしている。大きなものは直径60～70cmを測る。

柵列は、主曲輪の周囲や帯曲輪の要所に設けられたものといえる。直径15～20cmの小規模な柱穴により構成されている。櫓状建物の周囲に集中して認められる。出土遺物には土師器皿・土師器杯・陶磁器などがある(第15図5～13)。

土師器皿(第15図8)は、竪穴状遺構の東側約3.5mにある柱穴痕から出土したもので、手づくねにより整形されている。口径11cm・器高1.9cmを測る。時期は15～16世紀にかけてのものであ



第15図 出土土器実測図(古墳時代～室町時代)

る。その他にも、土師器皿は5点出土している(第15図5～7・9・10)。形態上からも多様なもので、時期幅(12～15世紀)がある。口径8～12cm・器高1.2～2.2cmを測る手づくねによる成形である。曲輪頂部・斜面・腰曲輪南東部などの表土層および包含層中から出土している。11は土師器杯である。墳丘東斜面から出土し

た。口径9cm・器高2.6cmを測る。

黒色土器片(第15図12)は、糸切り痕をとどめる底部の断片である。11世紀中頃～12世紀前半の時期である。竪穴状遺構内から出土した。

中国製の染付陶磁器(第15図13)は、櫓状建物跡の南西側約5mの部分から出土した。遺構に伴うものではない。口縁部の残る体部の小破片で、法量については明瞭にし得ない。15世紀代のものであろう。

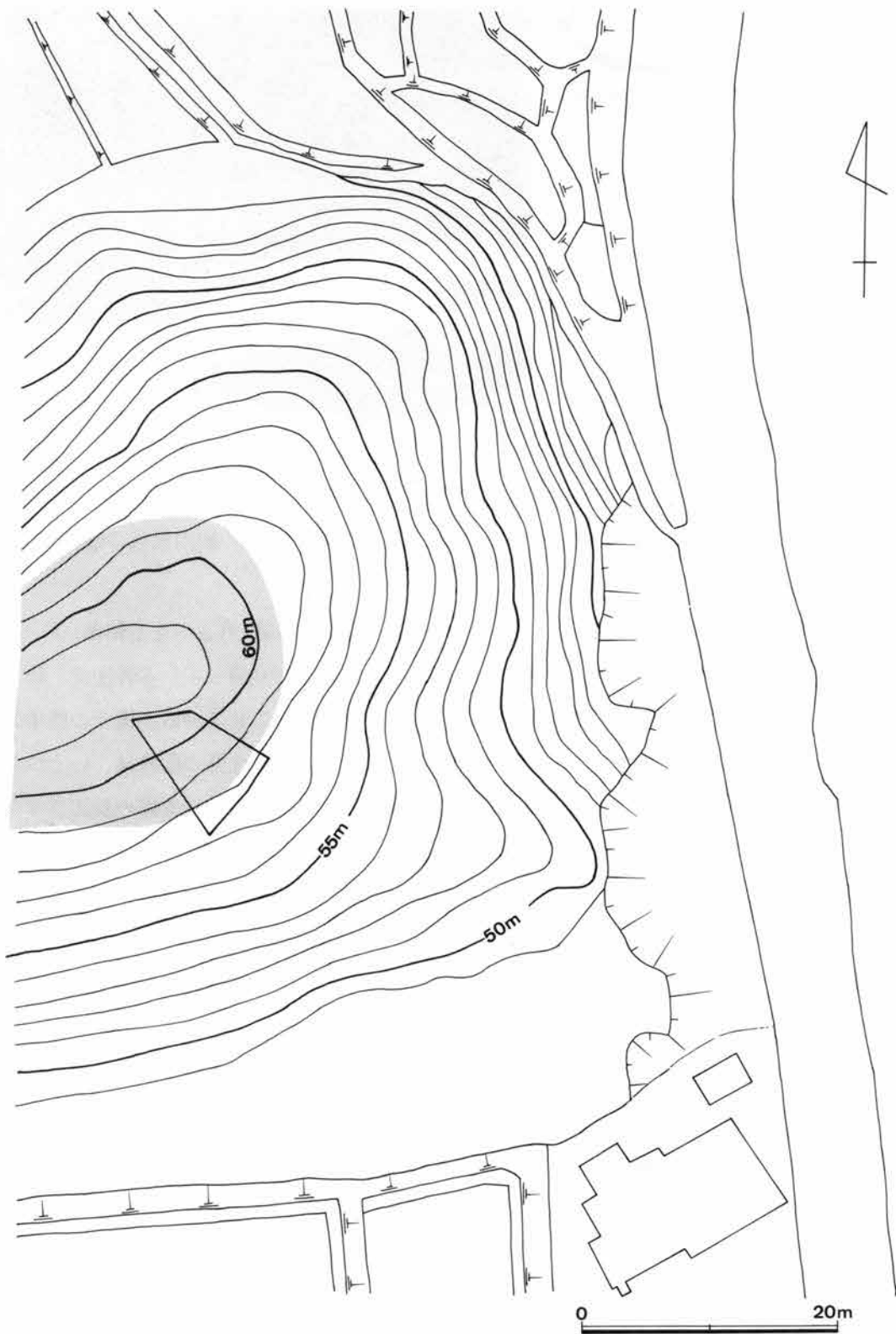
## 6. 今井古墳

今井古墳は、赤坂今井墳丘墓の南側で谷一つ隔てた丘陵上に位置している。標高は最頂部で61m、墳丘裾部で58mほどを測る。府道拡幅工事にかかることから、古墳の規模や磁器を確認する目的で、調査可能な範囲に限って、試掘調査を実施した。今井古墳の墳頂部は当初から大きく陥没しており、そこに何らかの埋葬施設の存在が予想された。その陥没部の中心は未買収地であるため、そこは外して、陥没部の前から斜面さらに傾斜変換線の裾部をカバーするように、幅広の調査トレンチを設定した。掘削の結果、墳丘斜面上半部の表土および表土直下の黄褐色砂質土中から須恵器の杯身の破片などが出土した。須恵器の時期は古墳時代後期(6世紀後半)である(第17図)。口径12.2cm・器高4.4cmを測る。また墳丘裾部からは、須恵器の臑とみられる破片も出土している。これらの須恵器の出土状況からみるかぎり、埋葬施設はかなりの攪乱を受けていることが予想される。周辺には石材の露出が若干観察され、横穴式石室の存在をうかがうことができる。標高58mあたりに裾部の一部がめぐるが、墳丘の規模・形態については明瞭ではない。

(黒坪一樹)

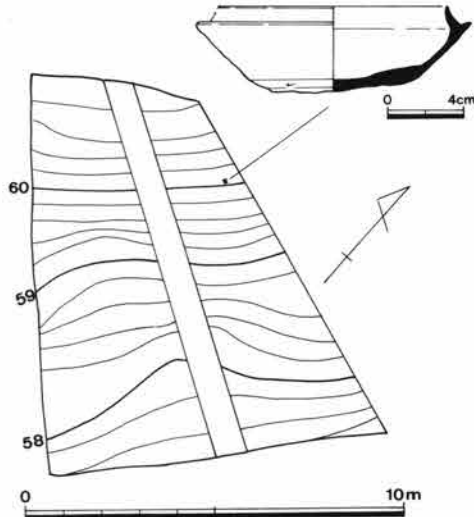
## 7. ま と め

まとめにあたり、赤坂今井墳丘墓についていくつかの重要な点を整理しておきたい。



第16図 今井古墳地形図および調査区(トーンは復原墳丘)

(1)墳丘はほぼ一辺40m・高さ3.5mを測る方形墳で、弥生時代後期の墳丘墓としては国内最大級のものである。また、墳丘構築には多量の盛土が使用されており、一般の地山成形の墳墓と比較して高度な技術、多くの労力が使われている。



第17図 今井古墳調査区および出土遺物



第18図 今井古墳調査前風景

(2) 埋葬施設は墳頂部・下段の周辺部ともに複数構築されている。この内、墳頂部中央を占める中心主体部(第1主体部)は、長さ14m・幅4m以上と、現在のところ国内最大の規模をもち、他の主体部に比べて圧倒的に巨大である。

(3) 巨大な中心主体部(第1主体部)と切り合いをもつ3つの主体部(第2～4主体部)は、第1主体部の破壊を最小限度に止めている。墓壇の外郭ラインを若干切り崩している程度で、棺の切り合いもない。こうした状況は金谷1号墓(峰山町)においても確認されている<sup>(注5)</sup>。墳丘の西半分の様子は不明ながら、特徴的な配置である。また周辺平坦部の7基の主体部の配置は、いくつかのまとまりを考慮せざるをえない。たとえば東側の第7～第10主体部は完全に墓壇の長辺ラインを揃えて設けられている。北東隅には埋葬主体部はないことから、これらは北側の第10～第13主体部とは別の系統のものとも考えられる。このように、なんらかの意図・規制が働いた埋葬主体部の配置は今後とも検討しなければならない。

(4) 築造時期は、第3主体部から出土した土器などから弥生時代後期末頃(3世紀中葉)と考えられる。

以下、丹後地域および周辺地域の資料をふまえ、被葬者について考えてみる。丹後半島の弥生時代墳墓からは多量の玉類や、鉄製品が出土することで知られている。平成10年度の岩滝町大風呂南墳墓でガラス釦と多量の銅釦、鉄剣が一つの主体部から出土し、全国的に注目を集めた<sup>(注6)</sup>。しかし、この大風呂南墳墓をはじめとする弥生時代の墳墓は、墳丘を大きく意識したものではなく、いずれも自然の地山を削り出し、背後に溝を掘って墓域を区画するといった単純なものである。こうした墳墓に比較して、赤坂今井墳丘墓は大規模な盛土工事を行い、しかも墳丘周辺の下段平坦部まで盛土成形するという入念な工事を施している。

一方、この時期を中心に山陰地方では四隅突出墓と呼ばれる方形の墳丘の四隅に突出部を付けた墳丘墓が数多く造られる。この四隅突出墓の分布状況は、出雲地方を中心に北陸地方まで広がっている。こうした状況から、日本海側では出雲地方を中心とした政治的連携がとられていったものと解釈されている。しかし、丹後半島ではこれまで四隅突出墓は発見されていない。若干時



第1表 赤坂今井墳丘墓主体部一覧表

	墓壇			木棺			出土遺物		備考	
	形状	長さ	幅	高さ	形状	長さ	幅	棺内		棺外
第1主体部		14	4以上							未完掘
第2主体部	2段墓壇	4.5	2.4	0.9	舟形	3.35	0.9	鈿1	なし	
第3主体部	2段墓壇	3.55	2.3	1.2	箱形	2.35	0.8	鈿1	甕1	
第4主体部		3.75	1.7以上							未完掘
第5主体部		2.8	1.85							未完掘
第6主体部		3	1.8							未完掘
第7主体部	素掘墓壇	2.3	1	1.1	箱形	1.8	0.5	鈿1・鉄鏃1・短刀1	土器片1	
第8主体部	素掘墓壇	2	1	1.1	舟形	1.7	0.5	鈿1	なし	
第9主体部	素掘墓壇	1.1	0.52	0.35	なし			なし	なし	
第10主体部	2段墓壇	2.1	0.9	0.45	箱形	1.7	0.4	なし	土器片1	朱散布
第11主体部	2段墓壇	2.6	1.8	0.6	箱形	1.8	0.6	鈿1	なし	
第12主体部	2段墓壇	2.4	1.5	0.45	箱形	1.83	0.6	なし	甕1	甕は破碎 供献
第13主体部	素掘墓壇	1.75	0.63	0.4	なし			なし	なし	土壇墓

期は新しくなるが、大和では前方後円形を呈する墳丘墓が出現し、畿内を中心に分布がみられる。一方、尾張では前方後方形の墳丘墓が出現し、東海地方を中心に分布圏を形成していく。墓の形を共有することによって、政治的な連合関係を結ぶ複数の地域が出現してくる。こうした全国的な状況から、突出部をもたない赤坂今井墳丘墓を構築した丹後の勢力は、出雲地域や他の地域とも組せず、独自の政治領域を形成していたものと考えられる。丹後半島における弥生時代首長墓の形態は、方墳の系統であることを、改めて示したものといえるかもしれない。

赤坂今井墳丘墓には、丹後地域に君臨した首長の一人が埋葬されているものと考えられる。首長の存在の背景としては、当時の可耕地が少なく、稲作をはじめとする農作物の生産がそれほど高くなかったであろう丹後地方では、農耕のみを基盤に勢力を得た人物とは考えがたく、やはり九州や朝鮮半島、さらに中国との独自の交流・貿易を基盤にしてきた人物ではなかったかと推定する。残された問題はあまりにも多いが、地域の歴史教育や研究において活用されることを願って事実報告を終えたい。

(石崎善久・黒坪一樹)

注1 調査参加者は次の通りである。

調査補助員：小笠原順子・古川 匠・三好 玄・坂東伊吹・山道裕美子・八代翻ひとみ

作業員：坪倉孝一・坪倉利恵子・大石四郎・森 和夫・藤原慶治・坪倉和行・岡崎 巖・高野貞子・松本はるゑ・森 秀雄・小国喜市郎・元井淳輔・沖野英範・松本一夫

整理員：金保真由美・金久真弓・谷辻絹代・吉岡美秋・伊熊佐知子・小笠原順子・大江稔弘



- 注2 村田和弘「(1)スガ町古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第83冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998
- 注3 増田孝彦「1. 通り谷城跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第88冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1999
- 注4 当調査研究センター福島孝行の教示による。
- 注5 石崎善久ほか「2. 金谷古墳群(1号墓)発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第66冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1995
- 注6 岩滝町教育委員会『平成10年度大風呂南墳墓群現地説明会資料』 1998

## 2. 福知山城跡発掘調査概要

### 1. はじめに

この報告は京都府福知山市岡野一町ほかに所在する福知山城跡の発掘調査の報告である。

今回の調査はJ R山陰本線の連続立体交差事業に伴う事前調査として、京都府福知山土木事務所の依頼を受けて実施したものである。

調査は平成11年7月26日から同年9月29日まで行った。調査した面積は約250m<sup>2</sup>である。作業員の雇用に当たっては福知山市シルバー人材センターのお世話になった<sup>(注1)</sup>。

調査に当たって福知山市教育委員会・京都府教育庁指導部文化財保護課・日本造園学会事務局



第19図 調査地位置図(1/2,500)

のご協力をいただいた。記して感謝したい。

本報告の執筆分担は、黒灰色粘土層の遺物を浦川真澄(同志社大学学生)が、その他を福島孝行が担当し、文末に文責を記した。

平成11年10月8日に現地説明会を行ったところ、平日であるにもかかわらず約150人もの見学者が訪れた。今回の調査が、福知山市民の埋蔵文化財への理解の深化に寄与することができたのであれば、望外の喜びである。

調査地は、明智光秀が丹波平定後に築城し、以後、福知山藩の藩主の居城となった福知山城内の庭園に当たる場所で、現存する古絵図には当該地は「御泉水」という名称とともに、池や築山(註2)が描かれている。

## 2. 調査経過

福知山城跡は天守閣周辺の本丸についての調査はすでに行われており、埋もれている石垣などの成果が公表されているが(註3)、今回の調査地付近は全く調査事例が無く、遺構面の深さや遺構の存否などは不明であった。従って調査開始時に調査区の最も東寄りの部分と調査区中央北寄りの部分に試掘グリッドを重機によって掘削し、遺構面の検出を行った。この結果、表土直下に厚く盛



第20図 トレンチ配置図

土が堆積しており、この上面に遺構らしき土色の変化が見られた。また、地表下1.5m付近に黒色土層が認められ、この層の下層は青灰色砂礫であった。一般に古代から中世の整地は自然地形の高い側を削平し、低い側を盛土して平坦面を造ると言われている。それに対し近世に入ると、削平をあまり行わず、主に盛土によって造成し、平坦面を造り出すと言われている。従ってこの盛土がどの時代に属すものかが不明であるため、当面はこの盛土を福知山城築城時もしくは整備時の盛土と考えることとし、盛土上面を第1遺構面として調査を開始した。しかし、精査をして遺構を検出し、遺構内を掘削していくにつれ、出土する遺物が近・現代のものであることが判明したため、第1遺構面は近代以降の生活面であると判断し、重機により前述の黒色土層まで掘削することとした。

ところが重機掘削中に木柱の上面を引っかけたため、掘削をこの面で止め、精査を試みた。しかし、検出されたのは木柱6本と、近代の土管のみであり、この木柱も断ち割りを行ったところ上層から打ち込まれた杭であることが判明した。この杭は第1遺構面では検出されなかったものであるため、盛土工事の最中に作業上の必要に応じて打ち込まれたものではないかと推定される<sup>(注4)</sup>。この段階で、現地地表下1.6mに到達していた。試掘グリッドで検出していた黒色土は、ほとんどの地点で検出されず、後に盛土に帯状に含まれる黒色土帯であるということが判明した。また、青灰色砂礫も盛土が地下水位の上昇に伴って還元され、グライ化したため変色したものであることが判明した。この時点で、安全勾配をとりながらではあっても盛土をこのまま掘削するのは危険であると判断して、犬走りを設け、また、狭い調査区内に排土置き場を確保するために調査区の西側の掘削を取りやめざるを得なかった。これにより、調査区の中央部に幅3m・長さ15mのトレンチを設けることとなった。これを内トレンチと呼ぶこととした。この内部を人力で約70cm掘り進めた段階で、黒灰色の粘土層を検出した。この層は、ほぼ内トレンチ全体を覆っており、一部削平により、トレンチ西寄りの南端では検出されなかった。この層の上面と盛土の最下部では近代の遺物が包含されていたが、黒灰色粘土層には18世紀後半を主体とする陶磁器類が包含されていた。この層を除去すると、黒色の玉石が堆積する層があり、この玉石を除去すると板石敷遺構に到達する。また、板石敷遺構・玉石敷遺構を破壊している井戸状の遺構を検出したが、この遺構は後に明治期のものであることが判明した。この面で現地地表下約2.2~2.5mである。さらなる下層遺構の存在を探るため、トレンチ西端に断ち割りを行ったが、摩滅した弥生土器をわずかに含む層が検出された他は、安定した遺構面は検出されなかった。したがってトレンチの土層断面柱状図、板石敷遺構の平面図を作成し、写真を撮影して調査を終了した。

### 3. 調査概要

今回の調査では、福知山城に伴う庭園遺構と、弥生時代の遺物包含層を検出した。

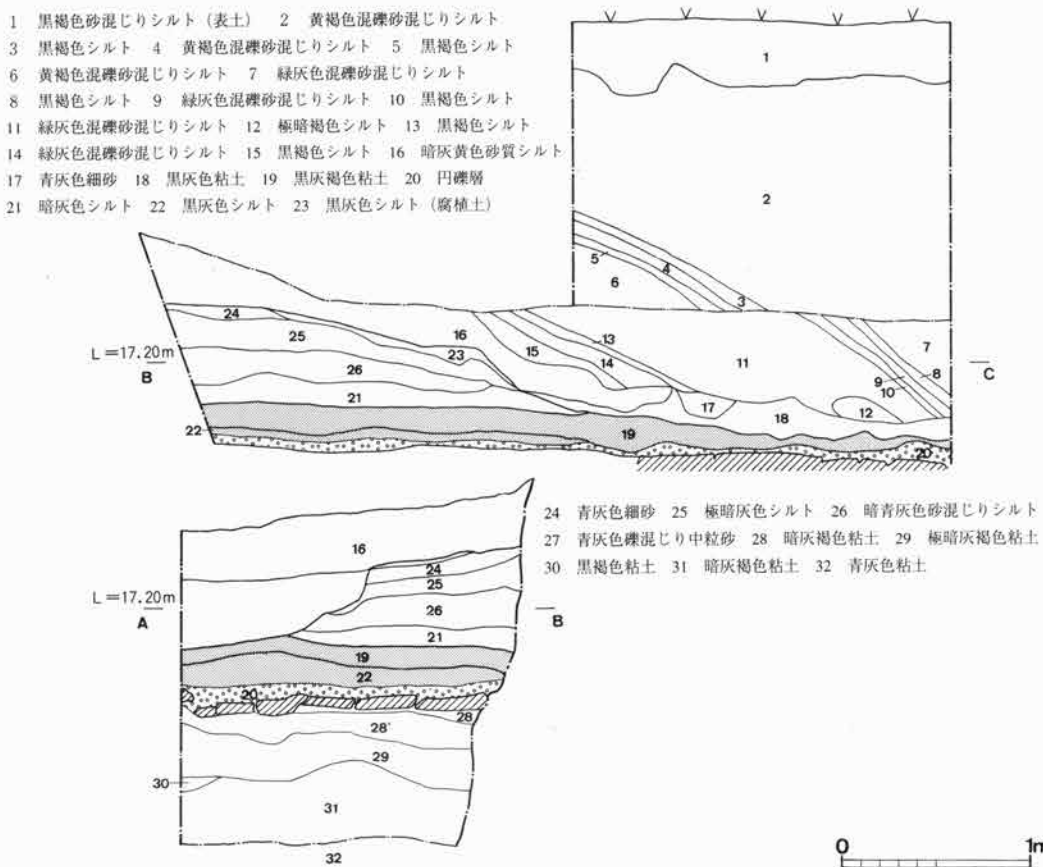
#### (1) 基本土層

当調査区の基本土層は上層から表土層(厚さ10~20cm)、盛土層(黄褐色砂礫、厚さ2~2.2m)、黒灰色粘土層(厚さ10~20cm)、黒色玉石層(厚さ10~20cm)、石敷遺構面、暗灰色シルト層(厚さ

40cm)、暗褐色粘土層(厚さ40cm)、青灰色シルト層である。この内、盛土層は斜行する黒色土層帯を挟んでおり、この黒色土層帯から型紙印判の陶磁器が出土している。また、盛土層下面からは近代の遺物が、黒灰色粘土からは18世紀後半の陶磁器が、暗褐色粘土層からは弥生土器1点がそれぞれ出土している。

(2)江戸時代の遺構・遺物

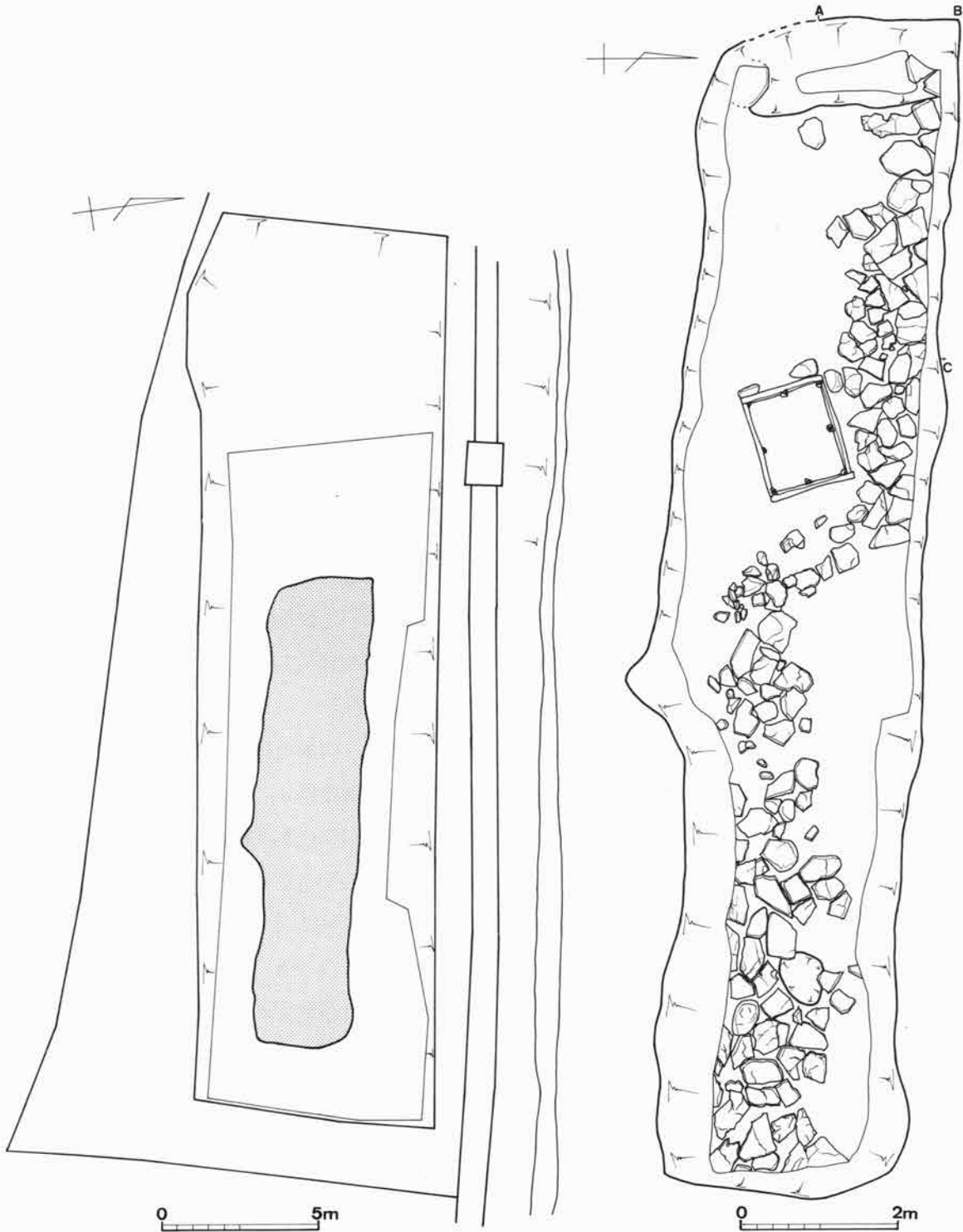
板石敷遺構(第22図) 調査区のほぼ中央で、現地地表下約2.2~2.5mの地点から板石を敷き詰めた遺構を検出した。この遺構は「S」字状に細長く続く遺構であり、この石敷きの外側に池状の堆積は認められないため、道状の遺構であることが推察された。岩石の種類はチャートを主体とするものの、砂岩や花崗岩などが少量含まれており、隣り合う石材同士は色目や石材、岩石の大きさが異なるように配置されていた。石材の大きさは最も大きなもので、長さ1m・幅60cm・厚さ20cmに達するものがあり、断ち割りの際にこの石材を外したが、成人男性が3人掛かりでようやく持ち上げられたほどの重量を持っていた。小さなものは拳大のものがあり、大型の石材同士の間を埋めるように配置されていた。また苑路とすれば、苑路の中央部に当たる石材はやや大きめの石材(長軸30~40cm)、端に近い部分には小型の石材(20cm内外)が用いられ、屈曲部の南側は拳大の塊石を用いていた。石材は遺構の主軸方向を意識しており、石材をモザイク状に配置しながらも、全体として主軸に沿った方向に向けて配置されている。そして屈曲する部分では、すべ



第21図 土層断面図

での石材がその方向を変えて主軸に合わせている。石と石の間の目地には、黒色玉石が入っていることが多いが、<sup>あられ</sup>霰こぼし技法ではなく、上層の玉石敷き遺構の玉石が落下して詰まったものであろうと考えられる。当初から目地に入っていたものは小さな割石である。

玉石敷遺構(図版第14) 板石敷遺構の上部に長軸で8cm内外の黒色の玉石が敷き詰められてい



第22図 内トレンチ配置図および板石敷遺構平面図



た。厚みは厚いところで10cmを越えるが、その他は敷き詰めてあるだけなので、石材1個ないし2個分の厚みしかない。ここからは遺物は出土しなかった。

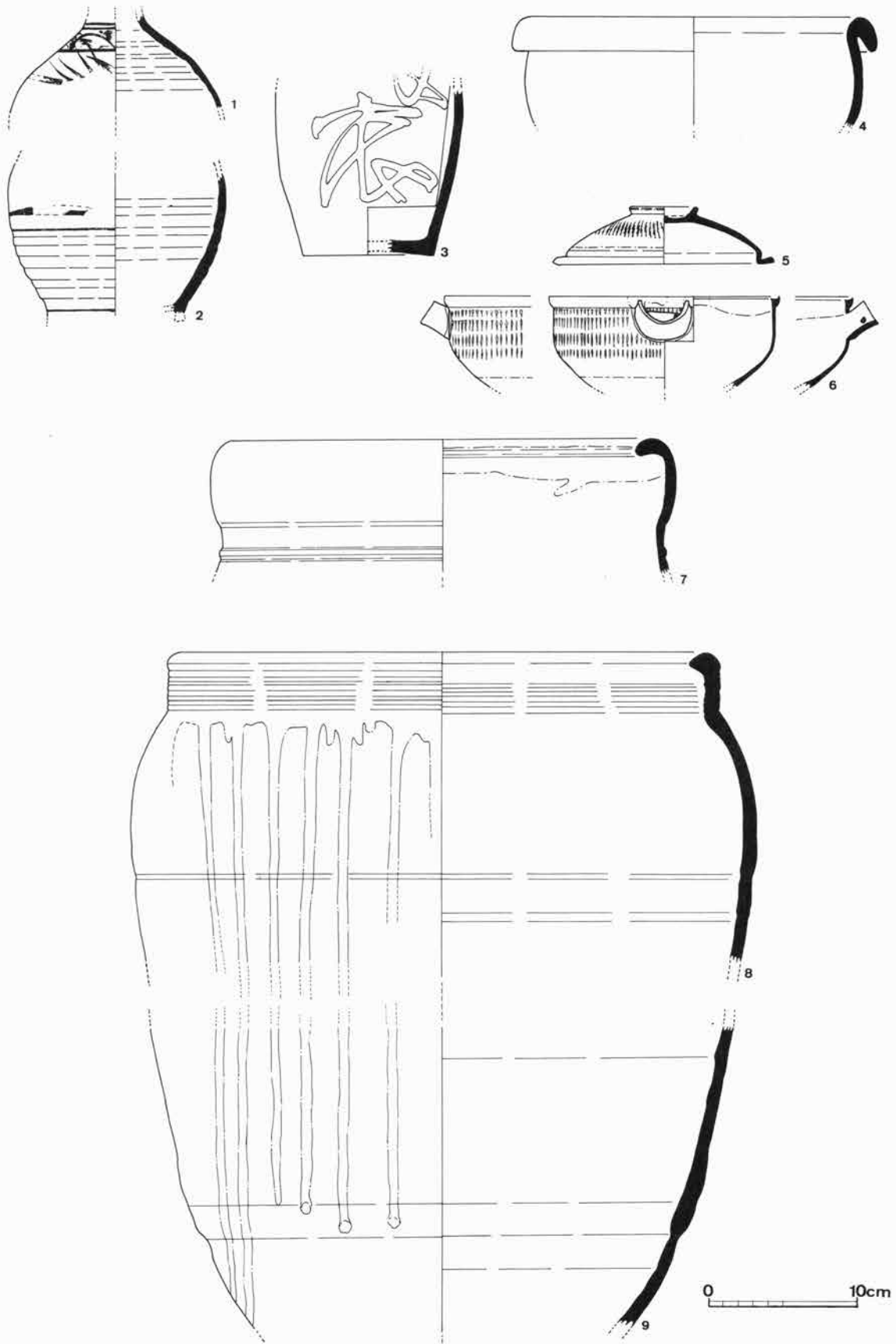
**築山状遺構** 土層断面の観察によるものであるが、土層断面図(第21図)の北西の隅に山状に盛り上がる層位があり、この内部は水平堆積になっている。また、盛土との境界部には腐植土が残存しており、ここが一時期地表であったことを示している。18世紀後半の陶磁器を含む黒灰色粘土層がこの遺構の下にもぐることから、この遺構が18世紀後半の池が陸化した後に築かれた島、または築山の一部であった可能性が考えられる。

(福島孝行)

**黒灰色粘土層の遺物** 今回の調査区から出土した遺物としては、近世以降の陶磁器が出土したが、図示できる遺物は少ない。

1～9はいずれも板石敷遺構より上層の黒灰色粘土層からの出土である。1・2は同一個体と思われる伊万里焼の染付けの瓶である。胴部最大体部径は14.5cmを測る。全体的に丸みを帯びており、表面は平滑である。内部調整はロクロによるヘラケズリである。外部はナデ調整である。磁肌は青みがかり、頸部から肩部にかけてと、体部にはややくすんだ呉須で笹や花と思われる図が描かれている。内面は露胎であるが、口縁からやや釉薬の流れが見られる。胎土は白色で、精緻である。この他に図示できていないが、類似した絵柄を描く瓶がもう1点出土している。(図版第18-a)。3は丹波焼の瓶である。最大径は12.5cm、底径は8.8cmを測る。器壁はやや厚い。底部は上げ底である。立ち上がりはほぼ直線的である。内外面ともナデ調整である。全体的に赤褐色の鉄釉が掛けられ、体部に白色釉で筒引きの文字が描かれている。表面はややざらついている。胎土は灰色で0.5mm前後の礫をやや含む。4は瀬戸・美濃系の折り返し口縁の水差しと思われる。口径は22.0cmを測る。器壁はやや厚く、口縁端部が外反している。内外面ともナデ調整である。やや黄色の長石釉が内外面ともに掛けられ、器表面は平滑である。胎土は灰黄色で水籤しており堅緻である。5・6はセットになる京焼系の蓋付片口鍋である。蓋5のつまみ部の径は4cm、口径は13cmを測る。身6の口径は15.4cmを測る。器壁は薄い。調整は蓋・身の内外面ともナデである。蓋のつまみ部、身の底部以外には外面に淡赤褐色の釉が掛けられ、その後トビカンナが施文されている。注ぎ部の孔はその後に開けられたものである。内部には暗黄褐色の釉が掛けられている。胎土は灰色で、精緻である。7は火鉢と思われる。口径27.8cm、最大径は30.6cmを測る。口縁端部がゆるやかに屈曲している。口縁端部の内側には煤が見られる。内外面ともナデ調整である。無釉である。胎土は暗赤褐色で水籤され精緻である。8・9は同一個体の丹波焼の甕である。口径は35.6cmを測る。口縁端部は内側に肥厚している。頸部には4本の凹線が見られる。こうした形態は備前の甕によく見られるものであるが、8・9の胎土、釉薬などから丹波焼であることは確実であるため、備前焼と丹波焼との間で技術交流がなされたことを表すと考えられる。胴部の上半と下半に粘土帯の接合部が見られる。内外面の調整はナデである。全体に暗褐色釉を施した上に、口縁から肩に暗黄灰色釉をを飴状に流し掛けにしている。胎土は灰色で1～2mm大の礫をやや含む。以上から、これらの遺物は18世紀後半から19世紀前半のもの





第23図 黒灰色粘土層出土遺物

思われ、これらの遺物を含む黒灰色粘土層の時期を表すものといえる。<sup>(注5)</sup>

(浦川真澄)

### (3) 弥生時代の遺物

板石敷遺構の下部には暗褐色粘土層が40cmほど堆積しているが、この下層に暗灰褐色粘土層が堆積している。この層から1点のみ弥生時代の土器片が出土している。小片のため、詳しい時期を特定するのは困難である。遺構に伴うものではないが、この付近に弥生時代の遺跡があることを示唆している。

## 4. 遺構の検討

今回の調査で検出した庭園について、まず時期の押さえられる黒灰色粘土層であるが、こうした層は主に池ないし沼状の遺構の堆積物によって形成される。また、出土した遺物は18世紀後半であり、福知山城主は朽木氏である。この時期は絵図「丹波国福知山城図」によると御泉水にあたる部分に「侍屋敷」と書かれているが、それ以外は池を含む庭園が描かれている。<sup>(注6)</sup> 通常藩主のための庭園であれば、陶磁器などを池に投げ込んだりはしないであろうし、またできないであろう。にもかかわらず、朽木氏代の遺物が池状の堆積から出土するという事は、絵図に描かれた侍屋敷の用地を造成する時、すなわち池の廃棄時に投棄されたものと考えべきものであろう。

黒色の玉石敷遺構は、時期を特定することが困難である。上層の黒灰色粘土層が18世紀後半以前の池であるという仮定に基づけば、17世紀頃のものである可能性がある。そうなれば藩主は松平忠房の頃のものとなろうか。だとすれば、この玉石は庭園の苑路である可能性がある。ただし、玉石敷の池底というものもあるようなので、そうなれば、前述の池底となる可能性がある。ちなみに造園の用語では、玉石敷といい、池の岸にあるものを浜の石敷きという。<sup>(注7)</sup>

板石敷遺構は玉石敷遺構の時期にもよるが、17世紀でも前半～中葉に遡るのではないだろうか。ただしこの遺構から出土した遺物は無いため、推察にすぎない。絵図からは、17世紀前葉の有馬豊氏が藩主であった時期の絵図「丹波福知山城之図」には御泉水という文字も、庭園らしき絵も描かれてはいない。空白地として表現されている。御泉水の位置は本丸・二の丸・伯耆丸が乗る丘陵が弧状に取り巻き、谷地形を呈する位置にある。したがって福知山城築城以前は湿地状を呈していたであろうことが推定でき、また、それはトレンチ西端の断ち割りによっても確認できる。地盤の安定しないこの地は築城当初から空白地として放置されていたのではないだろうか。絵図に「泉水」が登場するのは稲葉紀通が城主であった時期の絵図からである。しかし、残念ながらこの絵図「丹波福知山城図」には、「泉水」内の詳細な記述が無く、池と東屋らしき建物が存在することしか分からない。次の城主は松平忠房であり、この時期の絵図「丹州福知山城絵図」は、非常に精巧であり、細かい書き込みがある上に、建物の規模などが歩測されている。これによると、「御泉水」内の池に沿って石が配置されている様子が看取される。そして苑路は、直線的に線として朱書されている。今回検出した板石敷遺構はゆるく「S」字状に屈曲している。したが

って松平忠房の時期の「丹州福知山城絵図」に見る苑路とすることは、困難と言わざるを得ない。となれば、池端の景石か、もしくは詳細を知ることができない稲葉氏の時期の苑路ということになるだろう。池端の景石の場合、遺構の南側はやや高く、北側が低くなっているため、池は遺構の南側にあることになる。やや位置関係が矛盾することになるが、松平時代の池は北西に突出する部分があり、この部分の南側であるとすれば可能性が無いではない。なお、今回検出した板石敷遺構は造園の用語では寄石敷き<sup>よせいしじ</sup>という。現存する板石敷きの苑路には、大徳寺弧蓬庵の苑路や、武者小路千家官休庵があるが、どちらも苑路の側縁が揃っており、福知山城のものとは趣が異なる。この遺構が苑路であるならば、京都市内のものと比較して野趣があるといえようか。

最後に、稲葉時代は「泉水」、松平時代以降は「御泉水」と書く泉水という言葉は、造園の用語では池庭を指す一般的な用語である。したがって絵図に描かれた「泉水」はこの庭園を指す固有名詞ではなかった可能性がある。しかし、「御泉水」の方は、敬意を示す「御」が冠されており、少なくとも普段「泉水」ないし城主に対する敬意を伴って「御泉水」と呼ばれていたことを示唆する。したがって庭園を造った当初は名もなく一般的に泉水と呼んでいたものが、時を経るとともに定着して「御泉水」という名称で呼ばれるようになったのではないだろうか。

## 5. ま と め

今回の調査により、近傍に調査事例の無かった福知山城跡の遺構面の高さを把握できたことは、今後の福知山城跡の調査に貴重な資料を提供することとなった。残存する遺構は、福知山城の庭園「御泉水」に伴う板石敷き(寄石敷き)の苑路または池岸の石材であり、その時期は18世紀を下限とする江戸時代中期のものであると考えられる。なお、遺構の残存状況はきわめて良好であり、周辺を土木工事する際には細心の注意が払われる必要がある。また、弥生時代の遺跡については、福知山城天守台の調査の時にも、弥生土器が出土しており、伯耆丸などが立地する丘陵は、岡遺跡の名で周知される弥生時代の高地性集落である。今回の調査によって得られた資料はわずか1点であるが、福知山城周辺に弥生時代遺跡が眠っていることを示す発見である。

(福島孝行)

注1 調査には調査補助員として浦川真澄・笹井卓之(同志社大学学生)が参加し、遺物の整理は浦川が行った。

注2 福知山城(福知山市郷土資料館)編『福知山城の歴史』 1998

注3 崎山正人・大槻真純『福知山城跡』 福知山市文化財調査報告書第9集 福知山市教育委員会 1986

八瀬正雄「Ⅱ 福知山城跡発掘調査概要」『福知山市文化財調査報告書』第28集 福知山市教育委員会 1995

注4 盛土については、大正2年頃の写真に二の丸の丘陵を削平している様子が写っており、この排土で盛土されていると考えていたが、明治時代末期に国鉄が現在の線路敷きを買収した際、すでに現況に近い状態であったことが分かり、その頃までにはこの盛土がなされていたと考えられる。どちら

にせよ大量の土砂をもって盛土していることから、二の丸丘陵の削平か、新切り通し掘削に伴う排土が用いられたことは推察される。写真は前掲注2に掲載されているものである。

注5 陶磁器の記述については以下の文献を参考とした。

植崎彰一「山家と町家の陶芸」(『日本陶磁全集11 丹波』)中央公論社 1977

大橋康二『肥前陶磁』考古学ライブラリー55 ニュー・サイエンス社 1989

『古伊万里』別冊太陽No.63 平凡社 1988

注6 絵図については、いずれも前掲注2の文献によった。なお、「丹州福知山城絵図」については福知山市在住の高橋忠久氏所蔵の写真のカラーコピーを提供していただき、それに基づいて検討した。

注7 造園に関する用語については(有)重森庭園設計研究室代表取締役 重森千青氏のホームページ「日本庭園の美」内にある、「庭園用語集」によった。

URL <http://www.ifnet.or.jp/~chisao/index.html>

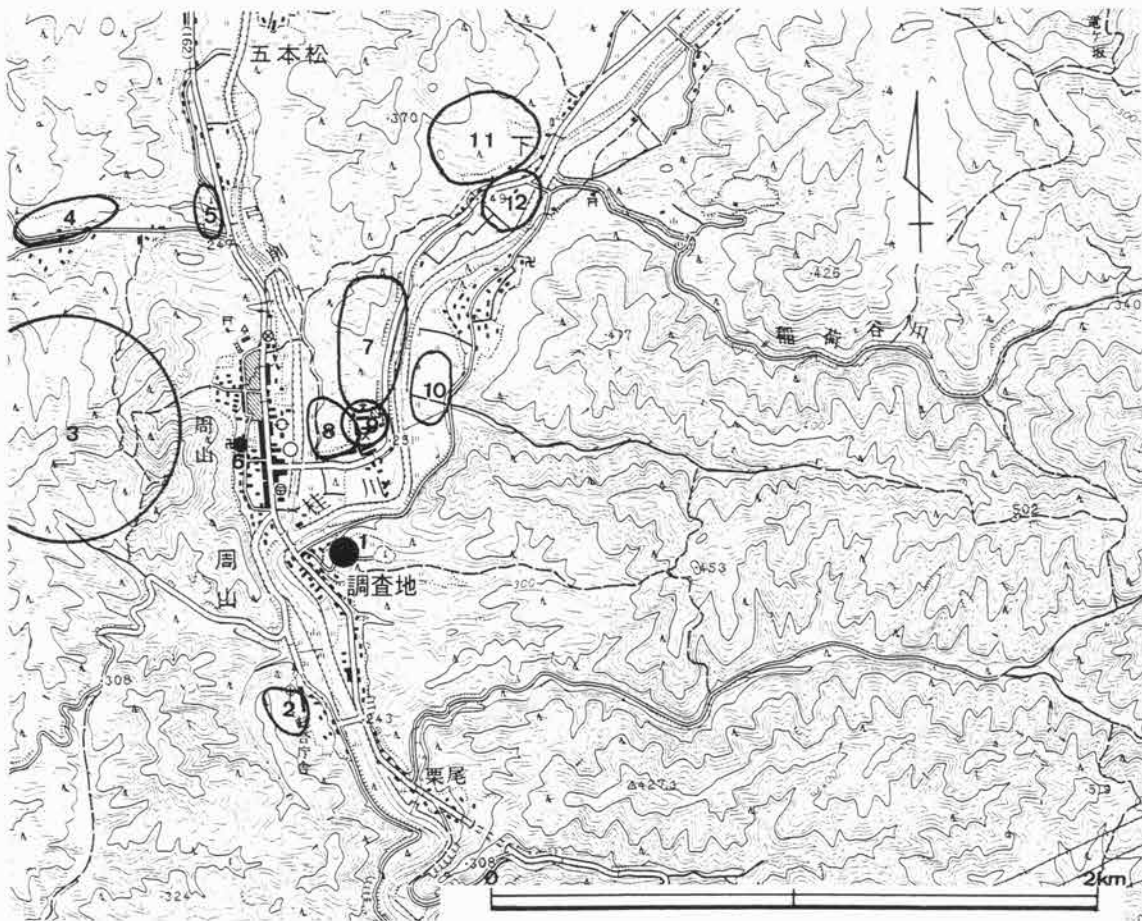
### 3. 東山遺跡発掘調査概要

#### 1. はじめに

東山遺跡は、京都府北桑田郡京北町字周山に所在する中世から旧石器時代までの複合遺跡である。今回の試掘調査は、国道162号周山バイパス建設工事に伴い、京都府土木建築部の依頼を受けて実施した。現地調査は平成11年7月22日～9月17日に行い、調査面積は約500m<sup>2</sup>である。

東山遺跡は、分布調査によって遺物散布地として知られていたが、その詳細な時期や内容は不明であった。開発行為に先立ち、東山遺跡の範囲並びに、発掘調査の必要性を調べる目的で、約5,000m<sup>2</sup>の対象地に対して1割の500m<sup>2</sup>の試掘調査を実施した。分布調査時には、布目瓦片や土師器碎片が採集されている。

東山遺跡は、弓削川と桂川の合流点に面した標高約257mの丘陵上に立地する。東山遺跡のあ



第24図 調査地位置図

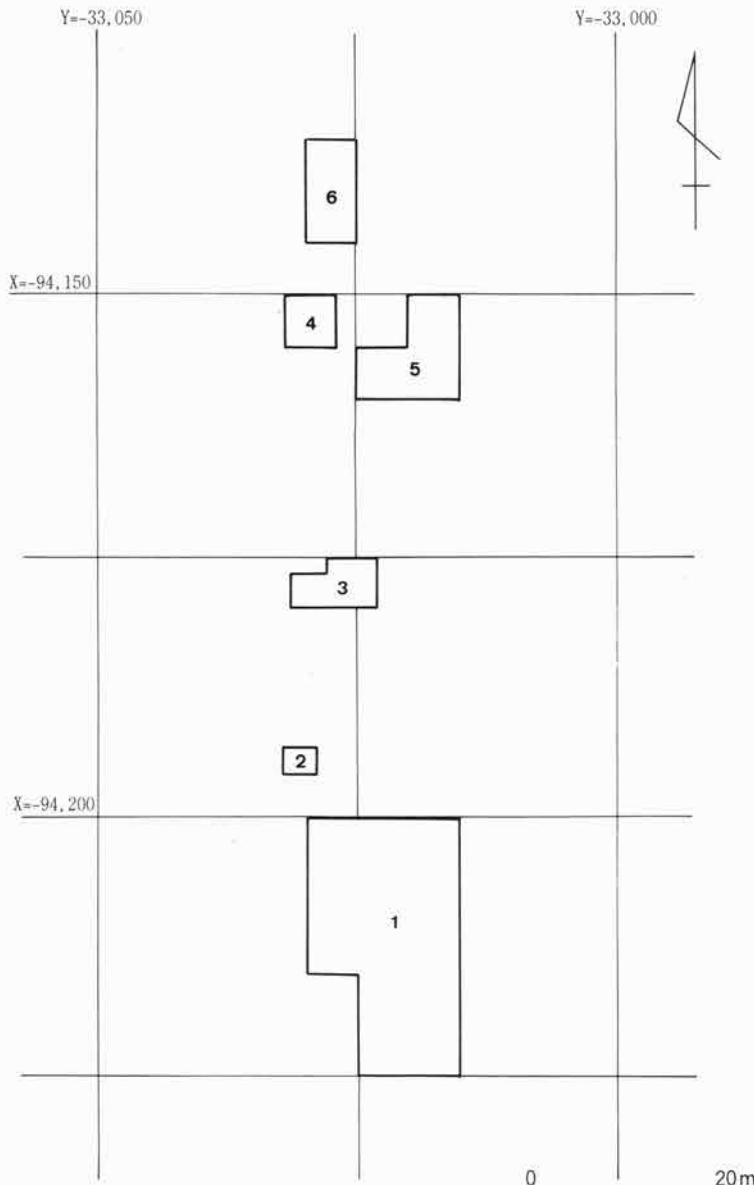
- |          |          |         |           |           |          |
|----------|----------|---------|-----------|-----------|----------|
| 1. 東山遺跡  | 2. 周山窯跡群 | 3. 周山城跡 | 4. 卯滝谷遺跡  | 5. 大年古墳群  | 6. 慈眼寺経塚 |
| 7. 周山古墳群 | 8. 高梨経塚  | 9. 周山廃寺 | 10. 祇園谷遺跡 | 11. 折合古墳群 | 12. 殿橋遺跡 |

る周山は、京都から若狭に抜ける幹線、周山街道(若狭街道)上の宿場町として古くから知られていた。近世には、慶長七(1602)年に幕府領、寛文四(1664)年には丹波国篠山藩の領地となった。また、長岡京や平安京に材木を供給した地として知られ、林業の中心地として近年まで栄えていた。

当調査地と桂川をはさんで対岸にあたる周山中学校敷地から丘陵部にかけて飛鳥時代後期から鎌倉時代まで営まれた府史跡の周山廃寺がある。周山廃寺は発掘調査によって6棟の建物が確認されており、それぞれ塔・東堂・北堂・西堂・南門からなり、標高がそれぞれ異なる特異な伽藍配置を見せる。

周山廃寺のある丘陵には廃寺に先行する周山古墳群や、高梨経塚も立地する。周山古墳群<sup>(注1)</sup>は方墳からなり葺石・埴輪を持つ。築造年代は四世紀とされ出雲氏との関係が指摘されている。

遺跡西側の黒尾山東峰(509.4m)には周山城跡がある。明智光秀が織田信長の命によって天正七(1579)年に在地の宇津氏を滅ぼした後、築城し、周の武王の故事にちなみ周山城と命名したと



第25図 トレンチ配置図

いう。

遺跡西側の桂川右岸には町道の拡幅工事によって発見された周山瓦窯<sup>(注2)</sup>(平良1979)がある。周山廃寺に供給された瓦が焼かれていた瓦陶兼業窯である。東山遺跡に近接する調査例としては、他に祇園谷遺跡<sup>(注3)</sup>があり、対岸の周山廃寺と同時期の集落と考えられている。

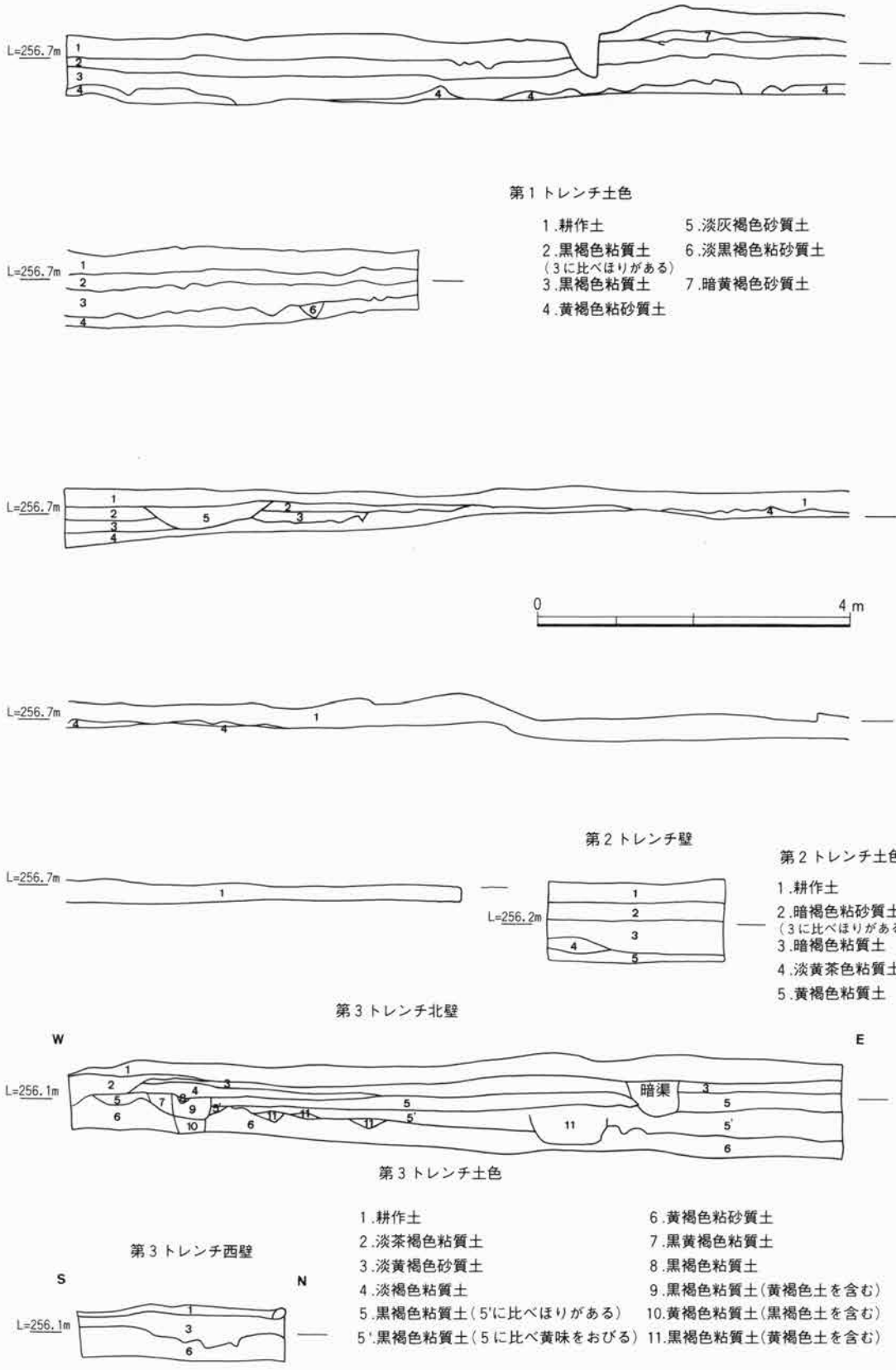
## 2. 調査概要

今回の発掘調査は試掘調査で、合計6か所のトレンチを設けたが、調査地全体の基本的な土層堆積状況は、水田耕作土を表土とし、その下層に黒ボク層を挟んで、遺構検出面となった黄褐色粘土層が基盤を形成する。

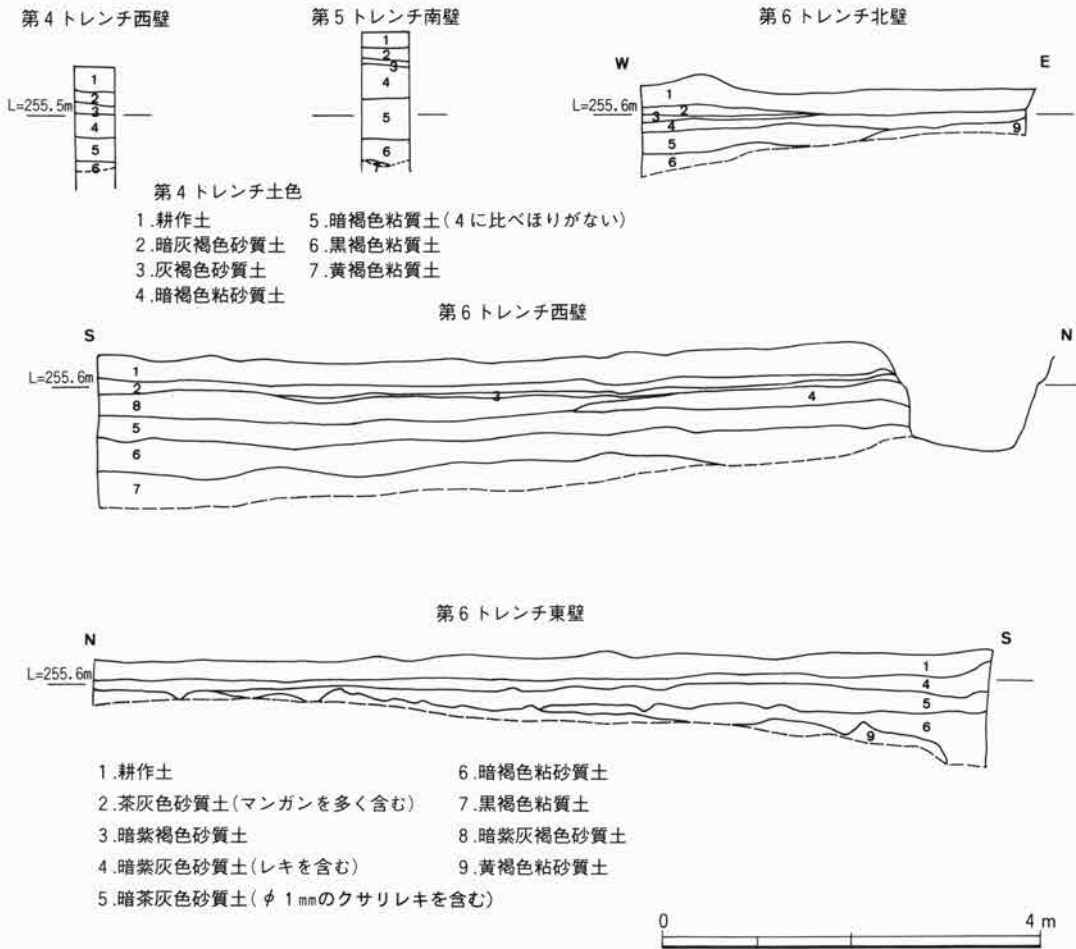
### (1) 第1トレンチ

トレンチは現有の高低差を持つ水田面2面にかけて設定した。南側の水田面が低いため、





第26図 東山遺跡土層断面図(1)



第27図 東山遺跡土層断面図(2)

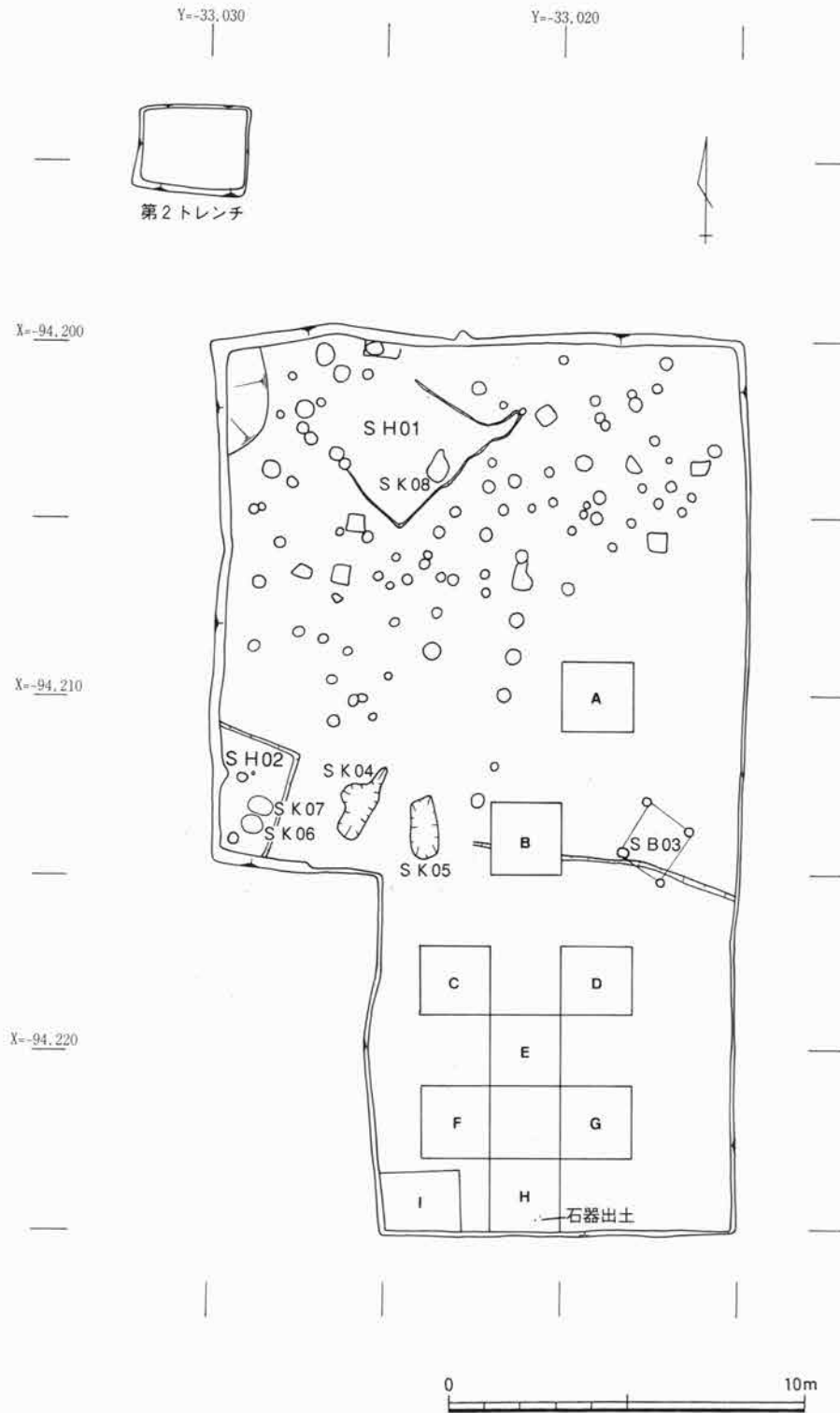
この水田に重複する部分では、耕作土を取り除くと、遺構検出面とした黄褐色粘土層が削平され、下層の白色シルト層、または、くされ礫層が露出していた。また、北側の水田区においては、遺構検出面が東から南に下がり、東では耕作土直下にあり、西では耕作土との間に厚く黒ボク層が堆積する。水田面を形成するまでは一様に厚く黒ボク層が広がっていたものと想定できる。

遺構は古墳時代の竪穴式住居跡2基・掘立柱建物跡・土坑2基・柱穴多数が検出されている。

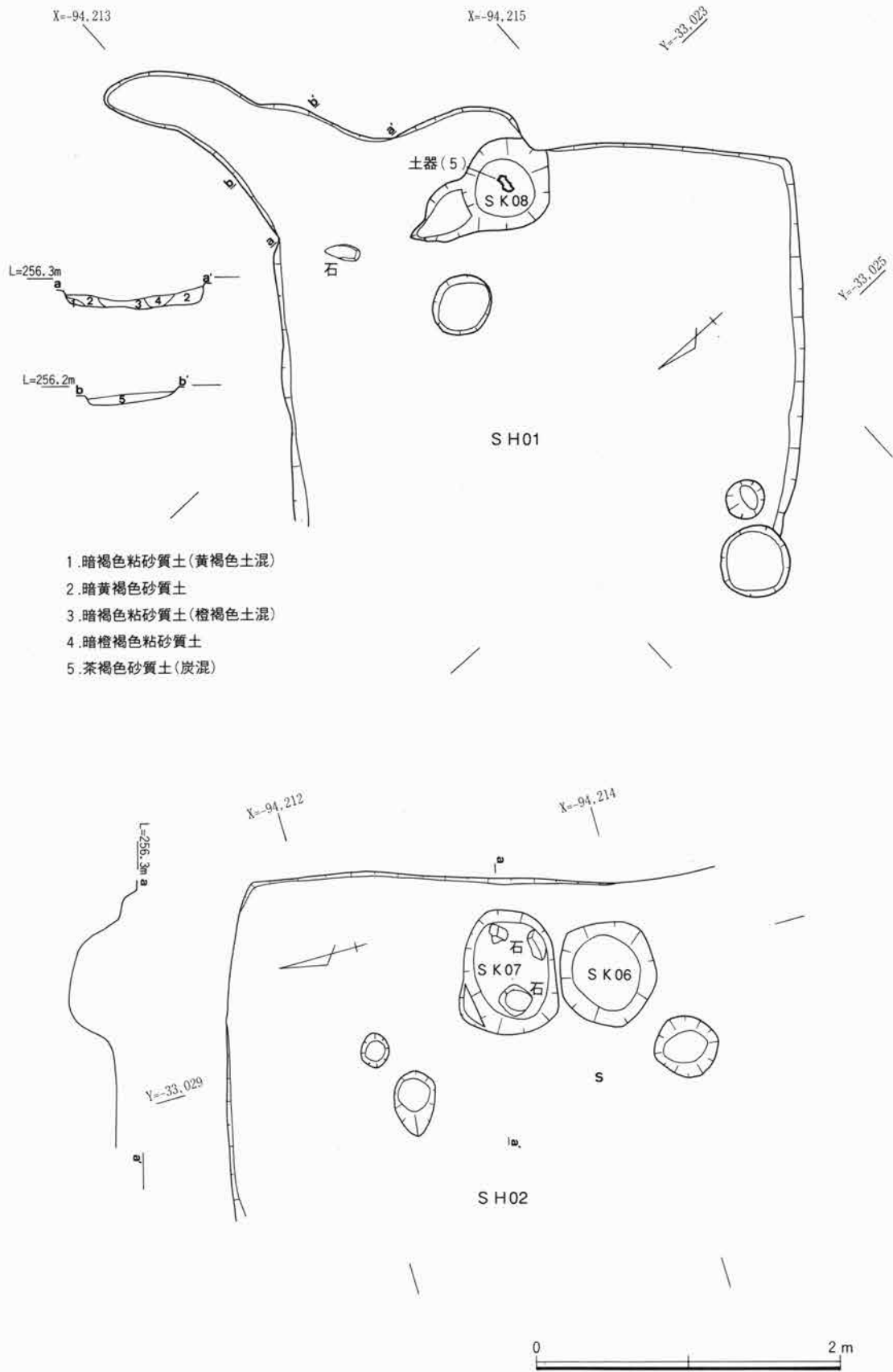
**掘立柱建物跡 S B03** 柱穴4か所のみを検出であるが、柱穴内からは焼土と土師器片が出土しており、埋土は全て同じ様相を見せる。竪穴式住居跡の主柱穴が残存した可能性も指摘できる。

**竪穴式住居跡 S H01** 方形の平面形を持つと考えられる住居跡で、東隅から煙道状の溝が外に延びる特徴を持つ。東隅部では、焼土も認められる。北西辺は削平によって削られ、規模が確認できないが、南東辺から約3.5mの規模を持つことがわかる。検出面からの深さは残存状態の良いところで約5cmを測る。住居内で検出した土坑 S K08の上面からは須恵器の甕が出土している。また、煙道状の遺構の基部付近の焼土中から出土した布留式土器と S K08出土の土器には、接合関係が認められる。

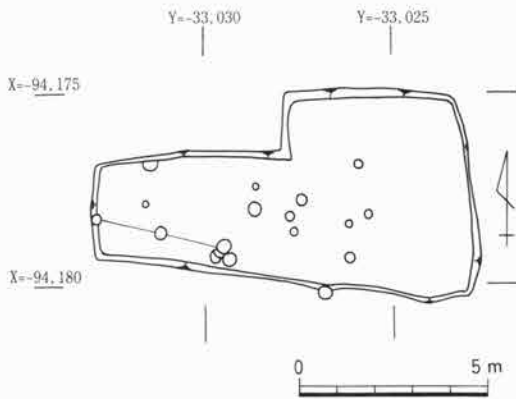
**竪穴式住居跡 S H02** 方形の平面形を持つと考えられる住居跡で、調査区内では北東隅のみの検出で、規模等は不明である。検出面からの深さは残存状態の良いところで約10cmを測る。出土遺物から古墳時代中・後期のものと考えられる。住居跡床面からは、柱穴のほか、2基の土坑



第28図 第1・2トレンチ遺構平面図



第29図 第1トレンチ竪穴式住居跡実測図



第30図 第3トレンチ遺構平面図

は平坦であることから土壙墓の可能性もあるが、遺物は検出できなかった。

多くの柱穴が検出できたが、一定量樹木の根の痕跡と考えられるものも存在している。隅丸方形を呈する柱穴は、柱痕跡の認められるものも存在するが、掘立柱建物としてはまとまらなかった。

旧石器時代に属すと考えられる石器が、1点のみであるが、後の遺構検出面となっている黄褐色粘土層上面から出土している。石器の広がり調を調べるため2m四方のグリッド(A～I)を設け掘削したが、石器の本来の出土層は確認できなかった。

## (2)他のトレンチの概要

**第2トレンチ** 耕作土を取り除くと約60cmの黒ボク層が認められた。調査区が小さいため、地層の傾斜方向は不明であるが、極端な傾斜は認められない。

古墳時代の土坑が1基検出されている。南壁面で検出したもので、平面形等は不明であるが、古墳時代後期の土師器が出土している。

**第3トレンチ** 耕作土を取り除くと約40～70cmの黒ボク層が認められた。東側が深く西で浅くなり、遺跡の位置する尾根の傾斜とは異なる。第4・5トレンチで見られる鞍部への地形変換点に位置すると考えられる。柱穴は遺構検出面までの深さが浅い部分で多く検出されている。

**第4トレンチ** 黒ボク層の堆積が非常に厚く、旧地形では鞍部を形成していたことがわかる。第26図の4～6層は色調の差がなくいずれも暗色である。黒ボク層に見える層も分層が可能であり、その成因の違いが考えられる。

**第5トレンチ** 黒ボク層の堆積が非常に厚く、第4トレンチから続く谷部に位置することがわかる。第4・5トレンチは丘陵の谷部に位置することから湧水が激しく、遺構検出面まで重機を使い一気に掘り下げ、遺構検出につとめたが検出することはできなかった。

**第6トレンチ** 調査区内では北から南に下がる地形が見られ、南側は第4・5トレンチに見られる谷部に続くと考えられる。第1トレンチの設定した地点と遺構検出面の色調は近似するが、礫を含んでいることが異なる。

(S K06・07)を検出した。S K07中からは、拳大よりやや大形のチャート製の礫が出土している。S K06からは、古墳時代の土師器甕体部片が出土している。

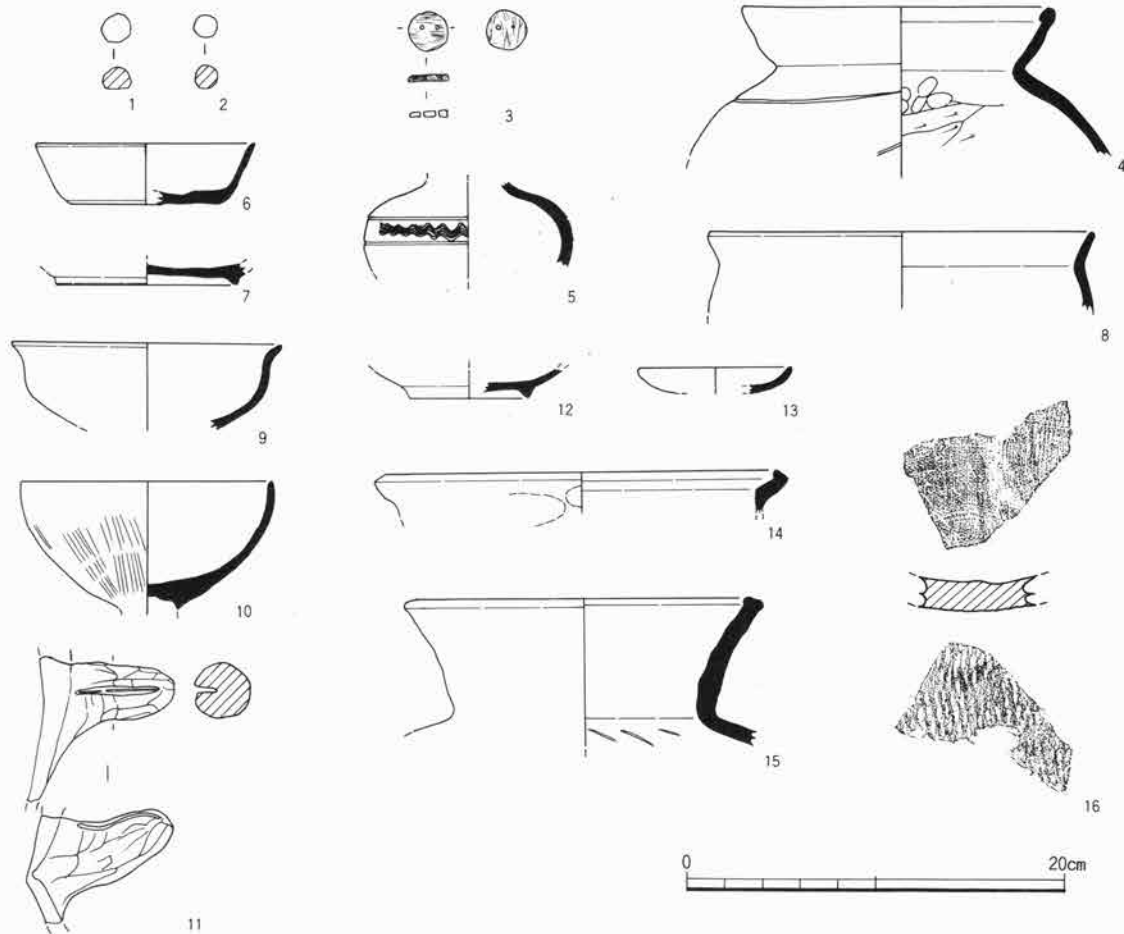
**土坑S K04** 検出面である黄褐色粘質土が傾斜変更する場所にある土坑で、上層の黒ボク層が充填されていた。形状は不定形で人為的な土坑である可能性は低い。

**土坑S K05** 隅丸長方形の土坑で、底部

### 3. 出土遺物

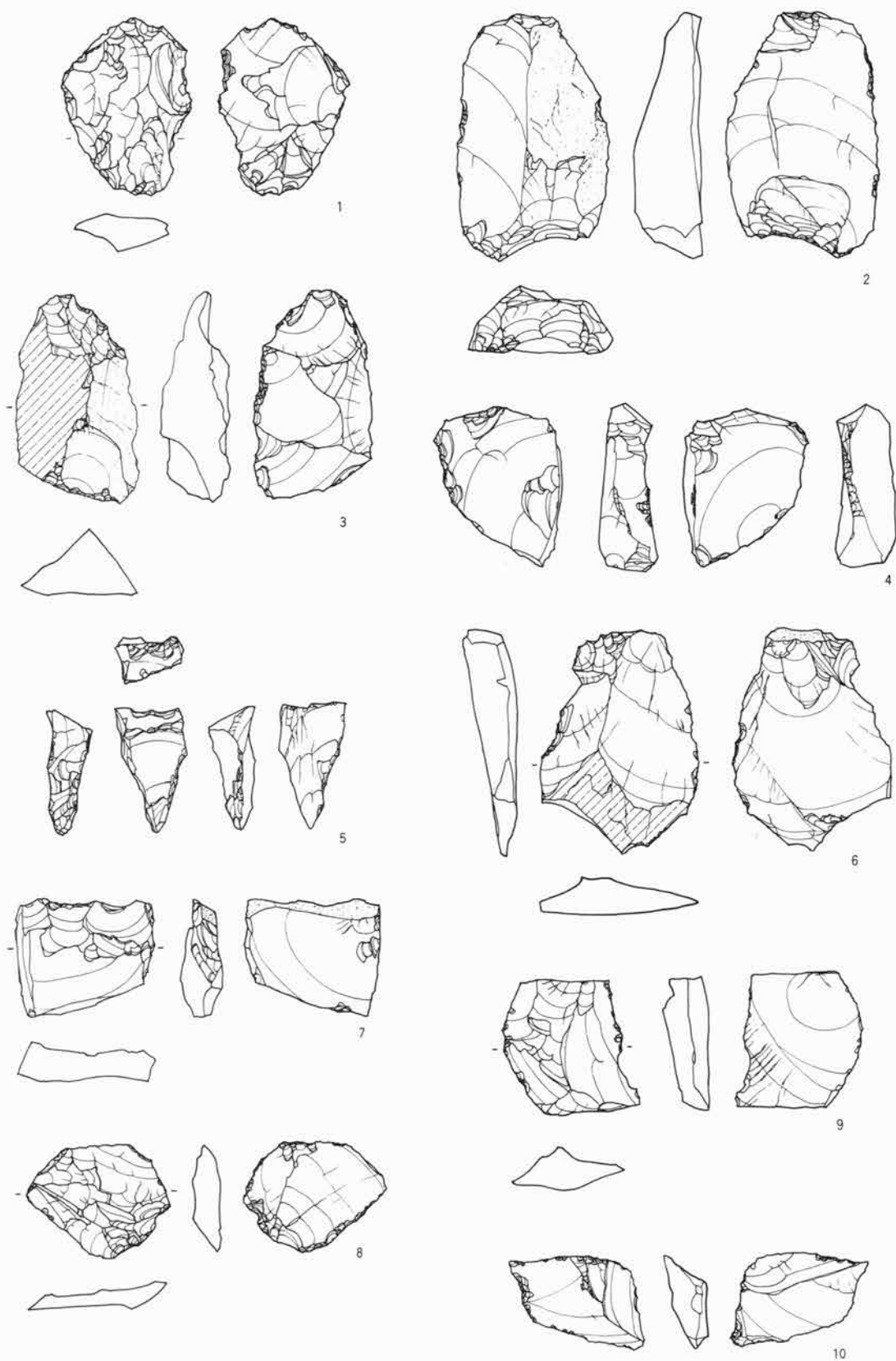
図化し得た遺物を中心に説明を加える。

第1トレンチ 出土遺物には、中世末の火縄銃の弾、鎌倉時代の瓦器椀片・土師皿、奈良・平安時代の須恵器・平瓦、古墳時代の土師器・須恵器・滑石製模造品、旧石器時代の石器がある。第31図4は、SH01の焼土部およびSK08内から出土した、布留式土器の甕口縁から体部にかけての破片である。口縁端部は肥厚し布留式土器の特徴を持つが、新しい様相を見て取ることができる。体部外面には沈線によって施文された痕跡が認められる。体部外面の調整はナデで内面はケズリが施される。第31図5は、SH01内のSK08上面で出土した須恵器の甕体部である。波状文が体部外面に認められる。底部付近にはヘラ削りがあり、比較的古い須恵器と考えられる。このような中村編年の1期の須恵器と上記の土師器に共伴関係が認められることは、近接する口丹波地域ではすでに指摘されている。第31図1・2は鉛製の火縄銃の弾である。いずれも包含層中からの出土である。第31図3は古墳時代の滑石製有孔円盤である。住居跡の時代と同じ時期のものと同定できる。第31図6は須恵器杯Aである。この形態の須恵器は周山瓦窯において作られているものと同形態である。第31図7は須恵器の杯Bの底部である。奈良～平安時代に属する。第31図8は須恵器の鉢口縁部である。第31図9は土師器の鉢で、口縁部は横ナデによって外反する。第31図16は平瓦である。焼成は非常に良好で緻密で硬質である。内面は暗灰色、表面は暗橙灰色

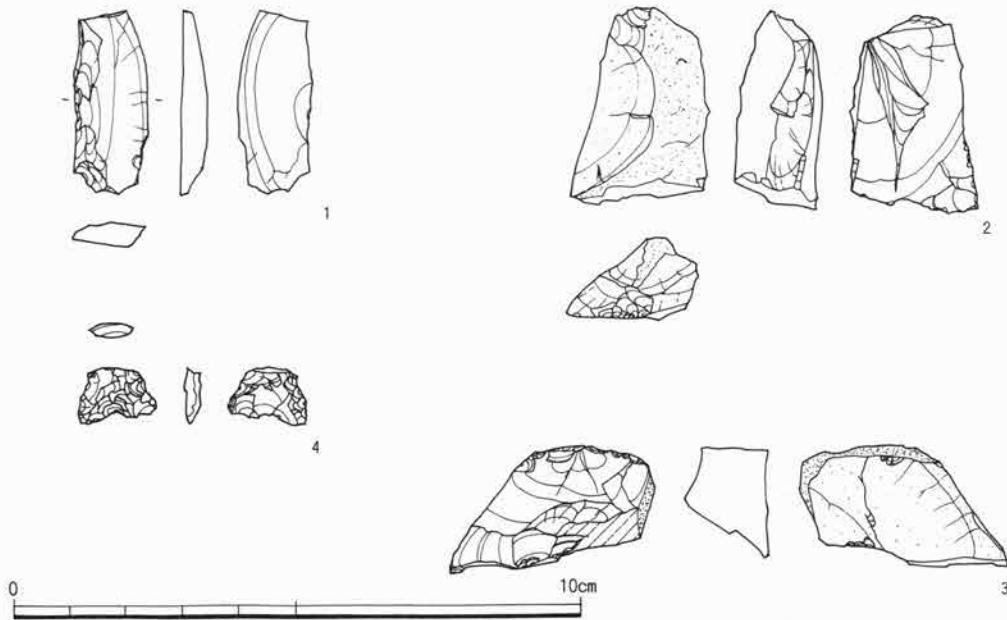


第31図 東山遺跡出土遺物実測図(1)





第32図 東山遺跡出土遺物実測図(2)



第33図 東山遺跡出土遺物実測図(3)

を呈する。上面には布目圧痕、下面には縄タタキが認められる。

石器は1点を除いて全て耕作土または黒ボク層から出土している。第32図1は、黄褐色土上面から出土した赤褐色チャート製の2次加工有る剥片。主要剥離面は複雑な剥離痕が残されるが、節理や夾雑物によるものである。下端部には比較的大きな2次加工面が残るが、多くは微細な剥離である。下端および上端部は背面側からの加工を主とするが、両側辺は主要剥離面からの加工である。第32図2は赤褐色チャート製の搔器と考えられる。刃部は縦に長い剥片の打面側を急斜な主要剥離面側からの2次加工によって形成されている。しかし、この背面に残された2次加工面を打面として主要剥離面側に剥離痕が認められる。剥離は数回に及び加工か使用によるものかの評価によって、器種認定は異なる。素材剥片の末端部は、刃潰しと考えられる加工が施される。両側辺には背腹両面からの微細剥離が認められる。第32図3は赤褐色チャート製の2次加工有る剥片。上端には主要剥離面側からの比較的急斜な剥離痕が並び、刃部が形成されている。第32図4は暗青灰色チャート製の削器である。側辺には上下からの両極技法によると考えられる裁断面が残される。この裁断面には、背面からの浅い剥離痕が見られ、使用痕に似る。側辺には背面側からの連続した2次加工によって刃部が形成される。第32図5は暗灰色チャート製の2次加工有る剥片である。断面は三角形で錐状を呈する。第32図6は赤褐色チャート製の2次加工有る剥片、自然面打面を持つ縦に長い剥片を用いる。背面には節理面と考えられる面が付着する。2次加工は微細な剥離で背腹両面に認められる。第32図7は自然面を打面とする灰色チャート製の剥片で、末端と片側辺は折れ面である。末端の折れ面と主要剥離面とがなす縁辺には潰れ状の微細剥離が認められる。第32図8は青灰色チャート製の2次加工有る剥片である。石器上面には楔形石器に見られる潰れ状の打面を呈する。末端部は折れ、側辺は主に背面からの連続した剥離痕が認められる。第32図9は平坦な自然面を打面として作出されたチャート製の2次加工有る剥片である。第32図10は暗青灰色を呈するチャート製の2次加工有る剥片。2次加工は微細な剥離で背腹両面

に認められる。打面は折れのため存在しないが、折れ面から背面、背面から折れ面への微細剥離痕が認められる。素材剥片末端はおおむね主要剥離面側からの微細剥離痕が認められる。第33図1は暗灰色を呈するチャート製の2次加工有る剥片である。打面は線状打面と考えられるが打点付近には、主要剥離面側からの加工が施される。剥片端部の片側もまた主要剥離面側からの微細剥離が認められる。第33図2は赤褐色チャート製の2次加工有る剥片。末端部と側辺の一部に微細剥離が認められる。第33図3は青灰色を呈するチャート製の石核である。素材は水磨を受けた円礫から剥離または分割されたものである。

第2トレンチ 出土遺物には、鎌倉時代の瓦器椀・土師皿、奈良・平安時代の須恵器、古墳時代の土師器・須恵器・滑石製模造品、旧石器時代の石器がある。古墳時代の土師器の甑には、朝鮮半島の影響を受けた韓式土器がある。南壁にみられた土坑から第31図10の土師器の高杯杯部が出土している。外面にはハケ調整が認められる。同遺構からはその他に土師器体部片が認められる。第31図11は包含層中から出土した土師器の甑把手部である。把手上面にはヘラによると考えられる溝が穿たれており、韓式土器の特徴を持つ。胎土は他の土師器と肉眼的には変わらない。

第3トレンチ 出土遺物には、鎌倉時代の瓦器椀・土師皿、奈良・平安時代の須恵器、古墳時代の土師器・須恵器・滑石製模造品、旧石器時代の石器がある。遺物はいずれも包含層中からの出土である。第31図12は瓦器椀の高台部である。外面は指頭圧痕が残り、高台は粘土紐の張付で形成されている。第31図13は手づくねの土師皿である。第31図14は瓦質の鍋の口縁部である。

第4トレンチ 第31図15は黒ボク層中から出土した須恵器の甕口縁部である。他の出土遺物には、鎌倉時代の瓦器椀・土師皿がある。遺物はいずれも包含層中からの出土である。

第5トレンチ 出土遺物には、旧石器時代の石器、鎌倉時代の瓦器椀・土師皿がある。遺物はいずれも包含層中からの出土である。

第6トレンチ 出土遺物には、鎌倉時代の瓦器椀・土師皿がある。第33図4は先端部が欠損する黒灰色チャート製の石鏃である。遺物はいずれも包含層中からの出土である。

この他にも微細剥離が認められる剥片が30点ほど存在する。

#### 4. ま と め

今回の試掘調査によって各時代に利用された複合遺跡であることが確認できた。遺跡の立地する現在の地形は比較的平坦であるが、本来は起伏に富むことがわかり、水田造成に伴う土地改変によって、谷部(鞍部)では包含層からの遺物の出土量はきわめて少なく遺構も検出できなかった。検出遺構では、古墳時代のものが多く、東山遺跡において最も利用された時期と考えられる。特に住居跡や包含層からは、古い須恵器や韓式土器が発見されており、対岸の周山古墳群との関係が注目できる。

石器はほとんど全てが包含層から出土しており、石器の帰属時期については断言できない。しかし、始良T n (A T)火山灰降下時期前後の地層が遺跡内に存在し、それらの層が削平された耕作土中から多く検出できたことは、石器が旧石器時代にさかのぼるものであることを否定しえな

い。石器の多くはその縁辺に微細な剥離痕をとどめるものが多く、定型的な剥片剥離技術の存在もうかがえない。加工方法には折断、インバースリタッチが多用されており、A T降灰以前の台形石器群の諸要素が含まれている。京北町での調査事例は少ないが、京都盆地や亀岡盆地では後期旧石器時代後半、縄文時代、弥生時代の石器にはサヌカイトが多用されている。しかし遺跡内では、チャート以外の石材を用いた石器や縄文・弥生土器は、1点も発見されていない。1点のみではあるが、第6トレンチからはチャート製の石鏃も出土している。しかし第6トレンチは谷部を挟んで石器の多く出土した第1トレンチとは離れる。石器に用いられたチャートは、丹波帯に含まれており、容易に入手可能である。今後の調査において、本来の出土層が遺跡内に存在するか否かを留意する必要がある。

火山灰の分析を第1トレンチ北壁で行った。分析資料は耕作土を除き黒ボク層、黄褐色粘砂質土層を5cmごとに連続して12点採集した。アカホヤ火山灰は、No. 2・3資料にその降灰層準があり、始良T n火山灰は黄褐色粘質土中のNo. 11に求められる。丹波山地・中国山地ではのちの自然ならびに人為的な改変がない限り、黒ボク層中にアカホヤの降灰層準が認められる。このことから、本調査地で検出した遺構のほとんどが、黒ボク層から掘り込まれたものであることは明らかであるが、黒ボク層からの遺構検出は極めて困難であった。隣接する八木町の池上遺跡の方形周溝墓<sup>(注3)</sup>では、溝の上層に土器が多く含まれていることがあり、黒ボク層中の土器集中部は、調査において留意する必要が感じられたが、今回の分析でもこのことが裏付けられた。

(中川和哉)

注1 京北町町誌編さん委員会編『京北町誌』京北町 1975

注2 平良泰久ほか「周山瓦窯跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報1979』 京都府教育委員会) 1979

注3 小池 寛「3. 祇園谷遺跡発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第52冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1993

注4 中川和哉・野々口陽子・筒井崇史「池上遺跡第5次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第91冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2000

#### 参考文献

石田茂作・三宅敏之「丹波国周山廃寺」(『考古学雑誌』第45巻第2号) 1954

## 付 編

## 東山遺跡火山灰分析結果

(株)京都フィッション・トラック

## 1. 試料

分析試料は、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター発掘担当者によって採集された土壌試料(12個)である。試料は実験室内でサンプリングされた測定に供された。なお得られた測定データは図2に総合的にまとめ、示されている。

## 2. 分析方法

試料の分析は、図1のフローチャートに従い行った。

## (1)前処理

まず未処理試料50~100gを白紙上にとり、新版標準土色帳(農林省農林水産技術会議事務局監修, 1970)により判定表示する。

次に半湿潤状態の生試料を適宜採取秤量し、50℃で15時間乾燥させる。乾燥重量測定後、2ℓビーカー中で数回水替えしながら水洗し、その後超音波洗線を行う。この際、中性のヘキサメタリン酸ナトリウムの溶液を液濃度1~2%程度となるよう適宜加え、懸濁がなくなるまで洗條水の交換を繰返す。乾燥後、篩別時の汚染を防ぐため使い捨てのフルイ用メッシュ・クロスを用い、3段階の篩別(60, 120, 250mesh)を行い、各段階の秤量をする。こうして得られた120~250mesh(1/8~1/16mm)粒径試料を、比重分別処理等を加えることなく、封入剤(Nd=1.54)を用いて岩石用薄片を作成した。

## (2)火山ガラス含有率測定

前処理で作成された岩石用薄片を検鏡し、特に火山ガラスの含有率や特徴を中心に以下の各項目について測定・チェックを行った。

## ①火山ガラス含有率

鏡下で火山ガラス・重鉱物・軽鉱物(土粒子やアモルファス粒子を含む)を識別し、各含有率を測定した。

## ②火山ガラス型

古川(1976)の分類(註1)に準拠して、含有される火山ガラスの形態を多いものから半定量的に求め、表示した。なお古川の分類に含まれないものについては、不規則型として一括した。

## ③プラント・オパール含有

鏡下でしばしばプラント・オパールが識別されるため、その有無と、比較的多い場合には全粒

子に対するプラント・オパール含有率を半定量的に示した。

④色付ガラスの有無

淡褐～淡紫色を呈する色付ガラスの有無は、広域テフラの識別の際に特徴の一つとなる場合がある。そこで、色付ガラスの有無を示した。なおここでいう色付ガラスには、スコリア(塩基性火山碎層物)中にしばしば含まれる赤褐・褐・黄・緑色などのガラスは含まれない。

(3)重鉍物分析

主要重鉍物(カンラン石・斜方輝石・単斜輝石・角閃石・黒雲母・アパタイト・ジルコン・イディングサイト等)を鏡下で識別し、ポイント・カウンターを用いて無作為に200個体を計数してその量比を百分率で示した。なお、試料により重鉍物含有が少ないものは結果的に総数200個に

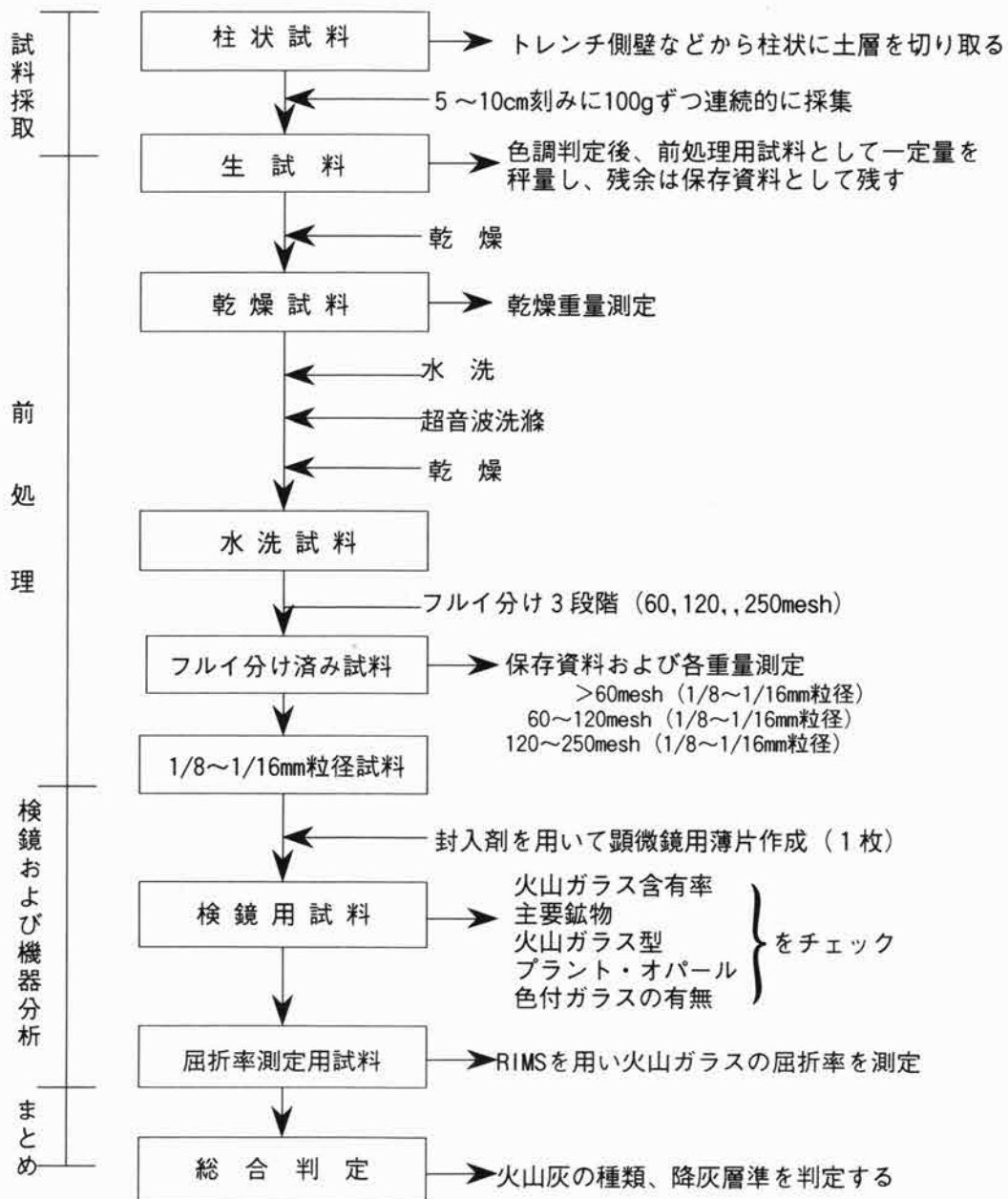


図1 火山灰分析方法のフローチャート



満たないことをお断りしておきたい。この際、一般に重鉍物含有の少ない試料は、重液処理により重鉍物を凝集することが行われるが、風化による比重変化や粒径の違いが組成分布に影響を与える懸念があるため、今回の分析では重液処理は行っていない。

#### (4) 火山ガラスの屈折率測定

前処理により調製された120～250mesh(1/8～1/16mm)粒径試料を対象に、温度変化型屈折率測定装置(RIMS)<sup>(注2・3)</sup>を用い火山ガラスの屈折率を測定した。測定に際しては、精度を高めるため原則として1試料あたり30個の火山ガラス片を測定するが、火山ガラス含有の低い試料ではそれ以下の個数となる場合もある。

具体的な測定データは巻末にデータシートとしてまとめられ、以下に述べるように表示されている。まず最上位に試料名(SeriesおよびSample Name)が印刷され、Immersion Oilは測定に使用した浸液の種類を示す。火山ガラスの屈折率 $nd$ の式は浸液温度から対応する屈折率を換算するもの、 $nd$ は屈折率、 $t$ は温度を示す。

温度変化型屈折率測定法<sup>(注4)</sup>は火山ガラスと浸液の屈折率が合致した温度を測定することにより、各浸液ごとに決められた浸液温度と屈折率の換算式から火山ガラスの屈折率を計算して求める方法である。(As. + De.)/2は液温制御の際の上昇時(Ascent)と下降時(Descent)の平均値を意味する。繁雑さを避けるため、ここでは測定温度を表示せず、各火山ガラス片毎の屈折率のみを表示した。

測定された屈折率値は最終的にTotalの項にまとめられる。count, min, max, range, mean, st. dev, skewnessはそれぞれ屈折率の測定個数、最小値、最大値、範囲、平均値、標準偏差、そして歪度である。屈折率のhistogramの図は縦方向に屈折率を0.001きざみで表示し、横方向にその屈折率をもつ火山ガラスの個数が表現される。\*一つが1個の火山ガラス片の測定結果を示す。

### 3. 分析結果および考察

今回得られた分析結果は集約され、前掲の図2に表示されている。これらの分析情報の中で考古学的に価値をもつものは、編年上意味のあるテフラ(広域テフラ)の降灰層準を認定するに必要な情報である。具体的には、テフラ起源物質として明確に同定される火山ガラスの特徴や、含有量比の情報が最も重要となる。

一般に土壤中に含まれる重鉍物の分析が広く行われているが、重鉍物分析結果をテフラ降灰層準との関係で講論する場合には、十分な注意が必要である。その理由は、土壤中の重鉍物は母岩起源のものを含むのが普通であり、必ずしもテフラ起源とのみ特定することができないからである。しかも、同一種類の鉍物でもその組織上かなりの多様性をもつことが普通であり、純粋にテフラ起源の重鉍物のみを識別することは困難が多い。このため、今回の分析結果の考察においては、重鉍物分析結果から得られる情報は参考程度として低く扱わざるを得ないことをお断りしておきたい。

**含有火山ガラスおよびテフラの種類** 火山ガラスから得られる情報に注目すると、今回の試料中には少なくとも3種類の火山ガラスが識別される。それらは、各火山ガラスの特徴をもとに火山灰アトラス(町田・新井、1992)と対照すると、古いものから順に始良-Tn(AT)、大山系、鬼界-アカホヤ火山灰(K-Ah)のテフラが識別される。<sup>(注5)</sup>このうち確度の高いものはATおよびK-Ahの2火山灰のみで、その他のものは含有が少なく詳細は不明である。各火山灰の特徴と分布層準は表3にまとめ示す。

**広域テフラの降灰層準** 分析試料中の火山ガラスの濃集は全体に比較的高く、その中でも含有の高いものはNo. 2~3、No. 5、No. 11の各試料である。描出された火山ガラスの大部分はATおよびK-Ahに由来すると判断され、うちK-Ahテフラについては上下層準との含有率の相対的な変化から、No. 2~3試料層準で最も濃集し、降灰層準がこの付近にあるものと考えられる。一方ATテフラについては、火山ガラス含有率の明らかなピークから、No. 11試料層準に明瞭な降灰層準があるものと推測される。少なくともこの層準以外に降灰層準は見出し難い。

注1 吉川周作(1976)「大阪層群の火山灰層について」『地学雑誌』82(8)、pp.475-515

注2 横山卓雄・檀原 徹・山下 透(1986)「温度変化型屈折率測定装置による火山ガラスの屈折率測定」『第四紀研究』25(1).21-30

注3 Danhara T., Yamashita T., Iwano H., and Kasuya M. (1992): An improved system for measuring refractive index using the thermal immersion method. *Quaternary International*. 13/14, 89-91

注4 檀原 徹(1993)「温度変化型屈折率測定法」『第四紀資料分析法2. 研究対象別分析法』149-157 東京大学出版会.

注5 町田 洋・新井房夫(1992)『火山灰アトラス(日本列島とその周辺)』東京大学出版会

東山遺跡  
京都市北桑田郡北町岡山

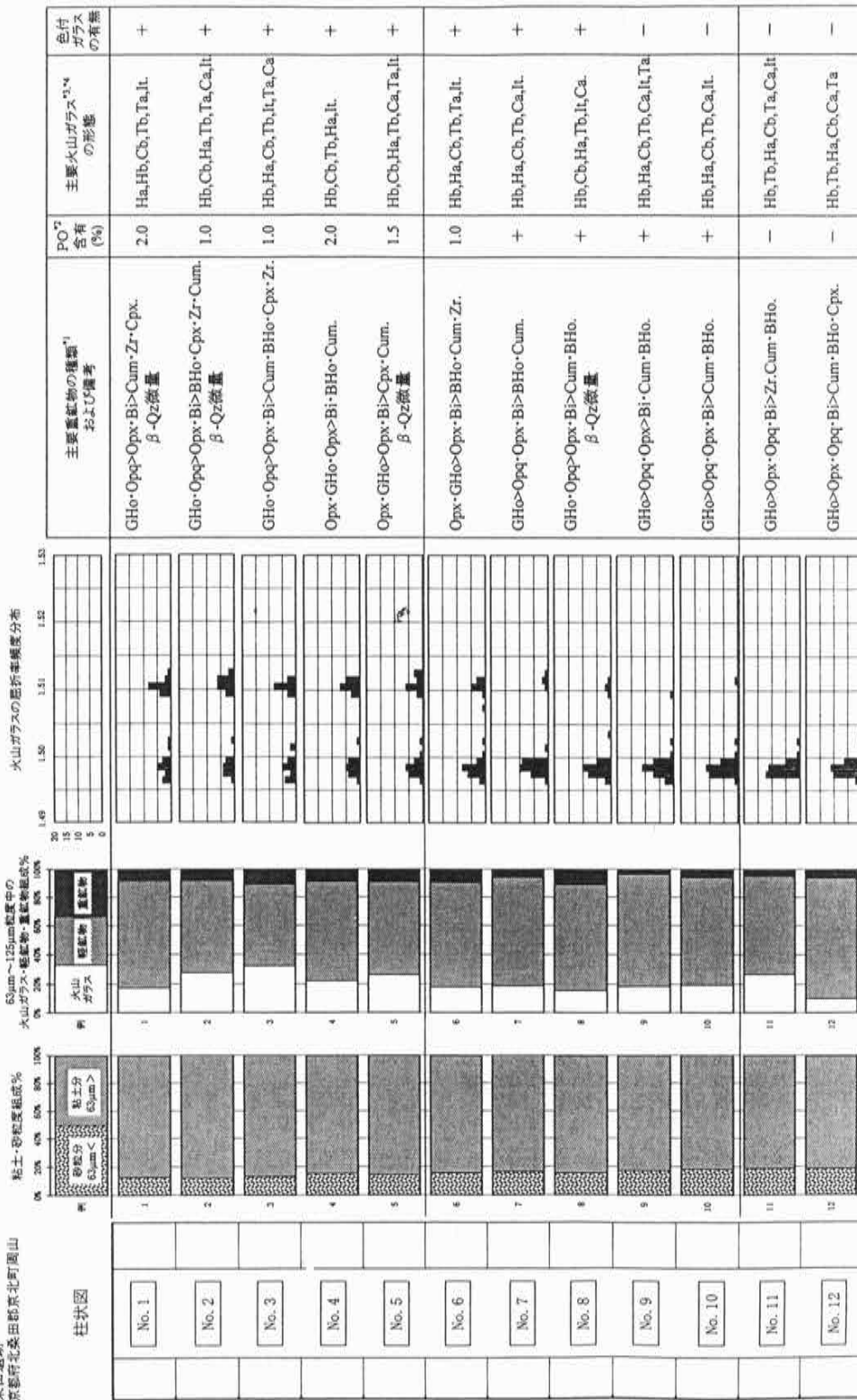


図2 東山遺跡の土層模式柱状図および分析結果

\*1: 表1参照

\*2: P含有はプラント・オパール含有率(%)を示す。

\*3: 火山ガラス型とその略称は、吉川(1976)に従う

Ha, Hb: 扁平型(バブル・ウォール型) Ca, Cb: 中間型(軽石型) Ta, Tb: 多孔質型(軽石型・繊維状型)

\*4: 吉川(1976)以外のガラス型については、次の略称を用いる。

Sg: スコリア質ガラス It: 不規則型

表1 東山遺跡出土火山灰の重鉱物組成

No	試料名	重鉱物組成*(1)										備考	
		01	Pyroxene		Amphibole		Opq	Cum	Zr	Bi	Ap		total
			Opx	Cpx	Bho	Gho							
1	No1	—	28	1	—	90	54	8	2	17	—	200	
		0.0	14.0	0.5	0.0	45.0	27.0	4.0	1.0	8.5	0.0	100.0	
2	No2	—	19	1	3	89	69	1	1	17	—	200	
		0.0	9.5	0.5	1.5	44.5	34.5	0.5	0.5	8.5	0.0	100.0	
3	No3	—	19	1	2	76	76	6	1	19	—	200	
		0.0	9.5	0.5	1.0	38.0	38.0	3.0	0.5	9.5	0.0	100.0	
4	No4	—	26	—	2	64	100	1	—	7	—	200	
		0.0	13.0	0.0	1.0	32.0	50.0	0.5	0.0	3.5	0.0	100.0	
5	No5	—	20	2	—	73	99	2	—	14	—	200	
		0.0	10.0	1.0	0.0	36.5	49.5	1.0	0.0	7.0	0.0	100.0	
6	No6	—	28	—	1	71	71	1	1	27	—	200	
		0.0	14.0	0.0	0.5	35.5	35.5	0.5	0.5	13.5	0.0	100.0	
7	No7	—	25	—	4	112	44	3	—	12	—	200	
		0.0	12.5	0.0	2.0	56.0	22.0	1.5	0.0	6.0	0.0	100.0	
8	No8	—	17	—	2	85	80	3	—	13	—	200	
		0.0	8.5	0.0	1.0	42.5	40.0	1.5	0.0	6.5	0.0	100.0	
9	No9	—	28	—	3	117	36	6	—	9	—	200	
		0.0	14.0	0.0	1.5	58.5	18.0	3.0	0.0	4.5	0.0	100.0	
10	No10	—	24	—	3	105	34	5	—	29	—	200	
		0.0	12.0	0.0	1.5	52.5	17.0	2.5	0.0	14.5	0.0	100.0	
11	No11	—	33	—	3	100	31	3	4	26	—	200	
		0.0	16.5	0.0	1.5	50.0	15.5	1.5	2.0	13.0	0.0	100.0	
12	No12	—	35	1	2	100	33	6	—	23	—	200	
		0.0	17.5	0.5	1.0	50.0	16.5	3.0	0.0	11.5	0.0	100.0	

注.\* (1) 上段計量粒子数 下段 %

01:カンラン石. Opx:

注 \*(1) 上段 計測粒子数 下段%

なお、各鉱物とその略称は以下のように対応します。

01:カンラン石	Opx:斜方輝石	Cpx:単斜輝石	Bho:褐色普通角閃石
Gho:緑色普通角閃石	Opq:不透明(鉄)鉱物	Id:イデイングサイト	Zr:ジルコン
Bi:黒雲母	Ap:アパタイト	Gar:ザクロ石	VG:火山ガラス
Zoisite:ユウレン石	Cum:カミングトン閃石	Wepidote:緑レン石	

表2 東山遺跡出土の火山ガラス屈折率

No	試料名	屈折率範囲 (range)		屈折率平均 値(mean)	測定個体 数(個)	屈折率最頻値 (mode)	火山ガラス形態 (glass type)
		最小	最大				
1	No1	1.496	1.500	1.4981	13	1.509 $\leq$ n<1.511 *40%	H, C
		—	—	1.5020	2		C, T, It
		1.509	1.512	1.5104	15		H, C, T
2	No2	1.497	1.500	1.4983	12	1.510 $\leq$ n<1.512 *40%	H, C
		—	—	1.5022	1		T, It
		1.510	1.513	1.5108	17		H, C, T
3	No3	1.496	1.500	1.4980	14	1.509 $\leq$ n<1.512 *50%	H, C
		—	—	1.5018	2		C, T
		1.509	1.512	1.5106	14		H, C, T
4	No4	1.496	1.500	1.4983	14	1.510 $\leq$ n<1.512 *40%	H, C
		—	—	1.5026	1		C, T
		1.510	1.512	1.5107	15		H, C, T
5	No5	1.497	1.500	1.4983	16	1.497 $\leq$ n<1.499 *40%	H, C
		—	—	1.5023	1		C, T
		1.510	1.513	1.5109	13		H, C, T
6	No6	1.497	1.501	1.4683	20	1.497 $\leq$ n<1.499 *50%	H, C
		—	—	1.5020	1		C, T
		1.508	1.512	1.5105	10		H, C, T
7	No7	1.496	1.500	1.4985	26	1.498 $\leq$ n<1.500 *60%	H, C
		—	—	1.5016	1		C, T
		1.510	1.512	1.5114	4		H, C, T
8	No8	1.496	1.500	1.4982	25	1.497 $\leq$ n<1.499 *60%	H, C
		—	—	1.5031	1		C, T
		1.510	1.511	1.5104	4		H, C, T
9	No9	1.497	1.500	1.4984	29	1.497 $\leq$ n<1.500 *80%	H, C, T
		—	—	1.5022	1		C, T
		—	—	1.5099	1		H, C, T
10	No10	1.497	1.500	1.4983	29	1.497 $\leq$ n<1.499 *70%	H, C, T
		—	—	1.5023	1		C, T
		—	—	1.5113	1		H, C
11	No11	1.497	1.500	1.4983	29	1.497 $\leq$ n<1.499 *80%	H, C, T
		—	—	—	—		H
		—	—	1.5029	1		H
12	No12	1.497	1.500	1.4981	29	1.497 $\leq$ n<1.499 *70%	H, C, T
		—	—	—	—		H
		—	—	1.5033	1		H

\*全測定数に対するmodeの範囲内にある火山ガラスの含有を示す。

H:扁平型 C:中間型 T:多孔質型(吉川, 1976) It:不規則型

東山遺跡地点における火山ガラス濃集層準とその特徴

火山ガラス検出層準		分布層準	最大濃集層準		屈折率 (nd)	主な火山ガラス型	※ 対比される 広域テフラ	※ 降灰年代	備考
			No. 番号	深度					
No. 1 } No. 10	—	No. 2 } No. 3	—	黒ボク層	1.508 } 1.515 最頻値 =1.510	H 型 ( 扁平型 )	鬼界アカホヤ 火山灰 (K-Ah)	6,300 B.P.	No.1~10試料間で検出されるが、No.2~3 試料で最大の濃集を示し、降灰層準にあたるものと推定される。ガラス形態はH型を主とし濃い色付ガラスを含む。火山ガラスの屈折率がかなり高いのが特徴。
No. 1 } No. 12	—	—	—	—	1.501 } 1.505	C, It 型 ( 中層~不凝塵 )	大山系火山灰	17,000 } 18,000 B.P.より	微量だが多くの分析試料で検出される。降灰層準決定は困難。火山ガラスの特徴と層序から大山系テフラ( 大山東大山DHg または大山笹ヶ平DSs など) の再堆積と推定されるが詳細は不明。
No. 1 } No. 12	—	No. 11	—	—	1.498 } 1.501 最頻値 =1.500	H 型 ( 扁平型 )	始良Tn火山灰 ( AT )	24,000 } 25,000 B.P.	今回の全分析層準で検出されるが、No.11 試料で明瞭な濃集が認められ降灰層準判断される。無色透明な扁平( バブル・ウォール) 型ガラスを主とするが、亀ノ甲型と称する特異な形態をもつガラスを少量含む。

町田 洋・新井 房夫(1992): 火山灰アトラス[ 日本列島とその周辺 ], 東京大学出版会。

図3 火山ガラス濃集層準とその特徴



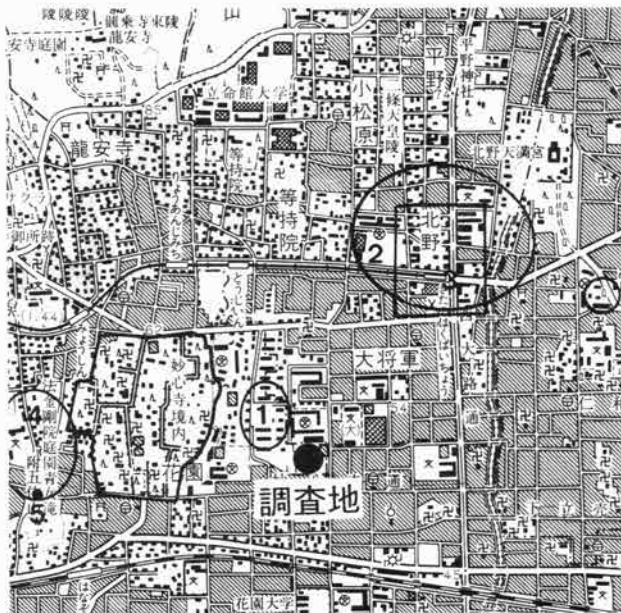
## 4. 平安京跡右京一条三坊九・十町(第8・9次) 発掘調査概要

### 1. はじめに

京都府立山城高等学校は、京都市北区大將軍坂田町29番地に所在する(第34図)。調査地の学校敷地は、延暦13(794)年に遷都した平安京の条坊区画では、右京一条三坊九・十町に相当する(第35図)。今回の調査地は、校舎建設に先立ち建設予定地であるグラウンド内に約2,700m<sup>2</sup>の面積で発掘調査を実施した。調査地は、右京一条三坊九町の南西部と十町の北西部にあたる。調査は、平成10年度(第8次)と平成11年度(第9次)にわたり実施した。

これまでに7次にわたる発掘調査が実施された。昭和54年度調査(第1・2次)において、平安時代の大規模な建物群が検出された。中心的な建物と左右対称に並ぶ西脇殿2棟と東脇殿2棟が検出され、昭和55年度調査(第3～5次)では、中心建物の北側で建物が確認され、中心建物を「コ」の字形に囲むような建物配置が確認され、建物群を囲う築地状の平坦地とその両側に溝が検出された。このことから、九町は一町分の敷地を占有する貴族の邸宅跡と考えられるようになった。検出された邸宅の中心建物部分は、昭和58年に府史跡に指定され地下保存されている。

今回の調査は、京都府教育委員会の依頼を受けて、当調査研究センター調査第2課課長補佐兼調査第1係長水谷壽克・同主査調査員石尾政信・同調査員村田和弘が担当した。調査は、第8次調査は平成10年10月7日～平成11年3月12日まで、第9次調査は平成11年4月19日～8月30日の期間で実施した。この間、京都府教育庁指導部文化財保護課・京都府立山城高等学校の方々のご



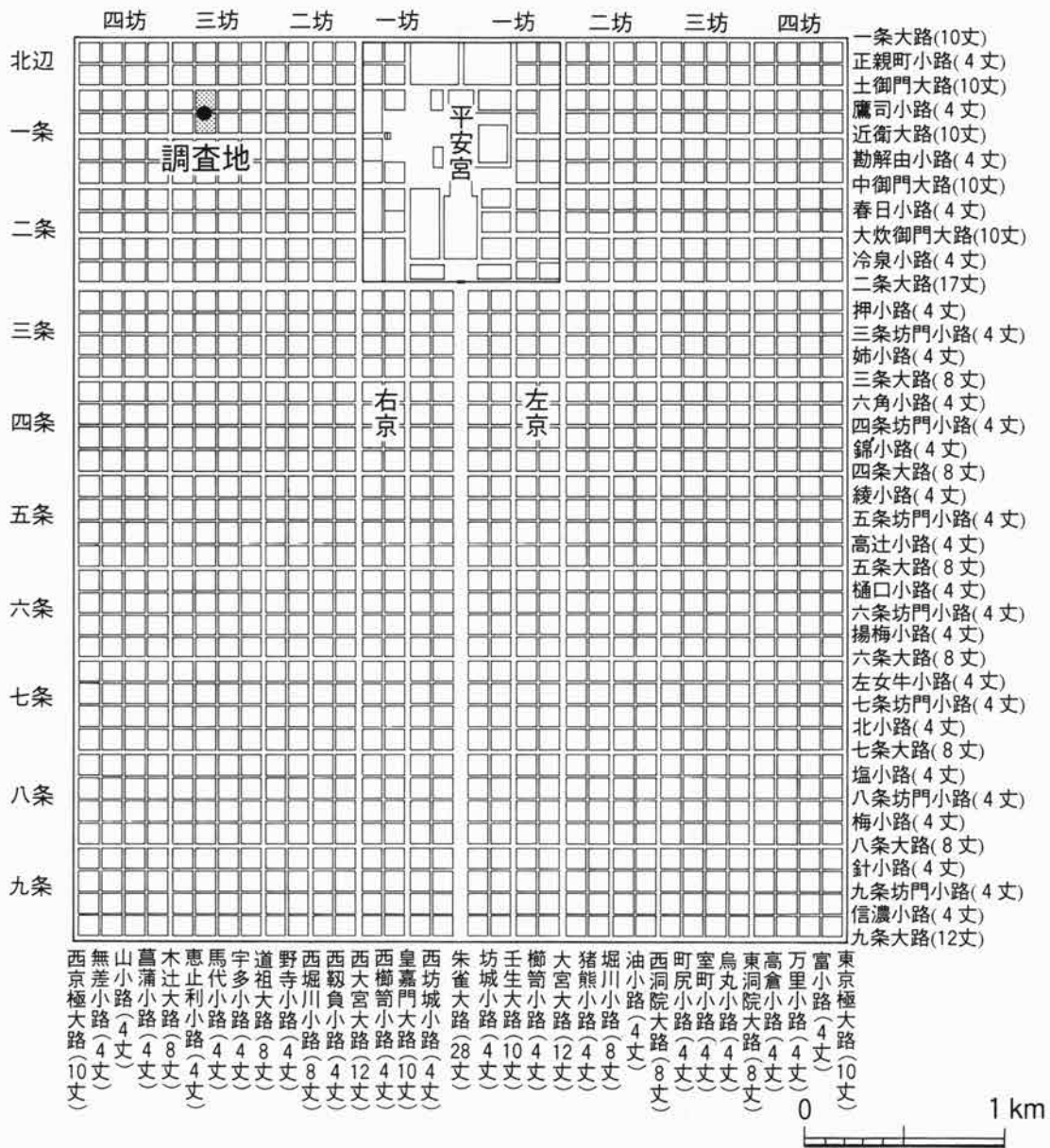
第34図 調査地位置図(S=1/25,000)

1. 花園遺跡            2. 北野遺跡    3. 北野廃寺跡  
4. 花園宮ノ上町遺跡    5. 五位山古墳

協力を得た。また、調査中には当調査研究センターの川上 貢・井上満郎両理事にご指導・助言をいただいた。そして、発掘調査および整理作業においては、調査補助員・整理員の協力を得た。本書の執筆は主に村田が行い、一部の項目について石尾・藤木が分担して行った。なお、本調査にかかる費用は、京都府教育委員会が全額負担した。

### 2. これまでの調査成果

これまでの調査の結果、遺構は大きく分けて3時期に分けられる。この時期区分に従い過去の7次にわたる発掘調査の成果を



第35図 平安京の条坊と調査地の位置

簡単にまとめておきたい。

I期 平安京造営以前の遺構で、古墳時代後期(6世紀末)～奈良時代末(8世紀末)の時期にあたり、これらの遺構は西側に所在する花園遺跡と同時期の遺構として位置づけることができる。

II期 平安京の条坊にしたがって建物などが造営され、廃絶するまでの期間である。年代的には平安時代初期～平安時代前期(9世紀後半)に相当する。これまでの成果と今回の調査の結果から、II期を細かく3時期(a～c期)に分けた。II-a期は、邸宅の建物が「コ」の字に配置される以前に先行して建てられた建物S B08が存続していた時期で、平安京造営の初期(8世紀末)にあたる。II-b期は、邸宅の建物群が建てられ廃絶するまでの時期で、9世紀初頭の短い期間にあたる。II-c期は、邸宅の建物群が廃絶した後に条坊に従って建てられた建物などの時期で、9世紀後半～9世紀末頃の遺構と考えられる。

Ⅲ期 条坊による方向の規制を受けない建物が建てられる時期で、平安時代中期(10世紀初め～11世紀初め)に当たる。

以上の時期区分を基に過去7次<sup>(注1-4)</sup>にわたる調査を簡単にまとめておく。

第1次調査(昭和54年度) 九町の北半中央部で、Ⅱ-a・b期に属する邸宅の主要建物群が検出された。S B08・09の正殿とS B07・10の西脇殿、S B12・13の東脇殿が検出された。正殿のS B09は、造営途上の仮設的なS B08(Ⅱ-a期)を整備し、廂・孫廂により規模を拡張しS B09(Ⅱ-b期)へと改築していることが確認された。

第2次調査(昭和54年度) 主要建物群の西側の調査で、Ⅱ期の遺構として主要建物と付属建物を画する柵、北側・西側の築地に伴う内溝、井戸などが検出された。また、Ⅰ期に属する掘立柱建物跡や竪穴式住居跡、Ⅲ期に属する掘立柱建物跡などが検出された。

第3次調査(昭和55年度) 第1・2次調査地の北西部の正殿の北側で、後殿と考えられる建物S B119が検出された。また、九町の北限で2条の溝状遺構と間の平坦地が検出され、北側の溝状遺構を土御門大路の南側溝、平坦地を築地、南側の溝状遺構を宅地内の溝と推定された。溝状遺構は解体時の廃棄用の溝と考えられ、築地自体も版築などの地業は確認されていない。

第4次調査(昭和55年度) 西脇殿S B07の南側で、S B07の西柱列の南延長線に東柱列を揃えた小規模な掘立柱建物跡が検出された。建物は井戸が近接していることから、厨房と推定された。また、Ⅰ期の竪穴式住居跡などやⅢ期に属する井戸などが検出された。

第5次調査(昭和55年度) 学校敷地の南西部の十町の北東部分で、Ⅰ期の掘立柱建物跡やⅡ-c期の苑池状遺構S G177など、Ⅲ期では小規模な掘立柱建物跡や柵などの遺構が検出された。

第6次調査(昭和59年度) 下水道整備工事に伴う小規模な調査で、北側で宅地内の溝に推定される遺構の東延長と主要建物群の南および南東側でⅠ期の掘立柱建物跡の一部を検出した。

第7次調査(昭和62年度) 九町の南西部と北東部での調査で、南西部では東西方向の掘立柱建物跡が1棟検出された。この建物跡はⅡ-b期の邸宅の建物配置では、九町の南半分で邸宅の中心建物S B09の中軸線より西側に位置している。ほかにⅠ期の竪穴式住居跡が検出された。

### 3. 平安京の条坊復原について

平安京の条坊復原<sup>(注5)</sup>の研究について簡単に説明する。そのうえで、検出した遺構と復原された条坊を照らし合わせて、条坊遺構・邸宅に関連する遺構を想定したい。

条坊制とは、古代の都城における街路街区割制度で、縦横の道路によって碁盤目状に区画され、東西に並んだ方格を坊、南北に並んだものを条と称する。条坊の概要は、古代の法典の一つ『延喜式』左右京職の京程および町内小径条に、平安京の平面規模や各道路の規模および構成部分の規模、町の規模や数値が記されている。条坊道路はその幅を築地心から築地心までの距離とし、築地・犬行・側溝・路面で構成される。また、一町の規模が40丈四方で、一町を32分割した区画の戸主が東西10丈、南北5丈の規模とされる(1丈=10尺=2.98445m)。今回の調査地内に想定される鷹司小路の規模は4丈で、築地幅の半分が2.5尺、犬行3尺、側溝幅3尺、路面幅2丈3

尺から成る。しかし、『延喜式』の記述には、数値の誤差や小路の数が異なるなどの疑問点がある。昭和40年代後半以降の再開発により調査件数は急増し、それにもなって条坊遺構をはじめ、さまざまな遺構・遺物が発見された。その後、(財)京都市埋蔵文化財研究所が主体となり、平安京内で同一方位と原点を用いて調査するため、田中 琢・田辺昭三両氏の提言を受け、遺跡調査に国土座標を導入した。昭和52・53年度に平安京を中心とした京都市全域に遺跡発掘調査基準点が設置され、各調査に同一座標系が用いられ、検出された条坊遺構から条坊復原が行われた。

これまで平安京の条坊復原の研究には、『平安通志』における復原図「平安京旧址実測全図」や杉山信三氏が行った西寺伽藍中軸線から東寺伽藍中軸線の実測値を用いた復原などが挙げられる。また、国土座標導入後、(財)京都市埋蔵文化財研究所によって、検出された条坊遺構の座標値から造営尺と方位の値を導き出し、平安京の条坊復原モデル(造営時の設計図)を作成された。昭和63(1988)年には、辻純一氏が条坊復原モデルを用いて九町の条坊復原を行った<sup>(注6)</sup>。検出遺構と条坊復原モデルによって、邸宅の建物群は九町の中軸より西寄りにあることや、条坊道路の土御門大路の位置などの条坊遺構の想定と再確認がなされた。今回の調査においても、条坊復原モデルのデータを活用し、検出した遺構から条坊の復原・想定を試みた。検出遺構を条坊復原モデルに照らし合わせ、条坊に関連する遺構や邸宅に関連する遺構を想定したい。

#### 4. 調査の経過

調査地はグラウンド部分の「口」の字形を呈する調査範囲で面積は約2,700㎡である。条坊では九町の南限西側部分と十町の北西部分にあたる。また、九町と十町の間には鷹司小路があり、九・十町の遺構確認とともに鷹司小路の確認も重要な調査の目的であった。

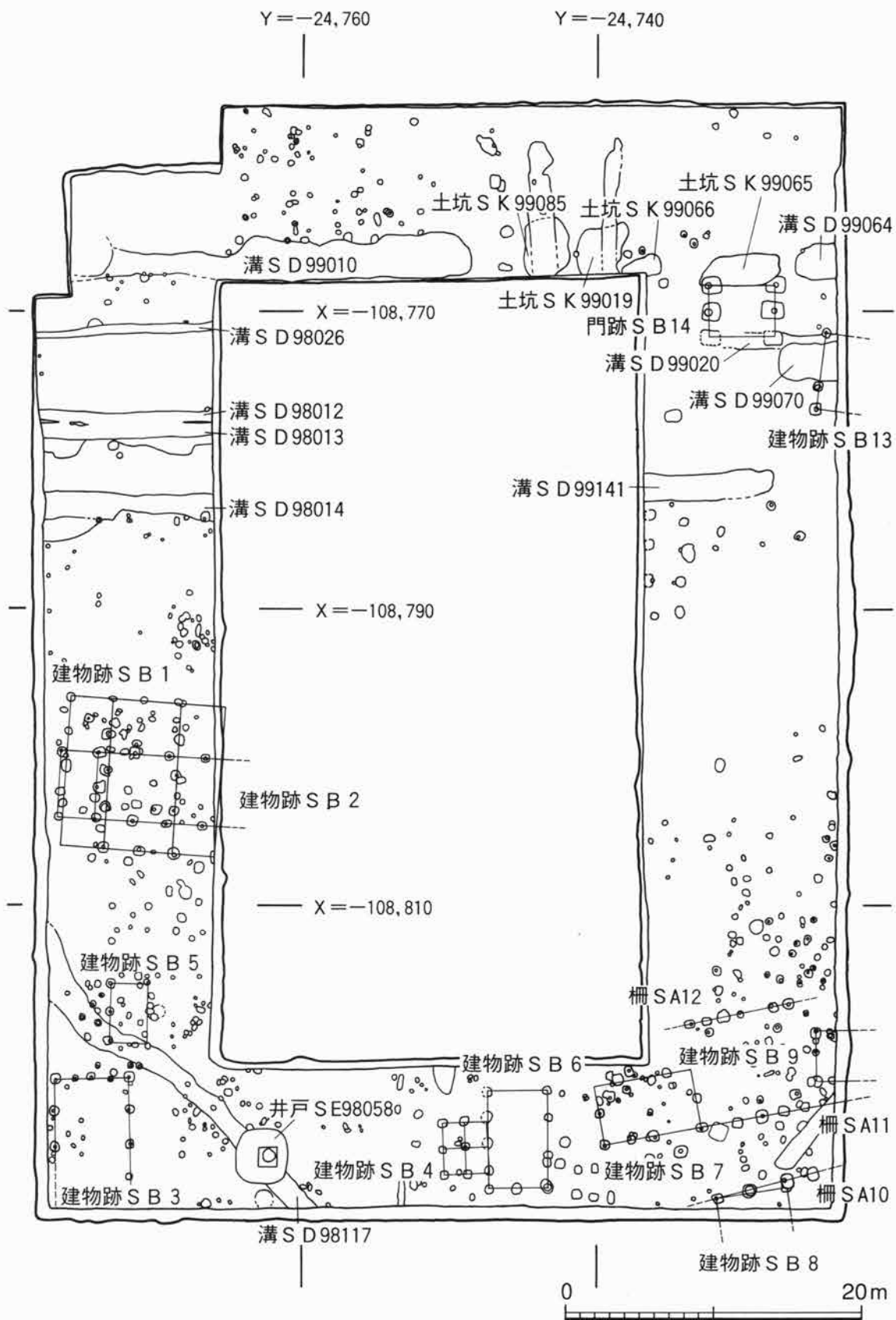
平成10年度 西側と南側トレンチの約1,400㎡の調査と北側と東側部分の試掘調査を実施した。東側部分の試掘調査の結果、邸宅中心建物の中軸南延長において柱穴を確認した。検出位置が九町の南限にもあたることから、全体像をつかむため拡張し、調査した。その結果、一辺約1.2mの方形の柱穴6基を確認し、位置関係から邸宅の南門跡であると判断した。このことを受け、京都府教育庁指導部文化財保護課・京都府教育庁管理部管理課・当調査研究センターの三者で協議を行った結果、北側と東側部分の発掘調査は平成11年度に面的調査を実施することとなった。

平成11年度 北側と東側部分の調査面積約1,300㎡を調査した。現地説明会は、平成11年8月22日に約260名の参加を得て開催した。なお、検出した邸宅の門跡は京都府教育庁管理部管理課・同文化財保護課・府立山城高等学校の協議の結果、地下保存されることとなった。

#### 5. 地形と層位

調査地は京都盆地の北西部にあたり、北側の衣笠山から南方向へ向けて段丘を呈して下がる洪積丘陵に立地する。検出した遺構面の傾斜は、北から南へゆるやかに傾いている。

調査地の現地表面(グラウンド)は、現在校舎などが建てられている北側とでは約0.5mの段差がある。隣接する第7次の調査地で遺構面は標高約50m前後で遺構が確認されている。調査地北



第36図 調査トレンチ遺構配置図(S=1/400)



第2表 遺構時期別一覧表

	九町	鷹司小路	十町
I期			S B04 S B07・S B08 S D98117
II-b期	S B14 S D99010 S K99019 S D99064 S K99065 S K99066 S K99085	S D98026 S D98012 S D98013 S D99070	S D98014 S D99141
II-c期			S B03・S B05 S B06・S B09 S E98058
III期		S B13	S B01・S B02

側でグラウンド整地土が約0.1m、その直下で遺構面を確認した。遺構面は北側から南側へゆるやかに傾斜し、南側では現地表から約1.5m、標高約48.5mで遺構面を確認した。南側には遺構面の土層に厚さ約0.2mの平安時代以降の遺物を含む包含層を確認した。また、遺構面にはグラウンドの水はけ用の暗渠溝が調査区全域にわたって南北・東西方向にめぐり、遺構面が破壊されていた。

### 5. 遺構の概要

今回検出した遺構を、九町、鷹司小路関連・十町に分けて各時期ごとに報告する(第36図・第2表)。

#### (1) 九町の遺構

検出した遺構は東西溝・土坑・柱穴やピットなどで、条坊に関連すると思われる遺構や、邸宅の南門と思われる門跡を検出した。

##### ① I期の遺構

今回の九町の調査範囲内には、時期の不明な遺構は検出したが、この時期の明確な遺構は検出できなかった。

##### ② II期の遺構

**門跡 S B14** 桁行1間(約4.5m=15尺)、梁行2間(約3.6m=12尺)の規模である(第37図)。検出位置は邸宅の中軸南延長線上にあり、九町(一町分)の南限にあたる。柱配置は、本柱2本と前後の控柱各2本の合計6本の四脚門と考えられる。南側の控柱の柱穴2基は、後世の攪乱と溝 S D99070の幅拡張によって破壊され、一部分のみ残存している状況であった。

門跡は保存されることが決まり柱穴を完掘することはしなかった。しかし、データ収集のため、北西側控柱の柱穴の断面観察を行った(第38図)。柱穴の深さは約0.45mを測り、柱の太さは断面から推定すると約30~35cmである。礎石はなく、構造面から屋根に瓦が葺かれていた可能性は低く、檜皮葺きであったと推測する。

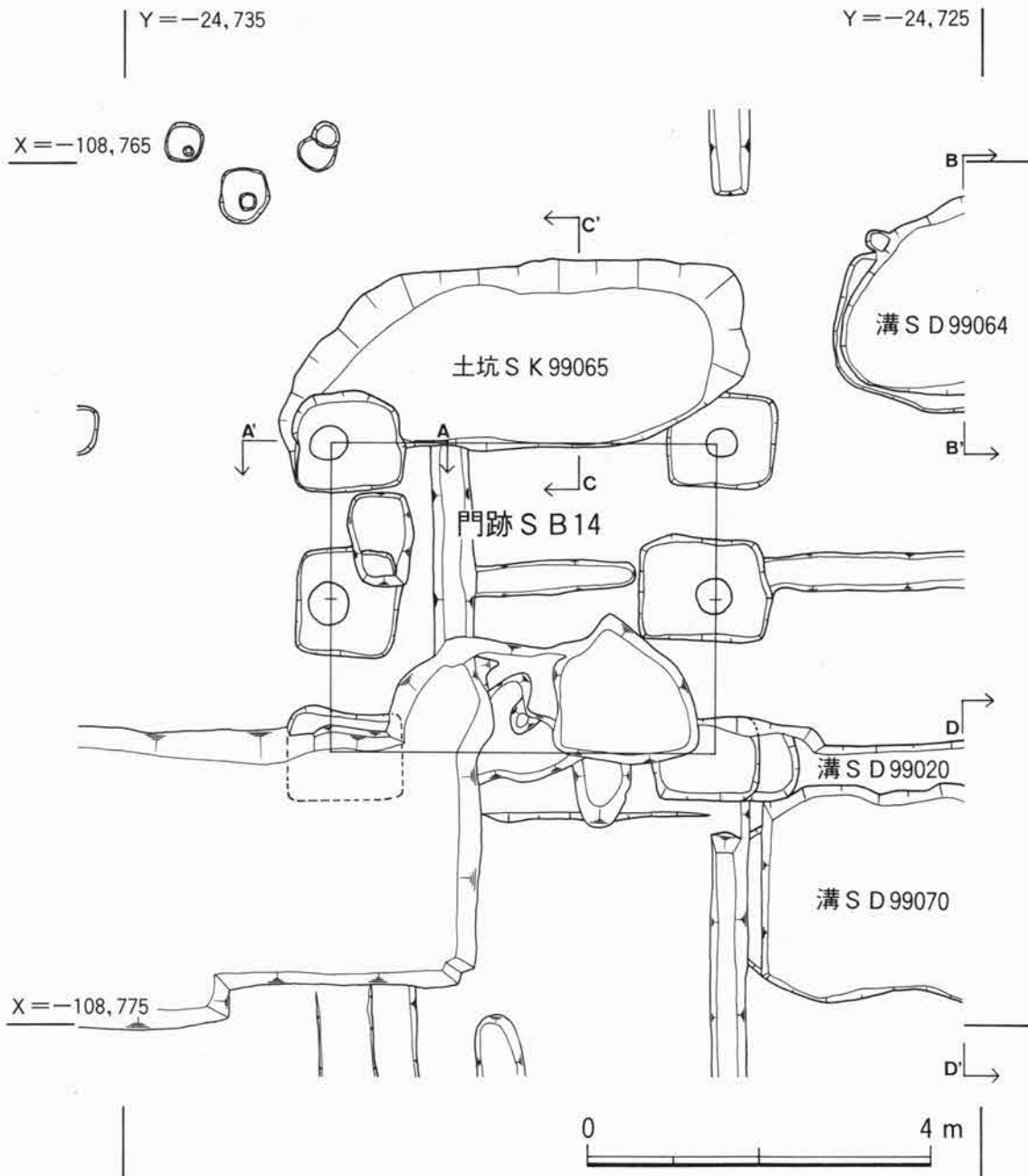
**溝 S D99064** 門跡 S B14の北東側にある幅約2m・深さ約0.4mの東西溝で、調査トレンチ外の東側へと伸びている(第37・38図)。埋土中から平安時代前期(9世紀初め)に属する遺物が出土した。

**土坑 S K99065** 門跡 S B14の北側にあり、門跡の北側柱穴2基の上から掘り込まれている(第37・38図)。埋土から平安時代前期に属する土器や難波宮式軒丸瓦などが出土した。

**土坑 S K99066** 門跡 S B14の北西側にある土坑で、底は浅く約5cmの深さであった。埋土から平安時代前期に属する土器が出土した。

**溝 S D99010** 門跡 S B14の西側の幅約3m・深さ約0.4mの東西溝である(第39図)。溝の底の





第37図 門跡S B 14と周辺遺構平面図(S=1/80)

一部に焼土がある。埋土からは平安時代前期に属する多くの土器・瓦や製塩土器が出土した。

土坑 S K 99019 土坑 S K 99066の西側で、東西約3 m・南北約4 m・深さ約0.12mを測る。

土坑 S K 99085 土坑 S K 99019の西側にある東西約3 m・南北約3 m・深さ約0.2mの土坑で、平安時代前期(9世紀初頭)の遺物が出土した。

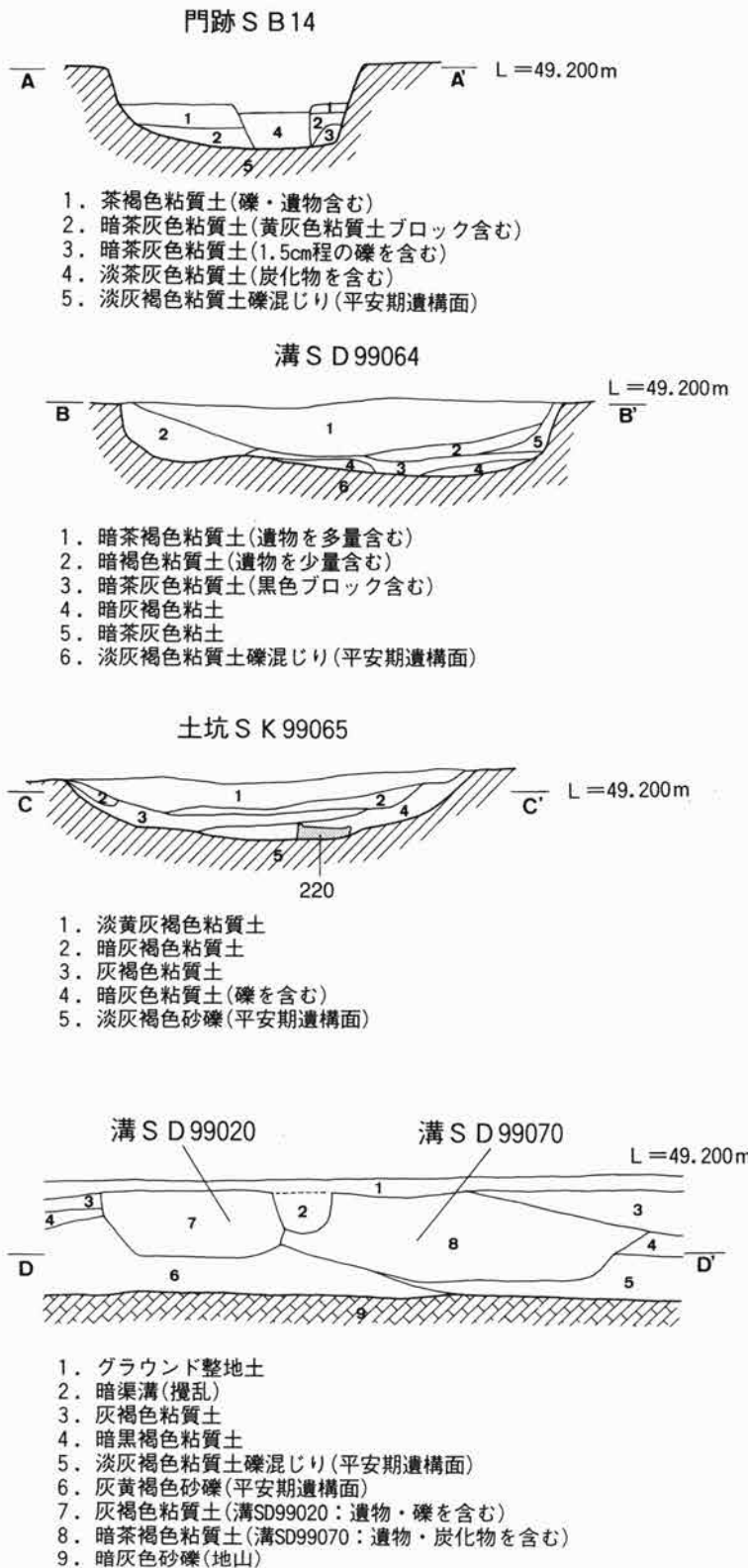
### ③ III期の遺構

III期と思われる約50基ほどの小規模な柱穴や土坑・溝などを全域にわたって検出した。

### (2) 鷹司小路関連遺構

#### ① II期の遺構

溝 S D 98026 幅約0.3mの狭い溝である。埋土からは、羽釜の破片が1点出土した。



第38図 遺構土層断面図(S=1/40)



溝 S D 99070 門跡 S B 14の南西側にある溝で、幅約2.6m・深さ約0.5mを測る(第37・38図)。南東側控柱の柱穴を一部破壊している。埋土からは、平安時代前期に属する遺物が出土した。この溝の上層で、後世に掘られた溝 S D 99020を検出した。溝 S D 99020は、門の柱穴に切り合っていることから、解体後のものである。

溝 S D 98012・98013 2条の東西溝を重ねた状態で検出した。2条の溝は時期差があると思われるが、上層からのグラウンドの水はけ用暗渠によって、新旧関係を確認することができなかった。

### ② III期の遺構

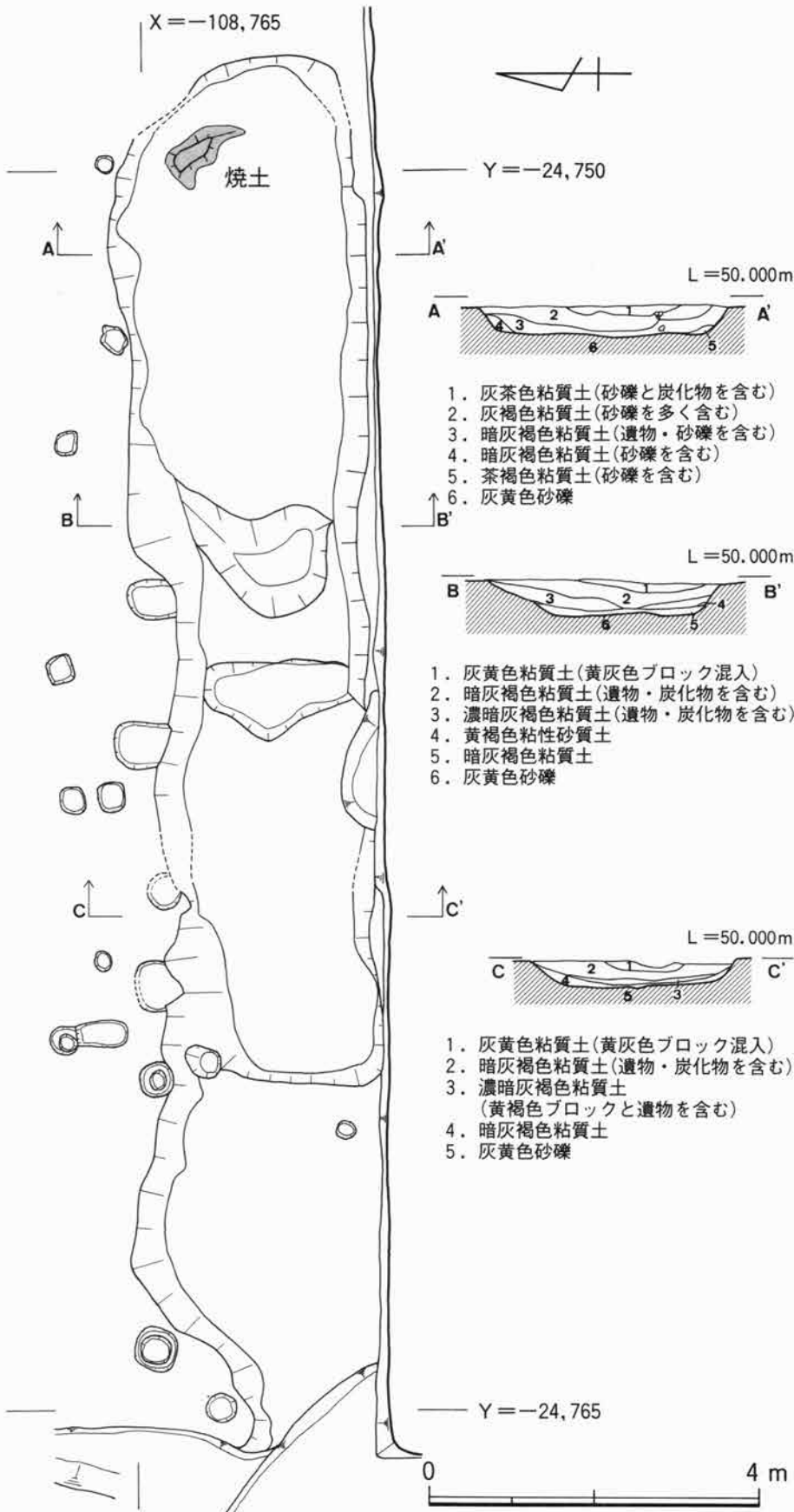
掘立柱建物跡 S B 13 溝 S D 99070が埋没した後に建てられた建物である。検出した柱穴は3基のみで、建物は東側のトレンチ外に伸びている。

溝 S D 99020 溝 S D 99070の上面において、幅約0.5m・深さ約0.15mの浅い東西溝の溝 S D 99020を検出した(第37図)。

### (3) 十町の遺構

#### ① I期の遺構

溝 S D 98117 西側トレンチの南側で検出した幅約1.7m・深さ約0.6mの斜行する溝である。溝の埋没後には、平安時代中期初頭(9世紀末~10世紀初



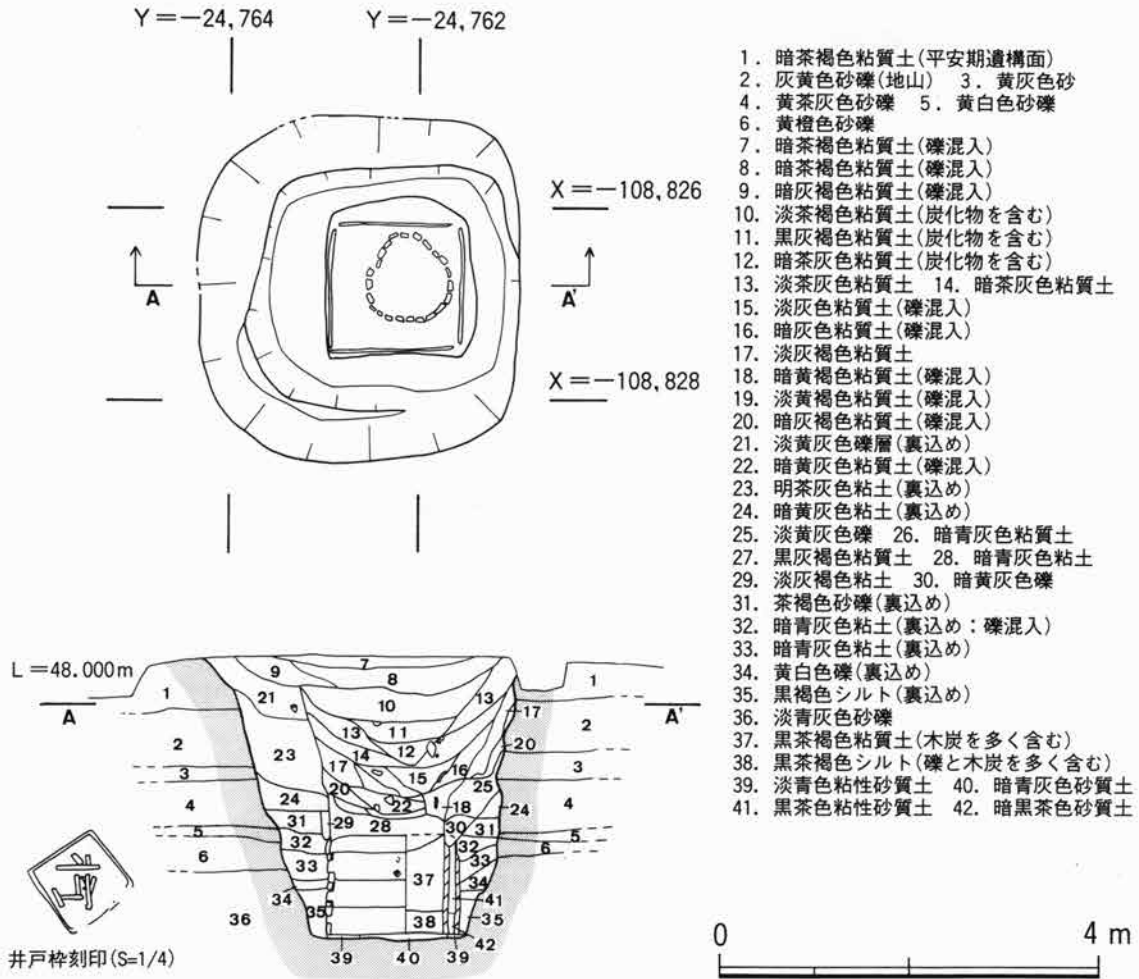
第39図 溝S D99010平・断面図(S=1/80)

め)と思われる掘立柱建物跡S B 5が建てられ、南東側は井戸S E98058がつくられた。井戸の埋土からは、8世紀後半の遺物が底部より出土した。遺物から条坊区画が施工される以前の遺構とわかる。調査地の西側には花園遺跡(弥生時代中期~奈良時代)の遺跡範囲が広がっていることから、この溝は花園遺跡に関連があると思われる。遺跡範囲が南東側にも広がることが考えられる。

掘立柱建物跡S B4 2間×2間の総柱建物である。東側に隣接する掘立柱建物跡S B6の柱穴が建物の柱穴を切り込んでいる。

### ②II期の遺構

溝S D98014 最大幅約2m・最も深いところで約0.4mを測る東西溝である。埋土からは

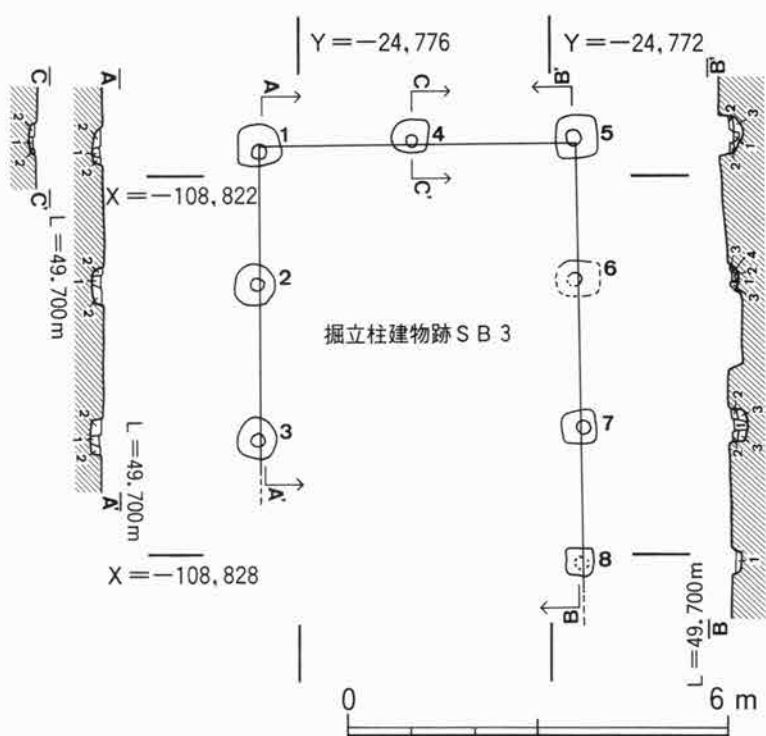


第40図 井戸 S E 98058 平・断面図(S=1/80)

平安前期～中期初頭(9世紀前半)に属する土器が多く出土した。

溝 S D 99141 東側トレンチで検出した幅約1.5m・深さ約0.1mを測る東西溝で、西側トレンチで検出した溝 S D 98014 とつながる可能性がある。溝は東側トレンチ中央あたりで途切れているが、東側壁断面において溝状の堆積層を確認している。

井戸 S E 98058 トレンチの南西において、東西約3.45m・南北約3.6mの隅丸方形の掘り形を呈する井戸を検出した(第40図)。検出面から約2.0mで一辺約1.4mの方形に組まれた井戸枠を検出した。井戸枠は、長さ約1.4m・幅約0.3m・厚さ4～5cmの板が井籠状に組まれていた。形式的には横板井蒸籠組井戸と言われるもので、横位に用いた厚い板材の両端に目違いの仕口を設けて組み、これを太柄で積み上げていく構造である。さらに方形井戸枠の内側には、細長い幅10cmほどの杭状の板を円形に組んだ井戸枠を検出した。方形井戸枠の上位部分は、東方向に抜き取られた様子で、西側には井戸枠設置に伴う裏込め土が残存している。井戸枠抜き取り後に、埋め立てられた状況がうかがえる。円形井戸枠内で、投棄された曲物の桶や木製品が出土した。掘り下げていくと、底付近から木炭や礫が出土したことから、井戸底には地下水を浄化するために木炭と礫が敷かれていたと推定される。方形井戸枠と円形井戸枠は、同時期に設置されていたと推定されるが、井戸枠取り上げの際の断ち割りの所見によれば、円形井戸枠がわずかに堆積層に乗っ



- |   |  |
|---|--|
| <p>柱穴 1</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 暗茶褐色粘質土(柱痕跡)</li> <li>2. 暗灰色粘質土<br/>(黄茶褐色ブロックや炭化物を含む)</li> </ol> <p>柱穴 2</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 暗茶褐色粘質土(柱痕跡)</li> <li>2. 茶褐色粘質土<br/>(黄茶褐色ブロックを含む)</li> </ol> <p>柱穴 3</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 暗茶褐色粘質土(柱痕跡)</li> <li>2. 茶褐色粘質土<br/>(黄茶褐色ブロックを含む)</li> </ol> <p>柱穴 4</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 茶褐色粘質土(柱痕跡)</li> <li>2. 茶褐色粘質土<br/>(茶褐色ブロックを含む)</li> </ol> | <p>柱穴 5</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 暗茶褐色粘質土(柱痕跡)</li> <li>2. 暗灰色粘質土<br/>(茶褐色ブロックを含む)</li> <li>3. 黄茶褐色粘質土</li> </ol> <p>柱穴 6</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 暗茶褐色粘質土(柱痕跡)</li> <li>2. 茶灰色粘質土<br/>(炭化物・黄褐色ブロックを含む)</li> <li>3. 暗茶褐色粘質土(礫を多く含む)</li> <li>4. 茶灰色粘質土</li> </ol> <p>柱穴 7</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 暗茶褐色粘質土(柱痕跡)</li> <li>2. 茶灰色粘質土</li> <li>3. 茶褐色粘質土</li> </ol> <p>柱穴 8</p> <ol style="list-style-type: none"> <li>1. 茶灰色粘質土</li> </ol> |
|---|--|

第41図 掘立柱建物跡SB3平・断面図(S=1/120)

ていることから若干遅れて設置された可能性も考えられる。井戸の深さは、遺構面から井戸枠の基底部まで約2.9mを測る。出土遺物は、9世紀末～10世紀初めの遺物が多量に出土した。また、『福』の反文字が刻印された平瓦が出土した。

(石尾政信・村田和弘)

**掘立柱建物跡SB3** 2間×4間以上の南北棟である(第41図)。建物の南側は、旧校舎の基礎などによって攪乱を受けており、規模は不明である。建物の方向は、条坊の方向に沿って建てられているが、柱穴掘り形は一辺約0.5mの方形で小規模なものである。

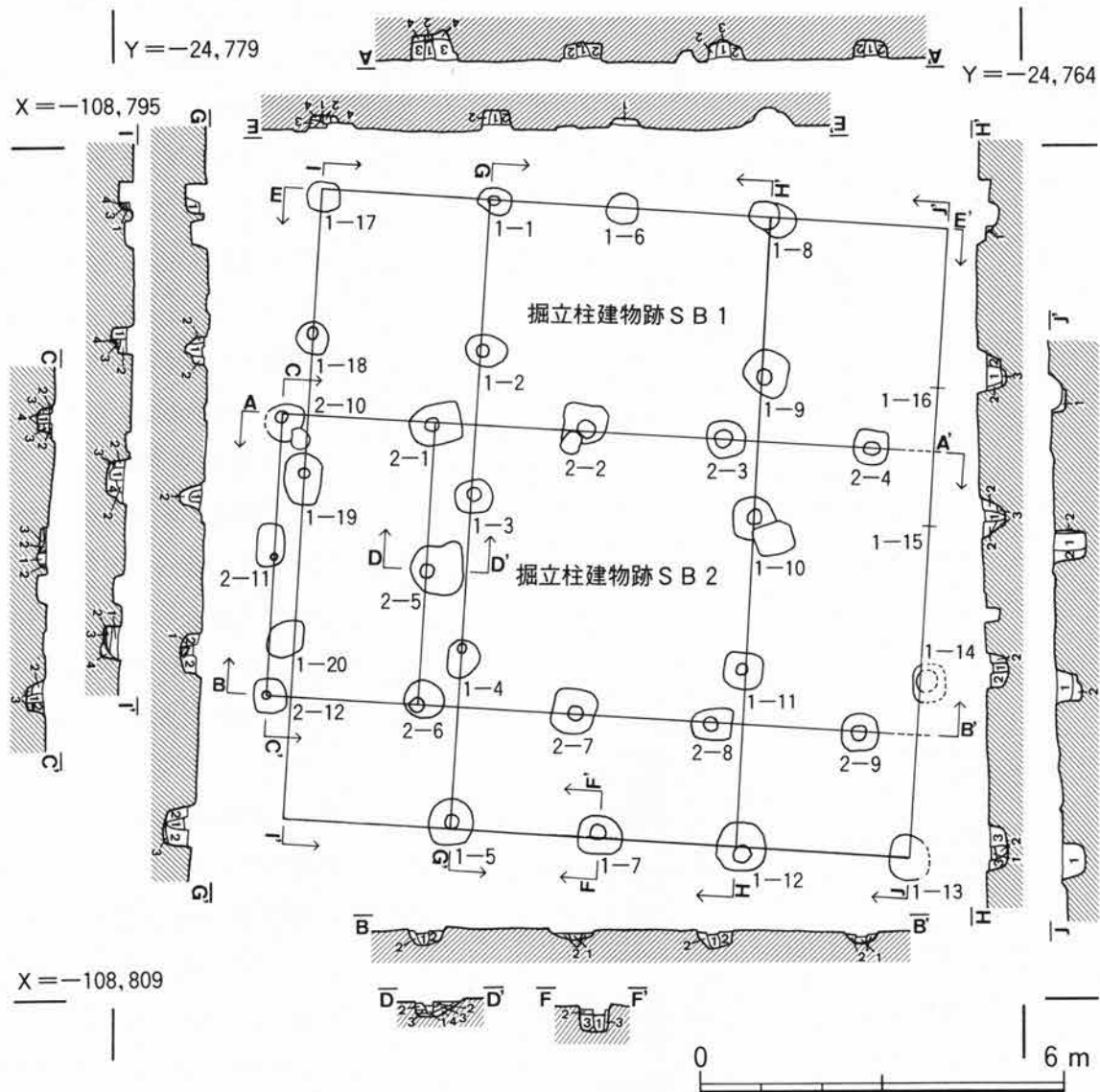
**掘立柱建物跡SB5** 1間×2間の東西棟の建物で、柱穴は直径約0.4mの円形である。建物の方向は、掘立柱建物跡SB3と一致することから同時期であると考えられる。

**掘立柱建物跡SB6** 2間×3間の南北棟である。柱穴は一辺約0.4mの方形で、掘立柱建物跡SB4の柱穴に切り込んでいた。建物の方向が、掘立柱建物跡SB3と一致していることから同時期と考えられる。

**掘立柱建物跡SB9** 東西棟と思われる建物の柱穴5基を検出した。建物の方向は条坊と一致しているが大半が調査トレンチ外のため規模は不明である。また、東西の柱間を考えると小規模な建物であると考えられる。

### ③III期の遺構

**掘立柱建物跡SB1** 2間×4間の南北棟の建物で、西側と東側に廂が付く(第42図)。この建物は掘立柱建物跡SB2と重複しているが、柱穴の切り合い関係はなく新旧関係は不明である。また、建物方向は条坊とは一致しない。柱穴の規模は、一辺約0.7mの方形を呈する。柱穴15・16は、トレンチ東側断面で確認した。



第42図 掘立柱建物跡SB1・2平・断面図(S=1/120)

掘立柱建物跡SB2 2間×4間以上の東西棟の建物で、西側に廂が付く(第42図)。建物は東側の調査トレンチ外へのびている。柱穴の規模は、一辺約0.6mの方形を呈する。

掘立柱建物跡SB7 2間×4間の東西棟と考えられる。南側トレンチの南東側は、現代の投棄穴や溝などにより平安期の遺構面が壊されていた。建物の柱穴も、攪乱によって破壊されている部分があった。

掘立柱建物跡SB8 南北棟と思われる建物の一部を検出した。大半が調査トレンチ外のため不明である。

柵SA10 掘立柱建物跡SB8の北辺に重なった状態で検出した。柱穴は4基のみであった。

柵SA11 掘立柱建物跡SB7の南側柱列に取り付く。柱穴を5基検出した。柱間も掘立柱建物跡SB7とほぼ一致し、同時期の遺構と思われる。

柵SA12 柵SA11の北側で柱穴列を検出した。



第3表 掘立柱建物跡SB1・2土層名一覧

掘立柱建物跡SB1

- 柱穴1  
 1. 淡灰色粘質土(柱痕跡)  
 2. 灰褐色粘質土(礫を多く含む)
- 柱穴2  
 1. 淡灰褐色粘質土(柱痕跡)  
 2. 灰褐色粘質土(遺物を少量含む)  
 3. 暗黄褐色砂礫層
- 柱穴3  
 1. 淡灰褐色粘質土(柱痕跡)  
 2. 灰褐色粘質土(遺物を少量含む)  
 3. 暗黄褐色砂礫層
- 柱穴4  
 1. 淡灰褐色粘質土(柱痕跡)  
 2. 灰褐色粘質土  
 (黄色ブロックを少量含む)  
 3. 暗褐色砂礫層  
 (黄色ブロックを微量含む)
- 柱穴5  
 1. 淡灰褐色粘質土(柱痕跡)  
 2. 灰褐色粘質土(遺物を少量含む)
- 柱穴6  
 1. 灰褐色粘質土  
 2. 暗灰色砂礫層
- 柱穴7  
 1. 淡灰褐色粘質土(柱痕跡)  
 2. 暗灰褐色粘質土  
 3. 灰褐色粘質土
- 柱穴8  
 1. 暗灰褐色粘質土
- 柱穴9  
 1. 淡灰褐色粘質土(柱痕跡)  
 2. 灰褐色粘質土
- 柱穴10  
 1. 淡灰褐色粘質土(柱痕跡)  
 2. 灰褐色粘質土(遺物を少量含む)  
 3. 暗灰褐色粘質土
- 柱穴11  
 1. 淡灰褐色粘質土(柱痕跡)  
 2. 灰褐色粘質土
- 柱穴12  
 1. 淡灰褐色粘質土(柱痕跡)  
 2. 暗黄褐色粘質土(柱痕跡)  
 3. 淡黄褐色粘質土
- 柱穴13  
 1. 暗褐色粘質土(遺物を少量含む)
- 柱穴14  
 1. 暗褐色粘質土(炭・遺物を含む)  
 2. 暗黄灰色粘性砂質土

- 柱穴15  
 1. 暗黄灰色粘質土(柱痕跡)  
 2. 暗褐色粘質土(遺物を含む)
- 柱穴16  
 1. 暗褐色粘質土(遺物を含む)
- 柱穴17  
 1. 淡灰褐色粘質土  
 2. 灰褐色粘質土(柱痕跡)  
 3. 暗褐色粘質土  
 4. 暗灰色粘質土
- 柱穴18  
 1. 淡灰褐色粘質土(炭を少量含む)  
 2. 灰褐色粘質土  
 3. 暗黄褐色粘質土  
 4. 暗褐色粘質土
- 柱穴19  
 1. 淡灰褐色粘質土  
 (柱痕跡：遺物を少量含む)  
 2. 灰褐色粘質土(遺物を少量含む)  
 3. 淡黄褐色粘質土(黄色ブロック)  
 4. 暗灰褐色粘質土  
 5. 暗黄灰色砂礫層
- 柱穴20  
 1. 灰褐色粘質土  
 2. 淡褐色粘質土  
 (黄色ブロックを含む)  
 3. 暗黄褐色粘質土  
 4. 暗灰色粘質土

掘立柱建物跡SB2

- 柱穴1  
 1. 淡灰褐色粘質土(柱痕跡)  
 2. 暗茶褐色粘質土(柱痕跡)  
 3. 灰褐色粘質土  
 (黄色ブロックを含む)  
 4. 暗黄褐色粘性砂質土
- 柱穴2  
 1. 淡灰褐色粘質土(柱痕跡)  
 2. 灰褐色粘質土  
 (黄色ブロック含む)
- 柱穴3  
 1. 淡灰褐色粘質土(柱痕跡)  
 2. 灰褐色粘質土  
 3. 暗茶褐色粘質土
- 柱穴4  
 1. 淡灰褐色粘質土(柱痕跡)  
 2. 灰褐色粘質土

- 柱穴5  
 1. 淡灰褐色粘質土(柱痕跡)  
 2. 灰褐色粘質土  
 (黄色ブロック含む)  
 3. 暗黄灰色粘質土  
 4. 暗茶灰色粘質土
- 柱穴6  
 1. 淡灰褐色粘質土  
 (柱痕跡：少量の炭を含む)  
 2. 灰褐色粘質土  
 (遺物を少量含む)
- 柱穴7  
 1. 淡灰褐色粘質土(柱痕跡)  
 2. 灰褐色粘質土
- 柱穴8  
 1. 淡灰褐色粘質土  
 (柱痕跡：少量の炭を含む)  
 2. 灰褐色粘質土
- 柱穴9  
 1. 淡灰褐色粘質土  
 (柱痕跡：少量の炭を含む)  
 2. 灰褐色粘質土
- 柱穴10  
 1. 淡灰褐色粘質土(柱痕跡)  
 2. 灰褐色粘質土  
 3. 暗黄粘質土(遺物を少量含む)  
 4. 淡黄褐色粘性砂質土
- 柱穴11  
 1. 淡灰褐色粘質土  
 (柱痕跡：遺物を少量含む)  
 2. 灰褐色粘質土  
 3. 淡黄褐色粘性砂質土  
 (黄色ブロックを含む)
- 柱穴12  
 1. 淡灰褐色粘質土(柱痕跡)  
 2. 灰褐色粘質土

第4表 建物規模一覧表

遺構	規模	方向	方位	廂 m(尺)
建物4	2×2	南北	N3° W	
門跡14	1×2	南北	N0° E	
建物3	2×4以上	南北	N2° W	
建物5	1×2	南北	N2° E	
建物6	2×3	南北	N1° W	
建物9	?×1	東西	N0° W	
建物1	2×4	南北	N3° E	西：1×4 東：1×4
建物2	2×4以上	東西	N4° E	西：1×2
建物7	2×4	東西	N9° E	
建物8	2×1以上	南北	N8° W	
建物13	?×3	南北	N7° E	

(4) 邸宅遺構と条坊遺構についての考察

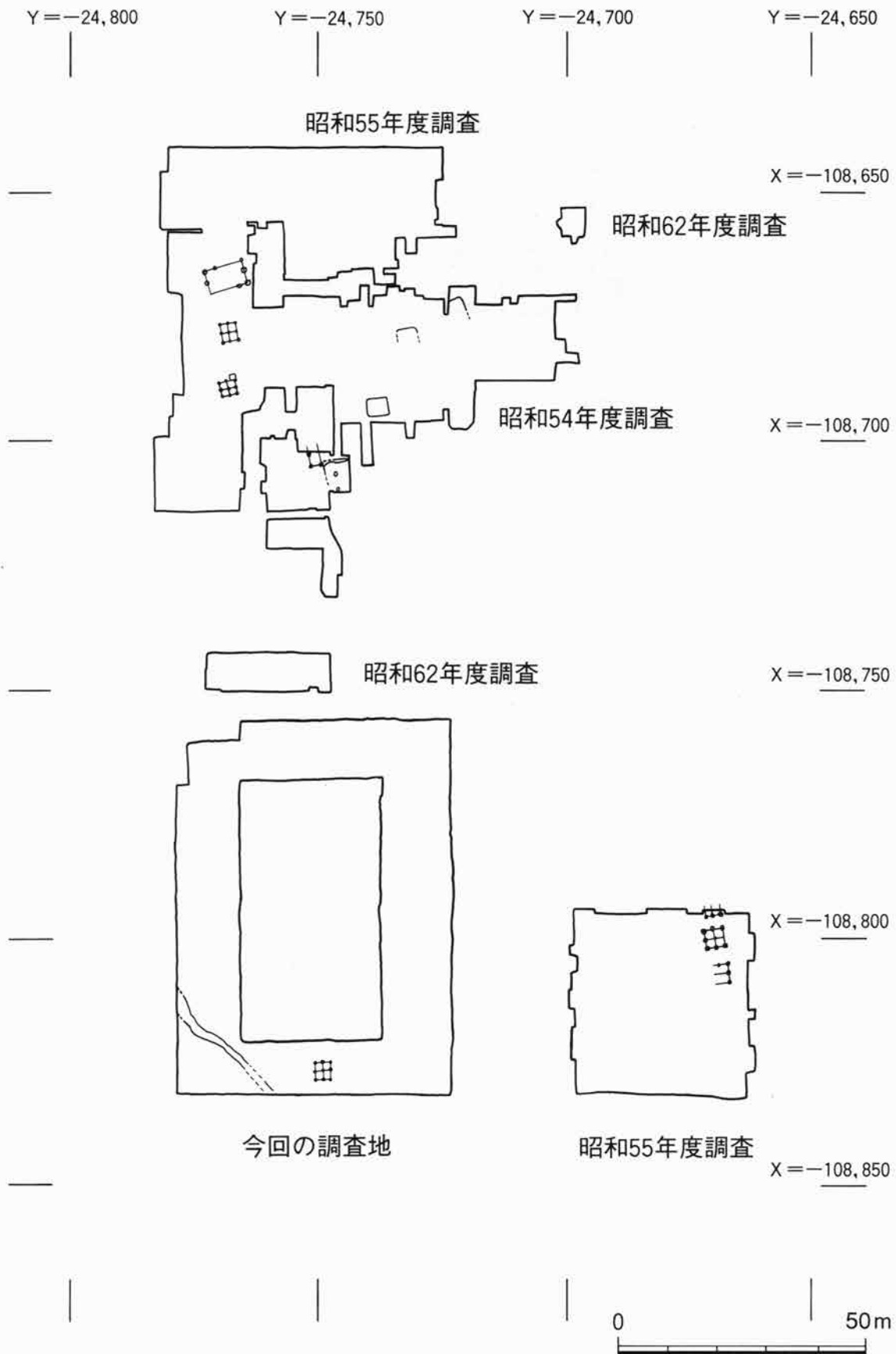
検出した遺構を、地区ごと・時期ごとに分けて、今回の調査で検出した遺構を条坊復原モデルに照らし合わせ整理し検討したい(第4表)。

九町で検出した門跡SB14は、位置的には北側にある邸宅の中心建物跡の中軸の南延長線上にあり、九町(一町分)の南限にあたる。また、柱穴の規模が邸宅の中心建物と同一であることや切り合っている土坑SK99065と溝SD99070の出土遺物の時期などから、邸宅と同時期に存続していた南門であると考えられる。また、溝SD99064・土

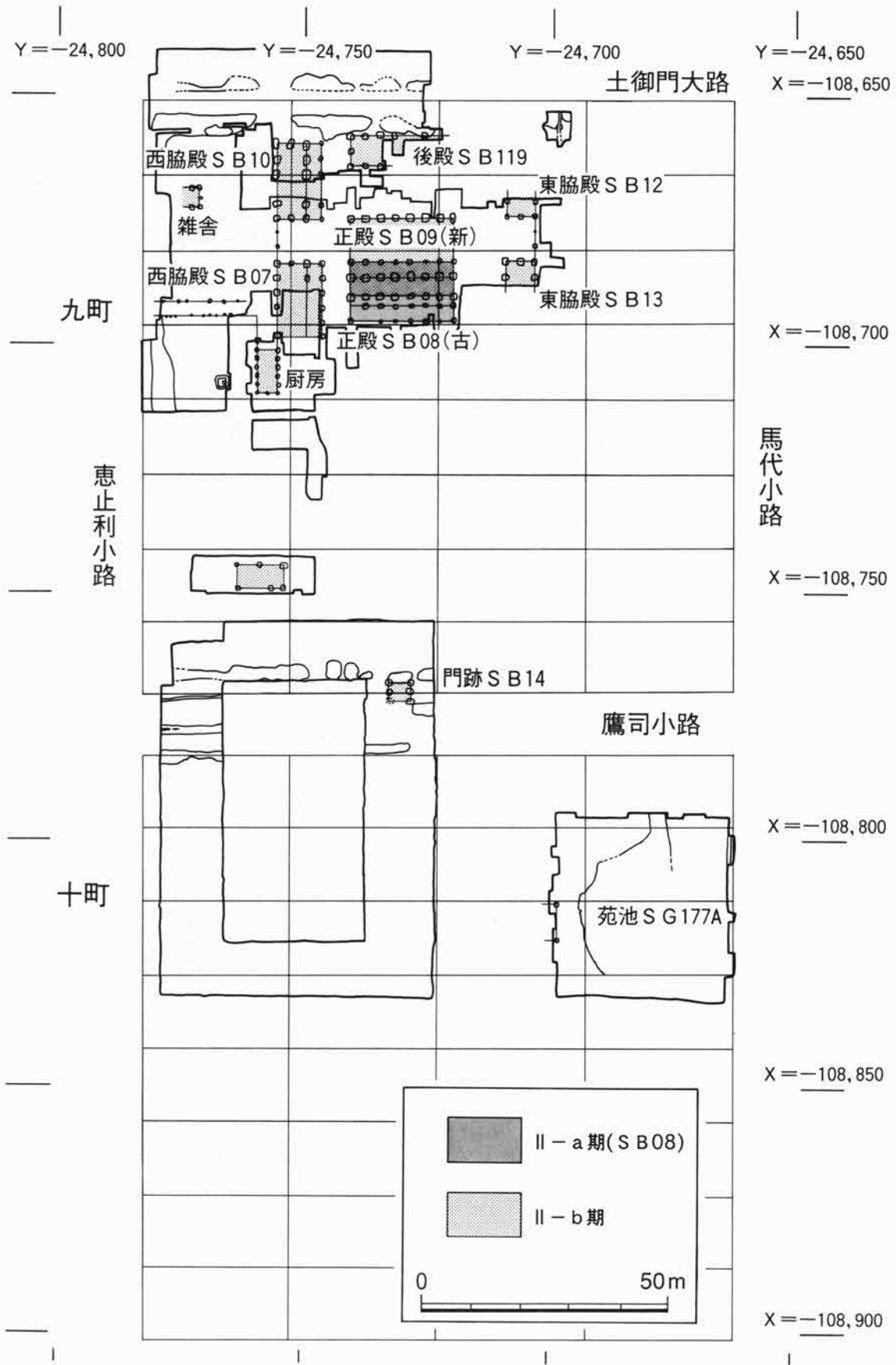
坑SK99066・溝SD99010・土坑SK99019・土坑SK99085の位置は、条坊復原モデルに照らし合わせると九町の南側築地の内側溝にあたる。これらの遺構は、邸宅解体時に築地の内側溝を投棄用にあらたに掘り広げたものと判断した。また、土坑なども投棄時は溝SD99010のような溝であったが、後世の削平によって土坑状に残ったものと考えられる。これらの遺構は、邸宅に関連するもので時期分けすると、Ⅱ-b期の遺構であると考えられる。九町の邸宅を囲う築地については、溝SD99010などの一連の溝と溝SD98026の間にある幅約3.5mの平坦地を九町の南側築地と想定する。築地自体は削平されており、確認できなかったが、北側築地の検出状況と似ているため築地である可能性がある。

鷹司小路に関連する遺構として、溝SD99070は位置的に鷹司小路の北側溝が想定される。この溝が門跡の柱穴を一部破壊していることや出土遺物などから、のちに溝幅を拡張したものと判断できる。重なった状態で検出した溝SD98012・98013は、平安時代前期(9世紀前半)に属する遺物を含んだ遺構としか判断できないが、位置的には鷹司小路の南側溝にあたることから、側溝であった可能性も考えておきたい。平安京の条坊の小路幅は4丈、路面幅は2丈3尺(約6.864m)とされる。今回検出した溝SD98026と98012・98013の間隔が約5.5mと小路の路面幅より幅が若干狭い。しかしながら、九町の築地との位置関係からも、溝SD98026と98012・98013の間隔に鷹司小路の路面が想定できる。今回の調査トレンチ内では、路面を確認することはできず、おそらく後世の削平によってすでに路面は削られていると考える。

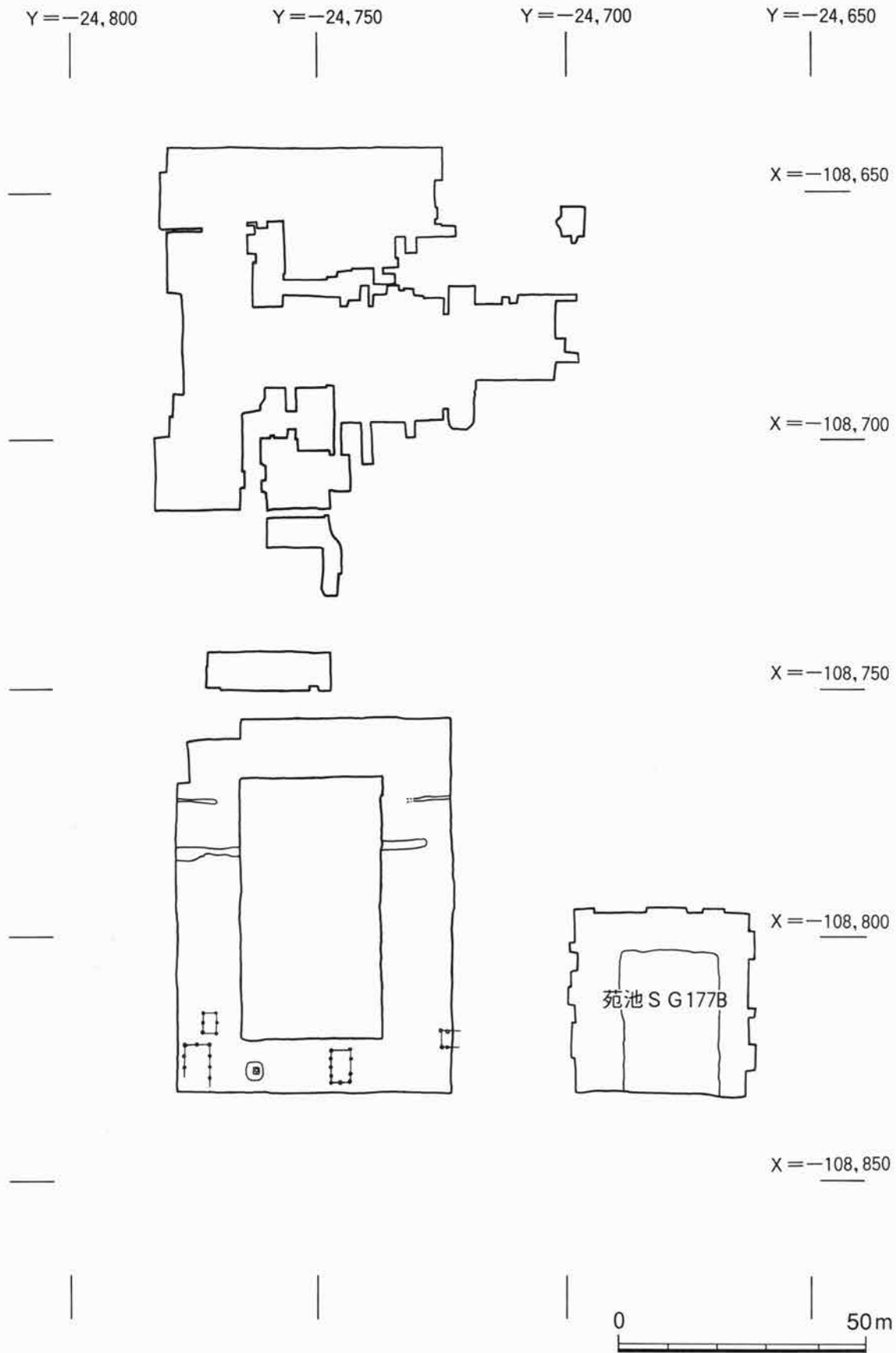
十町で検出した溝SD98014は、条坊では十町の北側築地の内側溝の位置にあたり、西側で検出した溝SD98014とつながると思われる。鷹司小路の南側溝に想定している溝SD98012・98013と溝SD98014の間に幅約3.5mの平坦地が存在することから、十町にも築地が存在していたと考える。築地の版築などの地業痕跡などは確認できなかった。また、築かれた時期については十町にⅡ-a・b期に属する明確な遺構が確認できないので、九町の築地の時期と同時期であるかは不明である。しかし、十町にⅡ-c期の建物などの遺構が集中することなどを考えると、築地の存続時期に疑問が残る。現時点では、検討材料が少なく解明することは困難であると思わ



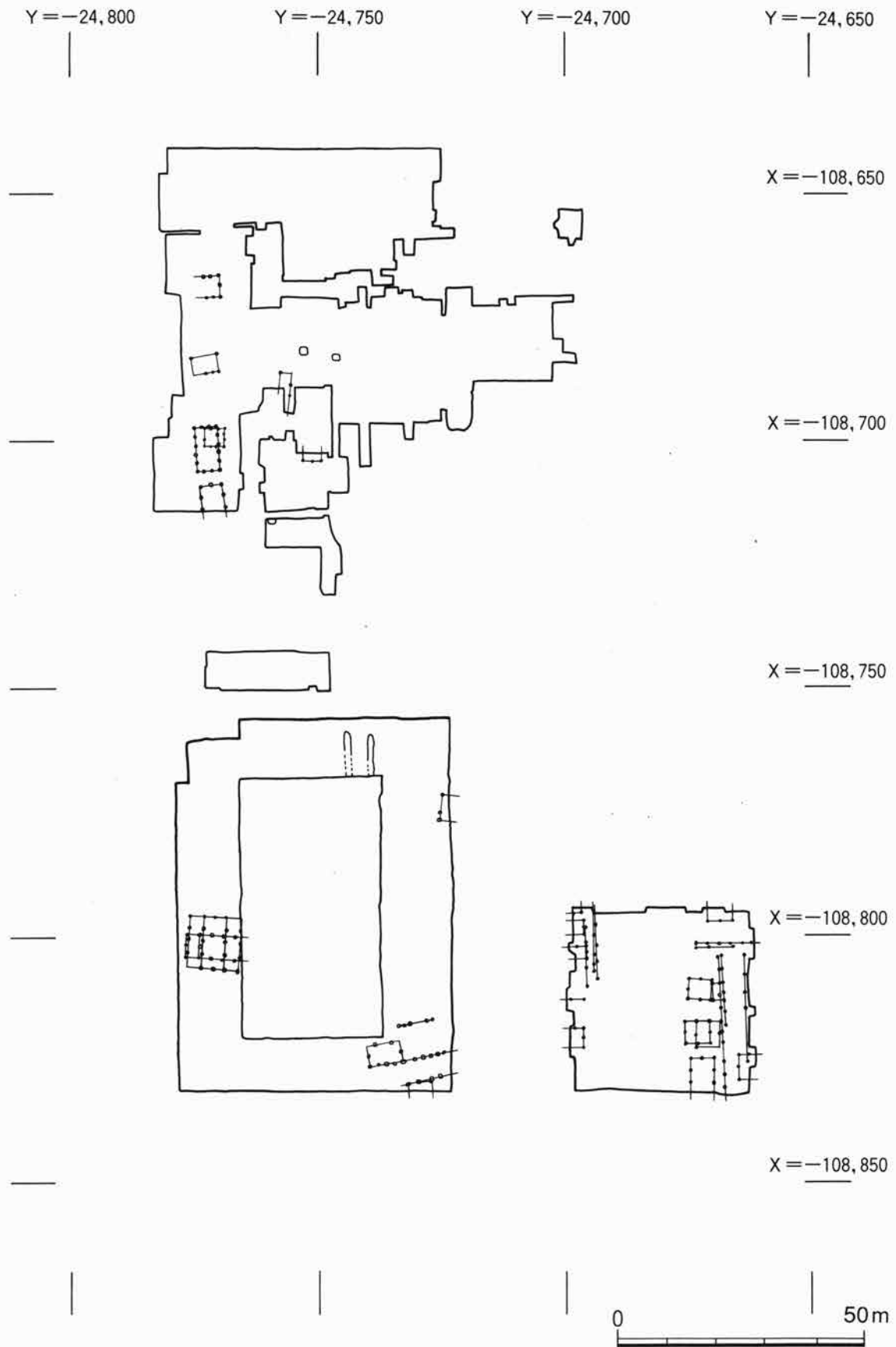
第43図 九・十町I期の遺構(S=1/1,200)



第44図 九・十町 II - a ・ b 期の遺構 (S=1/1,200)



第45図 九・十町Ⅱ-c期の遺構(S=1/1,200)



第46図 九・十町Ⅲ期の遺構(S=1/1,200)



れる。

以上、今回の調査で検出した遺構を、条坊復原モデルに照らし合わせながら、条坊の想定位置について検討した。また、検出した遺構を出土遺物や建物方向などから検討し、時期ごとに分けた。若干の問題点はあるが、九町の邸宅建物の配置や九・十町の時期ごとの遺構の変遷を追うことができた(第43～46図)。

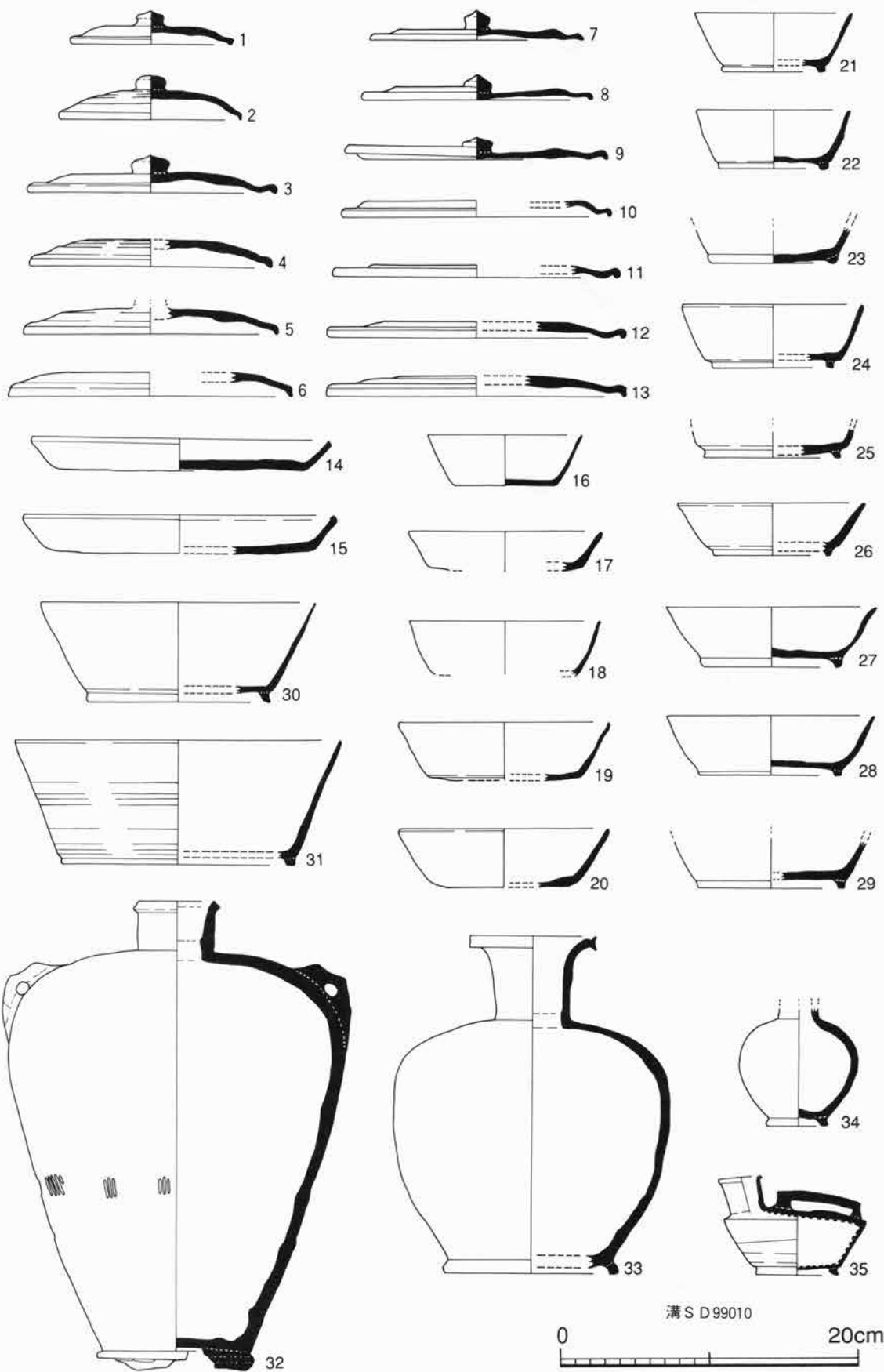
## 7. 出土遺物

### (1) 土器類

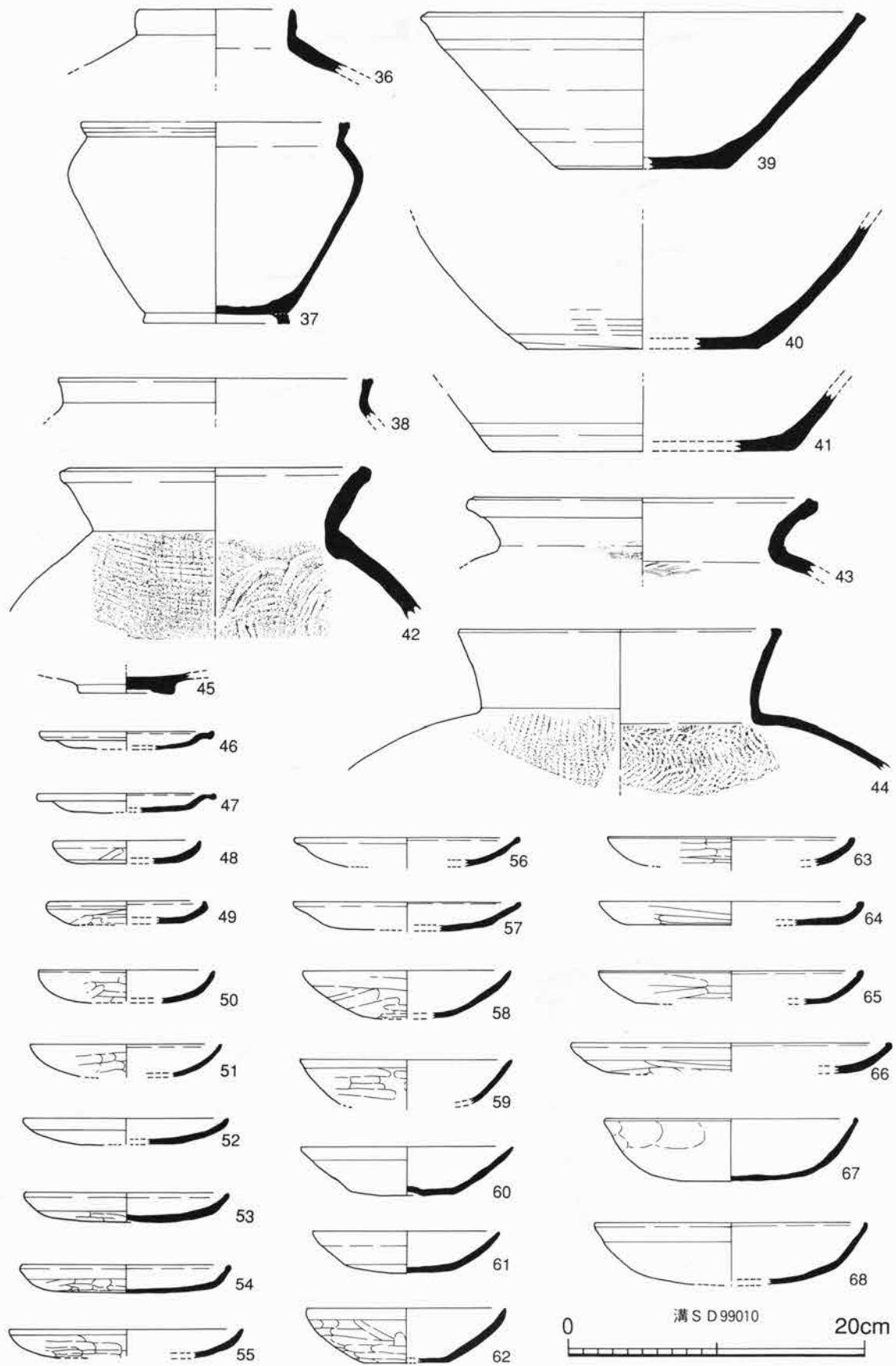
種類としては、須恵器・土師器・黒色土器・施釉陶磁器・製塩土器などが出土した。<sup>(注7・8)</sup> 黒色土器・製塩土器・青磁・白磁は少量であった。今回の調査で、出土した主要な遺構・包含層から出土した遺物について、遺構ごとに報告する(第47～53図)。

今回の調査地の九町内で検出した溝 S D99010からは、多量の遺物が出土した(第47～49図1～95)。1～13は須恵器の蓋で、8世紀末～9世紀中頃に属する土器と思われる。14・15は須恵器の皿である。16～20は須恵器の杯で、底部はヘラ切りによる切り離しである。21～29は高台をもつ須恵器の杯Bである。30・31は須恵器の大型の杯である。32は須恵器の双耳壺で、底部には焼成前に他の土器片が付着している。外面の色調は暗緑灰色である。33は須恵器の壺で、口径8.4cm・器高23.6cm・高台径11.8cmを測る。34は須恵器の小型壺で口縁が欠損している。35は須恵器の小型の平瓶で、底部中央に孔がある。36は須恵器の短頸壺で口縁部のみである。37は須恵器の鉢である。また、井戸 S E98058埋土上層から出土した破片と接合することができた。38は須恵器の鉢で口縁部のみである。39～41は須恵器の大型の鉢である。42～44は須恵器の甕で、外面格子目タタキ、内面は青海波文が認められる。45は緑釉陶器の椀の底部である。46・47は土師器の「て」の字状の皿で、上層から出土した。時期は11世紀初め頃のものであろう。48は土師器の皿で、時期は11世紀後半にあたる。49は土師器の皿で、時期は11世紀後半にあたる。50～57は土師器の皿である。58～62は土師器の椀である。65～66は口径が広く器高が低い土師器の皿である。67・68は土師器の杯である。69～72は土師器の皿の底部と思われる。73～75は埋土の下層部から出土した土師器の椀である。76～81は土師器の甕で、口径が17cm前後を測る。82～85は大型の土師器の甕である。86は土師器の壺Eで、外面にミガキの痕跡がある。87は土師器の高杯の杯部である。88～95は製塩土器で、形にはバリエーションがみられる。96～98は土坑 S K99019から出土した(第50図)。96は緑釉陶器の椀で、底部糸切りである。97は須恵器の杯Bの底部である。98は須恵器の壺の底部である。99～101は溝 S D99064から出土した(第50図)。99は須恵器の蓋で9世紀中頃のものと思われる。100は須恵器の杯Bで9世紀前半のものと思われる。101は須恵器の杯と思われる。門跡 S B14の北側に隣接する土坑 S K99065から102～113の土器が出土した(第50図)。102は須恵器の蓋である。103は須恵器の杯である。104は須恵器の壺の口縁部である。105・106は灰釉陶器の皿である。106は軒丸瓦220の直下から出土した。107・108は土師器の皿である。109は土師器で高台付きの底部で杯と思われる。110は土師器の鉢であるが小片であっ

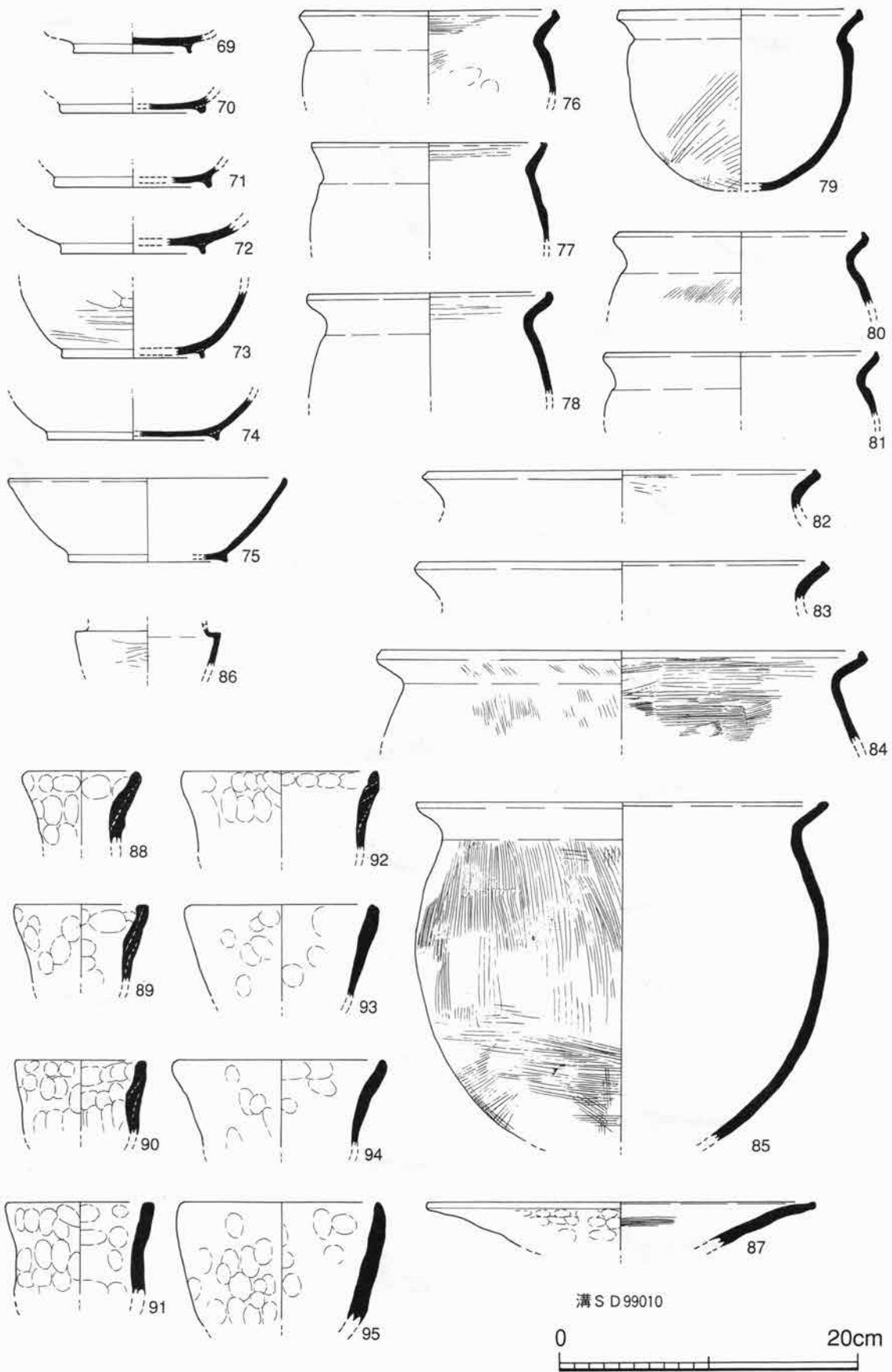
た。111は土師器の甕で口縁部から頸部にかけての破片である。112は灰釉陶器の椀である。溝の上層部から出土した。113は黒色土器の甕であるが、内外面ともに磨滅しており調整は不明である。114～117は溝S D99070から出土した(第50図)。114～116は須恵器の蓋で、9世紀中頃のものと思われる。117は土師器の皿である。118～131は調査地内を斜行している溝S D98117から出土した(第50図)。溝の底部からは8世紀代の遺物が出土した。118～120は須恵器の杯Bである。121は須恵器の蓋である。122は須恵器の杯で、底部は回転ヘラ切りである。123～125は須恵器の杯である。126は須恵器の播鉢で、底部の内外面には小さな穴があげられている。127は須恵器の杯である。128は須恵器の甕の口縁部である。129・130は土師器の杯である。130は底部に指頭圧痕が残る。131は土師器の皿である。132～135は溝S D98012から出土した(第51図)。132は緑釉陶器で底部は削り出し高台である。133は緑釉陶器で132の高台とは形状が異なる。134は緑釉陶器の椀で底部はヘラ切りである。135は灰釉陶器の椀と思われる。136～140は溝S D98013から出土した(第51図)。136は土師器の皿である。137は土師器の壺と思われる。138・139は土師器の甕である。140は黒色土器の鉢で、内面のみ黒色(A類)で底部にミガキがみられる。141～155は溝S D98014から出土した土器で、多量の土器片が出土した(第51図)。141は須恵器の蓋である。142は須恵器の杯、143は須恵器の杯Bである。144は灰釉陶器と思われる。内面が施釉され、底部外面にはヘラ書きの文字がある。文字は「示」または、「不」とと思われる。145は緑釉陶器の大型の椀である。内外面に施釉されている。146は須恵質の注ぎ口部分と思われるが、器種は不明である。147は溝の上層から出土した土師器の皿である。148も土師器の皿である。149・150は土師器の甕の口縁部である。151は土師器の杯であるが、内外面に赤色の顔料が塗られている。152は土師器で口縁部分の小片で器種は不明である。153は土師器の甕である。154・155は黒色土器の椀で、154はA類、155はB類であるが、磨滅のため調整は不明である。156～194は井戸S E 98058から出土した土器である(第52・53図)。156は井戸枠内から出土した須恵器の皿である。口縁部のロクロ回転のナデが明瞭で、底部に糸切り痕を残す扁平なものである。また、内面には硯として再利用された痕跡がある。157は井戸枠抜き取り後の埋土から出土した須恵器の壺の底部である。158は井戸枠内出土の須恵器の杯である。159は円形井戸枠出土の須恵器の蓋である。160・161は須恵器の杯Bの高台部分である。162は須恵器の壺の底部である。163は須恵器の壺の口縁部である。164・165は抜き取り後の埋土から出土した須恵器の甕である。166は土師器の甕で外面がハケメ、内面はケズリが残る。167・168は抜き取り後の埋土から出土した土師器の皿である。169・170は井戸枠内から出土した土師器の皿である。171～173は井戸枠内出土の土師器の杯である。174は緑釉陶器の椀の口縁部である。175は緑釉陶器の高台部分で、張り付け高台である。176は灰釉陶器の椀の高台部分である。177・178は緑釉陶器の椀の底部である。178は円形井戸枠内から出土し、近江系のものと思われる。179は緑釉陶器の椀の高台部分である。これも近江系と思われる。180は緑釉陶器の皿である。181は灰釉陶器の高台部分である。182～184は緑釉陶器の高台部分である。185・186は青磁の椀の高台部分と思われる。185は井戸枠内から出土した。187は裏込め埋土から出土した灰釉陶器の短頸壺の口縁部である。188は備前焼の壺の高台部



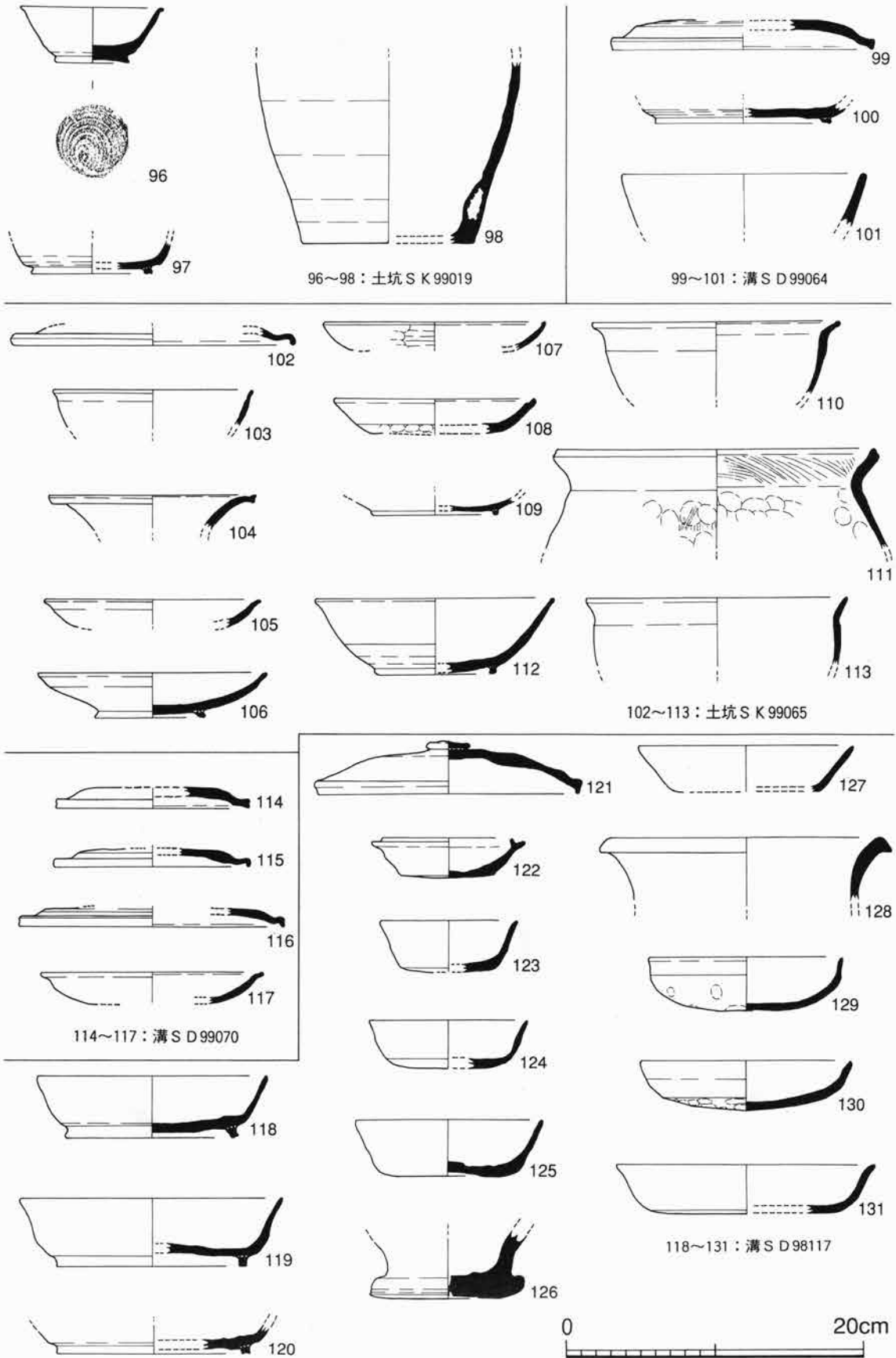
第47図 出土土器実測図(1)(S=1/4)



第48図 出土土器実測図(2) (S=1/4)

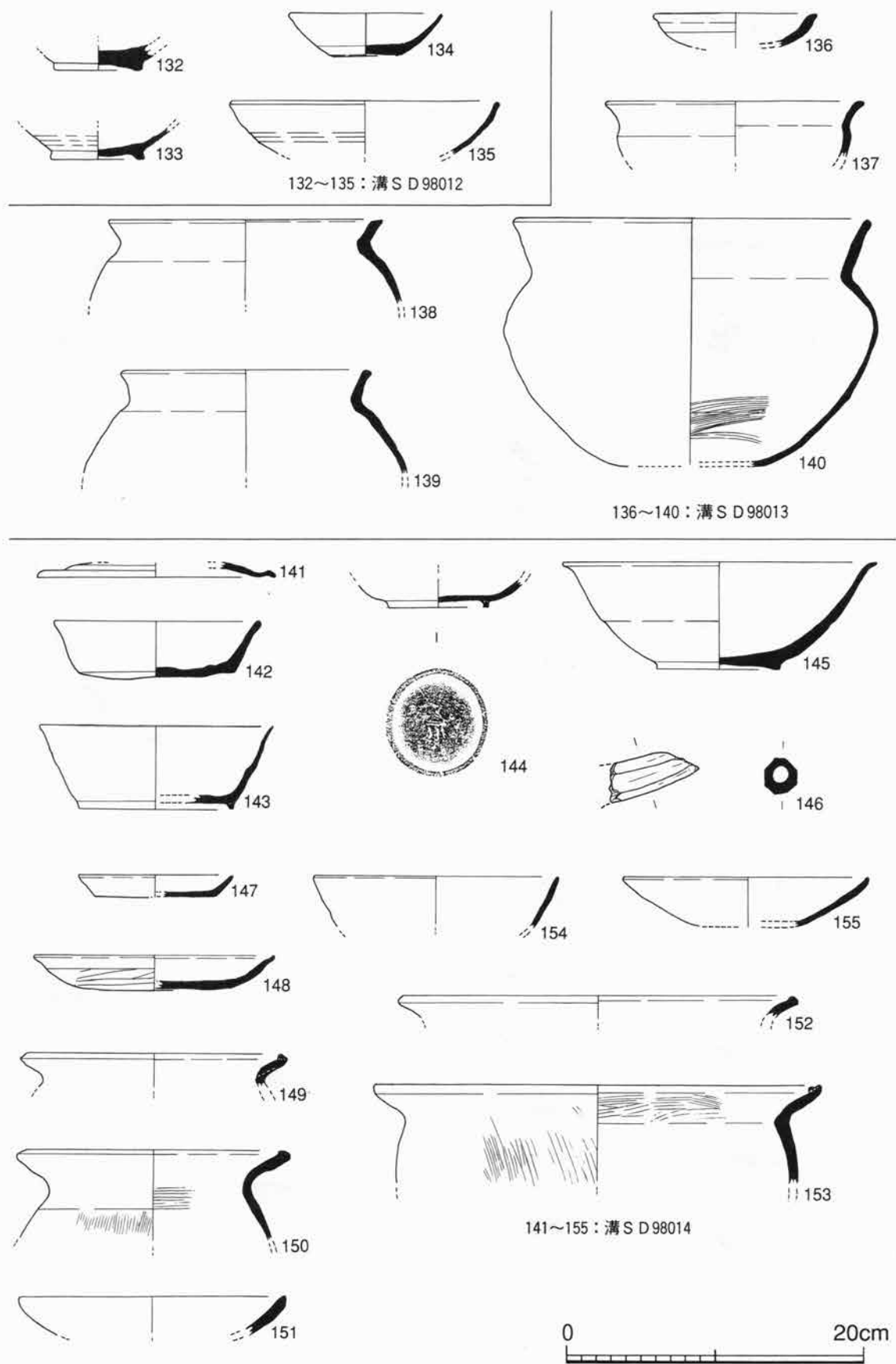


第49図 出土土器実測図(3)(S=1/4)

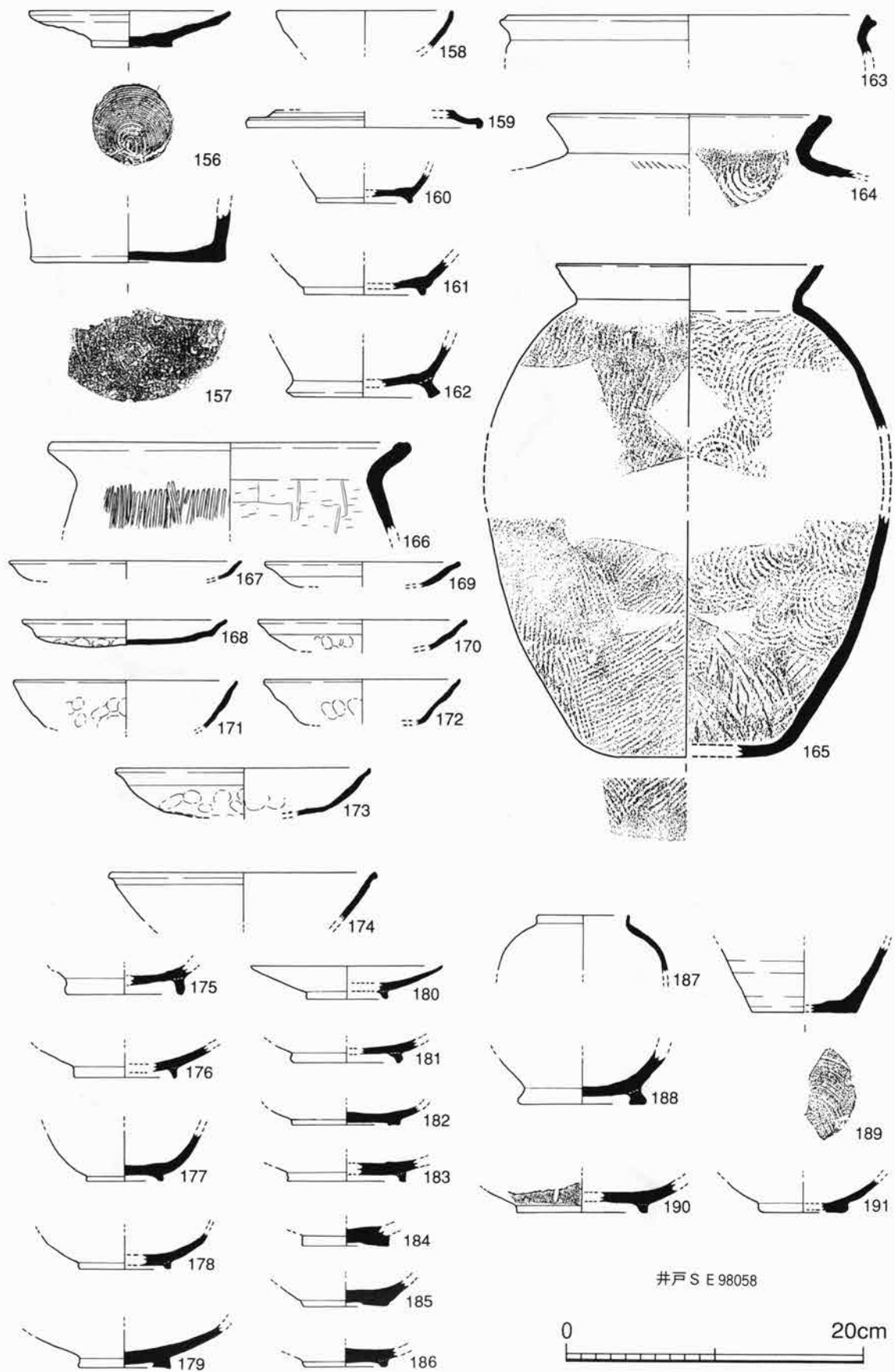


第50図 出土土器実測図(4)(S=1/4)

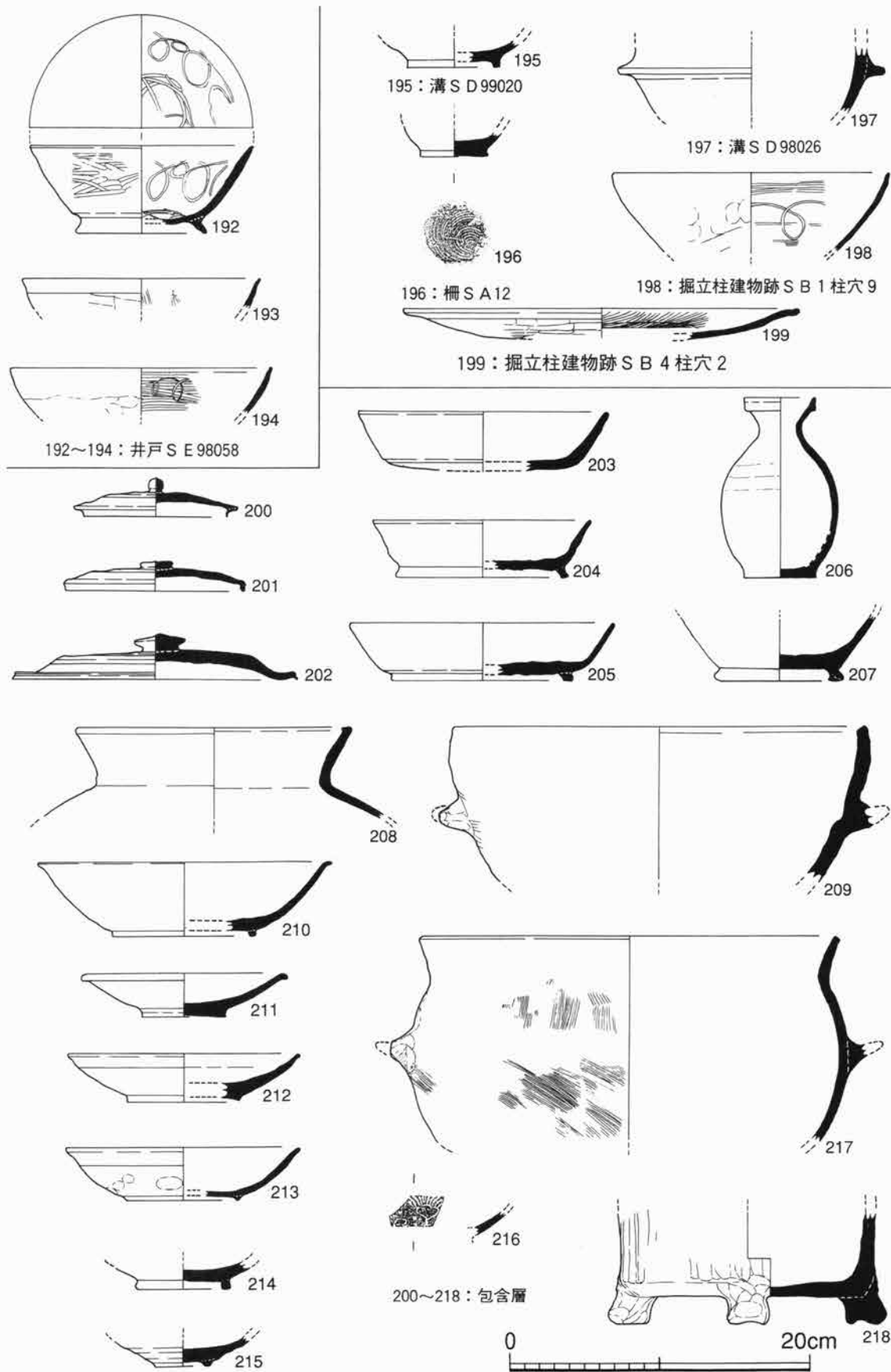




第51図 出土土器実測図(5)(S=1/4)



第52図 出土土器実測図(6) (S=1/4)



第53図 出土土器実測図(7)(S=1/4)

分である。189は灰釉陶器の壺の底部である。190は緑釉陶器の椀の底部で、外面に模様の一部がある。191は抜き取り後埋土から出土した白磁の椀の底部である。192は井戸枠内下層出土の黒色土器A類の椀である。内面には暗文が施されている。193・194も井戸枠内下層出土の黒色土器B類である。195は溝S D99020から出土した緑釉陶器の高台部分である。196は柵S A12の柱穴から出土した緑釉陶器の底部で糸切り痕がある。197は溝S D98026から出土した土師質の羽釜である。198は掘立柱建物跡S B 1の柱穴9から出土した黒色土器B類で内面に暗文がある。199は掘立柱建物跡S B 7の柱穴から出土した土師器の高杯の杯部分である。200～218は平安期の遺構面上層にあった遺物包含層から出土した(第53図)。200～202は須恵器の蓋である。203～205は須恵器の杯である。206は須恵器の小型壺である。207は須恵器の壺の高台部分である。208は須恵器の甕。209は須恵質の把手付きの鉢である。210は灰釉陶器の椀である。211・212は緑釉陶器の皿である。214は青磁の椀の高台部分である。215は緑釉陶器と思われる椀の高台部分である。216は緑釉陶器の椀と思われる小片で、内面に陰刻花文らしき文様がみられる。217は土師器の把手付きの鉢である。218は土師質の脚付きの火鉢と思われる。

(石尾政信・村田和弘)

## (2)瓦類

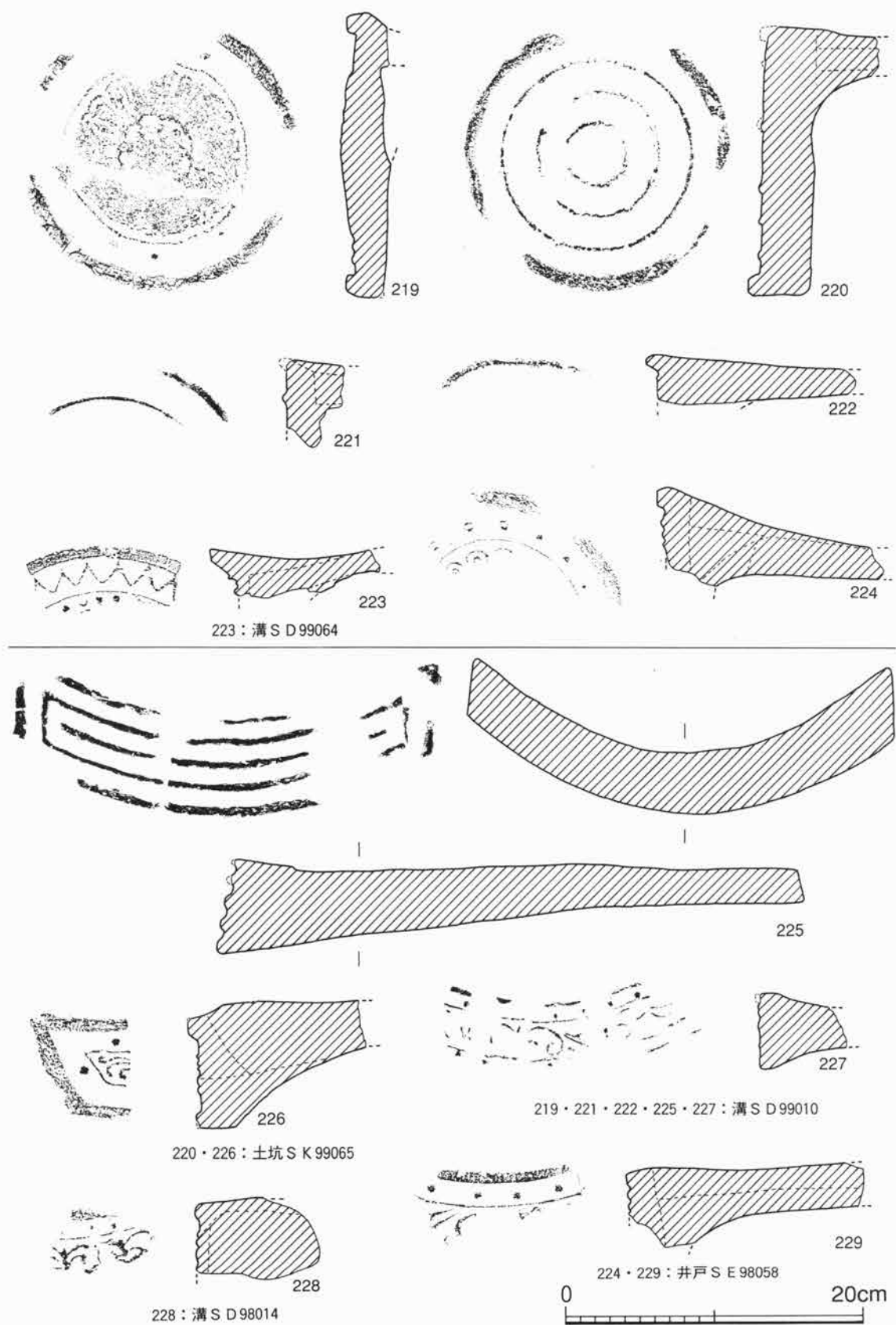
軒丸・軒平瓦の出土量は少なく、平瓦の破片が大半を占める。ここでは、主要な遺構からの瓦や残りの良い瓦について報告する(第54～61図)。<sup>(注9～13)</sup>

### ①軒丸瓦(第54図219～224)

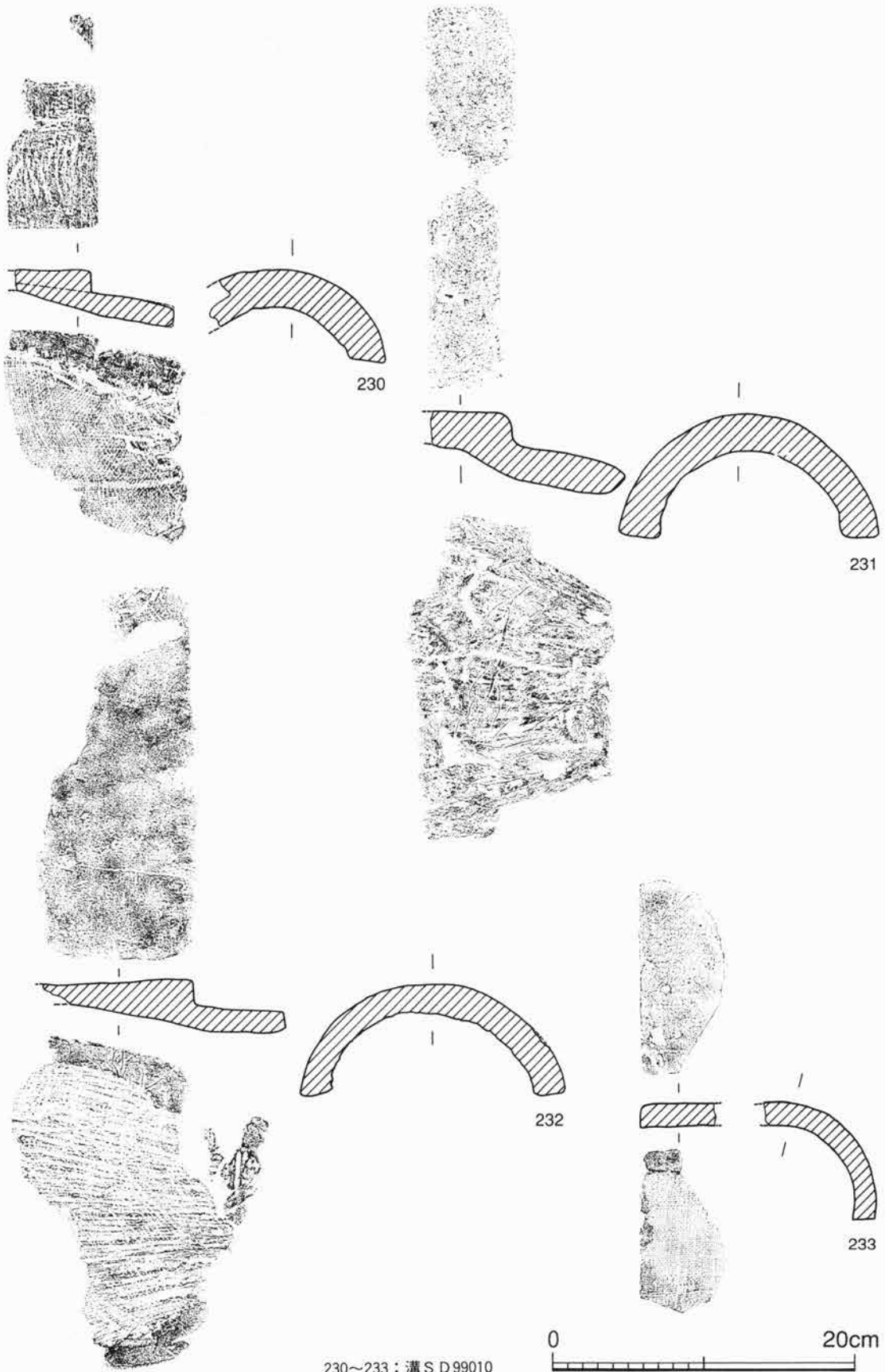
219は溝S D99010出土の複弁八葉蓮華文で、京都市西賀茂産の瓦と思われる。文様構成は1＋8の蓮子を配し、中房から花卉にかけてやや膨らみをもつ。磨滅が激しく詳細は不明である。220は土坑S K99065出土の難波宮6016形式の瓦と思われる。重圏文の瓦当の直径は17.9cmを測る。出土状況は土坑底部に瓦当面を上向きで、その直下からは灰釉陶器皿(第50図106)が出土した。221・222は溝S D99010出土の重圏文の難波宮の瓦である。しかし、小片のため形式については不明である。223は溝S D98014出土の幅0.8cmの周縁内に鋸歯文を配する瓦で、平城宮式の軒丸瓦と思われる。224は井戸S E98058から出土した。中心部の文様については欠損のため不明であるが、おそらくは単弁十六葉で大阪市吹田市の岸部産の瓦であろう。

### ②軒平瓦(第54図225～229)

225は溝S D99010出土の軒平瓦で、並行する上下2本の弧線の両端を結び、その内部にもう1本の弧線を配する重弧文で、難波宮6574CまたはD形式に属するものと考えられる。この瓦は、破片で出土したがほぼ完全な形に復原できた。226は土坑S K99065から出土し、瓦当の左側の端部のみであるが、文様については珠文を一部欠損しているが明確に残っている。西賀茂産であると思われる。227は溝S D99010出土の瓦で、平城宮6691-A形式と思われる。一部に唐草が強く巻き込んでいる文様がみられる。228は溝S D98014から出土した。破片のため文様構成は不明であるが、唐草が細かく枝分かれしている文様がみられる。西賀茂産の瓦と思われる。229は井戸S E98058出土で、瓦当の文様は上半部がわずかに残存している。おそらく岸部産の瓦であろう。



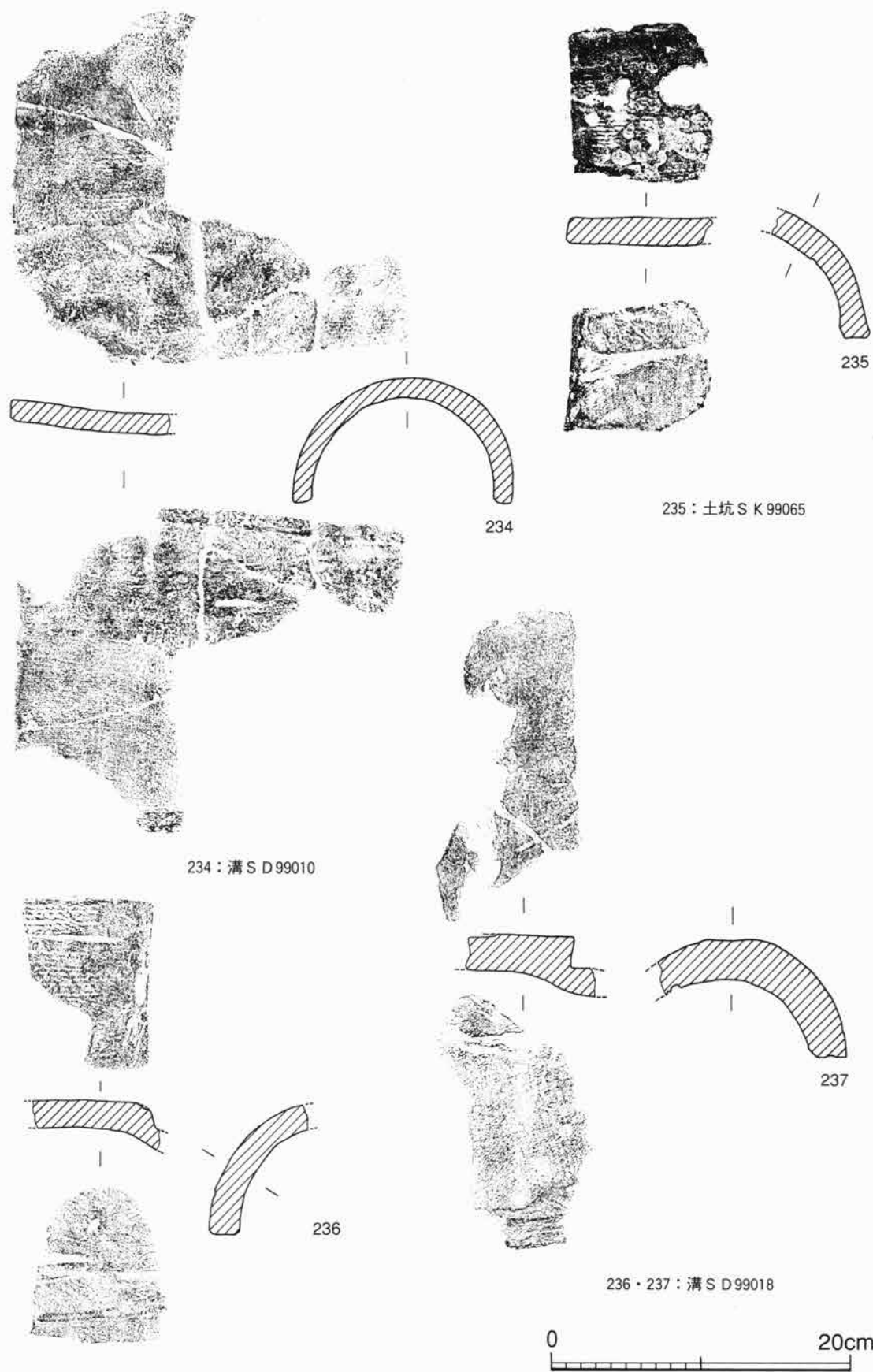
第54図 出土瓦実測図(1)(S=1/4)



230~233 : 溝 S D 99010

第55図 出土瓦実測図(2) (S=1/4)



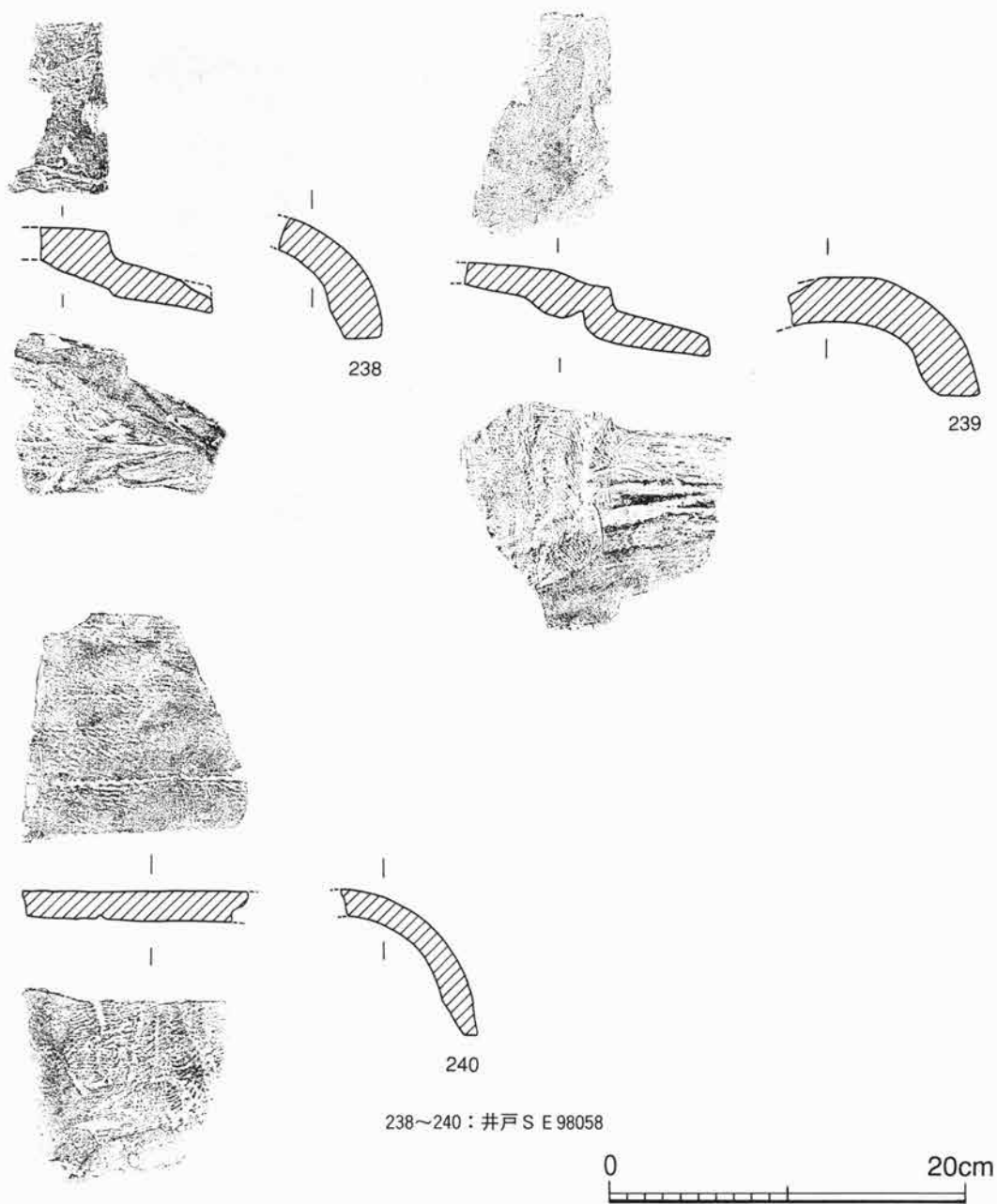


234 : 溝 S D 99010

235 : 土坑 S K 99065

236・237 : 溝 S D 99018

第56図 出土瓦実測図(3) (S=1/4)



238~240：井戸 S E 98058

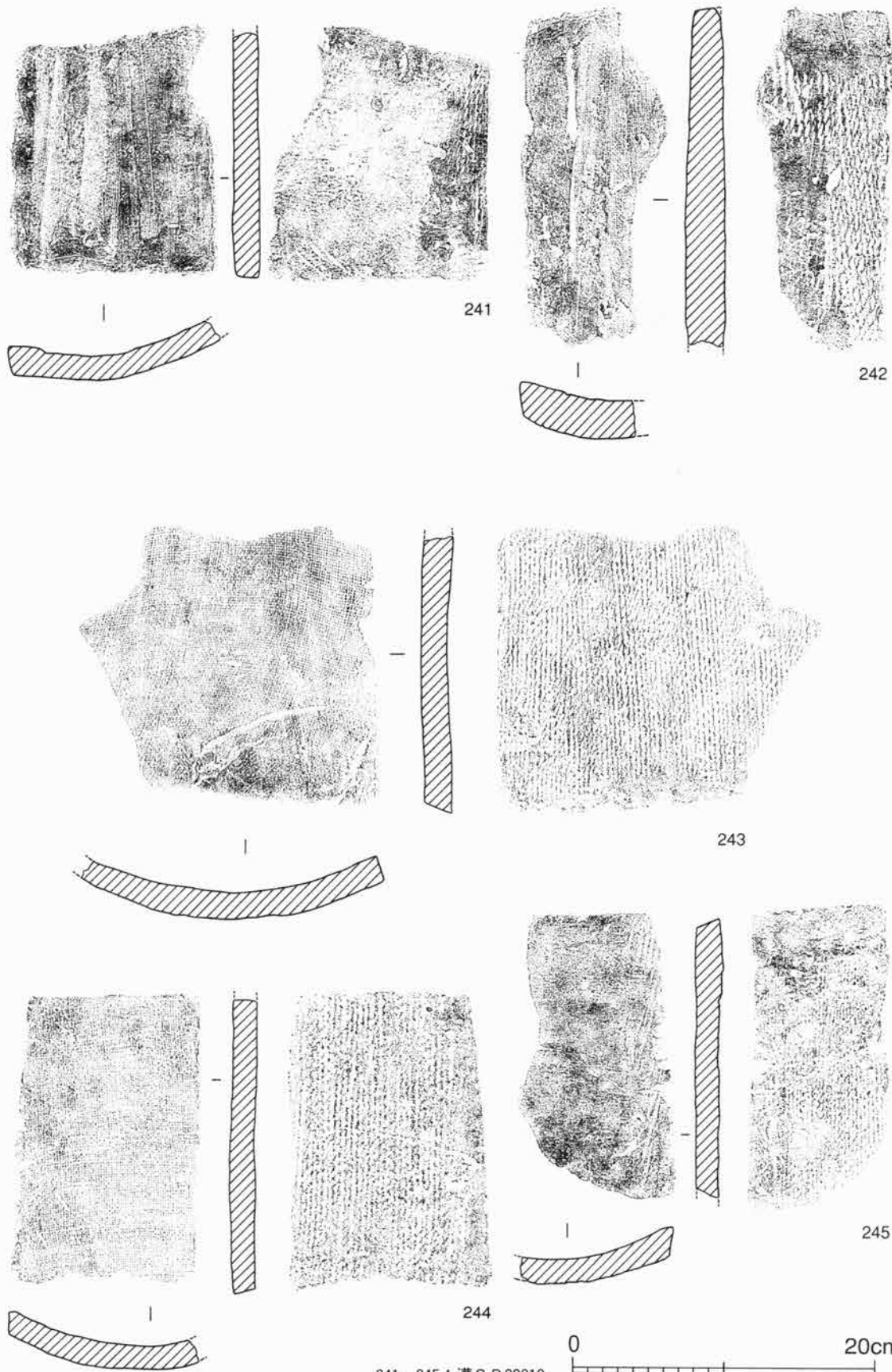
第57図 出土瓦実測図(4) (S=1/4)

③丸瓦(第55~57図230~240)

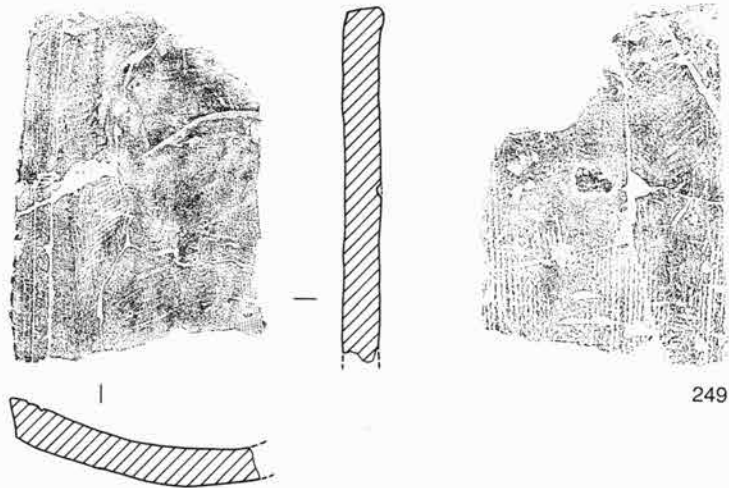
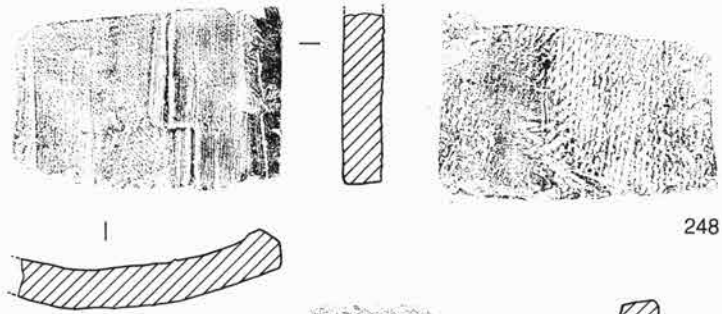
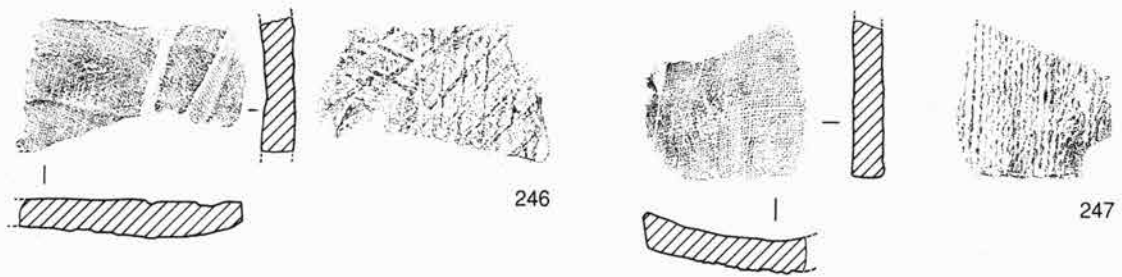
230~234は溝 S D 99010から出土した丸瓦である。凸面はナデ、凹面には布目が残っている。231は凹面には粘土の絞り痕跡がある。234は凸面には部分的に縄目のタタキがみられ、凹面には布目の痕跡がある。235は土坑 S K 99065からの出土である。236・237は溝 S D 99018から出土した。凸面は縄目のタタキが部分的に残っており、凹面には布目の痕跡がある。238~240は井戸 S E 98058から出土した。調整は凸面には縄目のタタキ、凹面には布目痕跡がある。239は井戸 S E 98058出土である。凸面は縄目のタタキ、凹面には布目の痕跡がある。

④平瓦(第58~61図241~262)

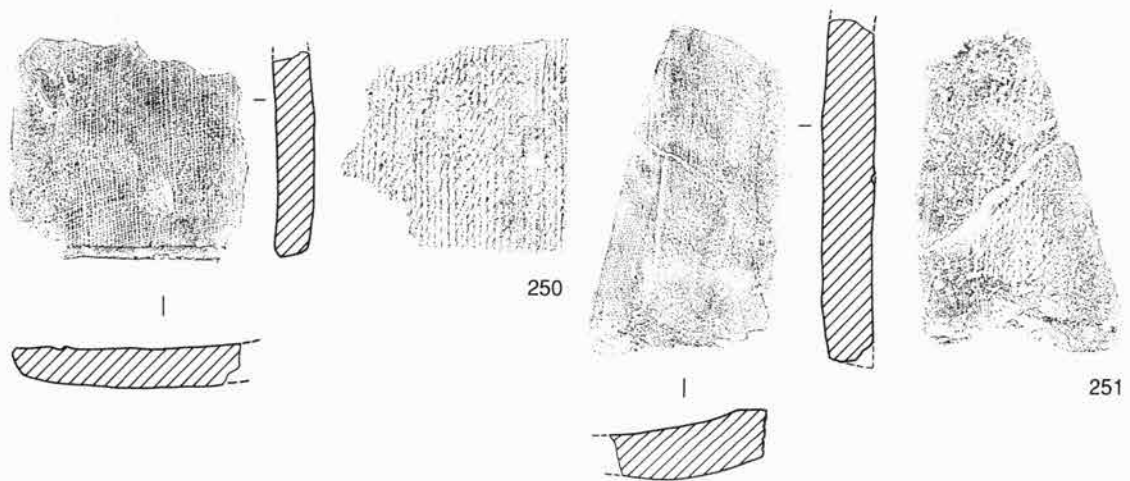
241~249は溝 S D 99010から出土した平瓦である。凹面には布目痕跡、凸面には一部に縄目の



第58図 出土瓦実測図(5)(S=1/4)



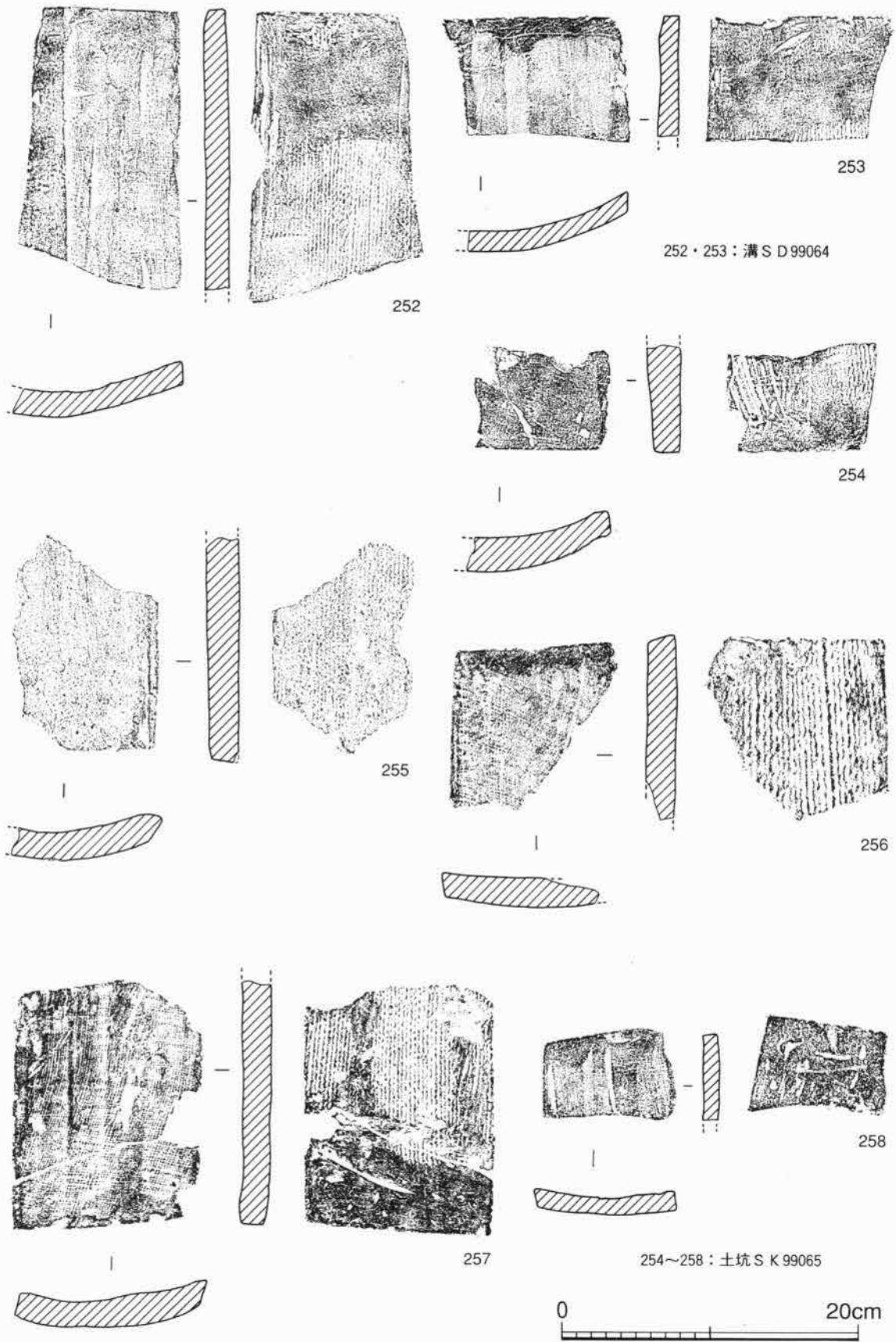
246~249 : 溝 S D 99010



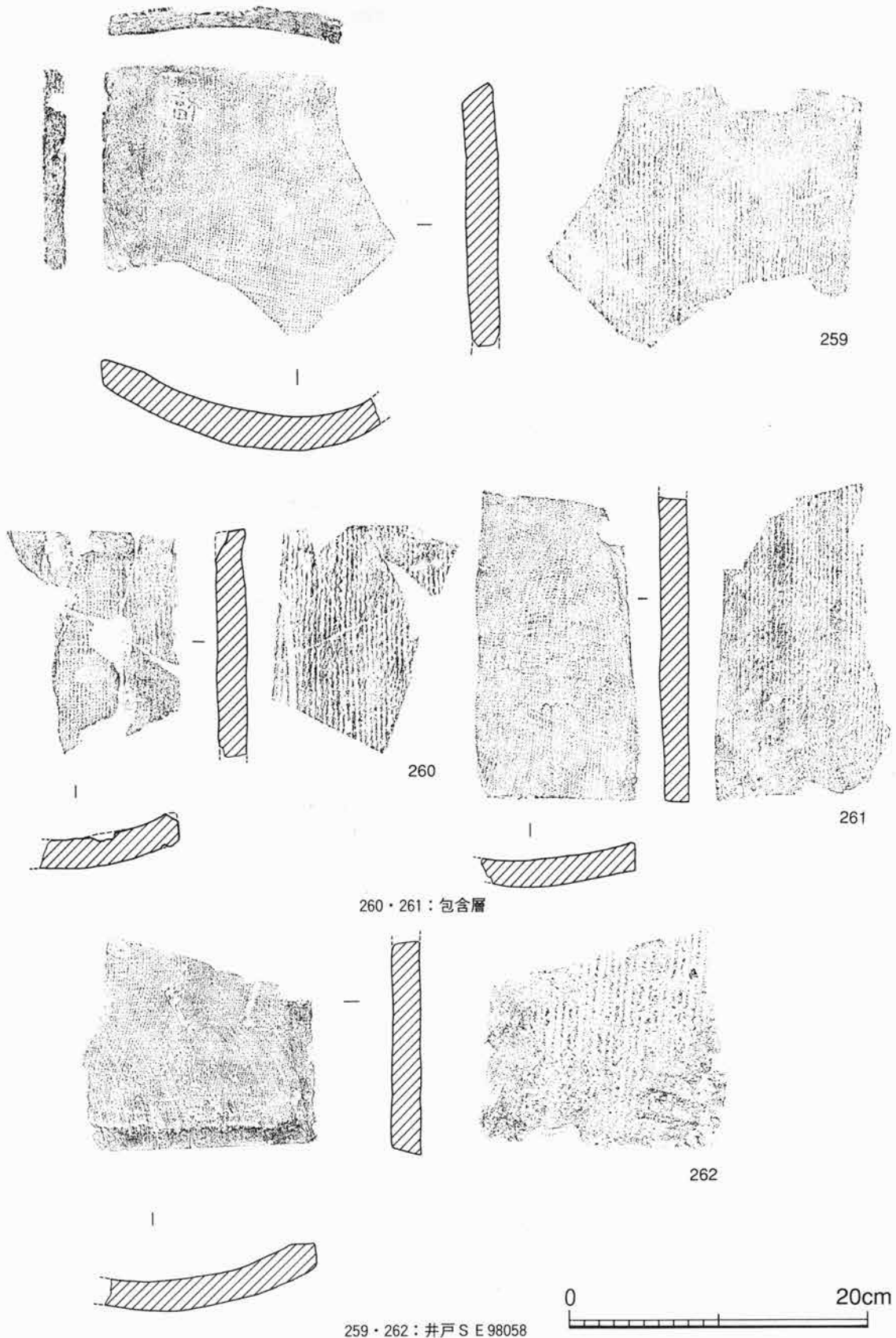
250~251 : 溝 S D 99018



第59図 出土瓦実測図(6) (S=1/4)



第60図 出土瓦実測図(7)(S=1/4)



第61図 出土瓦実測図(8) (S=1/4)

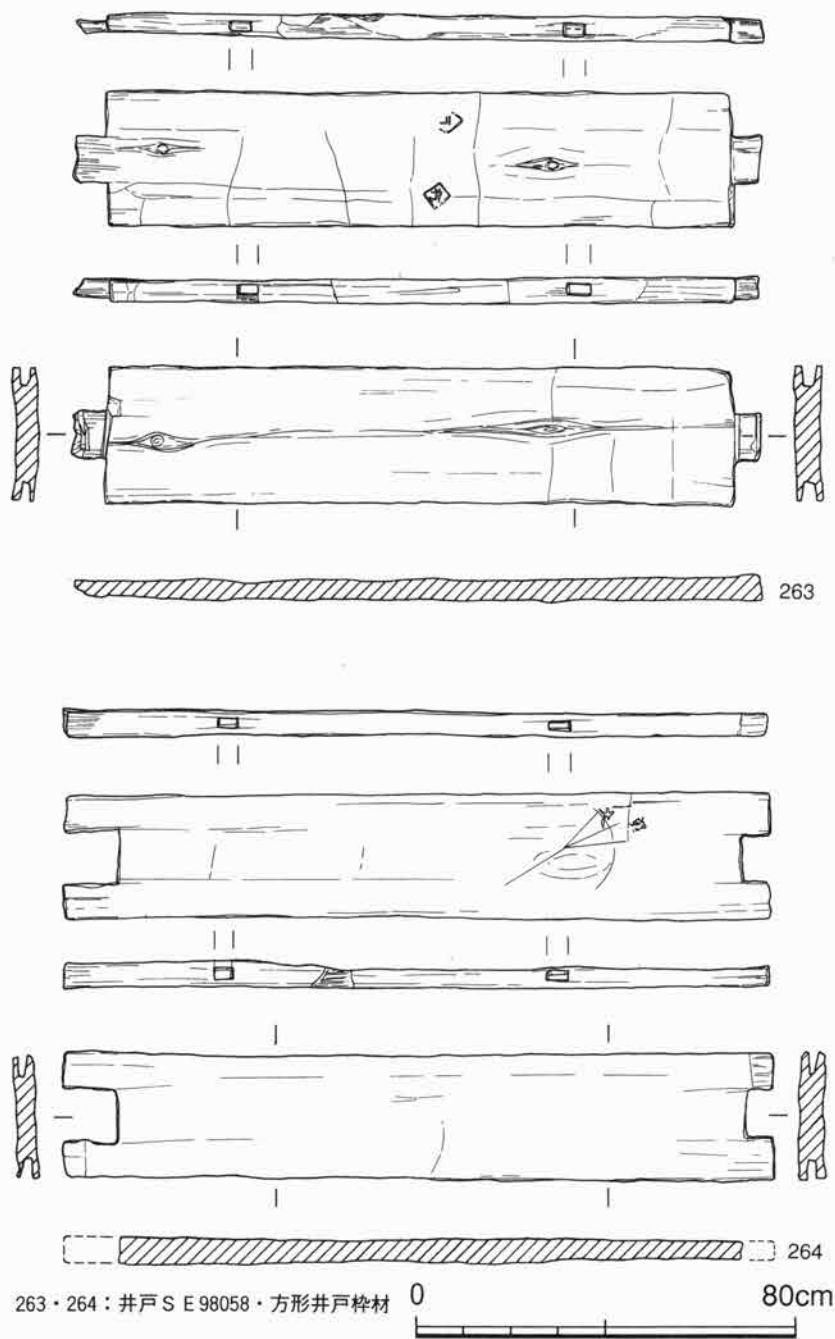


タタキが残る。また、246は溝S D99010から凹面には布目の痕跡、凸面には斜格子文のタタキが残る瓦も出土した。250・251は溝S D99018から出土した。凹面には布目痕跡、凸面には縄目のタタキが残る。252・253は溝S D99064から出土した。凹面には布目痕跡、凸面には縄目のタタキが残る。254～258は土坑S K99065から出土した。257は両端部が残っており、幅約13cmしかない。おそらく鬘斗瓦であろう。調整は凹面には布目痕跡が残り、凸面には縄目のタタキがある。258も鬘斗瓦と考えられる。幅は約9.5cmを測る。調整は凹面には布目痕跡が残り、凸面には縄目のタタキがある。259は井戸S E98058から出土した平瓦である。凹面側端部には、「福」の反文字が刻印されている。凹面の布目の上から刻印されており、焼成前に施されたようである。凸面には縄目のタタキがある。「福」は招福の意味や裕福、あるいは福(財)があるという意味が込められていると考えられている。260・261は西側トレンチの中央部の包含層から出土した。凹面には布目痕跡が残り、凸面には縄目のタタキがある。262は井戸S E98058から出土した。凹面には布目痕跡が残り、凸面には縄目のタタキがある。

(村田和弘・藤木句子)

### (3)木製品

遺物は井戸S E98058の井戸枳材と井戸内から出土したものである(第62・63図263～274)。井戸枳材は、方形枳の4段の井籠組の板材が16枚と組み合わせ部にはめられた太枳材24点、円形枳の枳材が23本と枳材23点と、埋土内から出土した枳材3点があった。方形枳の板材には、規格を揃えるためや太枳穴をあけるための墨で引かれた線や墨書・線刻文字などが描かれているものもある(第62図263・264)。木製品は、曲物桶・櫛・木簡・箸や不明木製品などが出土した(第63図265～273)。263は方形の井戸枳の南側二段目の枳材である。長さ144.3cm・幅28cm・厚さ5.4cmである。外面には、印が縦2列に押されている。この印は、打ち込んで凹面を形成している。印の形は菱形で、その中には文字らしきものがあるが判読できない。264は方形の井戸枳東側3段目の枳材である。長さ147.8cm・幅26cm・厚さ5.6cmで、外面には墨書・線刻文字などが描かれている。そのなかには、「大」らしき線刻文字があり、「顔」また「頭」らしき墨書文字がある。265は円形の井戸枳から出土した曲物の桶で、完形に近い状態で上層部分から出土した。高さ約11cm・口径約18.2cmの円形で、底部外面には中央から三方に分かれる紐状の痕跡が付着している。266は方形の井戸枳の裏込めから出土した櫛である。長方形枳材の長辺の一方に歯を挽き出し、器面を平坦に仕上げる横櫛といわれるものである。長さ5cm・幅4cm・最大厚みが0.9cmを測るが、完形品ではない。267は円形の井戸枳から出土した櫛である。266と同じく横櫛であり、長さ11cm・幅4cm・最大厚みが0.9cmを測る。268は方形の井戸枳から出土したが、用途は不明である。端部にくびれをもつ。269は円形枳内から出土した用途不明品で、両端部付近に穴が開けられていた痕跡が残っている。270は方形の井戸枳から出土した箸である。枳材を丸棒状に粗く削り、断面は多角形を呈している。この箸は断面が6面に削られている。箸は折れていたが一本に復原できた。長さは27.3cmを測る。271は、方形の井戸枳から出土した齋串である。長さ20.9cm・幅2.2cm・厚さ3mmを測る。272は方形の井戸枳から出土した齋串で、長さ17.6cm・幅2.1cm・厚さ



第62図 井戸 S E 98058・方形井戸枳材実測図 (S=1/16)

S D99070内上層より出土した大型の砥石で、淡黄灰色の砂岩である。最大長32.5cm・最大幅7.5cm・最大厚5.5cmで、使用面は長方形の面の表裏・両側の4面である。278は、最大長5.7cm・最大幅5.3cm・最大厚5cmで全面使用している。その他に、木材片・桃の種・木炭などが多量に出土した。

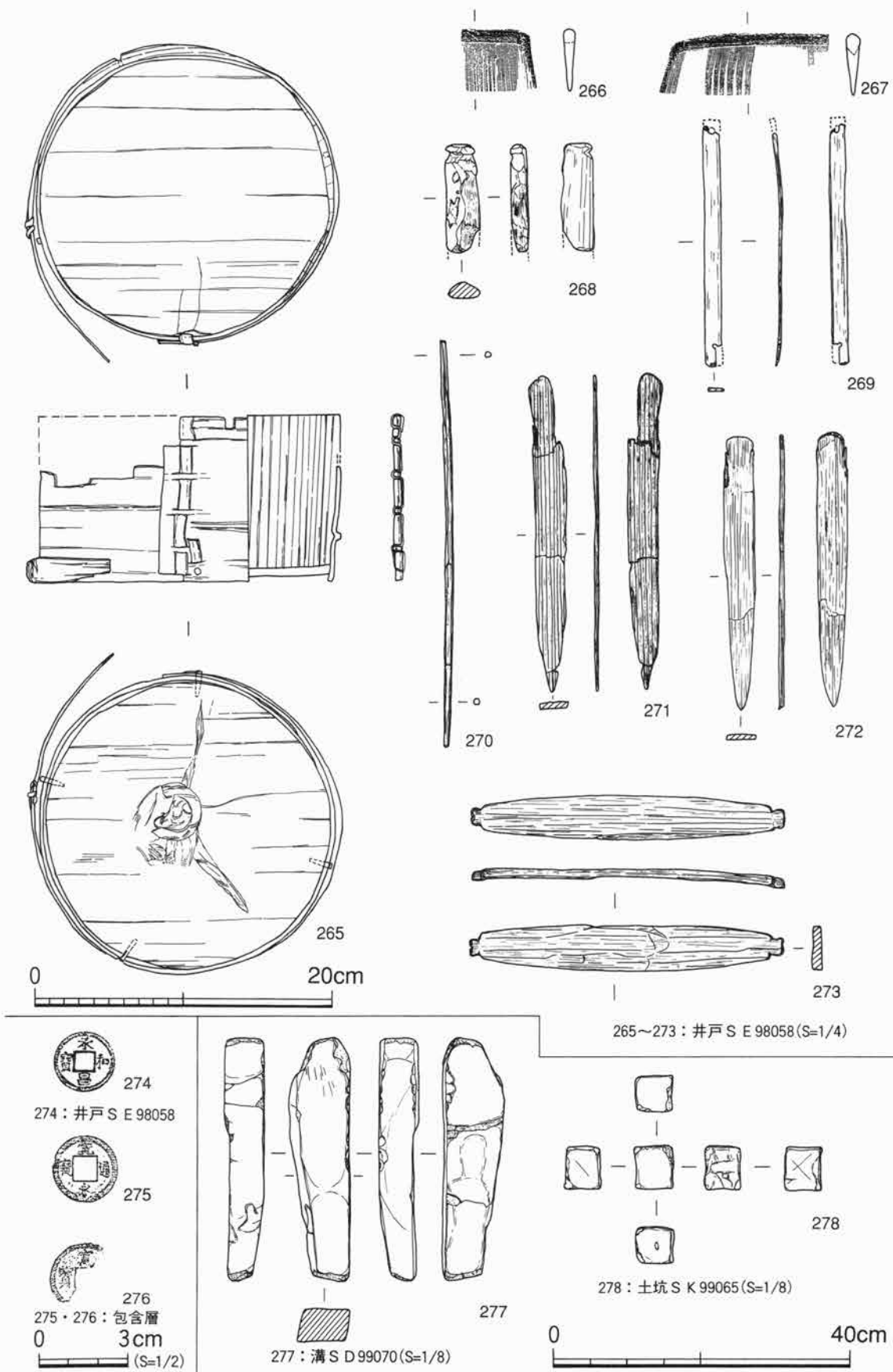
### 8. ま と め

今回の調査によって、以下のような成果が得られた。まず、第一に九町に築かれていた9世紀

3.5mmでほぼ完形品である。271・272は、形態的には材の一端に両側から切り込みを入れ、頭部を尖らせたものである。これらには、文字などは書かれていなかった。273は円形の井戸枳材から出土した用途不明品である。長さ21cm・幅3cm・厚さ5mmを測り、両端部には糸などを掛けるようなくびれ部がある。

#### (4) その他の遺物

銭貨は3点出土している(第63図274~276)。274は承和昌寶(835年初鑄)で井戸 S E 98058の方形井戸枳材から出土した。275は包含層から出土した寛永通寶(1626年初鑄)である。276も包含層出土の寛永通寶であるが欠損している。この他には、砥石が2点出土している(第63図277・278)。277は、溝



第63図 出土木製品および銭貨・砥石実測図

初めの邸宅は、一町の敷地内に収まる可能性が高くなったことである。第二に九町の南限で門跡 S B 14が検出され、さらにその門が四脚門であったことが注目される。第三としては、十町の時期による宅地利用の変遷が確認できたことである。その他には、九町と十町の間を通る条坊道路の鷹司小路の位置が推定できたことなどが挙げられる。

#### (1)九町

九町の条坊の南限の位置に、築地の内側溝と考えられる溝を検出した。さらに、邸宅の中心建物の中軸線の南延長で門跡を検出した。このことから、邸宅が存続している時期には九町の南限に築地が築かれていたと想定することができる。築地の内側溝とした溝 S D 99010などの東西溝は、本来の内側溝の幅ではなく、邸宅の解体もしくは築地の解体の際に投棄用にあらたに掘り込まれたものと考えられる。この状況は、邸宅の北側築地部分の調査で検出している築地の内側溝と類似していることから、今回検出した溝も同様であると考えられる。この溝を築地の内側溝とすると、邸宅の敷地が一町分であった可能性を示唆する新たな資料が得られたことになる。

門跡 S B 14は、邸宅の中心建物の中軸南延長線上、さらに九町の南限にあたる位置で検出した。規模は、桁行1間(約4.5m=15尺)、梁行2間(約3.6m=12尺)で6基の柱穴を検出し、柱穴の配置から四脚門であると考えられる。平安時代の四脚門は、全国各地で数例が検出されている(表4)<sup>(注14)</sup>。しかし、各地で検出されている四脚門は、国府跡や国分寺など公的な施設とされている遺跡のみである。また、平城京左京二条二坊・三条二坊(長屋王邸・藤原麻呂邸)の調査では、8世紀中頃の二条大路に面する6基の柱穴で構成される南門を検出しているが、遺構の配置や構造的に四脚門とは考えられず、薬医門か棟門に廂のついた門であると推定されている。これらのことから、今回検出した門跡 S B 14は邸宅の門としては今回が初めて検出例といえる。かねてから、九町の建物群は貴族の邸宅とみられ、寝殿造の祖型との見解がある。「コ」の字型の建物配置や脇殿の左右対称の建物配置は、宮内の内裏内郭や朝堂院の配置に酷似している。貴族の邸宅内において、前庭(未確認)をとめない左右対称の建物配置をとることは、内裏内郭や朝堂院の機能から考えると、邸宅の中でも公的な性格を持ったものと考えられる。一町分の敷地を占有していた貴族は三位以上の高位高官であったと推定されることから、位の高い貴族の邸宅であることがうかがえる。今回検出した門跡 S B 14は、官衙的な施設で検出されている四脚門を採用していることも含めて、内裏内郭・朝堂院や官衙などの公的要素をもった邸宅といえる。

#### (2)鷹司小路

部分的ではあるが、小路の両側溝と思われる溝 S D 98026・99070と98012・98013を検出し、その間を路面部分に想定した。今回の調査では明確な路面を確認していないが、小路の4丈幅と九町と十町の築地の位置関係、門跡の位置関係からこの部分を鷹司小路の路面部分と考えて良いだろう。しかしながら、東側トレンチでは南側溝となりうる溝を検出できなかった。先にも述べたが、調査区全体は著しい攪乱と削平を受けており、溝自体が削り飛ばされている可能性も考慮しなければならない。事実、溝 S D 99141は、東側トレンチの西側で検出しているが、浅く、東側には痕跡がない。しかし、トレンチ東側断面には溝状の堆積を確認している。このことから、

当時の溝の底部の深い部分のみが残ったと考えるのが妥当であろう。

(3)十町

九町の南側にある十町では、3時期に分けられる遺構が集中している状況で検出した。各時期の遺構については、すでに報告したが、九町の邸宅の存続しているⅡ-a・b期である遺構は検出できなかった。この時期には、宅地利用がされていなかった可能性が考えられる。しかし、邸宅の解体後であるⅡ-c期に属する遺構は、調査トレンチ内の南西部分に集中して検出した。Ⅰ

第5表 四脚門検出例一覧表

遺跡名	所在地	位置	構造	桁行	梁行	堀形	時期	備考
1 平安京跡右京一条三坊九・十町	京都府 京都市	南門	掘立	4.5m(15尺)	3.6m(12尺) 1.8mの等間	方形	9世紀 初頭	邸宅跡
2 志波城跡	岩手県 盛岡市	内城 西門	掘立	4.0m(13尺)	3.6m(12尺) 1.7mの等間	方形	9世紀	城柵
3 八森遺跡	山形県 八幡市	政庁 東門	掘立	2.9m(10尺)	3.7m(12尺) 1.5mの等間	方形	9世紀	出羽国衙 ?
4 能登国分寺	石川県 七尾市	南門	掘立	5.1m(17尺)	5.4m(18尺) 2.7mの等間	円形	10世紀 前半	国分寺
5 名生館官衙遺跡(小館地区)	宮城県 古川市	政庁 南門	掘立	3.0m(10尺)	4.4m(15尺) 2.2mの等間	方形	8世紀	郡衙
6 十三宝塚遺跡	群馬県 境町	政庁 南門	掘立	4.8m(15尺)	4.5m(15尺) 2.25mの等間	方形	9世紀 初頭	郡衙か 寺院跡
7 下総国分尼寺	千葉県 市川市	中門	掘立	3.2m(11尺)	3.0m(10尺) 1.5mの等間	方形	8世紀 中頃	国分尼寺
8 伊賀国府跡	三重県 上野市	政庁 南門	掘立	4.5m(15尺)	3.9m(13尺) 1.95mの等間	方形	9世紀	国衙
9 斎宮跡	三重県 明和町	官衙 北門?	掘立	3.4m(11尺)	3.0m(10尺) 1.5mの等間	円形	10世紀	官衙
10 平城京跡左京二条二坊・三条二坊(長屋王邸・藤原麻呂邸)	奈良県 奈良市	南門	礎石 ?	4.2m(14尺)	5.4m(18尺) 2.7mの等間	方形 ?	8世紀 中頃	邸宅跡 薬医門 または 棟門(廂)
11 法華寺畑遺跡(伯耆国分尼寺)	鳥取県 倉吉市	南門	掘立	5.2m(17尺)	3.6m(12尺) 1.8mの等間	方形	8世紀 後半	国庁付属 官衙後に 国分尼寺
		北門	掘立	5.4m(18尺)	3.6m(12尺) 1.8mの等間	方形	8世紀 後半	
		東門	掘立	5.4m(18尺)	3.6m(12尺) 1.8mの等間	方形	8世紀 後半	
		西門	掘立	5.4m(18尺)	3.6m(12尺) 1.8mの等間	方形	8世紀 後半	
12 筑後国府跡(風祭地区)	福岡県 久留米市	政庁 東門	掘立	4.0m(13尺)	2.6m(9尺) 1.3mの等間	方形	8世紀 前半	国衙
13 大ノ瀬下大坪遺跡(豊前国上毛郡衙)	福岡県 新吉富村	政庁 南門	掘立	4.5m(15尺)	3.9m(13尺) 1.95mの等間	方形	8世紀 前半~ 9世紀初	群衙 (推定)

期の遺構は、

小規模な総柱建物跡1棟と斜行溝1条である。これらの遺構は、このあたり一帯に分布する花園遺跡の一部と考えるべきであろう。Ⅱ-c期には、井戸S E98058の周辺に条坊の規制に沿った方向で建物が建てられていたことが確認できた。しかし、九町で検出されている建物と比べると、小規模なものであった。また、柱筋なども揃わず不規則な建物配置である。Ⅲ期では、条



坊に規制されない不定方向の建物を検出した。西側トレンチの中央部分で検出した掘立柱建物跡SB1と掘立柱建物跡SB2は、条坊の方向とはズレているが、柱穴の規模は一辺約0.45mを測り、ほかの建物に比べると規模的に大きい。また、2棟の新旧関係は不明であるが、この2棟は廂が付く建物であることから、十町内において、この時期に集中して建てられた建物群の中心的な建物と考えることができる。今回の十町での調査範囲と、これまでの十町での調査件数が少ないこともあり、どのような宅地割りや建物配置などの宅地利用をしていたか今後の調査課題のひとつとなろう。そのほか、今回は調査範囲外であったが邸宅の東側については、未調査であるため東限が確認されていない。また、邸宅の中心建物や南門が一町宅地の中軸より西側にあるなどの問題が残っている。

以上、今回の調査による成果の要点をまとめた。先にも述べたが、今回の調査の中においても不確定な要素もあり、まだまだ解明しなければならない問題点が残っている。九町の邸宅跡の敷地範囲の東側確定や邸宅の主、十町の宅地利用についてなどは、今後の発掘調査の成果によって検討資料の充実と新たな資料が得られることに期待するとともに、検討していきたい。

(村田和弘)

調査参加者・指導助言および協力者(順不同・敬称略)

児玉 真・高木祐志・吉村美穂・藤木旬子・澤井亮佑・谷口 梢・洪田和昌・山田大輔・河村昌輝・細川智美・清水理緒・清水あけみ・益田未奈・原田奈央子・丸谷はま子

井上満郎・川上 貢・中谷雅治・磯野浩光・有井広幸・伊藤 潔・辻 純一・山田邦和・眞田廣幸

注1 平良泰久・石井清司・常磐井智行「平安京跡(右京一条三坊九町)昭和54年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』1980-3 京都府教育委員会) 1980

注2 平良泰久・伊野近富・常磐井智行・杉本 宏・谷口智樹・村川俊明「平安京跡(右京一条三坊九・十町)昭和55年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』1981-1 京都府教育委員会) 1981

注3 山口 博「平安京跡右京一条三坊九町 昭和59年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第16冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1985

注4 石井清司「平安京跡右京一条三坊九町(第7次)発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第28冊(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988

注5 辻 純一「平安京の条坊復原」(『京都府埋蔵文化財情報』第27号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1988

注6 辻 純一「条坊制とその復元」(『平安京提要』(財)古代学協会・古代学研究所 角川書店) 1994

注7 古代の土器研究会『古代の土器Ⅰ 都城の土器集成』 1992

注8 古代の土器研究会『古代の土器Ⅱ 都城の土器集成』 1993

注9 中尾芳治「重圏文軒瓦の制作年代と系譜についての覚書」(『難波宮の研究』 吉川弘文館) 1995

注10 八木久栄ほか(『難波宮址の研究』第10 (財)大阪市文化財協会) 1995

注11 「西賀茂瓦窯跡」(『平安京跡研究調査報告』第4輯 (財)古代学協会) 1978

注12 平安博物館編『平安京古瓦図録 図録・解説篇』 1977

注13 『木村捷三郎収集瓦図録』 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1996

注14 第27回山陰考古学研究集会『遺跡を活かす』 1999



## 5. 三山木遺跡第2次発掘調査概要

### 1. はじめに

この調査は、綴喜都市計画事業三山木地区特定土地地区画整理事業に伴い、京田辺市の依頼を受けて実施した。京田辺市三山木では、近畿日本鉄道京都線の三山木駅西側約31.2haを対象として、区画整理事業が計画・進行中である。この事業に先立ち、京田辺市教育委員会は、対象地32か所の試掘調査を平成9年度に行っている。その調査成果によると、三山木字山崎の低丘陵地東側において、弥生時代前期から鎌倉時代にかけての遺物が集中して出土した。遺構は、西日本旅客鉄道学研都市線西側に弥生時代中期が、東側には奈良・平安時代の遺構が集中する傾向を見せ、その範囲をくくって「三山木遺跡」と称することとなった。

今回の調査は、この試掘調査成果をもとに、鉄道高架・道路部分など公共施設予定地内の調査を行った。現地調査は、当調査研究センター調査第2課主幹調査第2係長事務取扱久保哲正・主査調査員岡崎研一・調査員田代 弘が担当した。現地調査は、平成11年5月17日から同年10月28日まで行った。10月18日には、約101名の見学者の中、現地説明会を開催した。調査地は6地点で、総面積約1,800㎡である。調査時の空中写真は(株)ワールドに、土器の胎土分析は(株)京都フィッシュン・トラックに、石器の蛍光エックス線による産地同定は京都大学原子炉研究所に委託した。これら調査に係る経費は、全額京田辺市が負担した。

本概報は、主に岡崎が担当し、田代が補佐して作成した。遺構図の作成・遺物整理は、調査参加者がそれぞれ分業した。川端美恵・山岡匠平、長井謙治が遺物実測図作成を行い、主に山岡と長井が製図作業にあたった。図版写真は、遺構と木製品を岡崎が、その他の遺物を調査第1課資料係主任調査員田中 彰が撮影した。

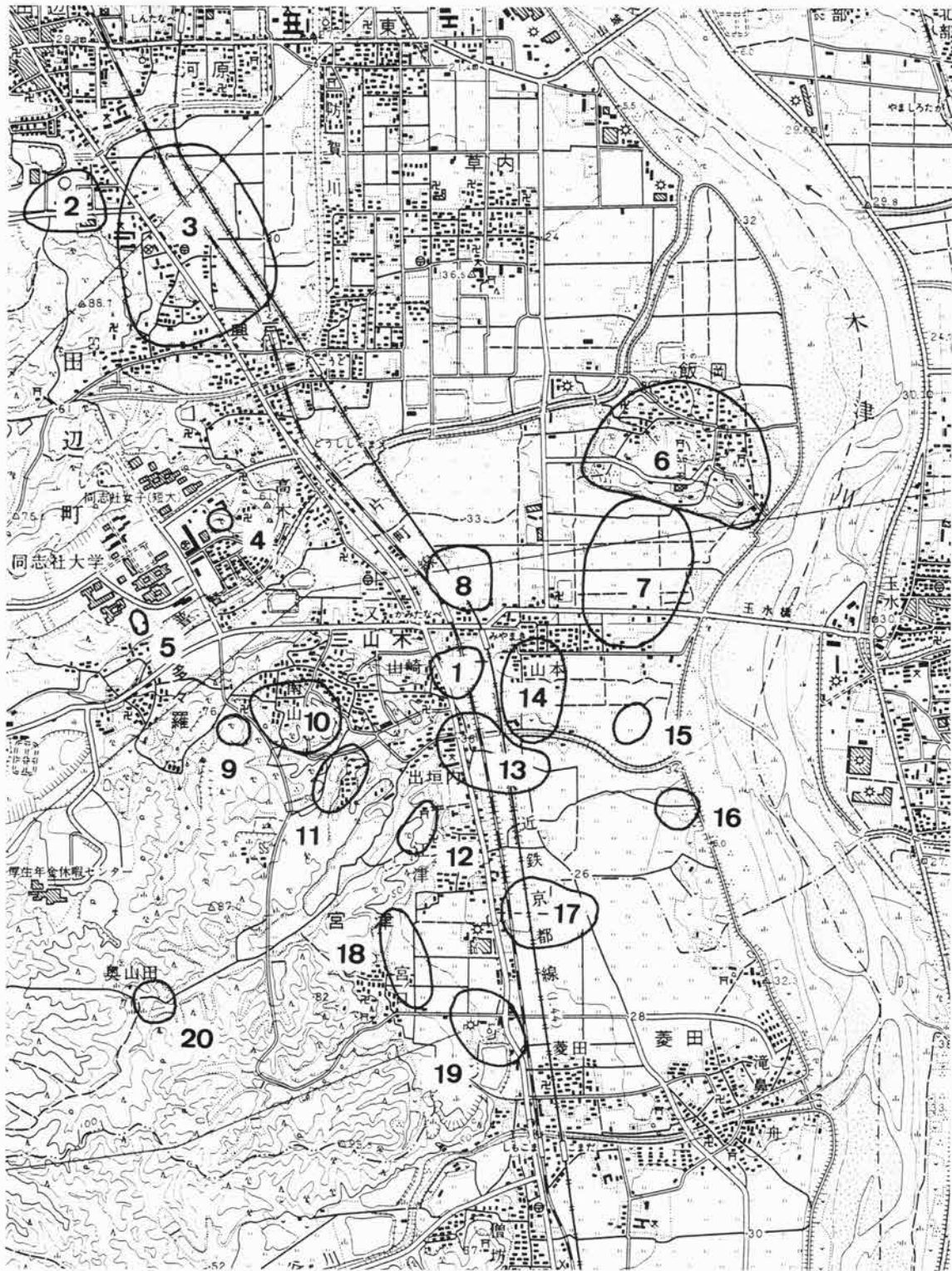
なお、執筆は、岡崎・田代・松尾が分担して行い、文責を文末に記した。調査期間中は、京田辺市教育委員会・京都府立山城郷土資料館・各自治会など、各関係諸機関の協力をいただいた。また、地元の方々には、調査補助員・整理員として従事していただいた<sup>(注1)</sup>。記して感謝の意を表したい。

(岡崎研一)

### 2. 位置と環境(第64図)

京田辺市は、南山城平野のほぼ中央を貫流する木津川左岸に所在する。背後にあたる西側は、生駒山系から派生する丘陵地で高く、大阪層群とよばれている砂礫層から成る。同市東側は、木津川によって形成された沖積地が広がる。

三山木遺跡は、京田辺市三山木字山崎に位置し、低丘陵端部にあたる。本遺跡は、平成9年度



第64図 調査地および周辺遺跡分布図

- |               |           |             |           |            |
|---------------|-----------|-------------|-----------|------------|
| 1. 三山木遺跡(調査地) | 2. 田辺遺跡   | 3. 興戸遺跡     | 4. 天神山遺跡  | 5. 新宗谷窯跡   |
| 6. 飯岡遺跡       | 7. 古屋敷遺跡  | 8. 田中(二又)遺跡 | 9. 口駒ヶ谷遺跡 | 10. 南山遺跡   |
| 11. 西羅遺跡      | 12. 三山木廃寺 | 13. 宮ノ下遺跡   | 14. 直田遺跡  | 15. 遠藤遺跡   |
| 16. 下川原遺跡     | 17. 桑町遺跡  | 18. 屋敷田遺跡   | 19. 宮ノ口遺跡 | 20. 奥山田池遺跡 |

上図は『京都府遺跡地図』から引用した。

に遺跡の範囲確定のための試掘調査が、京田辺市教育委員会によって実施され<sup>(注2)</sup>、『京都府遺跡地図』に三山木遺跡が追加された。遺跡の範囲は、東西200m・南北200mである。平成10年度には京田辺市教育委員会が南端部で発掘調査を実施している(第1次調査)。今回の調査は、この時の成果に基づいて行ったもので、第2次調査となる。

次に、三山木遺跡周辺の歴史的環境を概観する。縄文時代の遺跡には、草創期と推定される相楽郡山城町千両岩遺跡、同井手町上井手遺跡がある。早期遺物の出土例はなく、山城町涌出宮遺跡からは前期の遺物が採集されている<sup>(注3)</sup>。井手町鳥休遺跡からは中期の遺物が採集されている。また、石棒・石冠が京田辺市三山木山崎から出土しており、現在山崎神社に所蔵されている<sup>(注4)</sup>。

弥生時代には、前期の遺跡として京田辺市宮ノ下遺跡、宮ノ口遺跡がある。調査地南方約400m(現在、近畿日本鉄道の操車場)に位置する宮ノ下遺跡では、10基以上の土坑のほか溝・炉跡などを検出している。中期の土器が出土した遺跡としては相楽郡山城町涌出宮遺跡・同精華町畑ノ前遺跡・同木津町燈籠寺遺跡がある。涌出宮遺跡は床面から畿内第Ⅲ様式併行期の土器が出土した竪穴式住居跡2基、畿内第Ⅳ様式併行期の土器が出土した竪穴式住居跡1基を検出している。畑ノ前遺跡は畿内第Ⅳ様式期の土器が出土した竪穴式住居跡群を検出している<sup>(注5)</sup>。燈籠寺遺跡では畿内第Ⅲ様式の土器を出土した方形周溝墓をはじめ、竪穴式住居跡・焼土坑・土坑を検出している<sup>(注6)</sup>。後期になると京田辺市飯岡の飯岡遺跡・田辺天神山遺跡がある<sup>(注7)</sup>。木津町木津に位置する木津城山遺跡は、高地性集落として知られている。後期の遺跡は、木津川流域の標高35~80mの洪積段丘や洪積台地先端の景観の良好な場所に占地している例が多く見受けられる。

南山城地域においては、数多くの弥生時代の遺跡が確認されているが、中期後半から後期にかけての遺跡が大半を占める。前期から中期前半にかけての遺跡については、希薄であるというのが現状であり、確認されている土器量も少ない。

古墳時代の南山城地域は、前期でも最古級の山城町椿井大塚山古墳がある。調査地近辺では飯岡周辺に集中する。前期には前方後円墳の車塚古墳が築かれ、中期は南山城最大級の円墳でゴロゴロ山古墳、円墳の薬師山古墳・トヅカ古墳が築かれる。後期には飯岡横穴が築かれる<sup>(注8)</sup>。

飛鳥・奈良時代の京田辺市は、三山木廃寺・興戸遺跡・二又遺跡などがある<sup>(注9)</sup>。三山木廃寺は山田寺式の系譜で、普賢寺跡出土瓦と同範関係が判明しており、7世紀末頃に建立されたものである。今回の調査地の北方約2kmには興戸遺跡が、北方約400mには二又遺跡が所在する。二又遺跡は平成10年度に京田辺市教育委員会が調査し、奈良時代の掘立柱建物跡群などを検出している。興戸遺跡は東西600m・南北500mの範囲にかけて広がり、当調査研究センターが昭和62年度から平成3年度にかけて実施した調査では、掘立柱建物跡群・条里関連遺構などが検出されている。第11次調査では、山陽道とともに東1条・東2条の条里復原ラインが想定されており<sup>(注10)</sup>、現地形の畦畔と比較すると大きく西に振っていたとする案も提示されている。『続日本紀』で和銅四(711)年の条文に山本駅設置の記載があり、調査地付近には、平城京から大宰府まで続く山陽道が整備され、三山木山本の地は山本駅の置かれた所と想定されている<sup>(注11)</sup>。今回の調査で、関連する遺構が

確認されるのではないかと期待された。

(松尾洋次郎)

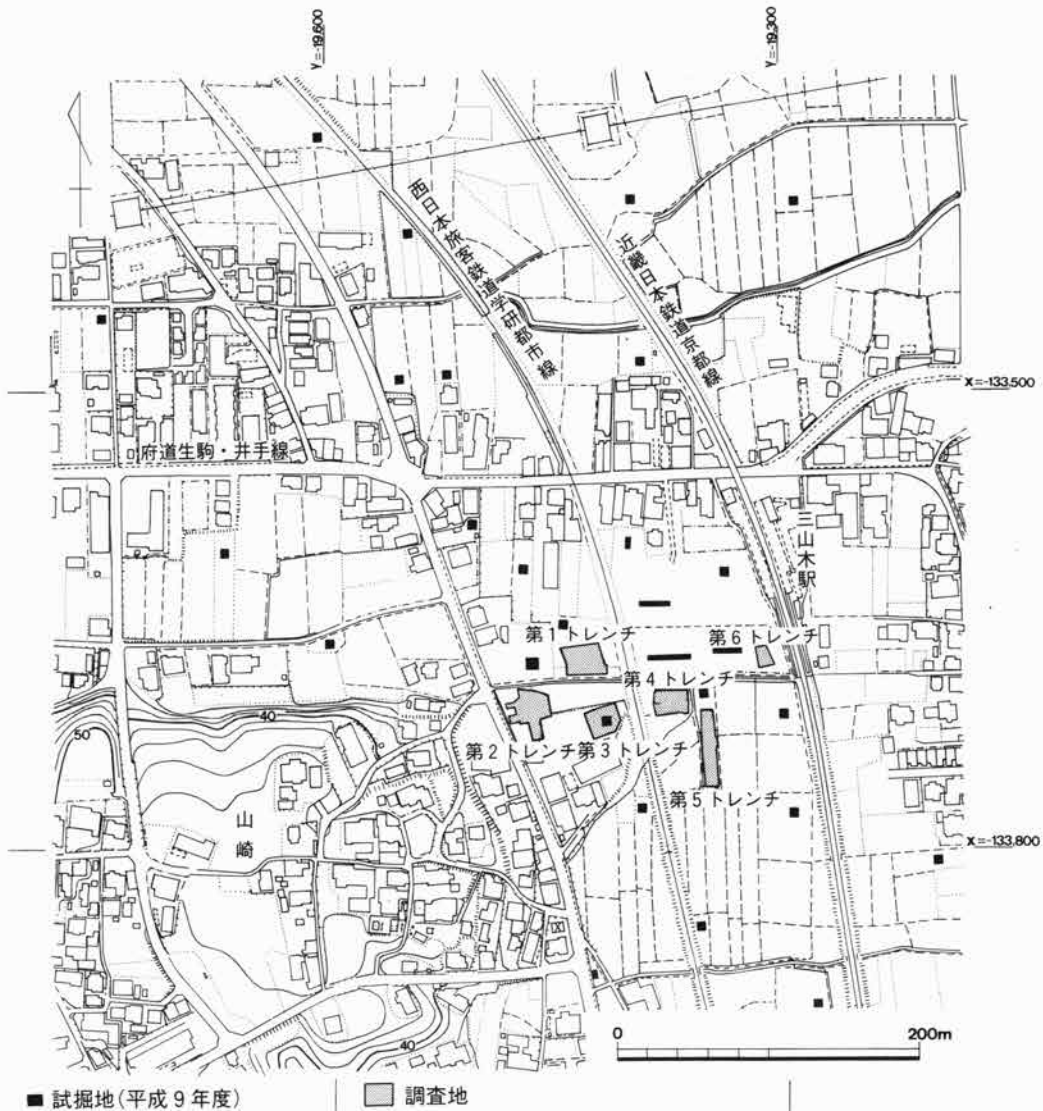
### 3. 調査概要(第65図・図版第49)

西日本旅客鉄道学研都市線を境に、西側に3か所、東側に3か所の調査区を設定した。トレンチ名は、西側から数字を付した。

#### (1)土層

調査区が東西方向に並ぶことから、低丘陵部から東方への堆積状況、ならびに遺構面を把握することができた。

弥生時代前期・中期は、三山木山崎に舌状に張り出す低丘陵部が第3トレンチ方向に延び、一部第4トレンチまで延びていた。第2トレンチ付近は小さな谷地形を成していた。今回出土した弥生土器の大半は、この谷部から出土したもので、丘陵尾根筋上に主体となる遺構が存在すると



第65図 トレンチ配置図および周辺地形図



考えられた。第4トレンチから東側は、川石や砂の堆積が見られたことから、木津川の氾濫域であったと考える。この砂からも弥生土器が出土しているが、かなり磨滅したものであった。近鉄京都線付近に設定した第6トレンチになると、1.5mの盛り土があり、さらに3m以上の砂の堆積が見られた。安定した面を検出するには至らず、現地地表下約2.1mで、古墳時代から平安時代の遺物が混入する層を確認した。弥生土器を包含する層には至らなかった。

第67図に示した柱状図は、第2トレンチ谷部での堆積状況を表わしている。最下層である黒色粘質土から第73～75図の弥生土器片と、第76～79図の石器類が出土した。その後暗灰色粘質土・茶褐色砂土が堆積し、その上に礫が混入する灰色砂土が薄く堆積していた。礫は川石のように丸く、木津川の氾濫によるものと考えられる。その上層の淡黄灰色土は奈良・平安時代の遺構面で、SD01などの遺構はこの層を切り込んでいる。灰色土は、磨滅した土器片が混入する包含層である。掲載した土器・石器の出土の詳細については、本文ならびに付表に記した。

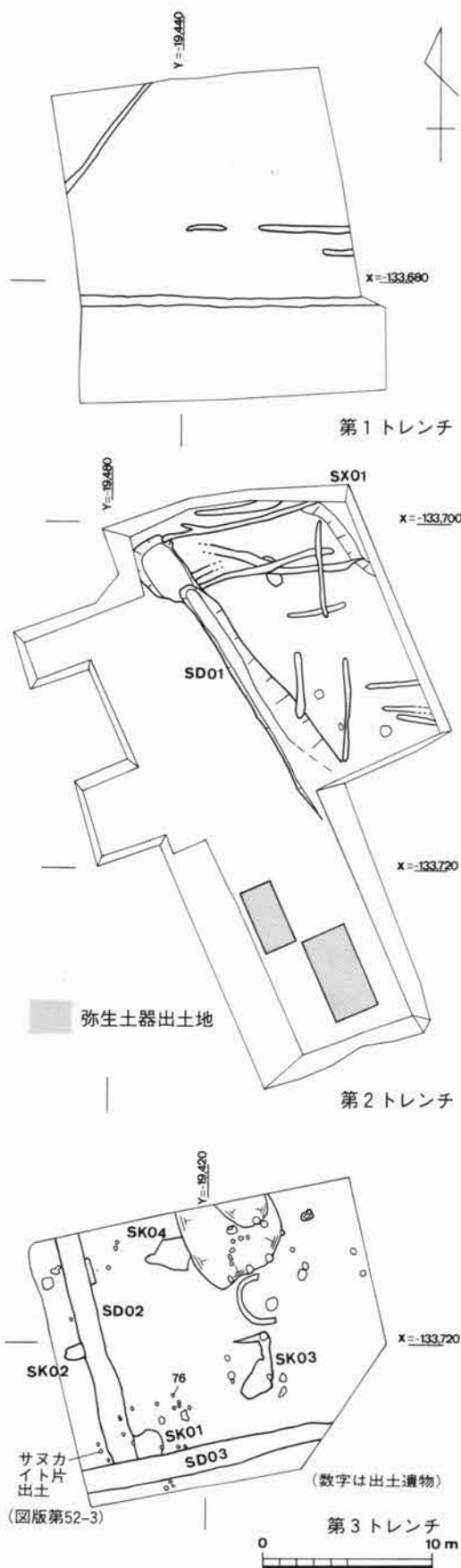
奈良・平安時代になると、一部丘陵尾根筋を削平し、第5トレンチ付近まで微高地が延びていた。弥生時代の氾濫時に堆積した砂層をベースとしているため、非常に地盤の悪い所であった。しかし、弥生時代に利用された丘陵部分と比較すると、かなり広範囲に整地が成されていたことが判った。

(2) 検出遺構

各トレンチ毎に概要説明をし、主な遺構についての詳細を記す。

① 第1トレンチ(第66図・図版第49)

京田辺市教育委員会が西隣の土地を試掘調査した際に、弥生時代中期の東西方向の溝を確認したことから、その延長が検出できると考え設定した。



第66図 遺構配置図(第1・2・3トレンチ)

調査の結果、田の土の入れ替え時にかなり削平されていたため、検出した遺構は幅約20cmの溝4条のみである。瓦器碗の出土から、鎌倉時代の溝と考える。下層を見るため重機による試掘を試みたが、下層遺構・遺物は無く、灰色粘土層が厚く見られた。

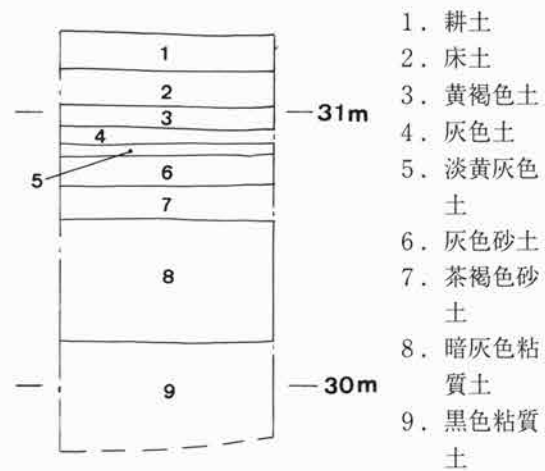
②第2トレンチ(第66図・図版第49・50)

府道木津・八幡線に隣接する土地に、南北方向のトレンチを設定した。トレンチ東側で府道に沿った溝(S D01)を検出した。出土遺物から平安時代と想定された。山陽・山陰併用道との関連性を考え、一部東・西側への拡張も行った。S D01以外に顕著な遺構が無いことから、トレンチ南半分については下層遺構の有無の確認を行った。その結果、第2トレンチ付近は小さな谷地形を呈しており、弥生時代にはここに土器片が流れ込んでいたことが判明した。このことから特に土器を多く包含すると思われる部分(第66図網部)を掘り下げ、土器の採取にあたった。S D01西側においても重機による深掘りを実施した。その結果、溝検出面下においても、若干の弥生土器を包含する層が続くことから、奈良・平安時代には、この谷地形は埋まっており、整地されていたことが判った。

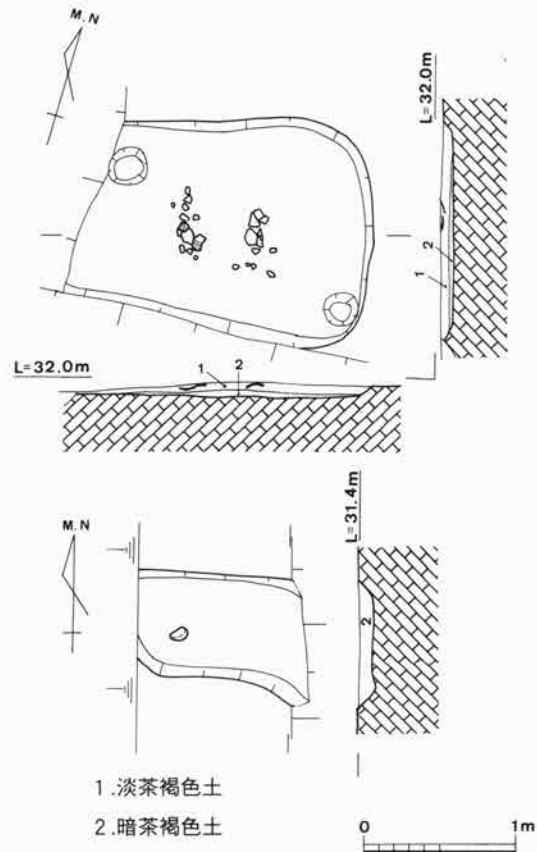
S D01(第66図) 幅約2.5m・深さ約0.4mを測る。溝西側は急に立ち上がるが、東側はゆるやかな傾斜を成す。ほぼ府道に沿って真っ直ぐに延びており、N32°Wを測る。溝北側では残りが悪く、深さ約0.05mとなる。溝内から8世紀中頃から9世紀初頭にかけての土器片が出土したことから、平安時代の遺構と考える。この地は、山陰・山陽併用道が府道沿いを通り、この三山木付近に「山本駅」があったと想定されている。このことから検出した溝は側溝の可能性があると考え、対となる溝が存在するのか、拡張し検出に努めた。その結果、S D01西側には溝はなく、東側からは拡張区隅に落ち込み(S X01)が見られたが、溝としての確認には至らなかった。なお、S D01とS X01間の幅の狭い溝は、その後の遺構である。

③第3トレンチ(第66図・図版第50・52)

丘陵尾根筋北側の傾斜変換点付近にあたる。



第67図 第2トレンチ谷部柱状断面図



第68図 SK01(上)・SK02(下)実測図

後世にかなり削平されており、検出した遺構は土坑4基(S K01~04)、溝2条(S D02・03)である。トレンチ北側からは落ち込みが見られ、丘陵の斜面部分となる。削平時の土が厚く堆積しており、弥生時代中期の土器片が若干混入していた。この落ち込みが埋められた後に、いくつかの柱穴が掘られていたが、建物に伴うものではない。柱穴内から8世紀末の土器片が出土したことから、丘陵先端部分は奈良時代に整地がなされたと思われる。

S D02(第66図) 幅約2.5m・深さ約0.4mを測る。溝の肩部は、東側が急に立ち上がるのに対して、西側はゆるやかな傾斜をなす。N17°Wを測る。S K01・02を切る形で検出した。溝内からわずかな土器片が出土し、9世紀初頭と考えられる。S D02は、S D03付近になるとほとんど深さが無い。

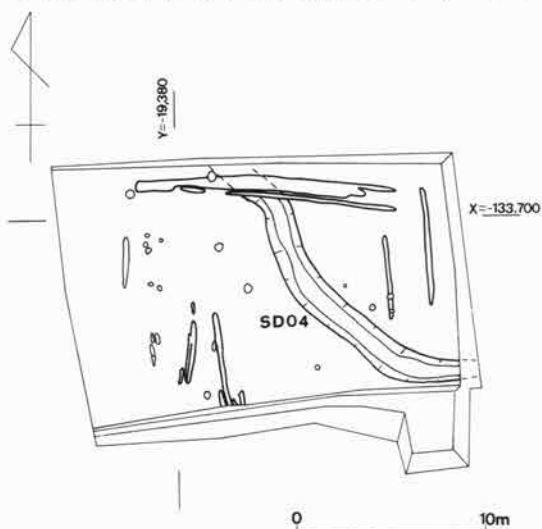
S D03(第66図) 幅約2.5m・深さ約0.4mを測る。「U」字状の浅い溝である。N80°Eを測る。S D02を切る形で検出したことから、S D02の後に設けられたことが判った。溝内からわずかな土器片が出土し、9世紀前半と考えられる。

S K01(第68図・図版第52) 弥生時代中期の土器が出土した土坑である。西はS D02に、南はS D03に削平されていたため、検出規模は、2m×1.4m・深さ約0.1mである。

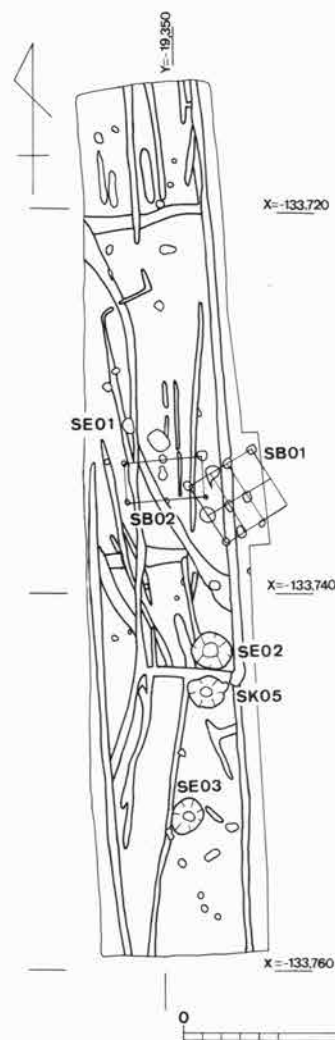
S K02(第68図) 東半分をS D02によって削平されていた。土坑床面から弥生時代中期の土器片が出土した。検出規模は、1.4m×0.8mである。S K01と同様のものと考えられ、尾根筋上にこのような土坑が点在すると思われる。

S K03(第66図) 平成9年度に試掘調査した際に検出した不定形な土坑である。今回の調査でその全容が判った。東西長約2m・南北長約2m・深さ約0.5mを測る。出土遺物については試掘時に出土しており、弥生時代中期と考える。

S K04(第66図) 落ち込み西側で検出した不定形な土坑である。最大長約2.5m・最大幅約2m・深さ約0.3mを測る。土坑内からわずかな弥生土器

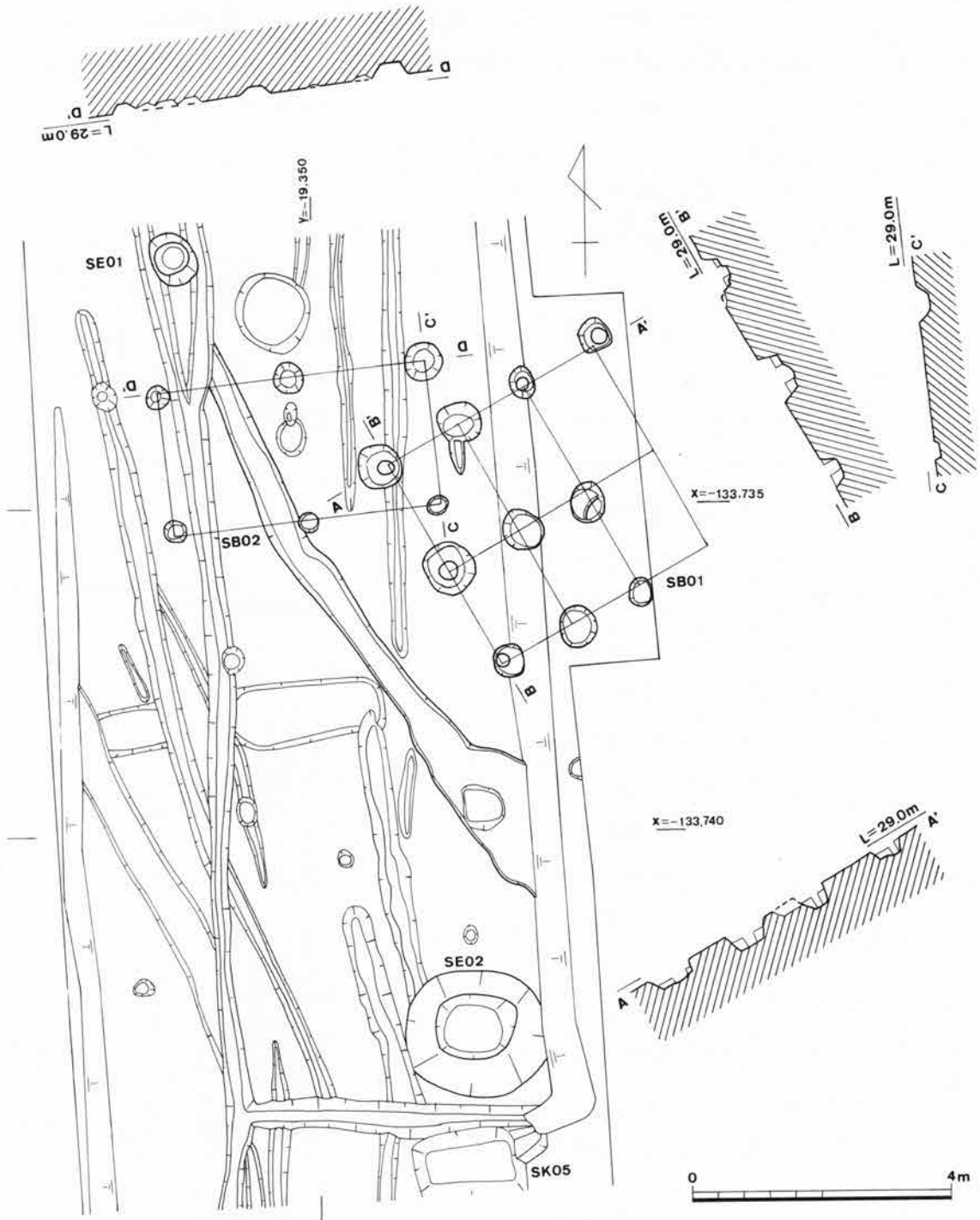


第69図 遺構配置図(第4トレンチ)



第70図 遺構配置図(第5トレンチ)

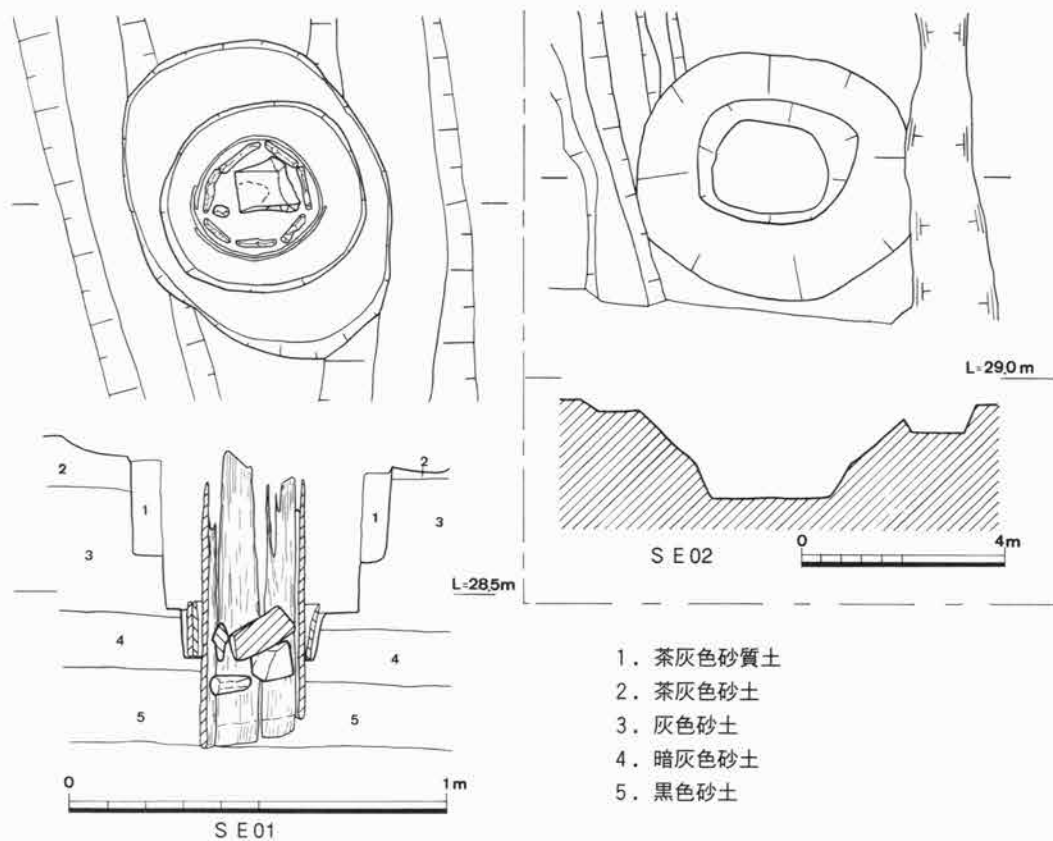




第71図 SB01・02実測図

片が出土しているが、性格については明確でない。

これらの遺構以外に、南西隅の柱穴状の遺構からサヌカイトの石核・剥片・石鏃など約20点が出土した(図版第52)。遺構の規模は、径約0.2m・深さ約0.4mを測る。石材を埋納していたものと思われる。このような遺構は、遺物整理を行うと他に1か所あることが判明した。SK01北方約3mの柱穴状遺構で、第66図76である。数字は遺物番号を示す。第2トレンチ谷地形から多量に出土した石器は、このような形態で石材を大切に保管しており、当地で製作していたことを裏付ける。



第72図 S E 01・02実測図

## ④第4トレンチ(第69図・図版第51・53)

J R線東側に設定したトレンチで、丘陵尾根筋先端部付近にあたる。J R線敷設時や田畑耕作時に大きく削平されたため、トレンチ西半分は地山であった。トレンチ中央部を蛇行する形で溝(S D 04)1条が検出できた。

S D 04(第69図) 幅約2m・長さ約16m・深さ約1.2mを測る。溝内からは、6世紀後半の土器片が出土した。8・9世紀代の溝と比べて、大きく蛇行することから、関連遺構とは認められなかったが、性格については不明である。

## ⑤第5トレンチ(第70図・図版第51・53)

第4トレンチ東側の隣接地に設定したトレンチである。南北方向に細長いトレンチからは、掘立柱建物跡(S B 01・02)、井戸(S E 01~03)、数条の溝、土坑(S K 05)などを検出した。検出面は、南へ行くほどわずかに下がっており、微高地端付近であることがうかがえる。

S B 01(第70・71図・図版第53) トレンチ中央付近で検出した2間×3間の総柱建物である。南側のトレンチの壁にかかる形で小さな柱穴が見られることから、南にさらに1間延び、3間×3間であった可能性もある。建物の主軸方位は、N28°Wを測る。第5トレンチ北側で試掘した際に検出した建物と比べて、大きく西に傾くのが特徴である。建物の西辺から約1.2mの部分からは、平行する溝を検出した。建物に伴う可能性がある。柱穴内からは、時期を明確に示す土器が出土しなかったが、上記の溝が多くの遺構に切られていることや、京田辺市教育委員会が第5トレンチ北側で検出している建物を奈良時代に当てていることから、おおむね同時期と考える。

S B 02(第70・71図・図版第53) S B 01西側に位置する、1間×2間の掘立柱建物跡である。東西方向に長いこの建物跡は、S B 01と切り合い関係がなく、時期については不明である。柱穴は、径約0.6m・深さ約0.2mである。建物の主軸はほぼ磁北方向である。

S E 01(第71・72図・図版第54) S B 02北方約2mの所で検出した円形の井戸である。径約0.7m・深さ約0.5mを測る。井戸基底部に径約0.3mの曲物を据え、内側に7枚の矢板を打ち込んでいた。砂地を掘り込んだ遺構であることから、矢板は砂の流入を防ぐためのもので、矢板内側からは拳大から人頭大の石3石でもって、矢板の内傾防止としていた。井戸内出土遺物が無いため、時期については不明である。

S E 02(第71・72図) S B 01南方約5mで検出した、平面円形を呈する素掘りの井戸である。底部が大きく弯曲していることから、井戸に使用された矢板などの木材を抜き取った可能性もある。平底の杯や高台を持つ瓶子が出土している。

S E 03(第70図) 第5トレンチ南端付近で検出した素掘りの井戸である。規模は、径約1.6m・深さ約1mを測る。井戸に伴う施設はない。出土遺物はなく、時期不明である。

S K 05(第70図) S E 02南側に隣接する長方形の土坑である。長辺約2m・短辺約1.5m、深さ約1.2mを測る。埋土上層から瓦片(第82図)が出土した。瓦の出土は、この遺構のみである。土坑の性格については不明である。

#### ⑥第6トレンチ(第65図)

近鉄三山木駅西隣に設定した調査地で、京田辺市教育委員会が西隣の田畑部を試掘調査した際には、掘立柱建物跡の一部を検出している。今回の調査では、この遺構の続きは確認できず、安定した土層も認められなかったことから、木津川氾濫時にかなりの削平を受けたものと考える。

(岡崎研一)

## 4. 出土遺物

ここでは主に第2トレンチで検出した遺物についてみていきたい。

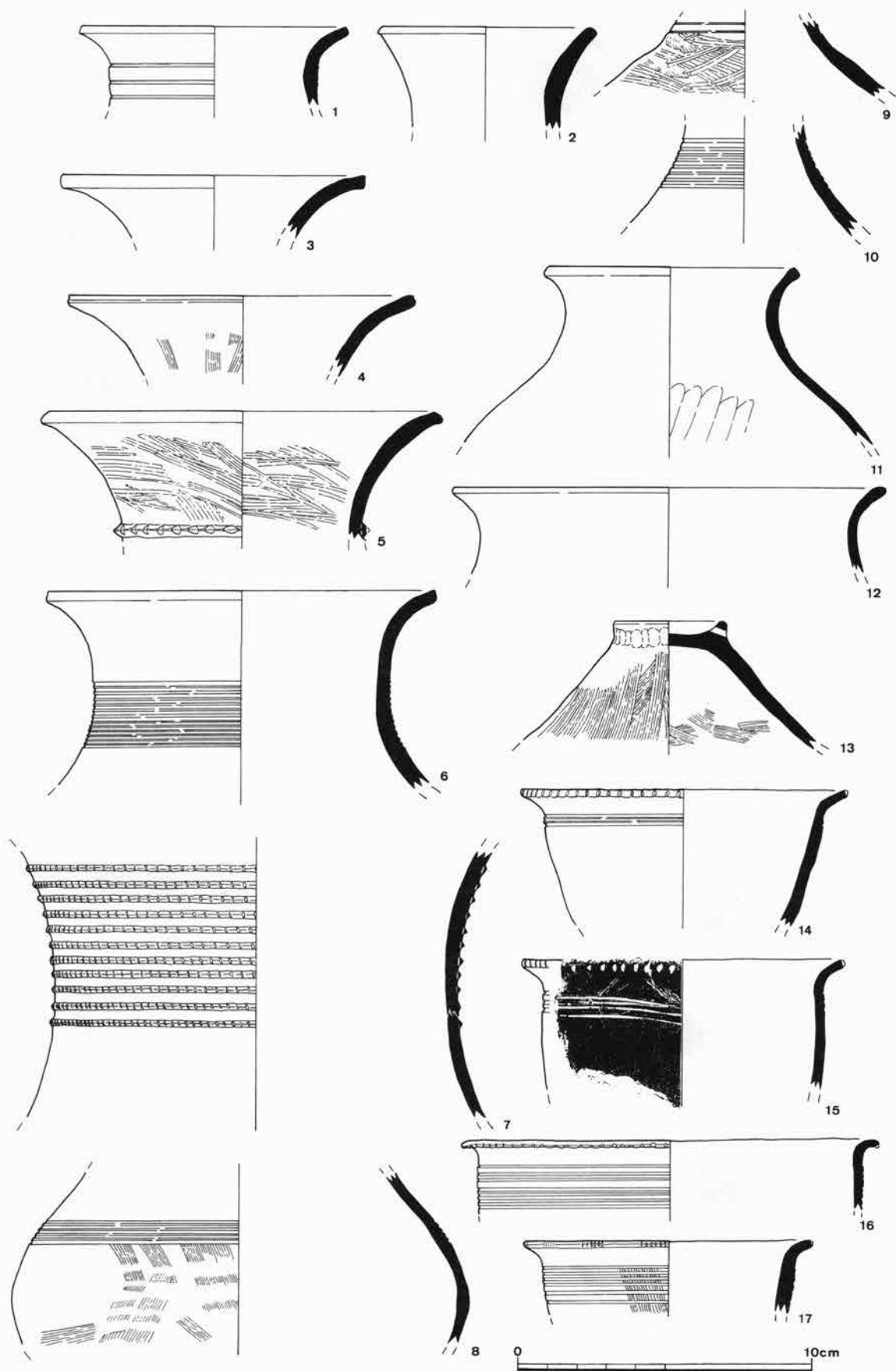
### (1)縄文土器(第75図39・43)

突帯文を有する深鉢である(39・43)。第2トレンチの黒色粘質土下層より出土したものである。39は頸胴部間の屈曲部に、43は口縁端部外面に突帯文が施されている。いずれも「D」字形の刻み目がある。色調は暗灰色を呈し、胎土には砂粒を多く含む。

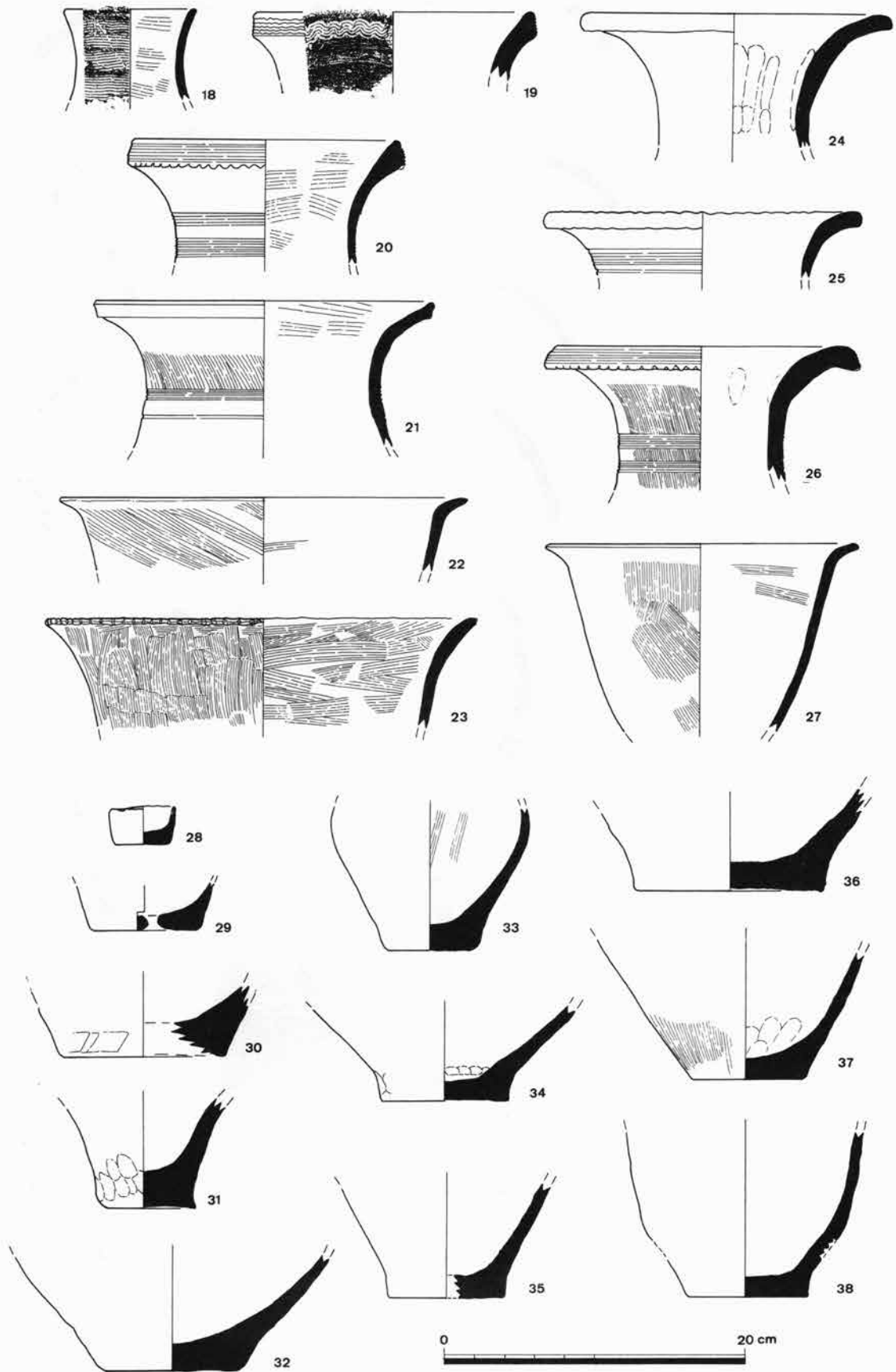
### (2)弥生土器(第73図1~17、第73図18~38、第74図40~42・44~66、図版第55)

ここに図示した資料の大半は第2トレンチで出土したものである。第73図6のみが第3トレンチS K 01で出土したものである。これらは、弥生時代前期から中期前半にかけての土器(第I様式・第II様式)で、壺・甕・鉢・ミニチュア土器などの器種がある。

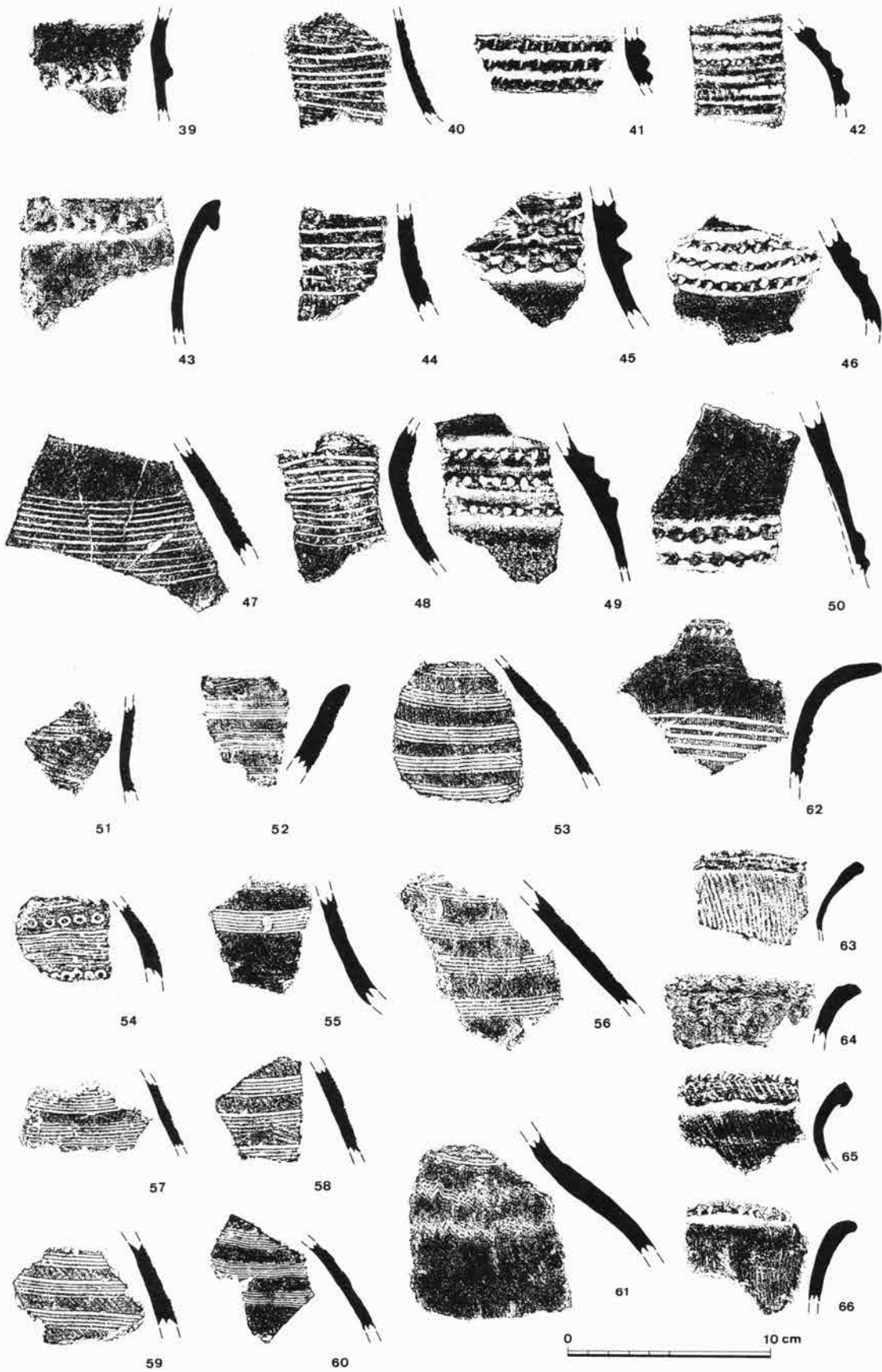
壺(1~11・8~21・24~26、40~42・44~50・53~62) 1・3~11・19~26・44~50・53~62は広口壺である。2・18は細頸壺である。ヘラ描沈線、貼付突帯、櫛描文を施すものがある。1・6・8~10・40・44・47・48は沈線が施されている。1・6・9・10・40・44・47は頸部、



第73図 出土遺物実測図(1)



第74図 出土遺物実測図(2)



第75図 出土遺物実測図(3)

8・47は肩部に沈線がある。2は細い沈線が2条、1は3条、44は5条、10は8条、6は13条と多条である。9は黒色物質が塗布され、ていねいに研磨されている。前期中頃に散見するもので、この資料の時期を示す特徴といえよう。他は、前期後半から末葉のものであろう。

5・7・41・42・45・49・50は、刻目のある貼付突帯である。45・50は布目圧痕を有する。頸部に施すもの(7・41・45)、肩部あるいは体部に施すもの(42・46・49・50)がある。7は11条と多条である。前期後半に属するものである。

櫛描文が施されているのは、19・20・25・21・26・53・54～61である。19は口縁端部にある。これ以外は、頸部～体部にかけて施文されている。54は直線文と半截竹管文、61は直線文と波状文の組み合わせである。中期初頭から前半のものであろう。

なお、7・47は、暗茶褐色の胎土に角閃石を多量に含むものである。生駒西麓産の、搬入土器である。

甕(12・14～17・23・62～66) 口縁が短く外反し、口縁に刻み、頸胴間にヘラ描沈線文を有するもの(14～17・62)と、粗いハケ目を特徴とするもの(23・63～66)、無文のもの(12)などがある。14・15は沈線が少条である。14・15は、黒色粘質土最下層から9とともに出土したものである。前期中頃に属するものであろう。16・17は多条化したものである。16は、8条以上施されている。前期後半のものである。23・65・66は口縁端部に刻み目がある。64は波状文である。いわゆる大和形の甕である。中期前半に属するものである。細片であるが、内外面に条痕を施す体部破片がある(51)。東海方面からの搬入品である可能性もあるので、注意しておきたい。

鉢(22・27・52) 口縁が外反して大きく開くものである。22・27は無文である。52は櫛描直線文を3帯施す。

蓋(13) 13は甕の蓋である。つまみに穿孔がある。

ミニチュア土器(28) 直口、平底のミニチュア土器である。

底部(29～38) 29は甕の底部である。穿孔がある。30～38は壺類の底部である。

なお、出土した弥生土器の分析を行っている。分析資料は、2・42・55・66である。42は、分析の結果、生駒西麓産のものと思われた。分析点数が、4点と少ないため、多くをコメントすることはできない。ただし、42が、試料データの数値上、他の3点とは大きく異なり、胎土が別地点で採取されたことは疑いないと裏付けることができた。

(3)石器類(第76図67～94、第77図95～109、第78図110～123、第79図124～130、図版第57、第6・7表)

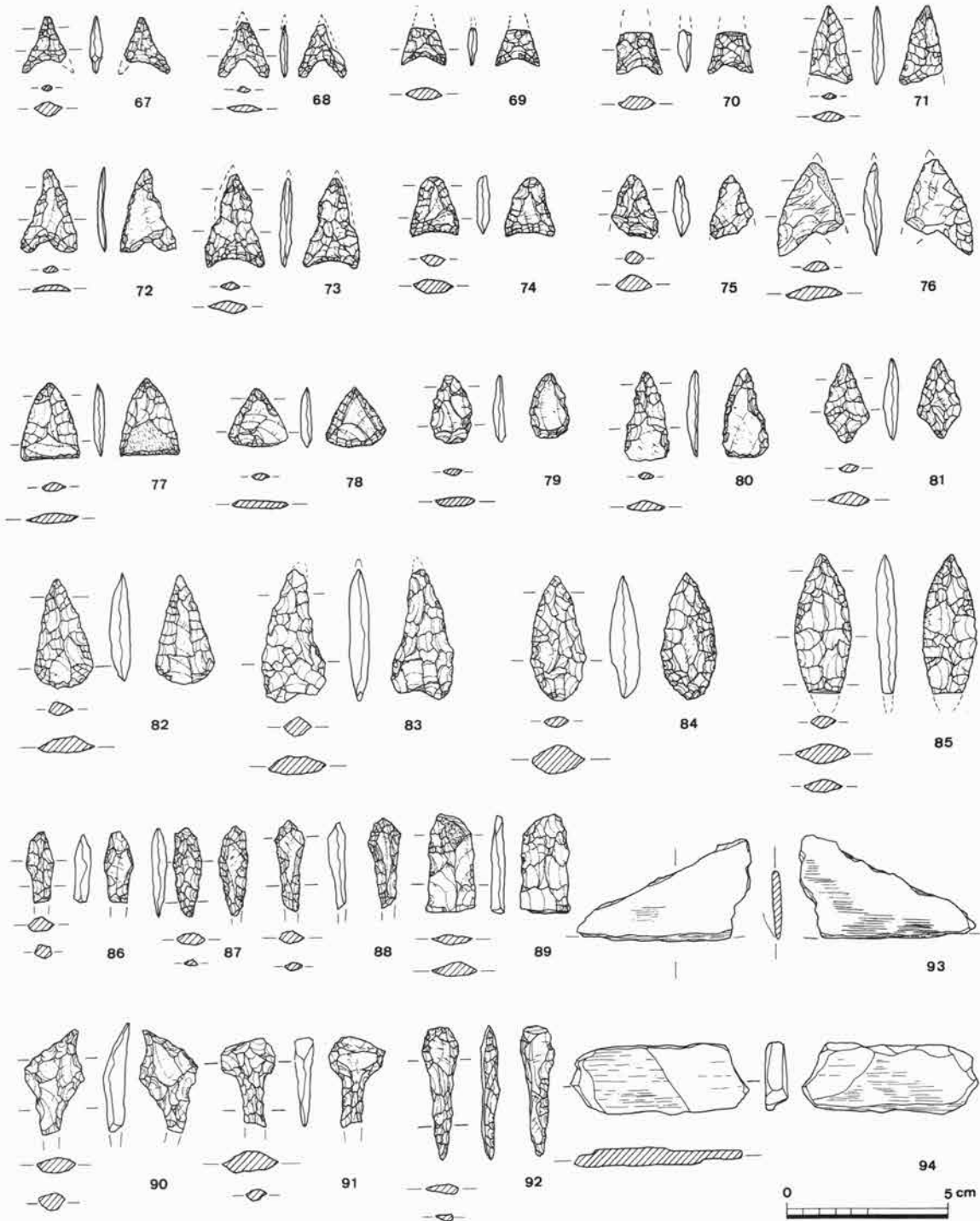
打製石器類と磨製石器類がある。この他に管玉生産に関わるものがある。石鏃ならびに剥片18点を蛍光X線による産地同定を行った。その結果、サヌカイトは二上山のものと同定した。

①打製石器類(67～92・95～109)

石鏃(67～85)、石錘(86～88・90～92)、削器(101～102・104～106)、楔形石器(95～100)、打製石斧(109)がある。107・108は剥片、103は調整のある剥片である。全てサヌカイト製である。

石鏃は、凹基式(67～76)、平基式(77)、円基式(78～80・82)、尖基式(81・85)など各種ある。





第76図 出土遺物実測図(4)

83は未製品である。

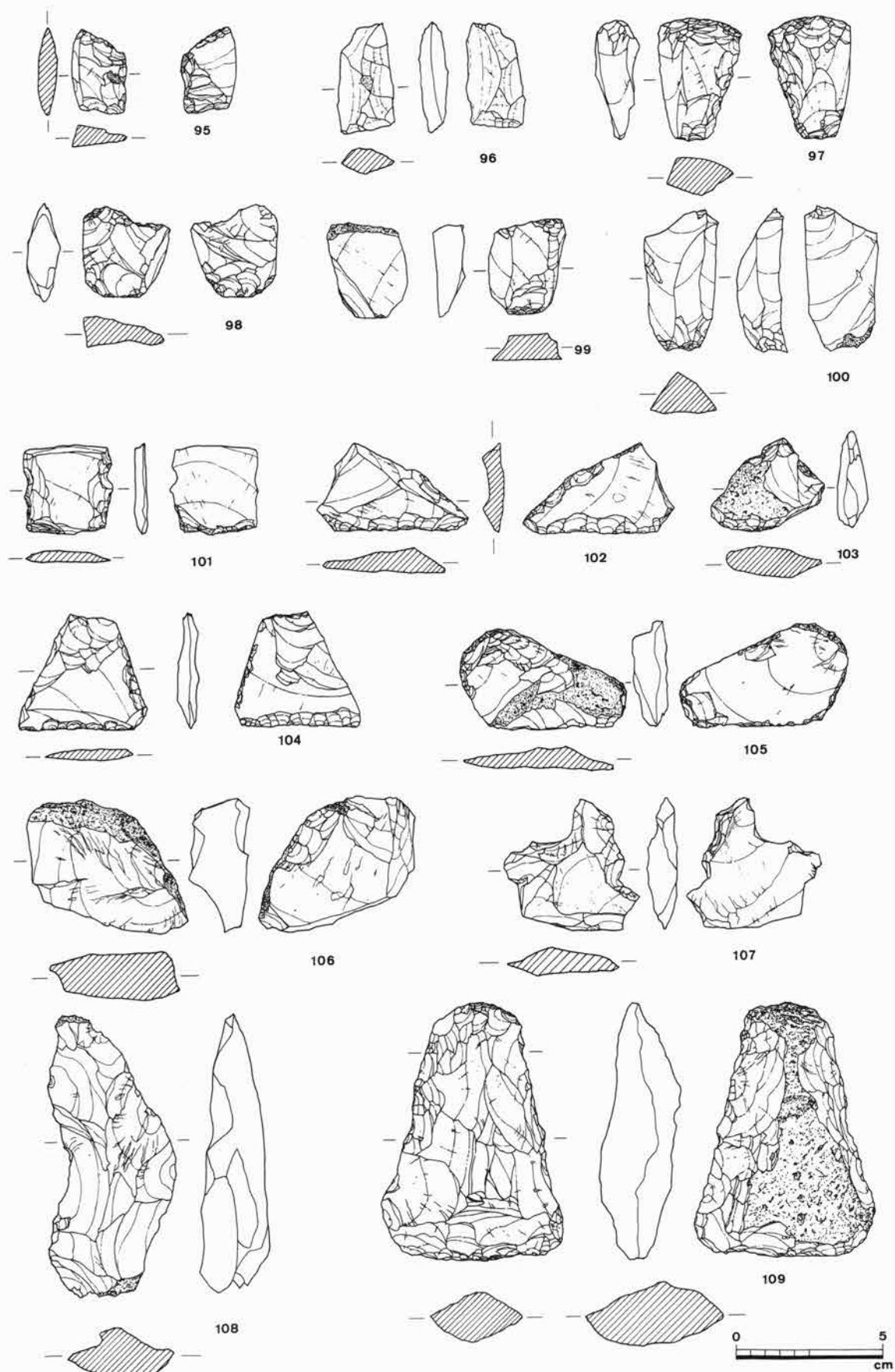
石錘は基部を明瞭に作り出す涙滴形のもの(90・91)と、棒状のもの(86~88・92)とがある。

109は自然礫面を残す大形の剥片を素材とする。周縁を両極打法により成形した後に、調整剥離を施したものである。石斧と考えたが、剥片石器素材の可能性も考えられる。

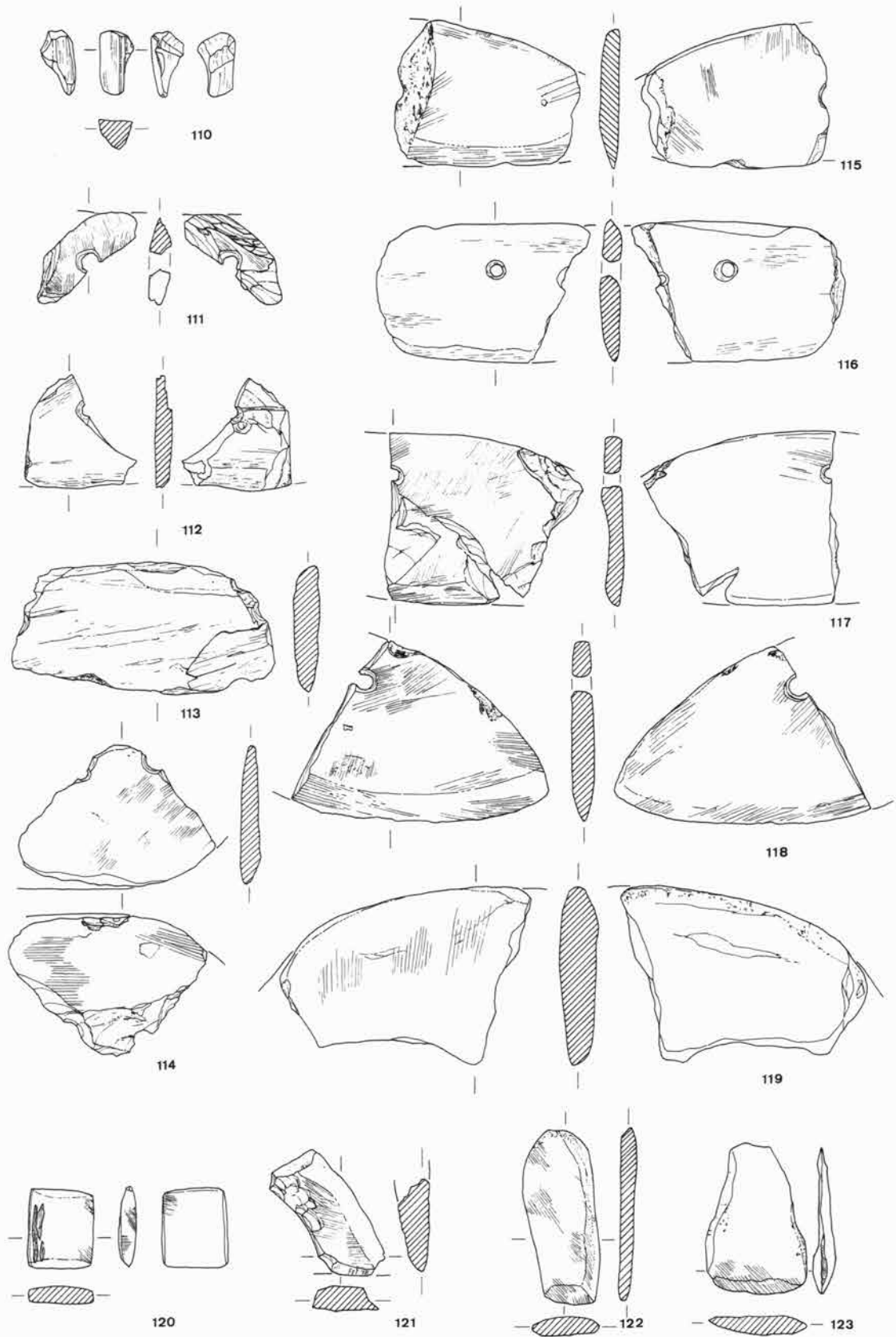
89はていねいな調整剥離がみられる未製品である。

②磨製石器類(93・111~123)

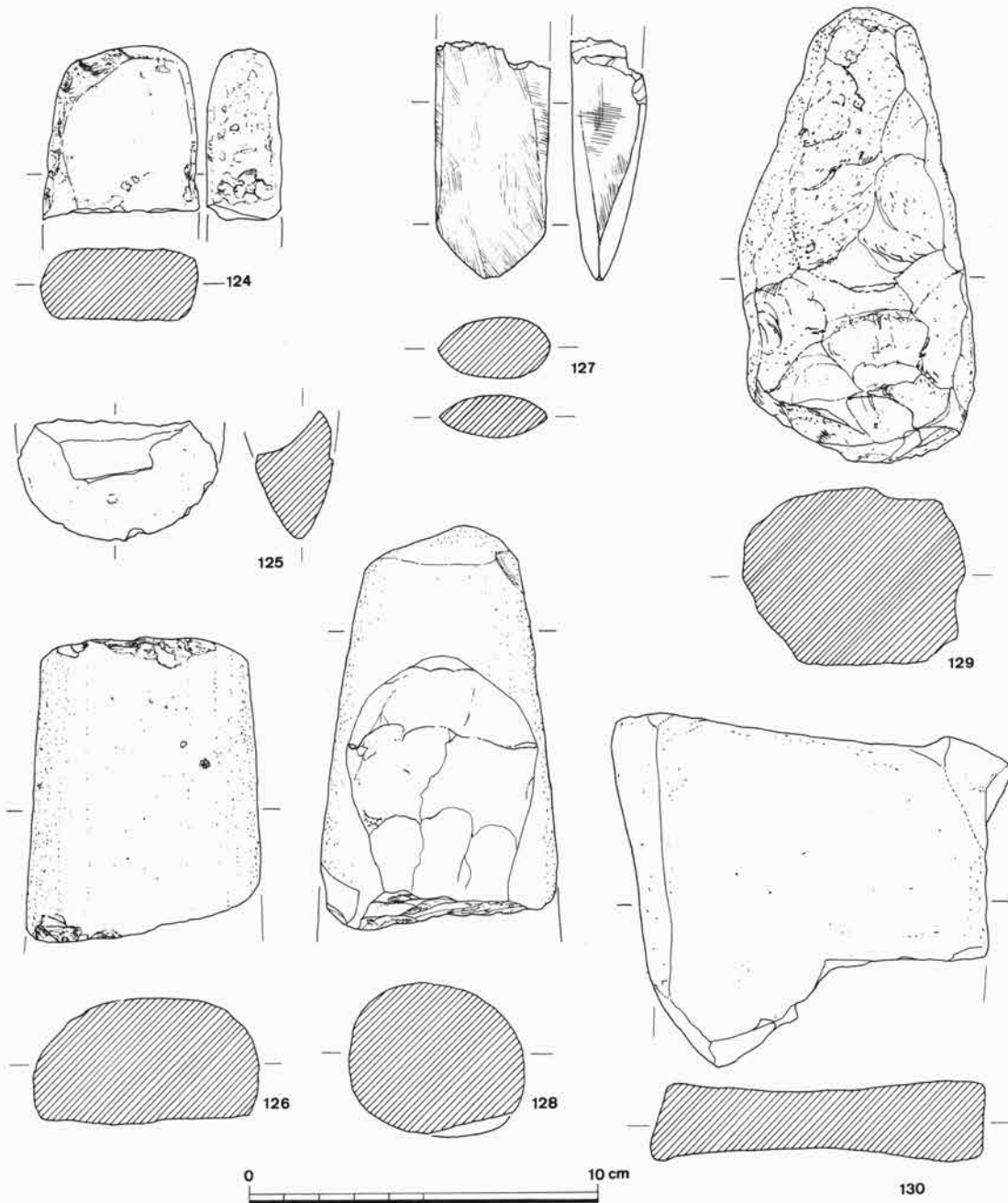
石庖丁(93・111~119) 全て破損している。杏仁形・半月形直線刃形、長方形のものがある。



第77図 出土遺物実測図(5)



第78図 出土遺物実測図(6)



第79図 出土遺物実測図(7)

杏仁形のもの118である。114もその可能性がある。半月形直線刃形を呈するものは、115・117・119である。111・112もこれに属するものだろう。

使用石材は、粘板岩(93・115～117・119)、砂岩(118)、結晶片岩系の石材(111・114)である。粘板岩は硬質で堅緻なもの(112・115・117)とやや軟質なもの(116・119)がある。118は灰白色の精緻な砂岩である。111は良質の緑泥片岩である。紀ノ川流域産とみられるものである。114は銀灰色を呈する結晶片岩である。

113は周縁に調整痕をもつ粘板岩の剥片である。石庖丁の未製品であろうか。

石斧(120～123・125～128) 太型蛤刃石斧(125・126・128)・柱状両刃石斧(127)・扁平片刃石斧(120・121)がある。121・125は刃部の一部である。126・128は基部である。このほか、扁平な

第6表 三山木遺跡出土石器一覧表(1)

番号	器種	出土地	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	石材	備考
67	石鏃	第3トレンチ包含層	1.80	(1.40)	0.45	サヌカイト	
68	石鏃	第2トレンチ黒色粘質土	(1.80)	1.55	0.25	サヌカイト	
69	石鏃	第2トレンチ黒色粘質土	(1.10)	1.40	0.35	サヌカイト	
70	石鏃	第3トレンチ包含層	(1.30)	1.40	0.45	サヌカイト	
71	石鏃	第3トレンチSD02埋土	2.50	(1.35)	0.40	サヌカイト	
72	石鏃	第3トレンチSD02埋土	2.60	1.70	0.20	サヌカイト	
73	石鏃	第3トレンチ包含層	(2.80)	1.80	0.35	サヌカイト	
74	石鏃	第2トレンチ黒色粘質土	1.80	1.50	0.40	サヌカイト	
75	石鏃	第3トレンチ包含層	2.00	(1.40)	0.50	サヌカイト	
76	石鏃	第3トレンチPit内	(3.00)	(2.00)	0.50	サヌカイト	
77	石鏃	第3トレンチSK02	2.50	1.80	0.35	サヌカイト	
78	石鏃	第2トレンチ黒色粘質土	1.85	1.85	0.35	サヌカイト	
79	石鏃	第2トレンチ黒色粘質土	2.15	1.25	0.35	サヌカイト	
80	石鏃	第2トレンチ黒色粘質土	2.85	1.45	0.35	サヌカイト	
81	石鏃	第2トレンチ黒色粘質土	2.50	1.40	0.45	サヌカイト	
82	石鏃	第2トレンチSD01埋土	3.35	1.85	0.65	サヌカイト	
83	石鏃	第3トレンチSD02埋土	(4.10)	2.00	0.65	サヌカイト	
84	石鏃	第3トレンチ包含層	3.90	1.75	0.90	サヌカイト	
85	石鏃	第2トレンチ黒色粘質土	(4.30)	1.70	0.65	サヌカイト	
86	石錘	第2トレンチ黒色粘質土	(2.20)	0.90	0.55	サヌカイト	
87	石錘	第2トレンチ黒色粘質土	(2.80)	0.90	0.50	サヌカイト	
88	石錘	第3トレンチ包含層	(2.80)	0.90	0.60	サヌカイト	
89	不明未製品	第2トレンチ茶褐色砂土	3.00	1.55	0.45	サヌカイト	
90	石錘	第2トレンチ黒色粘質土	(3.20)	1.85	0.65	サヌカイト	
91	石錘	第2トレンチ黒色粘質土	(2.70)	1.70	0.60	サヌカイト	
92	石錘	第3トレンチ包含層	4.00	1.15	0.55	サヌカイト	
93	石庖丁	第5トレンチ包含層	(5.40)	(3.20)	0.30	粘板岩	刃部破片
94	剥片	第4トレンチSD04埋土	(5.50)	(2.15)	0.80	結晶片岩	石鋸未製品か
95	楔形石器	第2トレンチ黒色粘質土	3.00	1.90	0.70	サヌカイト	
96	楔形石器	第2トレンチ黒色粘質土	3.60	1.90	0.95	サヌカイト	
97	楔形石器	第2トレンチ黒色粘質土	4.10	2.90	1.30	サヌカイト	
98	楔形石器	第2トレンチ黒色粘質土	3.00	3.00	1.10	サヌカイト	
99	楔形石器	第2トレンチ黒色粘質土	3.15	2.60	1.10	サヌカイト	
100	楔形石器	第2トレンチ黒色粘質土	4.90	2.45	1.50	サヌカイト	
101	削器	第2トレンチ黒色粘質土	3.00	3.10	0.40	サヌカイト	
102	削器	第2トレンチ黒色粘質土	2.90	5.20	0.90	サヌカイト	

第7表 三山木遺跡出土石器一覧表(2)

番号	器種	出土地	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	石材	備考
103	剥片	第2トレンチ黒色粘質土	3.90	3.10	1.05	サヌカイト	
104	削器	第2トレンチ黒色粘質土	3.90	4.30	0.70	サヌカイト	
105	削器	第2トレンチ茶褐色砂土	3.60	5.70	1.20	サヌカイト	
106	削器	第2トレンチ黒色粘質土	4.50	5.30	2.00	サヌカイト	
107	剥片	第2トレンチ黒色粘質土	4.50	4.10	1.00	サヌカイト	
108	剥片	第2トレンチ黒色粘質土	9.70	3.60	2.25	サヌカイト	
109	打製石斧	第2トレンチ黒色粘質土	8.80	6.10	2.50	サヌカイト	
110	管玉未製品	第3トレンチ包含層	(2.10)	(1.20)	(1.00)	碧玉	擦切施溝痕あり
111	石庖丁	第2トレンチ黒色粘質土	(3.20)	(2.90)	0.70	緑泥片岩	
112	石庖丁	第3トレンチ包含層	(3.70)	(3.80)	0.55	粘板岩	
113	剥片	第2トレンチ黒色粘質土	(8.70)	(4.40)	0.85	粘板岩	石庖丁未製品か
114	石庖丁	第2トレンチ黒色粘質土	(6.50)	(4.50)	0.60	結晶片岩	
115	石庖丁	第2トレンチ黒色粘質土	(6.10)	(4.80)	0.65	粘板岩	
116	石庖丁	第2トレンチ黒色粘質土	(7.10)	4.70	0.65	粘板岩	
117	石庖丁	第2トレンチ黒色粘質土	(6.40)	5.50	0.55	粘板岩	
118	石庖丁	第3トレンチ包含層	(8.50)	(5.90)	0.80	砂岩	
119	石庖丁	第2トレンチ黒色粘質土	(8.30)	(5.85)	1.30	粘板岩	
120	扁平片刃石斧	第2トレンチ黒色粘質土	2.60	2.15	0.55	砂岩	
121	扁平片刃石斧	第2トレンチ黒色粘質土	(4.10)	(1.90)	(1.00)	砂岩	
122	扁平片刃石斧	第2トレンチ黒色粘質土	5.60	2.30	0.60	砂岩	
123	扁平片刃石斧	第2トレンチ黒色粘質土	4.90	3.35	0.60	粘板岩	
124	未製品	第2トレンチ黒色粘質土	(4.80)	4.45	2.00	砂岩	磨製石斧未製品か
125	大型蛤刃石斧	第2トレンチ黒色粘質土	(3.40)	(5.80)	(2.20)	砂岩	
126	柱状両刃石斧	第2トレンチ黒色粘質土	(8.80)	6.80	(3.50)	砂岩	
127	大型蛤刃石斧	第2トレンチ黒色粘質土	(6.70)	3.25	1.75	砂岩	
128	大型蛤刃石斧	第2トレンチ黒色粘質土	(11.60)	6.80	4.25	砂岩	
129	未製品	第2トレンチ黒色粘質土	13.10	6.60	5.10	ひん岩	磨製石斧未製品か
130		第2トレンチ黒色粘質土	(10.20)	11.60	2.20	砂岩	

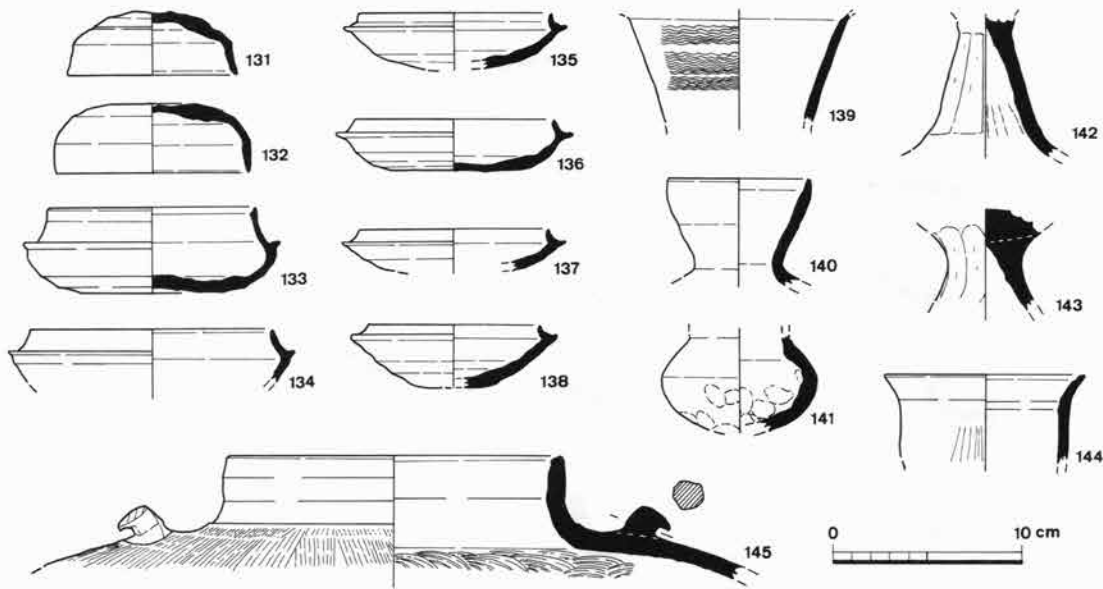
円礫の一端を刃部とする粗製の両刃石斧(122・123)、磨製石斧未製品とみられる加工石材(124・129)がある。

### ③玉作りに関連する石製品(94・110)

110は、擦切施溝分割痕跡の施された角柱体である。淡緑色の良質の碧玉製である。ていねいに研磨した後に施溝が施されている。角柱体を再分割する途中で折損した資料である。碧玉製管玉の未製品である。

94は、結晶片岩の剥片である。同種の剥片は数点検出しており、細片化した資料中に長辺の一





第80図 出土遺物実測図(8)

辺に研磨痕跡の認められるものがある。石鋸と呼ばれる玉作り関連工具で、玉材の切断に用いられるものである。94は8mmと厚みがある剥片であり、石鋸の素材と考えることができる。110と合わせ、弥生時代に本遺跡で玉生産が行われたことを示すものといえる。

(田代 弘)

#### (4) 須恵器(第80図131~140・145、第81図146~163、図版第56)

今回出土した須恵器は、古墳時代から平安時代にかけてのもので、6世紀中頃~9世紀前半に該当する。

133・149・151・154・157は、第2トレンチ包含層から、150は第3トレンチ包含層から出土した。132・134~136・148は第4トレンチSD04から、152はSD04東側の細い溝から、145・158・160・161・163は第4トレンチ包含層から出土した。131・147・156は第5トレンチSE02から、138・140・146はSK05から、137・139・153・155・159・162は包含層から出土した。

杯蓋(131・132)は、平坦な天井部と下方を向く口縁部からなる。

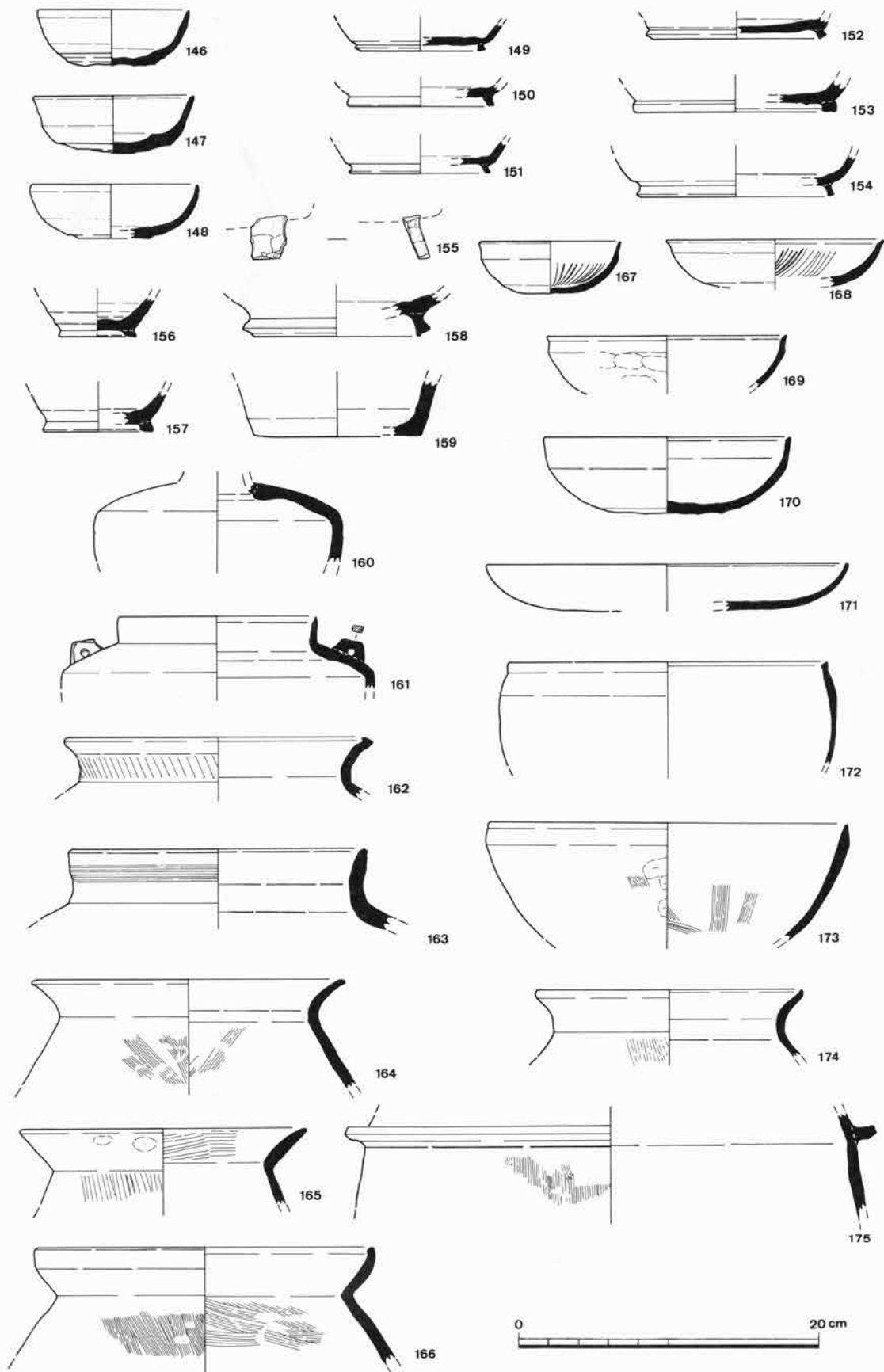
杯身(133~138)は、立ち上がり方が内上方を向く。133はその高さから見ても古い様相を示す。135・136の立ち上がりは短くなり、137・138においては器が小型となる。

壺口縁部(139)は、頸部のみで、外面に波状文が認められる。壺の頸部か。壺部は欠損しているため時期は不明であるが、杯身(133)と同時期のものと思われる。

甕(145)は、口縁部が上方に短く立ち上がる。肩部に把手を持つ。

杯(146~154) 146~148は高台を付さないもので、149~154は高台を有す。146~148は平坦な底部から内湾しながら立ち上がる。口縁端部は丸い。口径10~11cmを測り、7世紀後半~末頃のものと考えられる。149~154は、底部縁に高台を貼り付けたもので、8世紀末~9世紀初頭にかけてのものとする。

風字硯(155) 脚部のみである。硯本体については不明である。ヘラ状工具による面取りが施



第81図 出土遺物実測図(9)

されている。

壺(156～161) 156は底部の径から見て瓶子と思われる。高台を貼り付けている。157・160は、別個体のものであるが、157の底部の上部は160の体部につながるとと思われる。159は平底の壺である。158・161は、短頸壺の口縁部と底部である。

甕(162・163) 162は、口縁部が大きく外反し、端部は内上方に尖る。外面にヘラ状工具による圧痕が見られる。163は口縁部が上方に短く立ち上がる。外面にカキ目を施す。

(5)土師器(第80図141～144、第81図164～175、図版第56)

143は、第3トレンチS D02から、170は柱穴内から、165・168は包含層から出土した。141・142・164・175は、第4トレンチS D04から、166はS D04北側の東西方向の溝から、172は包含層から出土した。167・173は、第5トレンチS K05から、174はS E02から、144は包含層から出土した。169・171は第6トレンチから出土したものである。

壺(141) 球状の壺部のみで口縁部については不明である。内外面に指圧痕が多く認められる。

高杯(142・143) 脚部の一部であり、全容は不明である。外面にヘラ削りが施される。

ミニチュア土器(144) 上方に立ち上がる体部と外反する口縁部からなる。端部は丸い。全体に磨滅しているが、外面にハケ目が部分で残る。

甕(164～166・174) 体部から口縁部にかけて「く」字状に屈曲するものである。口縁端部の丸い164・165と、口縁部が内弯気味に立ち上がる166、端部を上方につまみ上げている174がある。体部内外面にはハケ目が残る。166は、7世紀に属するものと思われる。

杯(167～170) 小型で丸みのある杯167と浅い杯168内面には、暗文が密に施される。丸みのある底部からなる杯169・170は、口縁部付近でわずかに屈曲し、端部は外上方に尖る。指圧痕が部分で残る。167・168は、7世紀に属するものと思われる。

皿(171) 焼成の良好な皿であるが、全体に磨滅を受けているため、調整は不明である。大型である。

鉢(172・173) 底部は欠損しているため不明である。体部から口縁部にかけて内弯しながら上方に立ち上がる鉢172と、外上方に真っ直ぐに立ち上がる鉢173である。後者は体部内外面にハケ目が認められた。

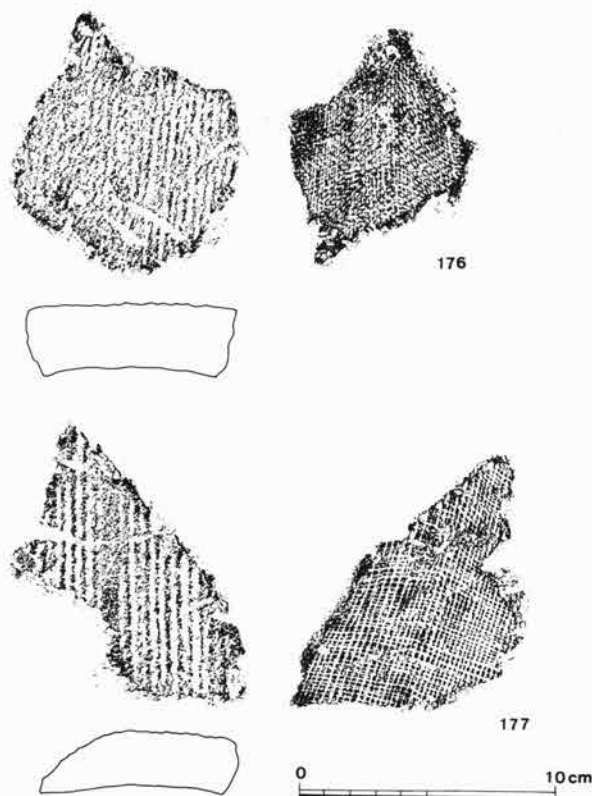
羽釜(175) 鏝部のみであり、全体の形状については不明である。鏝部下半にハケ目を施す。

(6)瓦(第82図176・177)

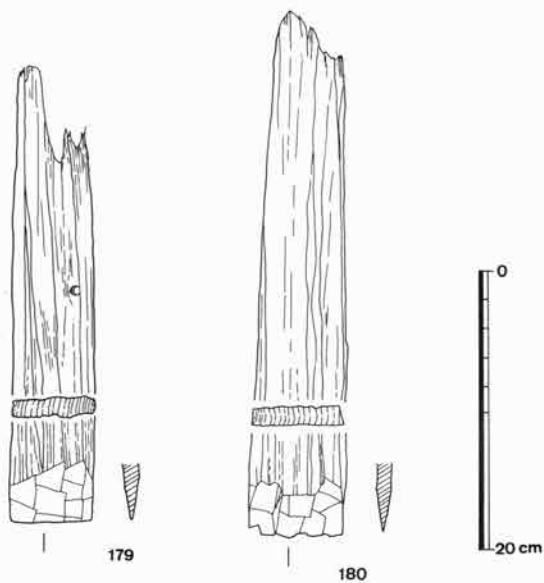
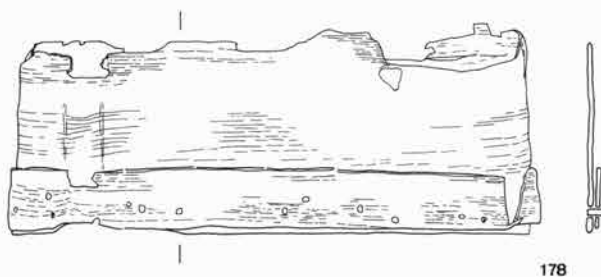
S K05埋土上層から出土したもので、破片を含めて20点ほどである。全て平瓦の破片であるため、時期の明確なものはない。いずれも凸面に縄タタキ痕が確認される。縄目には、細かいもの(176)と粗いもの(177)の大きく二者があるようだが、遺存状況の悪いものが多く、数量的な検討は行えていない。

(7)木製品(第83図178～180、図版第58)

S E01の基底部に使用されていた曲物・矢板状のものである。矢板状のものは7枚出土したが、加工痕が良好に残るもの2枚を載せた。曲物(178)の上部は腐植しており、高さは不明である。



第82図 出土遺物実測図(10)



第83図 出土遺物実測図(11)

径約35cmを測り、桜の皮で止めている。矢板状のもの(179・180)においても、上部は腐植して長さは不明である。幅約7cm・厚さ約1.7cmの板材の端部の片面を斜めに削り、加工している。

(岡崎研一)

(8)製塩土器(図版第58)

第2トレンチの第5～6層で出土したものである。細片が数十点、散発的に出土をみた。製塩土器は、いずれも厚手である。内面に布目圧痕が認められるものがある。器形は、長大な体部を有し、口縁が少し外反するものである。奈良時代後半から平安時代前期に属するものであろう。

(田代 弘)

(9)黒色土器・瓦器・土師器・その他(第84図181～191)

186・187・188・190は第2トレンチ茶褐色砂土から、191は第3トレンチ包含層から、181・183は第4トレンチ包含層から出土した。その他は第5トレンチのものであるが、182・184は柱穴内、189は溝内から出土した。このように中世関係の土器類は少量であり、出土地点もばらつきが見られた。

181～183は土師器皿で、口縁部が外上方に立ち上がる。184～187は瓦器碗である。磨滅していたため、部分的に暗文が認められた。体部上部でわずかに屈曲し、口縁端部内面には凹線がめぐる。いわゆる大和型の瓦器碗である。高台は外下方に踏ん張るものと、断面三角形のものがあ、その形態から13世紀前半と思われる。188・189は、黒

色土器である。非常に残りが悪く、この2点のみである。190・191は、土錘である。

(岡崎研一)

#### 4. ま と め

上述したように、今回の発掘調査では弥生時代、奈良時代・平安時代の遺構遺物を多数検出し、三山木遺跡に関する新たな知見を得ることができた。成果と問題点を記し、まとめとしたい。

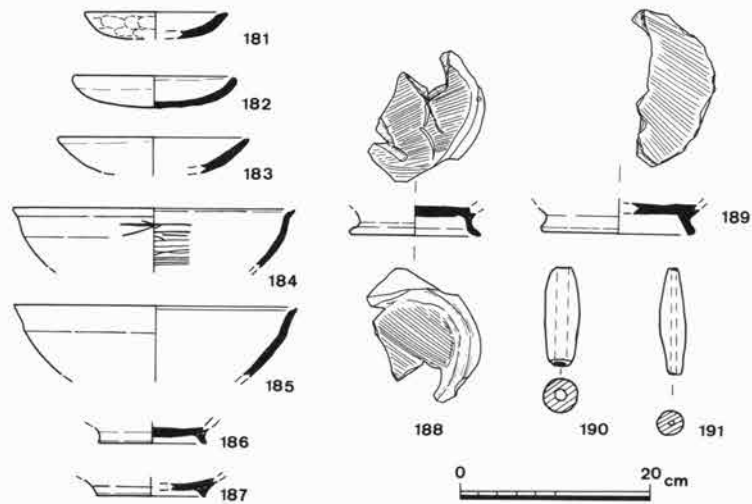
##### ①弥生時代に関する成果

**遺跡の成立時期** 以前、京田辺市教育委員会の試掘によって、三山木遺跡は弥生時代前期末頃には成立を見ていたことが確認されていた。今回の調査では、第2トレンチの黒色粘質土層下層より、少量ではあるが弥生時代前期中頃の壺・甕破片が得られ、遺跡の成立時期が遡ることが明らかになった。三山木遺跡は遺跡が南山城地域で最も早い段階に成立した弥生集落のひとつである可能性が高まったのである。

**集落の継続期間** 第2トレンチの黒色粘質土層には前期末から中期初頭にかけての土器類、石器類が多数包含されていた。土器の文様は、前期末の多条沈線文が中期初頭の櫛描文へと移行、定着する時期を示すものであり、これ以降のものは含まれていない。第3トレンチで検出した土坑(S K02など)、溝等から出土する土器類も同様の傾向を示している。このことから、本遺跡は弥生時代前期中頃に成立し、中期初頭にかけて展開したものとみたい。周辺での調査で、弥生時代中期後半期の集落の動向が明らかにされることを期待したい。

**遺物について** 山城盆地南部地域の弥生時代前期土器は資料が乏しいことが原因して、その様相はあまり解っていないのが実状である。今回得た土器資料は断片的なものに過ぎないが、具体的な一事例として重要なものである。そのひとつとして、前期の土器の中に角閃石と黒雲母を多量に含む生駒西麓産の搬入土器が目立つ点に注目したい。京田辺市域は山城盆地の南西域にあり、奈良盆地北部地域、大阪平野の北東地域との地理的な結節点に位置していることもあって、三山木遺跡では生駒山へ西麓産の胎土を有する土器の比率が高いと予想されるのである。

石器類は、打製石器類・磨製石器類など多数を検出することができた。大半は弥生時代前期から中期初頭の土器を包含する黒色粘質土層で検出したものであり、弥生時代前半期の石器資料として重要なものである。打製石器はすべてサヌカイト製で、未製品と多数の剥片の存在から、集落内で生産が行なわれていたことが解った。サヌカイトは、その一部を分析した藁科氏によると、大半が奈良県二上山産である可能性が高いとのことである。磨製石器では石庖丁材に注目したい。



第84図 出土遺物実測図 (12)

丹波帯産と見られる頁岩ないし粘板岩製、紀ノ川流域産とみられる緑泥片岩製、砂岩製など各種があり、頁岩ないし粘板岩製のものは未製品が認められた。緑泥片岩製石庖丁は明らかに搬入品である。穂摘み具である石庖丁を集落内生産しつつも他地域から入手して使用していた実体が明らかになった。

また、擦切施溝分割痕を有する碧玉製の角柱体、石鋸とその材料の存在から、碧玉製管玉生産が行なわれていたことが解った。時期を明確にできないが、包含層の状況からみて、他の遺物同様に中期初頭段階までのものと推定される。

## ②奈良・平安時代の成果

奈良時代においては、この付近は山陽道山本駅に想定される地域だが、今回の調査では道路状遺構ならびに側溝は認められなかった。しかし、第5トレンチから瓦が出土したことや、掘立柱建物跡が検出されたこと、また、一昨年度に京田辺市教育委員会が実施した試掘調査成果、ならびに二又遺跡の調査成果などから、周辺には建物などの遺構が存在していたと思われる。

今回の調査は、低丘陵端部から沖積地にかけての調査であった。このような部分の調査例は少なく、今後調査数が増えることによって当地域の歴史を明らかにするものと考え、今後の周辺地域での調査成果に期待される。

(岡崎研一・田代 弘)

- 注1 久田 亨・松尾洋次郎・奥 浩和・山岡匠平・一森雄次・長井謙治・松田早映子・川端美恵・岡本淳子・藤井矢壽子・小西麻佐子・辻 和子・川嶋満里子・今中龍子・荻野富紗子・川嶋多喜子・村本幸美・荒尾倫子
- 注2 京田辺市教育委員会「三山木地区特定土地区画整理事業地内試掘調査概報」(『京田辺市埋蔵文化財調査報告書』第26集) 1998  
京田辺市教育委員会「二又遺跡・三山木遺跡発掘調査概報」(『京田辺市埋蔵文化財調査報告書』第28集) 1999
- 注3 木津町史編纂委員会編『木津町史』資料編Ⅰ 京都府木津町 1983
- 注4 京都府編『京都府史蹟勝地調査會報告』第4冊 京都府 1922
- 注5 精華町教育委員会・(財)古代學協會『京都府(仮称)精華ニュータウン予定地内遺跡発掘調査報告書』1986
- 注6 注3に同じ
- 注7 田辺町教育委員会「古屋敷遺跡・飯岡横穴発掘調査報告書」(『田辺町埋蔵文化財調査報告書』第1集) 1981  
田辺町教育委員会「飯岡遺跡第5次発掘調査概報」(『田辺町埋蔵文化財調査報告書』第17集) 1994  
森 浩一編「田辺天神山弥生遺跡」(『同志社大学文学部考古学調査記録』第5号 同志社大学文学部考古学研究室) 1976
- 注8 注7に同じ
- 注9 京都府編『京都府史蹟勝地調査會報告』第2冊 京都府 1919
- 注10 伊野近富「興戸遺跡第11次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第47冊) (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター 1992
- 注11 足利健亮『日本古代地理研究』大明堂 1984



# 圖 版

図版第1 赤坂今井墳丘墓・今井城跡・今井古墳

(1)調査地遠景（東から）



(2)調査地遠景（北から）



(3)頂部遺構検出状況  
（垂直、空中写真）

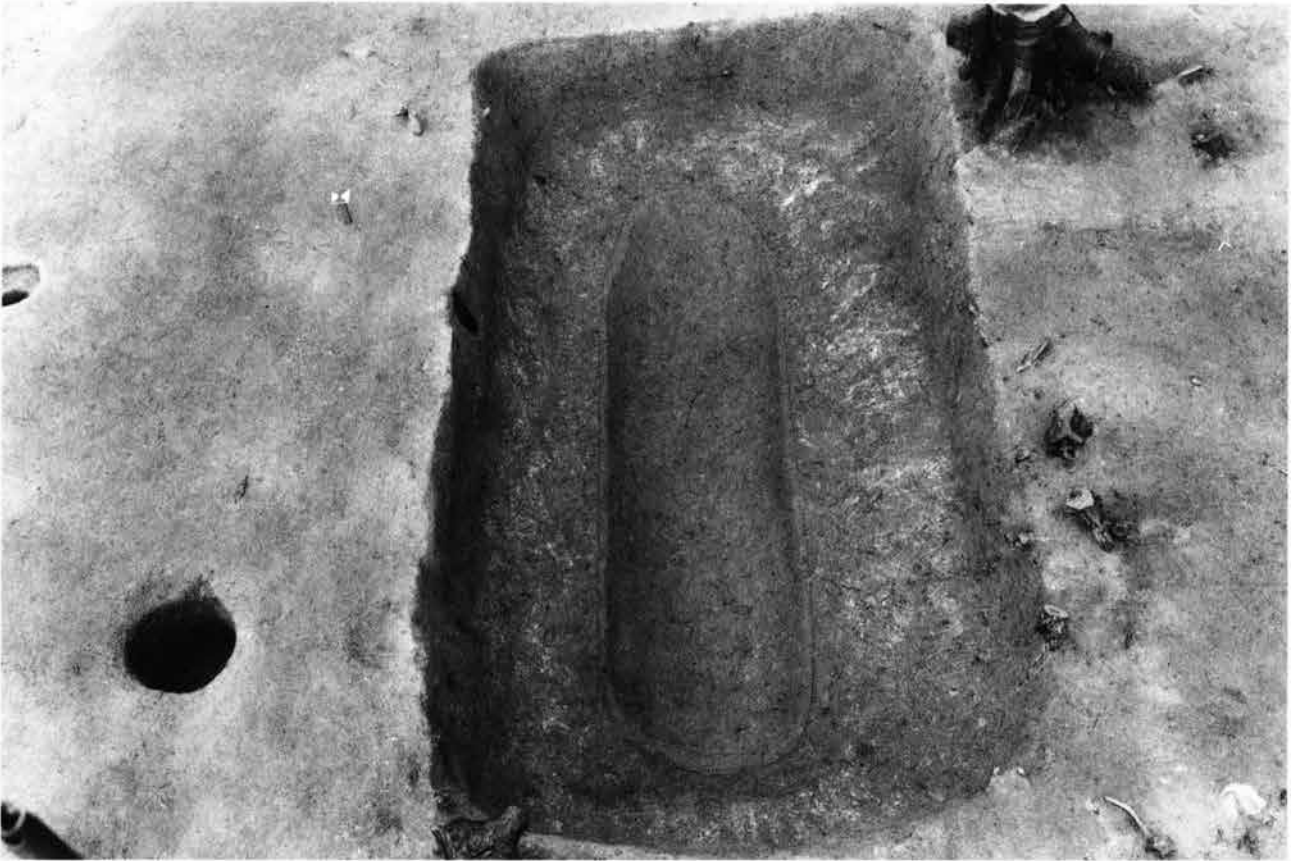




(1)頂部調査前風景（北から）



(2)墳丘墓主体部（第1～6）検出状況（北から）



(1)墳丘墓第2主体部（北から）



(2)墳丘墓第3主体部（北から）



図版第4 赤坂今井墳丘墓・今井城跡・今井古墳



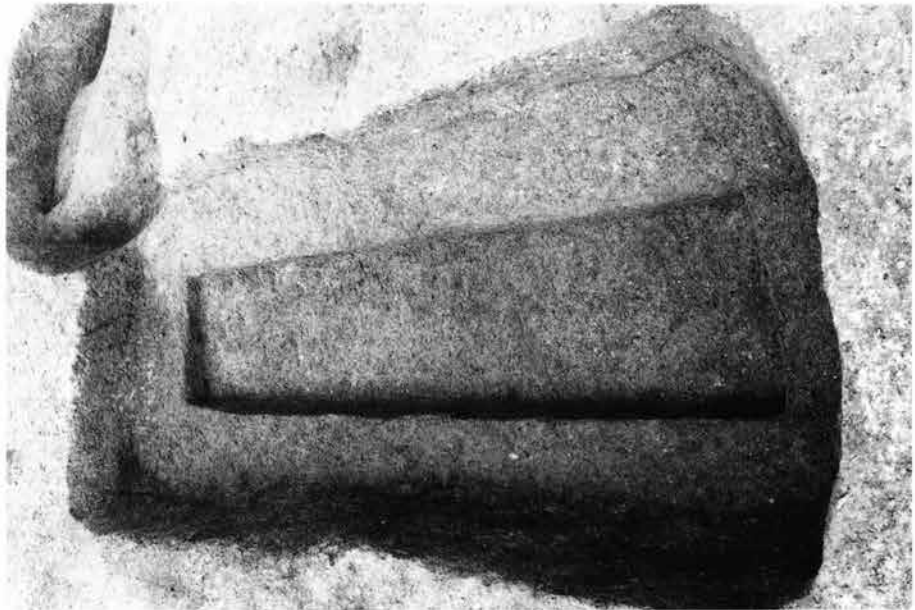
(1)墳丘東側裾部調査風景（北から）



(2)墳丘東側裾部調査風景（南から）



(1) 墳丘墓第7主体部 (南から)



(2) 墳丘墓第10主体部 (南から)

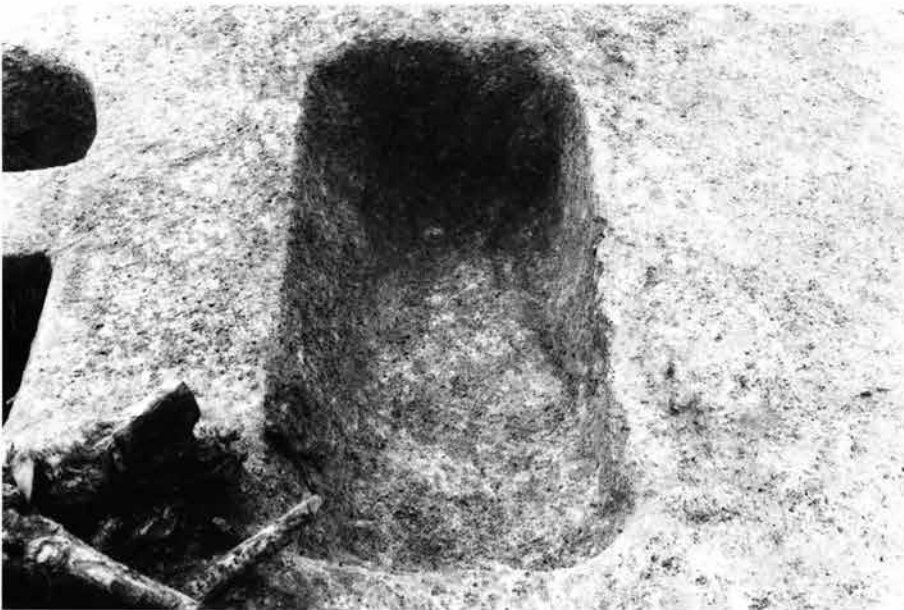


(3) 墳丘墓第12主体部 (東から)





(1)墳丘墓第8主体部（北から）



(2)墳丘墓第9主体部（東から）



(3)墳丘墓第13主体部（東から）



(1)墳丘墓第11主体部（東から）



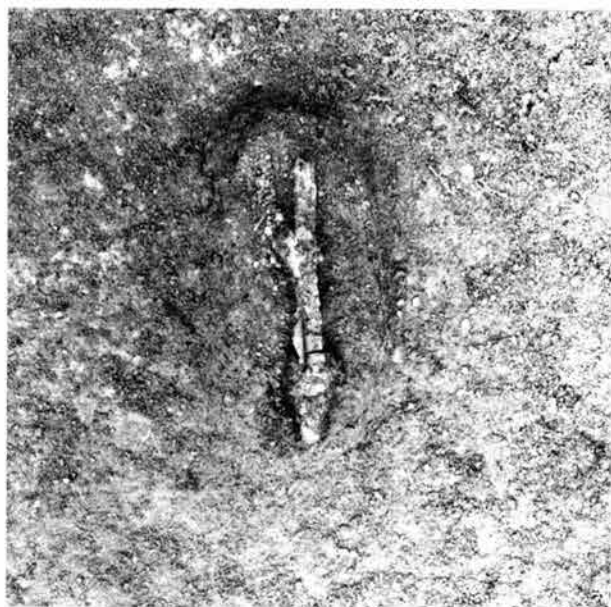
(2)墳丘墓第11~13主体部完掘状況（東から）



(1) 弥生土器甕 (第3主体部出土)



(2) 弥生土器甕断片  
(第12主体部出土)



(3) 鈍 (第11主体部出土)



(1)今井城跡櫓跡・柱穴検出状況  
(西から)



(2)今井城跡竪穴状遺構土層断面  
(北から)



(3)今井城跡竪穴状遺構完掘状況  
(南から)





12-1



12-2



12-5



12-4



12-3



12-6

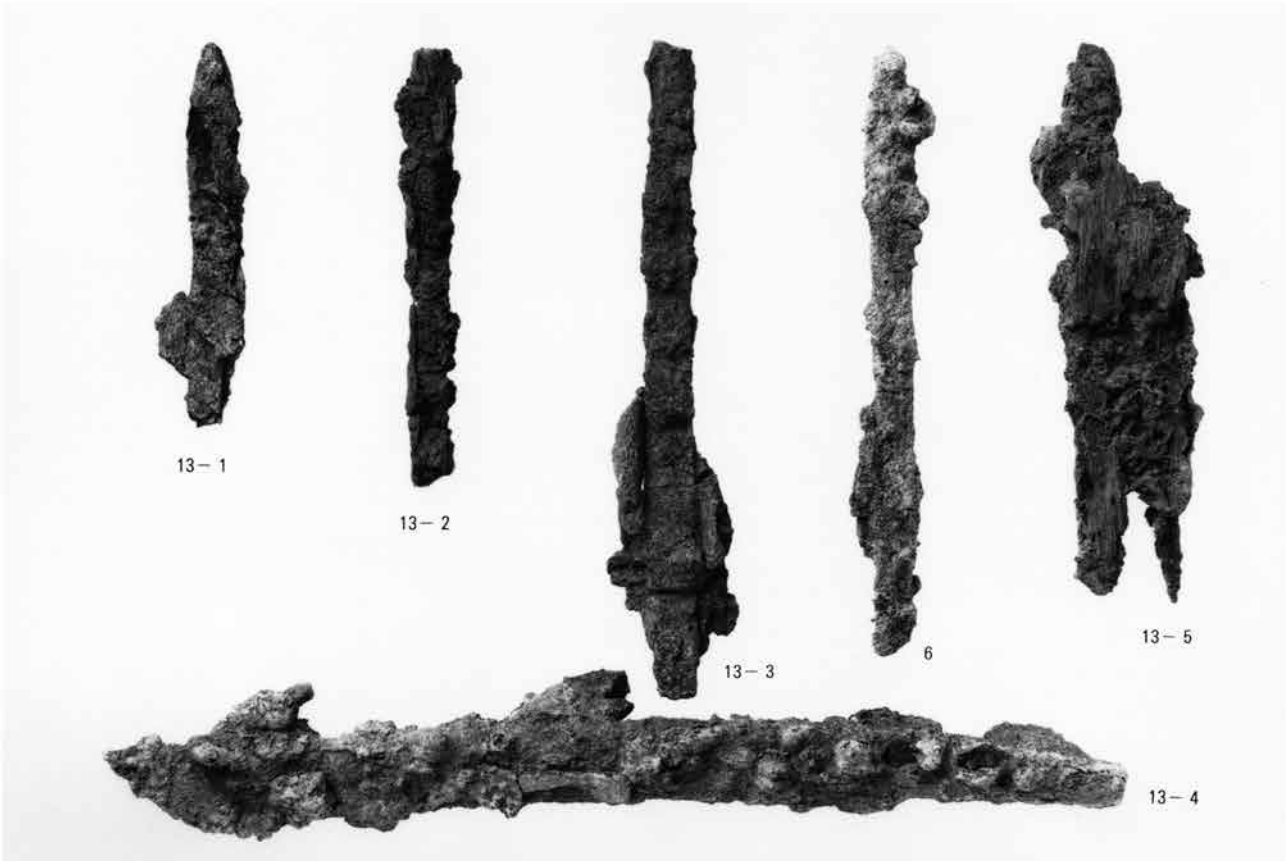


12-7



8

出土遺物（8は今井古墳出土）



(1)出土遺物（6は第8主体部出土）



(2)出土遺物、裏面





(1)墳頂部埋め戻し状況（北から）



(2)墳丘北側裾部埋め戻し状況（南東から）



板石敷遺構全景（西から）

図版第14 福知山城跡



(1)土層断面（東から）



(2)玉石敷遺構（西から）



(3)板石敷遺構全景（西から）



(1)板石敷遺構部分1 (北から)

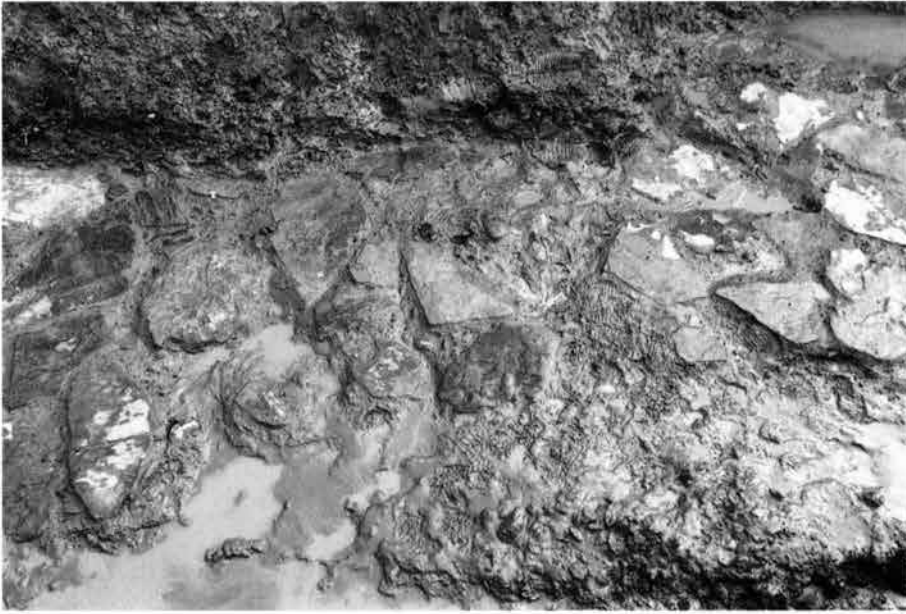


(2)板石敷遺構部分2 (北から)

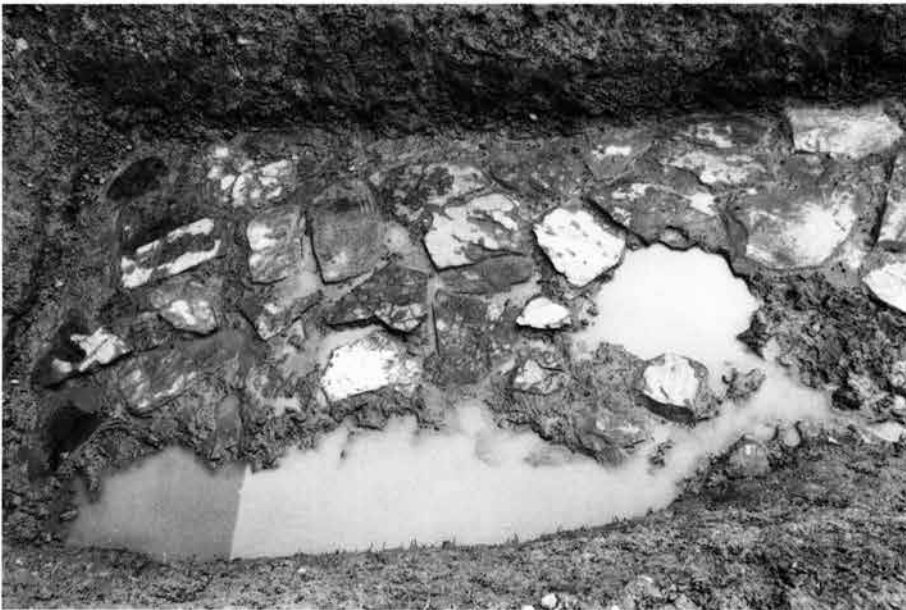


(3)板石敷遺構部分3 (北から)





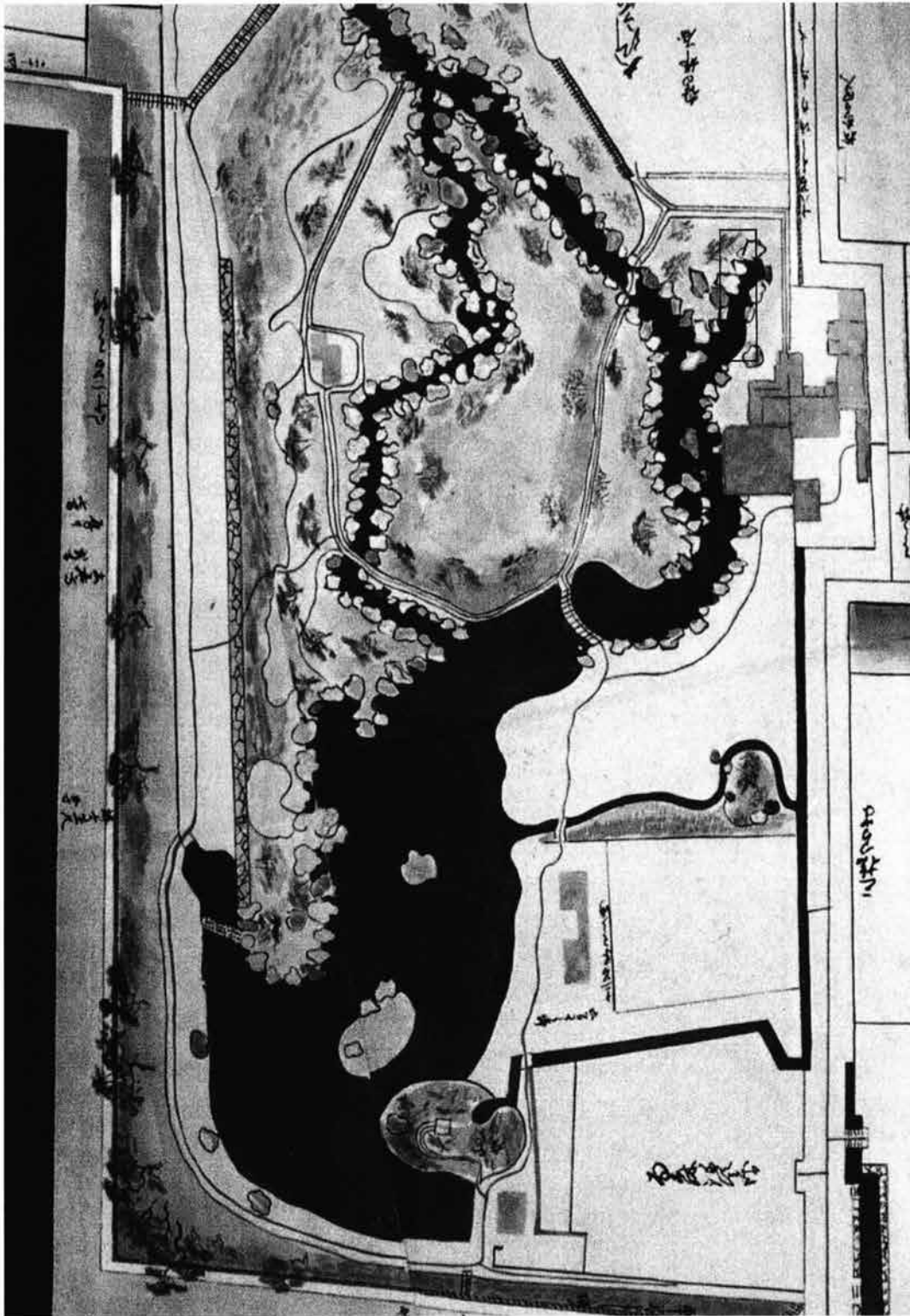
(1) 板石敷遺構部分4 (北から)



(2) 板石敷遺構部分5 (北から)



(3) 板石敷遺構全景 (南から)

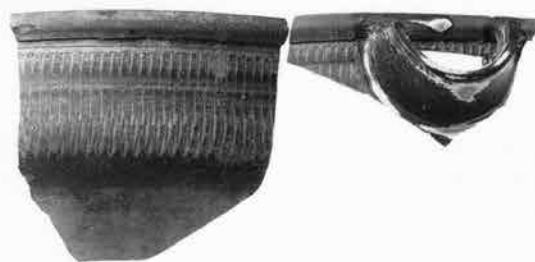


丹州福知山城絵図 御泉水部分（黒枠はおよその調査地点、島原市図書館蔵）





1



6



1



7



a



8



3



9

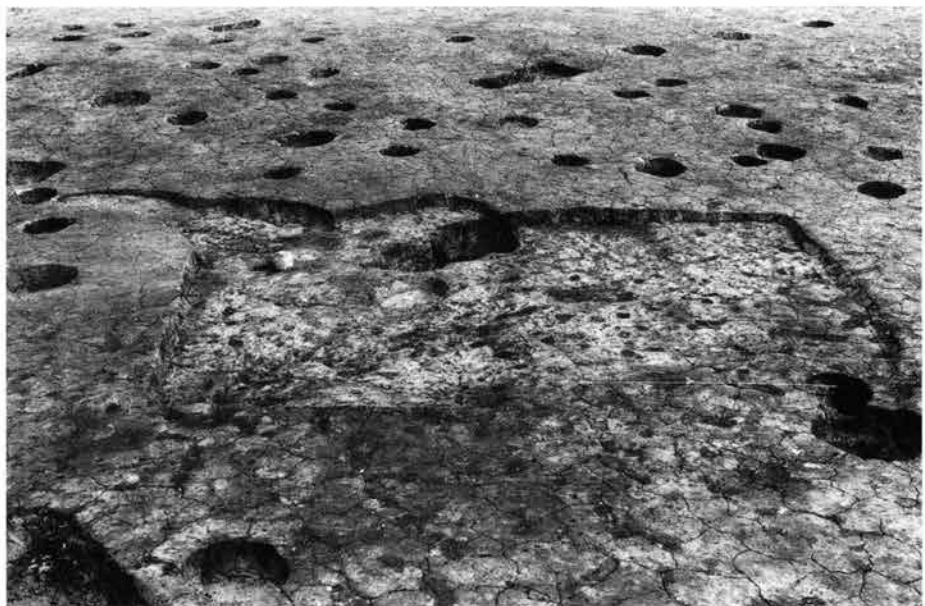
図版第19 東山遺跡



(1)東山遺跡遠景（南西から）



(2)第1トレンチ全景（北から）



(3)第1トレンチSH01（北西から）



(1)第1トレンチSH02(東から)



(2)第6トレンチ(北から)



(3)調査風景



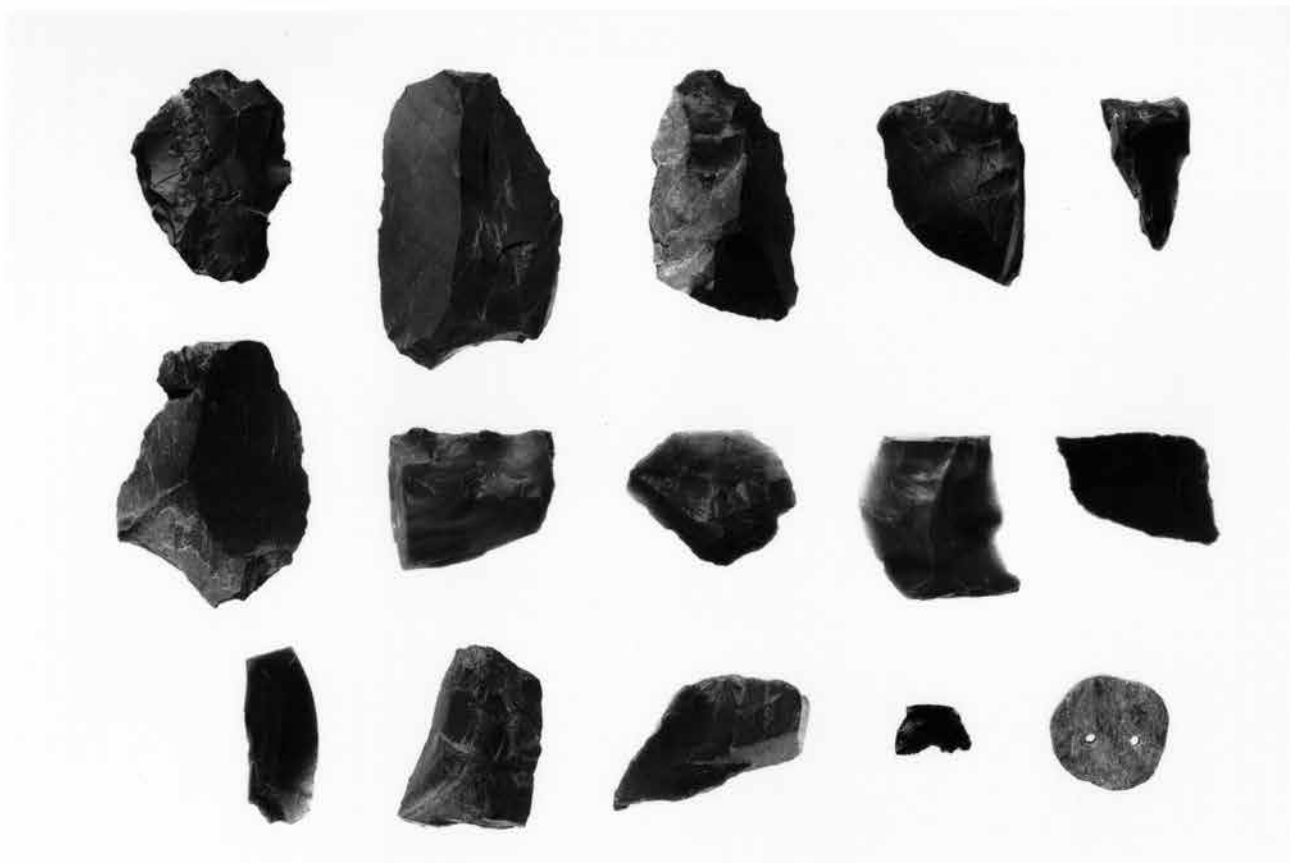
(1)第3トレンチ全景(東から)



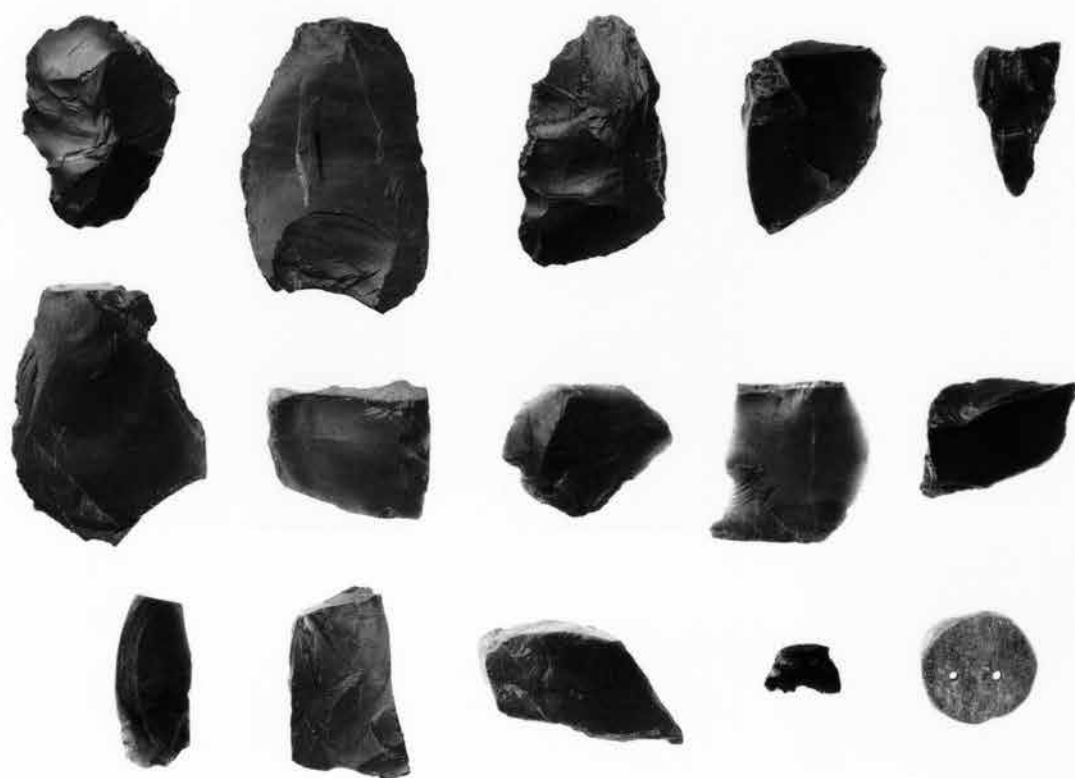
(2)第4～6トレンチ全景(南から)



(3)東山遺跡出土遺物



(1)東山遺跡出土石製遺物

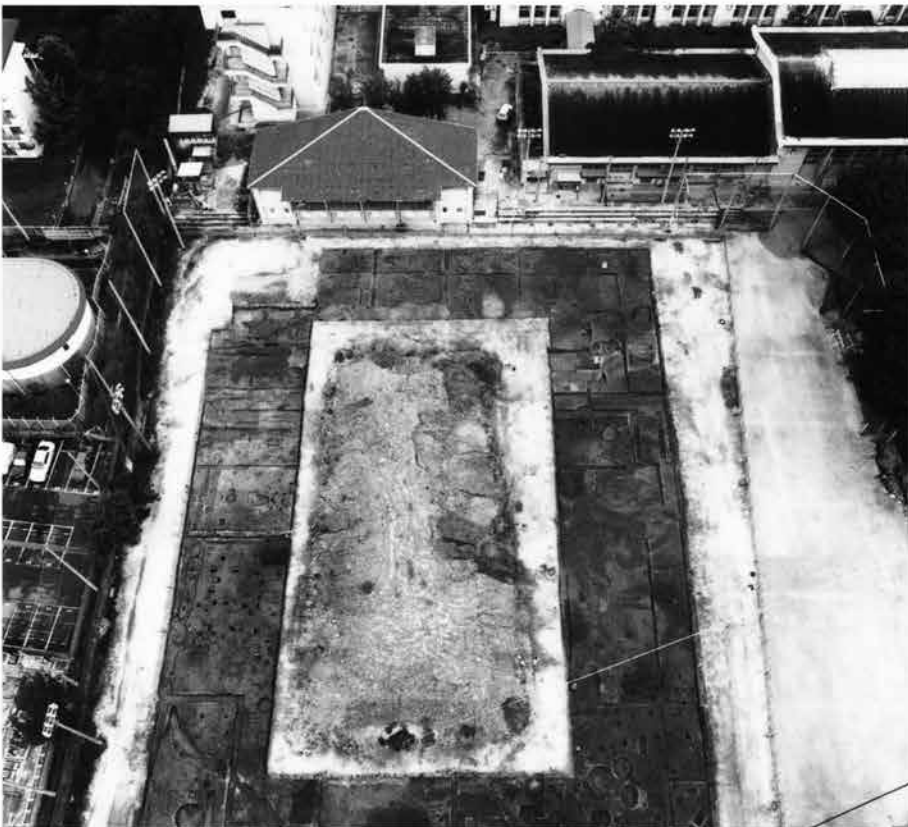


(2)東山遺跡出土石製遺物（裏面）





(1)門跡S B14 (上空から・上が北)



(2)調査トレンチ全景 (上空・南から)





(1)調査前風景 (南西から)



(2)重機掘削作業 (南から)



(3)人力掘削作業風景 (南東から)

(1)北側トレンチ全景（東から）



(2)溝 S D99010（西から）

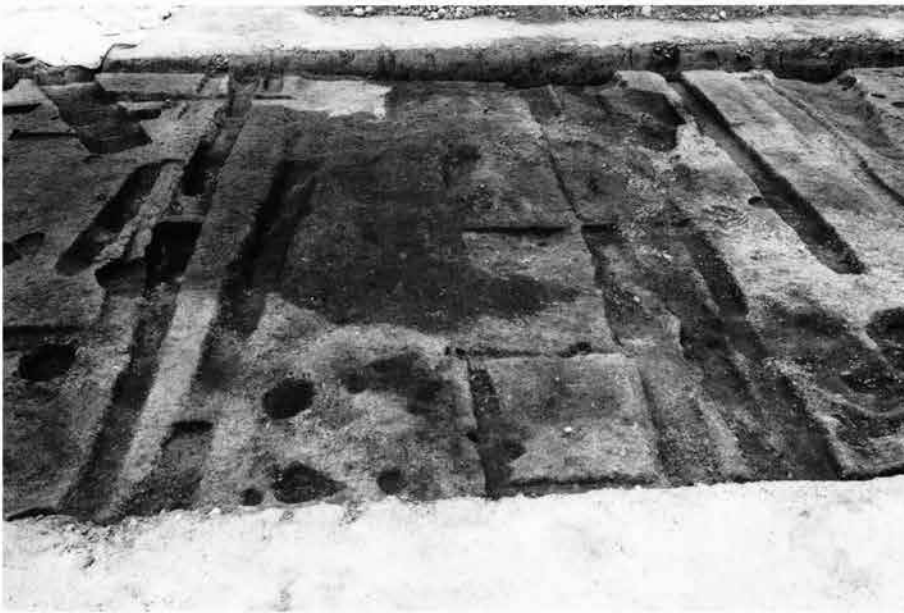


(3)溝98014（東から）

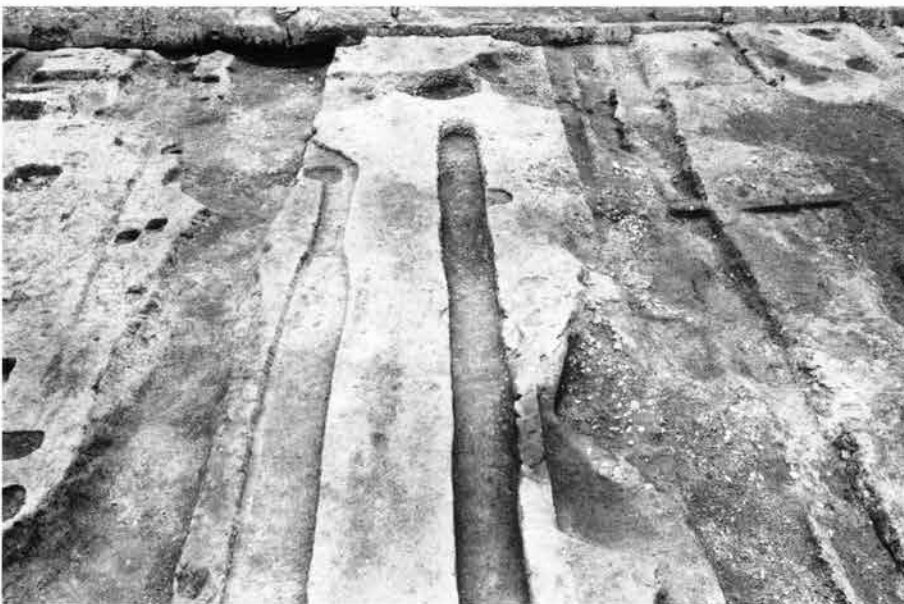




(1)九町南側築地推定地と  
溝 S D99010（西から）

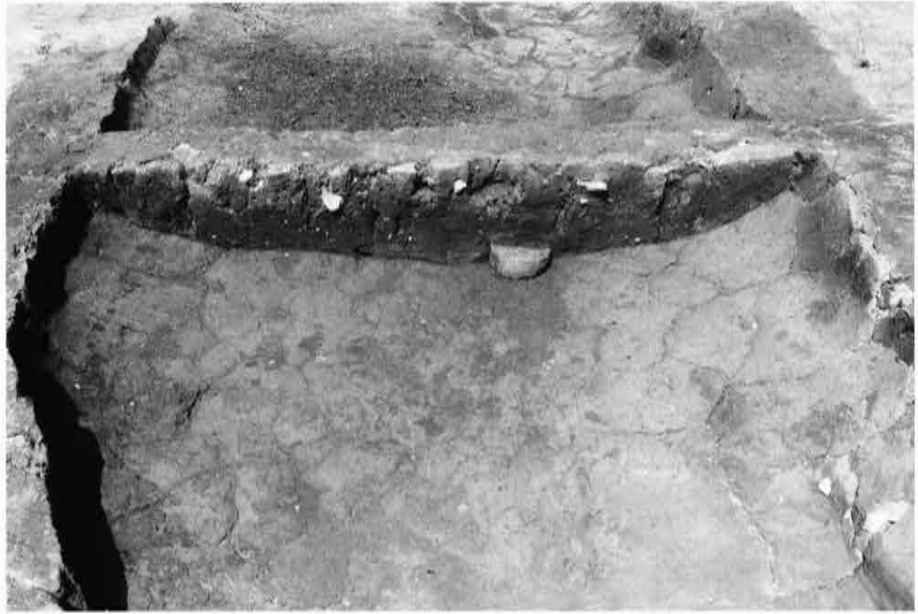


(2)鷹司小路推定地（西から）



(3)十町北側築地推定地（東から）

(1)土杭S K99065（東から）



(2)土杭S K99065出土軒丸瓦  
（東から）



(3)土杭S K99065出土土器  
（東から）







(1)溝 S D99010・焼土および瓦  
出土状況（北から）



(2)溝 S D99010土器出土状況  
（北から）



(3)溝 S D98117土器出土状況  
（南から）

(1)門跡S B14掘削作業風景  
（西から）



(2)門跡S B14全景（西から）



(3)東側トレンチ全景（北から）







(1)門跡S B14柱穴1断面（北から）



(2)門跡S B14柱穴2（北東から）



(3)門跡S B14柱穴3（南東から）



(1)遺構掘削作業風景 (南東から)



(2)溝 S D99020完掘状況 (東から)



(3)門跡 S B14柱穴検出状況  
(西から)



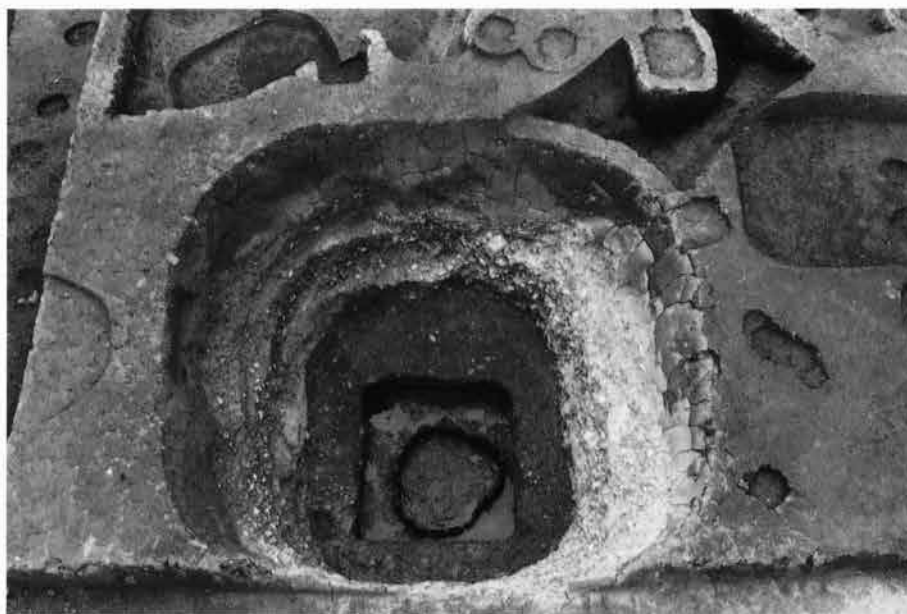
(1)掘立柱建物跡S B 1・2 検出  
状況（北から）



(2)掘立柱建物跡S B 1・2 検出  
状況（西から）



(3)掘立柱建物跡S B 4 全景  
（南から）



(1)井戸S E98058全景（東から）



(2)井戸S E98058断面（南から）



(3)井戸枿刻印接写（南から）





(1)西側トレンチ掘削作業風景  
(南から)



(2)溝S D98117全景 (北西から)



(3)東側トレンチ南部全景 (南から)



(1)南東隅部遺構検出状況（東から）



(2)空中撮影作業風景（南東から）



(3)現地説明会風景（西から）





1



2



3



7



9



21



22



32



33



34



35



85



37



96



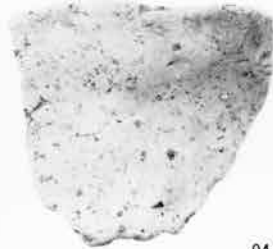
88



90



91



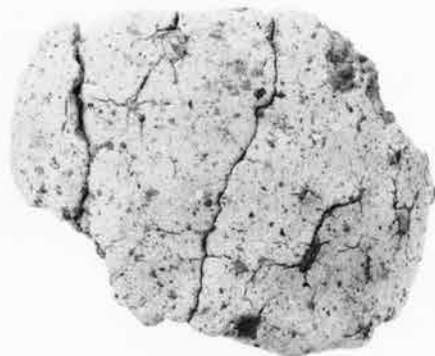
94



92



93



95



45



214



133



132



134



136



106



112



121



129



122



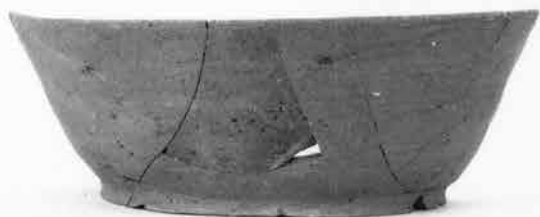
130



124



131



143



145



144



146



148



173



156



180



168



192



185



186



190



183



177



175



181



176



182



178



184



174



195



196



210



202



211



206



212



209



217



215



218



219



220



221



223





222



224



225



226



227



228



229



231



232



239



233



235



237



231



232



239



233



235



237



241



243



241



243



248



246



250



251



248



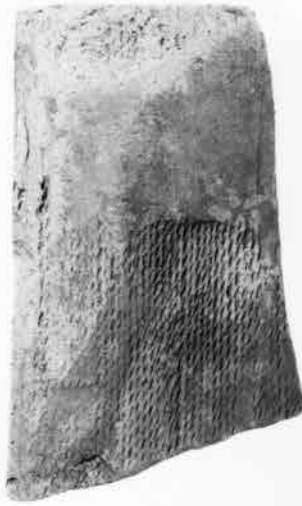
246



250



251



252



253



258



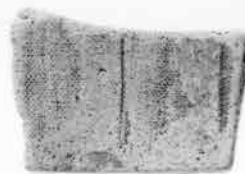
257



252



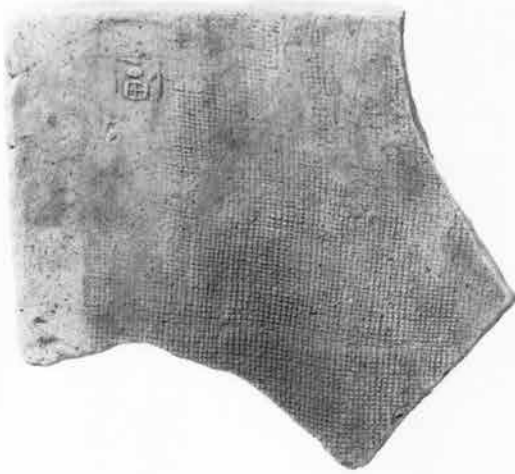
253



258



257



259



259



265



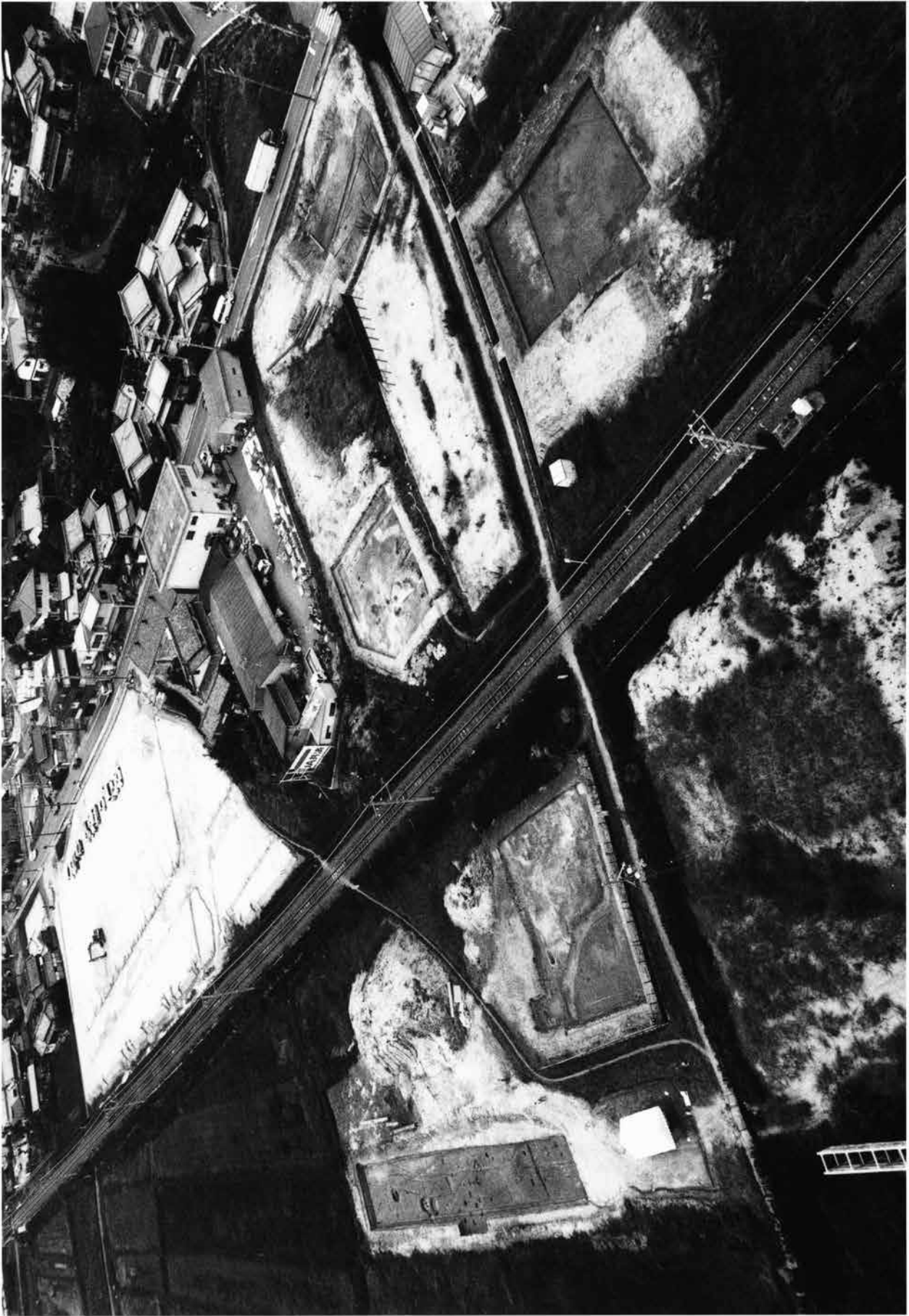
277



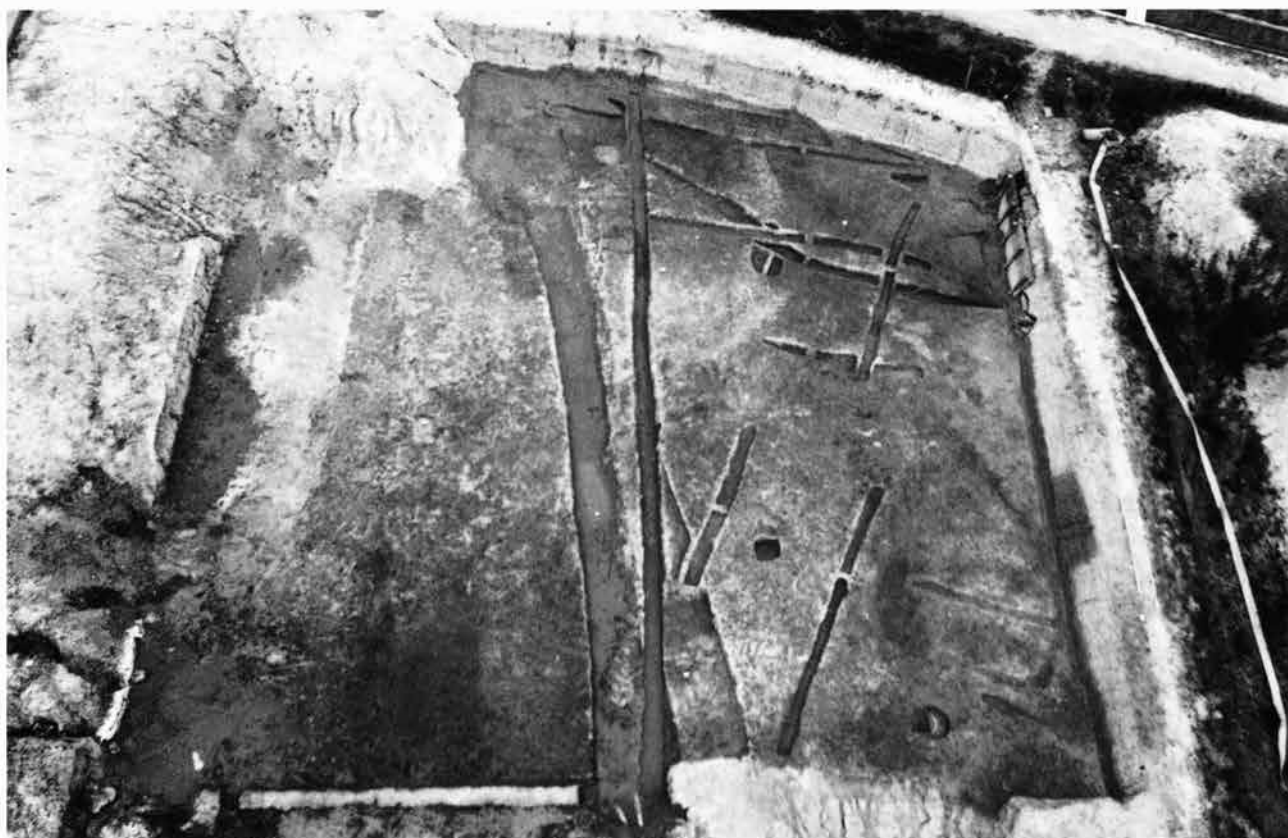
278



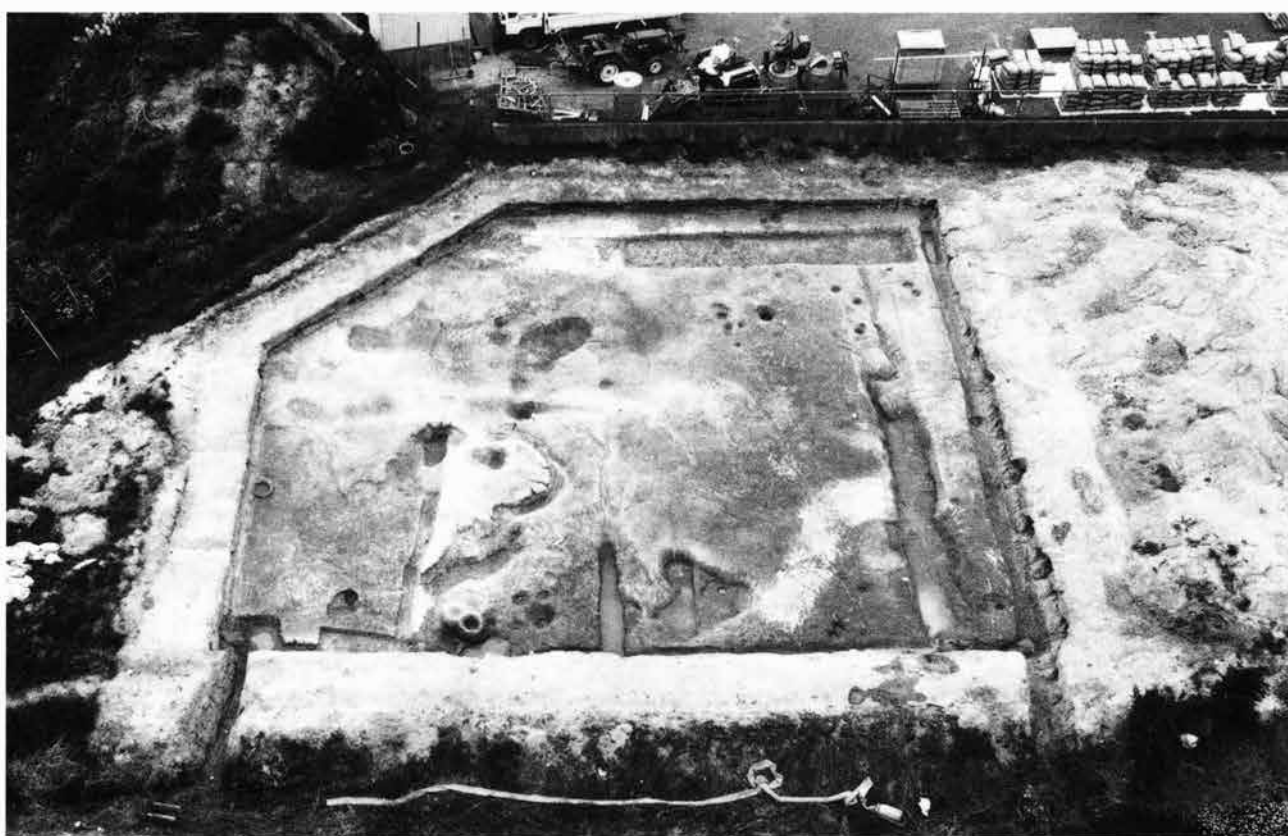




三山木遺跡全景（北東から）



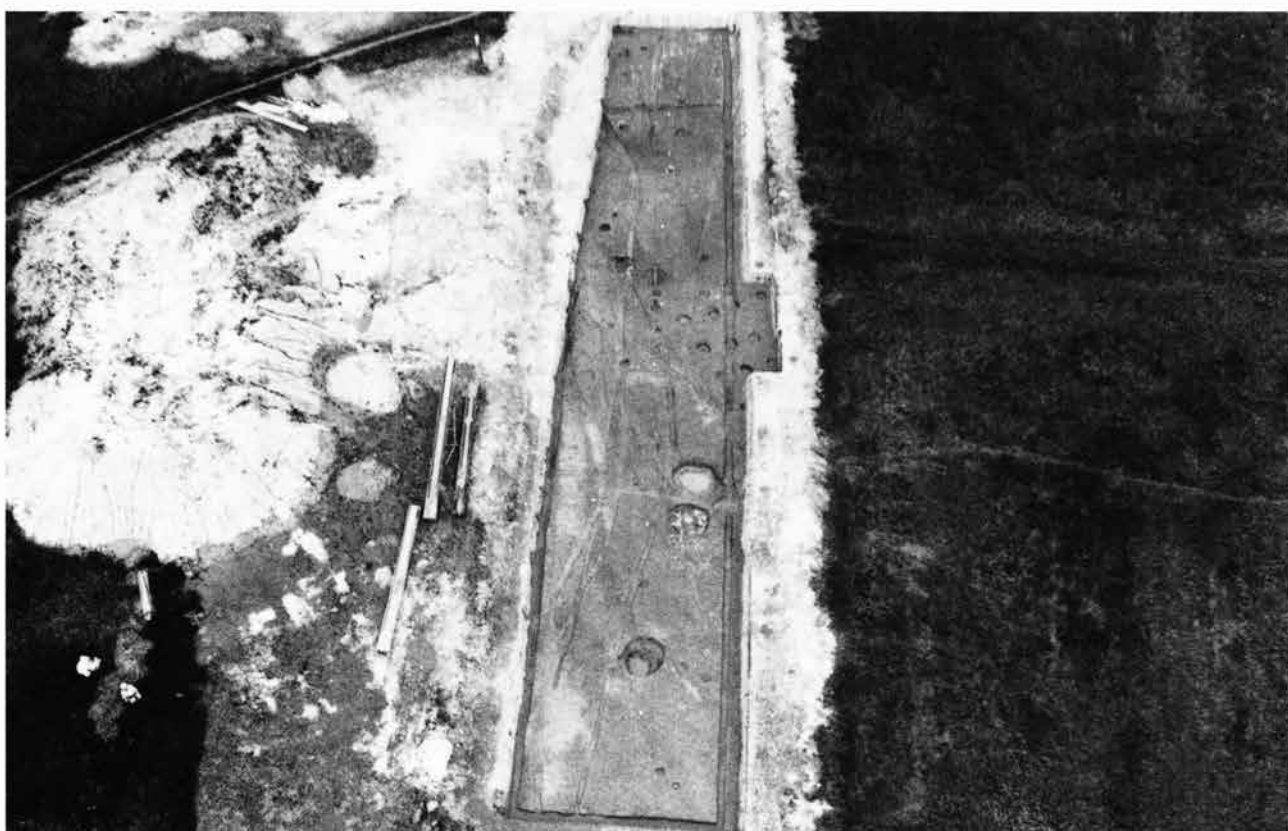
(1)第2トレンチ全景(南から)



(2)第3トレンチ全景(北から)



(1)第4トレンチ全景(南から)

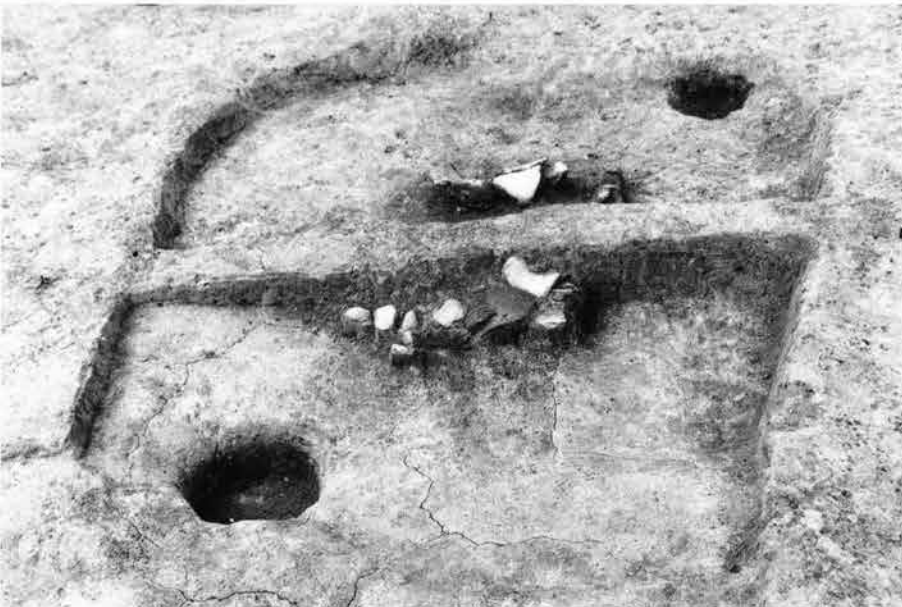


(2)第5トレンチ全景(南から)

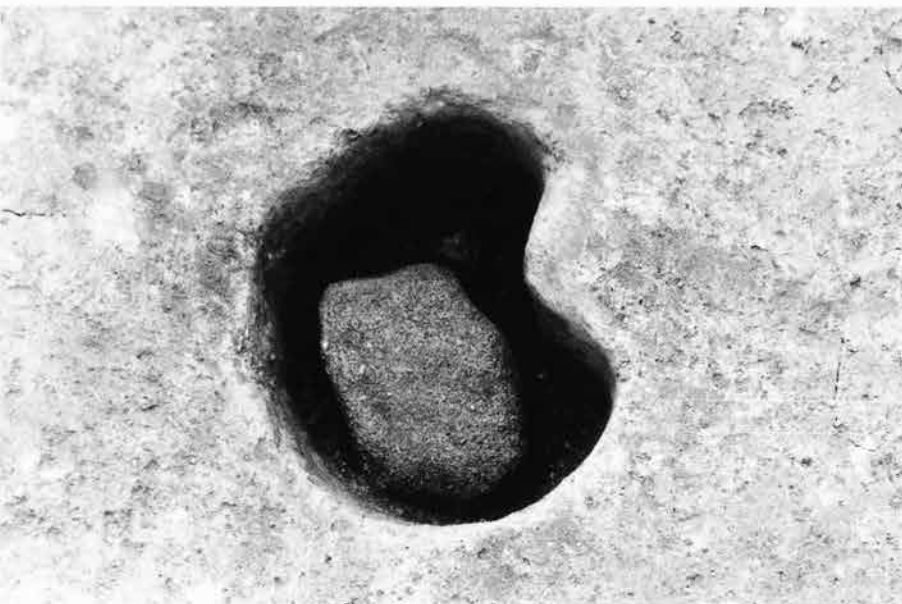




(1)第3トレンチ近景(西から)



(2)S K01遺物出土状況(西から)



(3)サヌカイト片埋納穴(東から)

図版第53 三山木遺跡第2次



(1)第4トレンチ近景(南から)



(2)S B01・02、S E01・02近景  
(南から)



(3)S B01近景(南から)

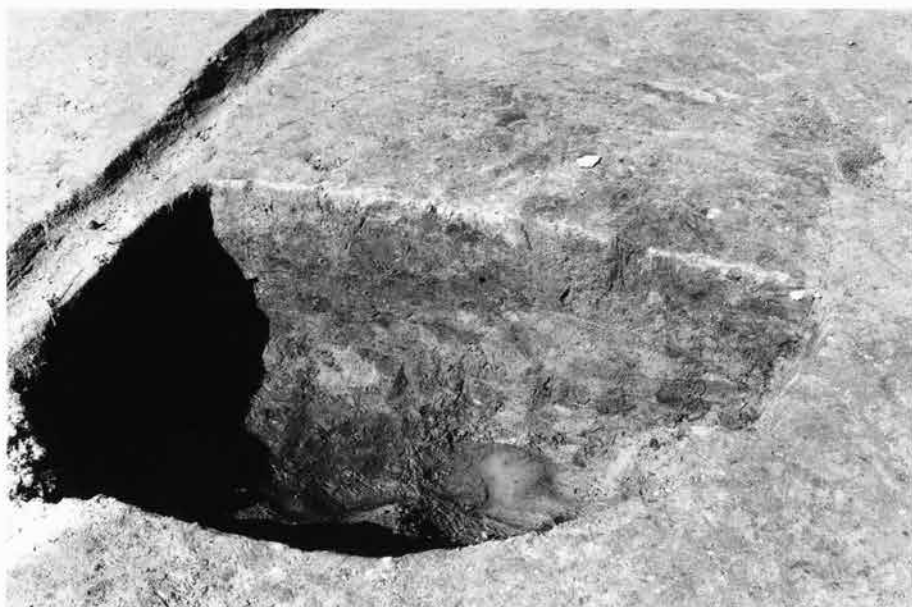




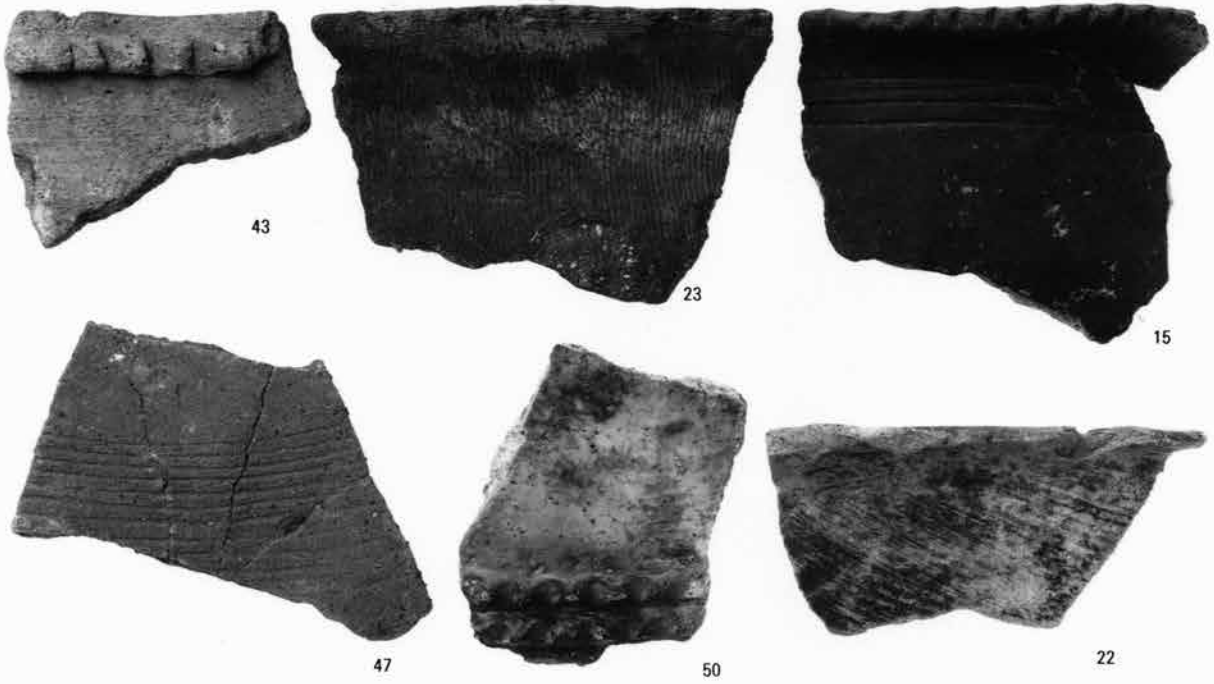
(1) S E01近景 (南から)



(2) S E01断ち割り状況 (南から)



(3) S E03近景 (南から)



(1)出土遺物(1)



(2)出土遺物(2)



133



167



138



170



136



171



147



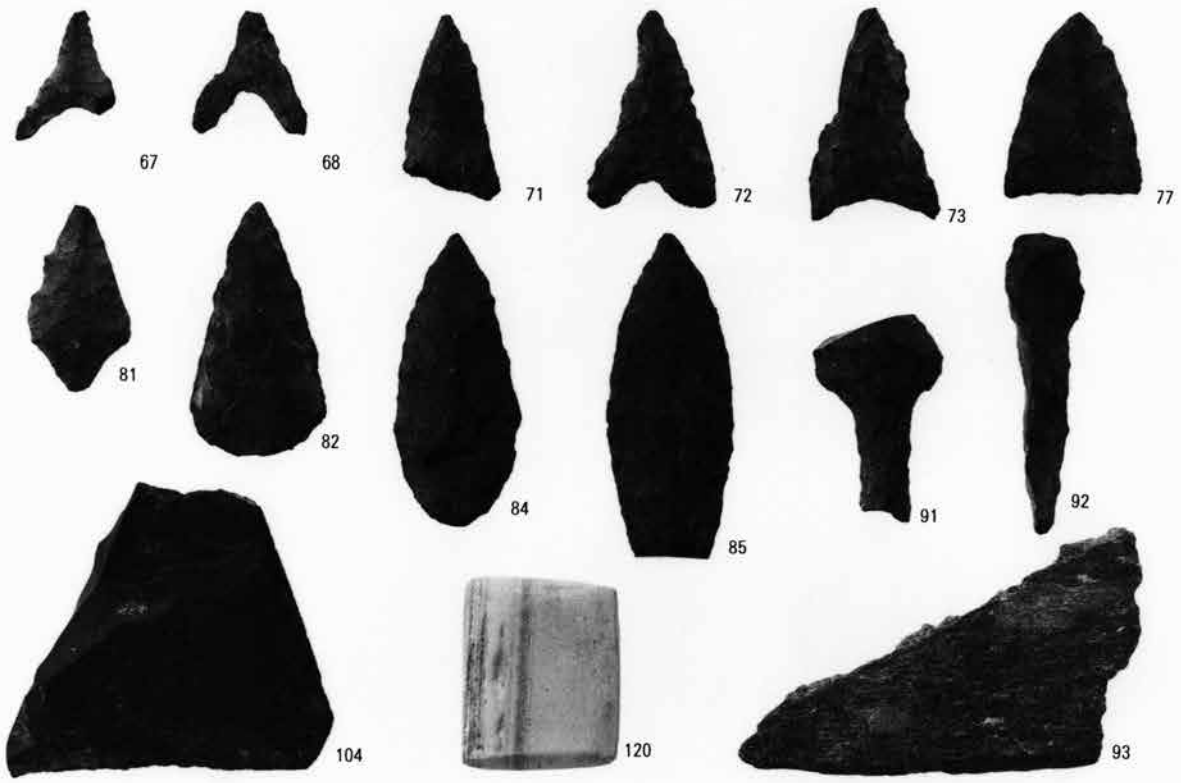
146



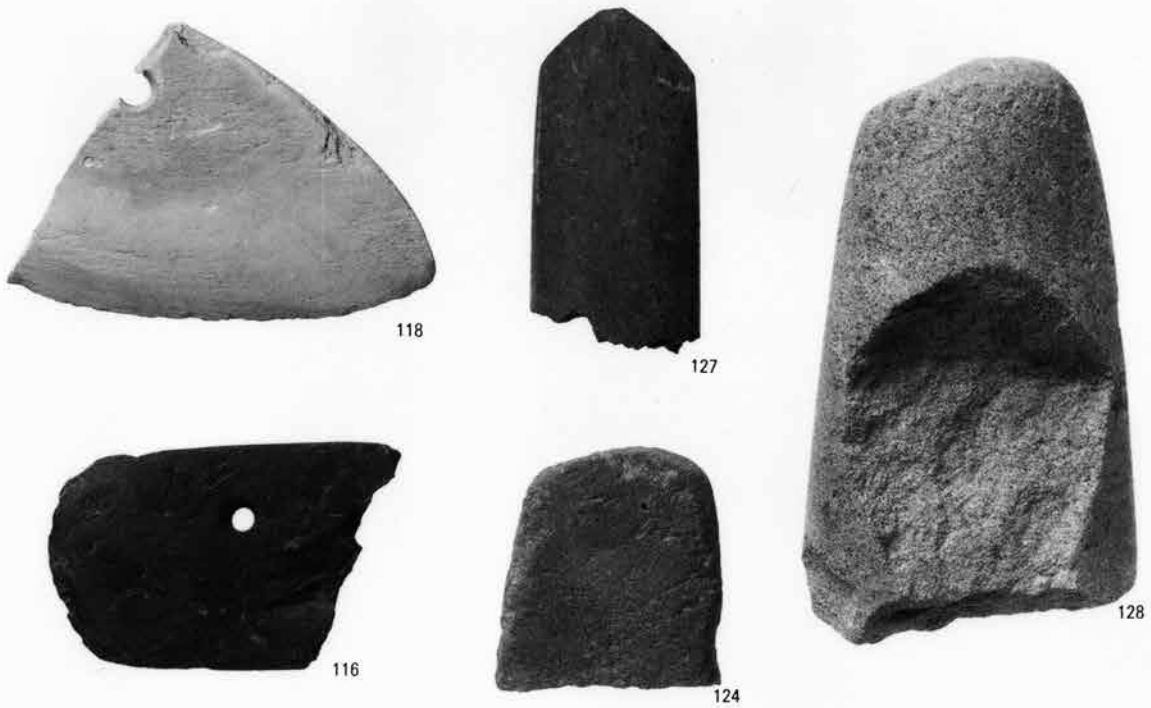
161



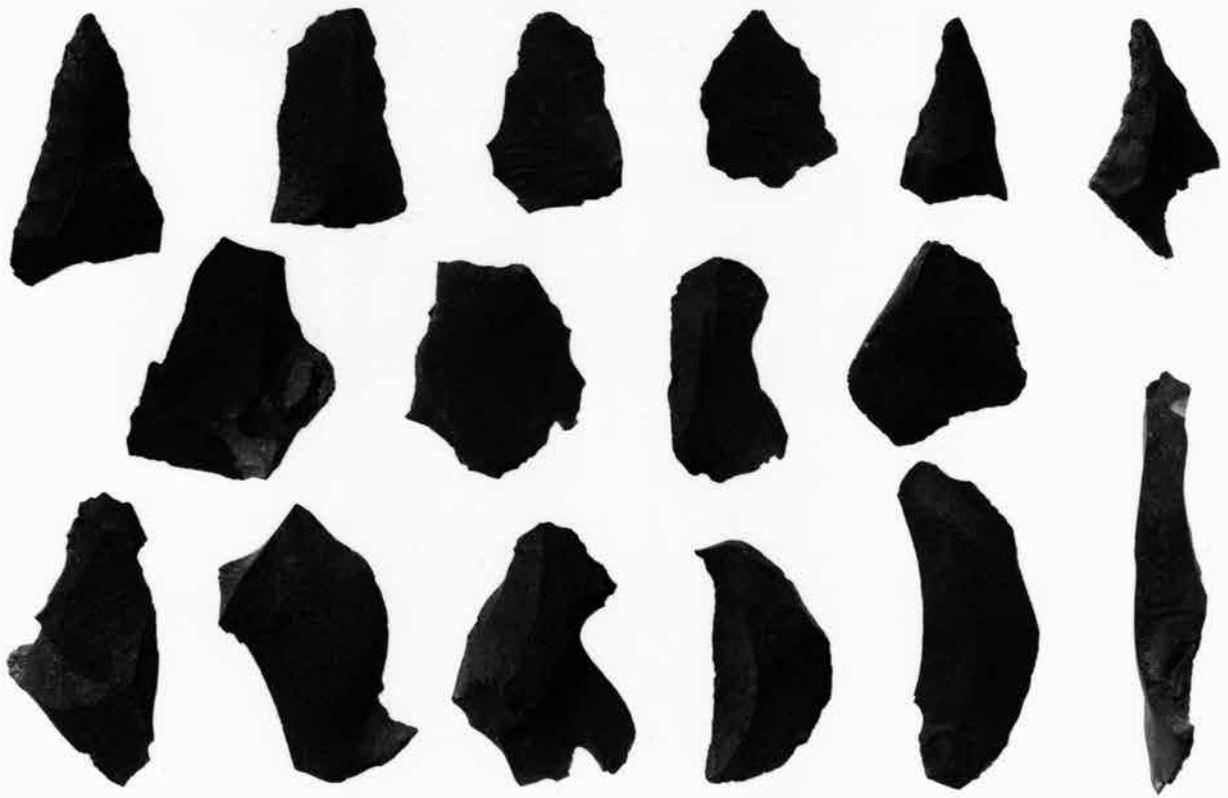
図版第57 三山木遺跡第2次



(1)出土遺物(4)



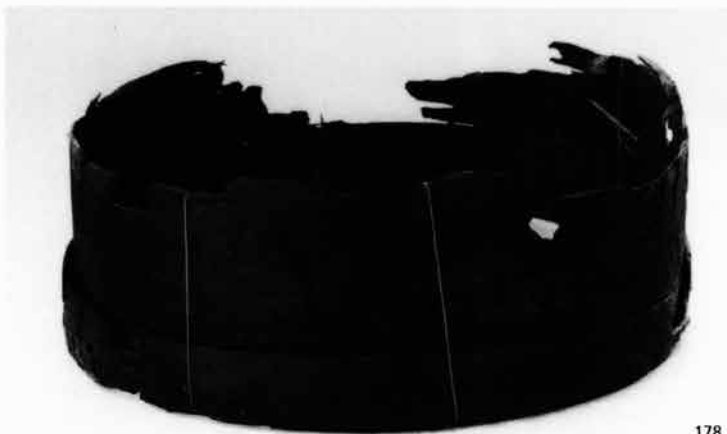
(2)出土遺物(5)



(1)出土遺物(6)



製塩土器



(2)出土遺物(7)

178



179



180

報告書抄録

ふりがな								
書名								
副書名								
巻次								
シリーズ名	京都府遺跡調査概報							
シリーズ番号	第92冊							
編著者名	黒坪一樹・石崎善久・福島孝行・中川和哉・村田和弘・岡崎研一・田代 弘							
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3				Phone 075(933)3877			
発行年月日	西暦 2000 年 3 月 26 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積 -	調査原因
		市町村	遺跡番号					
あかさかいま いふんきゅう ぼ・いまい じょうあと・ いまいこふん 赤坂今井墳 丘墓・今井 城跡・今井 古墳	なかぐみねやま ちょうあかさかこあ ざいまい・けび 中郡峰山町赤坂小 字今井・ケビ					19981110 ～ 19990220	1,550	道路建設
ふくちやま じょうあと 福知山城跡	ふくちやましおかの いちまち 福知山市岡野一町	201	101			19980725 ～ 19990929	250	鉄道建設
ひがしやまい せき 東山遺跡	きたくわたぐんけい ほくちょうあざしゅ うざん 北桑田郡京北町字 周山			35° 9' 06"	135° 38' 15"	19990722 ～ 19990917	500	道路建設
へいあんきよ うあとうきよ ういちじょう さんぼうきよ う・じゅつ ちょう(だい はち・きゅう じ) 平安京跡右 京一条三坊 九・十町 (第8・9 次)	きょうとしきたくだ いしやうぐんさかた ちょうにじゅうきよ うばんち 京都市北区大將軍 坂田町29番地	101	S1	35° 1' 9"	135° 43' 44"	19981007 ～ 19990312 19990419 ～ 19990830	2,700	校舎建設
みやまぎいせ きだいにじ 三山木遺跡 第2次	きょうたなべしみや まぎ 京田辺市三山木字 山崎	342	42	34° 47' 39"	34° 47' 39"	19990517 ～ 19991028	1,800	土地区画整 理
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
赤坂今井墳 丘墓・今井 城跡・今井 古墳	中郡峰山町赤坂小 字今井・ケビ	弥生 古墳 室町		墳丘墓 古墳 城跡		弥生土器・鉄製品 石杵・須恵器・土師 器・土師皿		
福知山城跡	福知山市岡野一町	江戸		敷石遺構		陶器		



東山遺跡	北桑田郡京北町字 周山	古墳	竪穴住居・土坑・柱穴	土器・石器	
平安京跡右 京一条三坊 九・十町 (第8・9 次)	京都市北区大將軍 坂田町29番地	平安	門跡・掘立柱建物・井戸	須恵器・土師器・緑 釉陶器・瓦・木製品 など	
三山木遺跡 第2次	京田辺市三山木字 山崎	縄文・弥生・古 墳・奈良～平安	土坑・溝・柱 穴・掘立柱建 物・井戸	縄文土器・弥生土 器・石器・須恵器・ 土師器・木器	

## 京都府遺跡調査概報 第92冊

平成12年3月26日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究  
センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3  
Phone (075)933-3877 (代)

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル  
Phone (075)256-0961 (代)